

金沢城史料叢書37

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書13

金 沢 城 跡

—いもり堀—

2020

石川県金沢城調査研究所

例　　言

1. 本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財確認調査報告書である。
2. 調査原因は公園整備事業であり、事業を所管する石川県土木部公園緑地課から石川県教育委員会事務局文化財課への依頼に基づき、財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成 10・12 年度）および石川県金沢城調査研究所（平成 15・16、18～21 年度）が調査を実施した。
3. 調査期間と担当職員は次のとおりである。

平成 10 年度（1998）

期間　平成 10 年 7 月 21 日～10 月 30 日

担当者　三浦ゆかり（主任主事）、端　猛（主事）

平成 12 年度（2000）第 2 次

期間　平成 12 年 5 月 16 日～6 月 21 日

担当者　富田和気夫（課主査）、滝川重徳（主任主事）、湊屋玲美（主事）、土田友信（講師）

平成 12 年度（2000）第 3 次

期間　平成 12 年 8 月 10 日～11 月 22 日

担当者　富田和気夫（課主査）、滝川重徳（主任主事）、湊屋玲美（主事）、土田友信（講師）

平成 15 年度（2003）

期間　平成 15 年 9 月 1 日～12 月 21 日

担当者　富田和気夫（調査専門員）、滝川重徳（係主査）、熊谷葉月（主任主事）、加藤克郎（主事）

平成 16 年度（2004）

期間　平成 16 年 8 月 17 日～12 月 22 日

担当者　富田和気夫（調査専門員）、滝川重徳（係主査）、熊谷葉月（主任主事）、加藤克郎（主事）

平成 18 年度（2006）

期間　平成 18 年 9 月 15 日～11 月 1 日

担当者　滝川重徳（専門員）、加藤克郎（主任主事）

平成 19 年度（2007）

期間　平成 19 年 8 月 17 日～9 月 27 日

担当者　滝川重徳（調査研究専門員）

平成 20 年度（2008）

期間　平成 20 年 7 月 8 日～9 月 22 日

担当者　滝川重徳（調査研究専門員）、丹野修太（嘱託）、吉田千沙子（嘱託）

平成 21 年度（2009）

期間　平成 21 年 5 月 11 日～7 月 6 日

担当者　滝川重徳（調査研究専門員）

4. 出土品整理は、平成 14～22 年度に財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成 25 年度から公益財団法人）に委託して実施した。

5. 報告書の作成は、滝川重徳（担当課長）、安中玲美（調査研究専門員）、荒木麻理子（調査研究専門員）が担当した。なお、第 6 章第 1～3 節は、株式会社パレオ・ラボ（小林克也、伊藤　茂、佐藤正教、廣田正史、山形秀樹、Zaur Lomtadze、竹原弘展、藤根　久、米田恭子）による分析報告である。執筆分担は目次に記した。

6. 調査に関する記録・遺物は石川県金沢城調査研究所で保管している。

7. 調査・報告にあたり、以下の機関・個人の指導・助言、協力を得た。

文化庁文化財第二課 石川県立歴史博物館 金沢市立玉川図書館 公益財団法人前田育徳会

東京大学総合図書館

市川浩文 金森安孝 金田明大 河村健史 北浦 勝 北垣聰一郎 北島俊朗 北野博司

楠 正勝 久保智康 斎藤慎一 鳩崎 丞（故人） 千田嘉博 中村利則 成瀬晃司 新谷洋二

西形達明 飛田範夫 平井 聖 蘭 和善 堀 大介 堀内秀樹 宮里 学 森島康雄 横山隆昭

吉岡康暢 脇田 修（故人）（敬称略）

凡　例

1. 本書の水平基準は海拔高を表し、東京湾平均海面標高（T.P）である。
2. 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第VII系に準拠した。
3. 石垣のID番号や呼称は、『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』（金沢城調査研究所 2016）の記載に拠っている。
4. 本報告書中の調査番号IDは次の通りである。

平成10年度：199803（鯉喉櫓台調査区、北岸調査区、土橋調査区）

平成12年度（第2次）：200002（稲荷屋敷下調査区）

平成12年度（第3次）：200004（鯉喉櫓台調査区、土橋調査区）

平成15年度：200302（鯉喉櫓台調査区、北岸調査区）

平成16年度：200402（北岸調査区）

平成18年度：200605（南岸調査区）

平成19年度：200705（南岸調査区）

平成20年度：200805（南岸調査区）

平成21年度：200905（鯉喉櫓台調査区）

5. 遺構測量図中のケバ種や線種は下記の「平面図線種表」の通りである。

6. 遺構断面図中に使用した塗り部分については、次の通りである。

■	瓦	▨	石垣	▨▨	コンクリ、アスファルト	■■	戸室石（赤）
■■	戸室石（青）	■■■	戸室石（中間色）	■■■■	戸室石（色調不明）		

7. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、各図中に示した。

8. 本文中に使用される石垣用語は、「石垣用語表」及び「石垣名称凡例図」の通りである。

9. 遺物名は次の略号を使用した。

P：土器・陶磁器・土製品 T：瓦 S：石製品 M：金属製品 W：木製品

10. 遺物図版中の遺物番号はゴシック体が本書報告番号、明朝体が遺物ID（調査ID番号-実測番号）を示す。

11. 陶器類の胎土表記は「磁器胎土表記」、「陶器胎土表記」に、瓦についての計測方法等は「瓦計測部位凡例」に示した通りである。

12. 引用参考文献は、原則的に一括して巻末に掲載しているが、第6章については節毎に記載している。

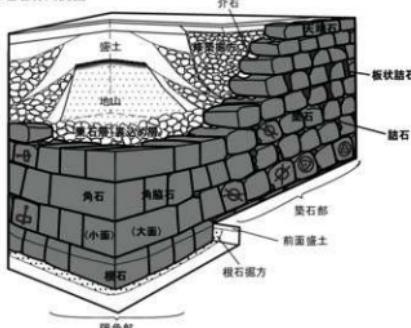
平面図線種表

	ケバ種	上端線／下端線		ケバ種	上端線／下端線		ケバ種	上端線／下端線
トレンチ	—	—	遺構（未完解）	—	—	遺構型の種別変換線	—	—
近代以後	—	—	実線	—	—	長・短ケバ（下端線なし）	—	長・短ケバ（下端線なし）
近世以前	—	—	短・短ケバ	—	—	長・短ケバ（下端線なし）	—	一点鉛線
			実線			(壁のみで確認された遺構)		
			長・短ケバ		—	長・短ケバ（下端線なし）		
			実線		—	石（埋没部分）	—	実線・ケバなし

石垣用語表

用語	読み	解説
施石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	くうちかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ)、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
シノギ角	しのぎすみ	出角の一つで、鈍角状に組まれる
輪どり	わどり	石垣の壁面を弧状に湾曲させる構築方法
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんぱいし	石垣の最も上の石材
裾部	すそぶ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最も下の石
礎石	つきいし	石垣を構築する石材、平石(ひらいし)とも言う
筋石	つねいし	礎石の隙間に詰める小振りの石
板状結石	いたじょうゆうめいし	石垣面を直角に見せるため、石材の隙間に合わせて加工された板状の石材を筋石とする技法
角石	くみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
栗石	くりいし	栗の壳などのように用いられる円錐
押さえ石	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	かいいし	石材の固定及び角度調整のため留め置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押さえ石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本來の地面上に盛られた土
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度、或は斜面のノリと曲線のツリからなる
丁張	ぢょうはり	石垣普請の通りや勾配を示すために張る水糸や板
鉢巻き石垣	はちまきいしがき	鉢上面部だけに鉢巻状に石垣を張いたもの。斜面部分だけに張いた石垣を鉢巻石垣という
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おほづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、跡が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、跡が小さい面
挫	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石垣の後ろ側
胸	どう	石材の面と民の間
合端	あいば	石同士の接点
自然石	しぜんいし	加工していない石。野面石・河川転石とも言う
割石	わかれいし	割って、大きさを整えたり、面を作ったもの
粗加工石	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材
周囲加工	しゅうういかくこう	切石の四方を一定幅で平滑にならす加工。周囲はつりとも言う
鍛積み	ねりづみ	コンクリート等を石積みの複合面や裏込めに使用して固めた工法
空積み	からづみ	石材を積繋・接着しないで積んだ工法
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横且地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
落し積み	おとしづみ	下の石の谷(くぼみ)へ石を落していく積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する2面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方
準み出し	はらみだし	変形の一つ。膨らんで張り出した状態
迫出し	せりだし	単体の石材が石垣面から飛び出した状態

石垣名称凡例図



磁器胎土表記

平滑性		光沢	器壁の空洞
1	極めて平滑	A 強い	a 目立たない
2	平滑	B 弱い	b 目立つ
3	凸凹目立つ		

陶器胎土表記

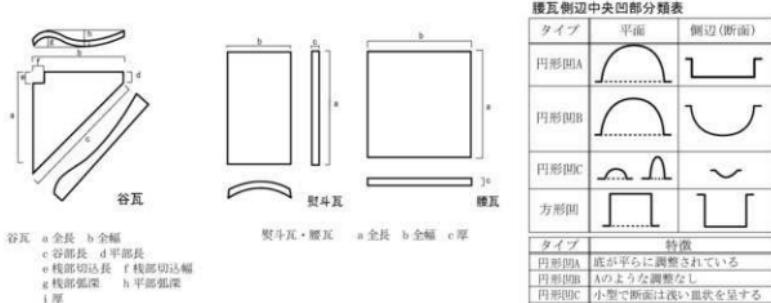
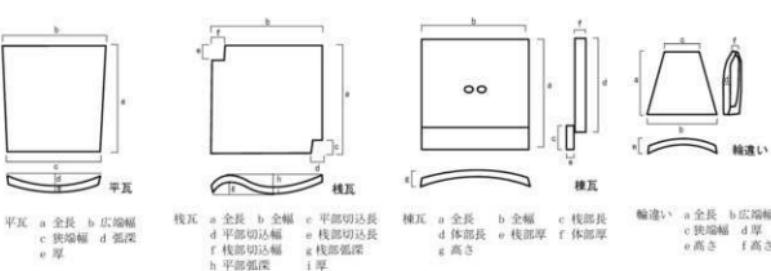
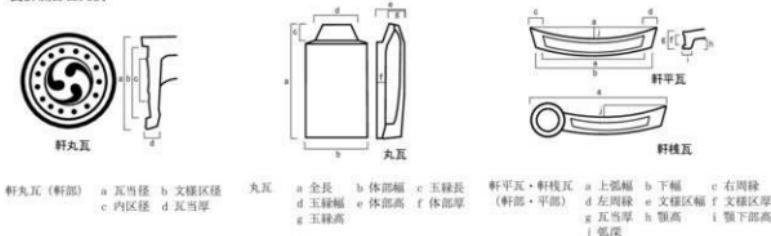
硬さ		平滑性	砂粒	器壁の空洞
I	硬質	1 極めて平滑	A 希少	a 目立たない
II	軟質	2 平滑	B 細砂含む	b 目立つ
		3 凸凹目立つ	C 粗砂以上含む	

土器胎土分類

特徴	
A	中砂多い・粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ
B	砂粒比較的少なく・均質(細分の余地大きい)
C	砂粒ごく少ない・均質
D	細砂多い・均質(粉質)
E	1 糜含み・粗砂・細砂多い(含有量の程度差大きい) 2 糜無~微・粗砂・細砂少ない (Bよりも粒子大きく・素地が粗い。E1より精良)

(6)川越金物城遺跡研究会(2010.6)

瓦計測部位例



裂瓦側辺中央凹部分類表

タイプ	平面	側辺(断面)
円形凹A		
円形凹B		
円形凹C		
方形凹		
タイプ	特徴	
円形凹A	底が平らに調整されている	
円形凹B	Aのような調整なし	
円形凹C	小型で断面は浅い皿状を呈する	
方形凹	底が平らに調整されている	

目 次

第1章 経緯と経過	(荒川)	1
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 調査の経過	3	
第2章 位置と環境	(荒川)	8
第1節 金沢城跡と周辺の歴史的環境	8	
第2節 金沢城の沿革	13	
第3節 いもり堀の沿革	15	
第4節 既往の調査成果	19	
第3章 調査の概要	(荒木)	24
第1節 調査の目的と対象区域	24	
第2節 調査の方法	24	
第4章 遺構	(荒木)	27
第1節 いもり堀北部の調査	27	
第2節 いもり堀南部の調査	134	
第5章 出土遺物	(荒川・安中)	169
第1節 土器・陶磁器	169	
第2節 瓦	171	
第3節 金属製品	175	
第4節 石製品	176	
第5節 木製品	176	
第6章 自然科学的調査	380	
第1節 木製品・加工木の樹種同定	(小林)	380
第2節 放射性炭素年代測定	(伊藤・佐藤・廣田・山形・Lomtatidze・小林)	385
第3節 塗膜分析	390	
1. 漆器椀の塗膜分析	(竹原・藤根・米田・小林)	390
2. 本丸南堀出土大型部材の塗膜分析	(竹原・小林・米田)	394
第7章 地質調査	(荒木)	396
第1節 調査の経緯	396	
第2節 調査の方法	396	
第3節 基本土層	396	
第4節 調査の結果	397	
第5節 小結	398	
第8章 総括	(荒木)	423
引用・参考文献	429	
報告書抄録	434	
写真図版	435	

図版目次	頁	59
第1図 調査区・調査地点位置図	7	
第2図 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡	9	
第3図 近世後期の金沢城全体図	12	
第4図 近世初期の金沢城	13	
第5図 いもり塙絵図1	17	
第6図 いもり塙絵図2	18	
第7図 金沢城跡発掘調査位置図（～令和元年度）	20	
第8図 既往の調査区	23	
第9図 調査区・調査地点位置図	26	
第10図 いもり塙北部 調査区位置図	28	
第11図 いもり塙北部 調査区・絵図照合図（近世前期）	29	
第12図 いもり塙北部 調査区・絵図照合図（近世後期）	30	
第13図 鯉喉塙台調査区 全体図	34	
第14図 鯉喉塙台調査区 区割図	35	
第15図 鯉喉塙台調査区 平面図1	36	
第16図 鯉喉塙台調査区 平面図2	37	
第17図 鯉喉塙台調査区 平面図3	38	
第18図 鯉喉塙台調査区 平面図4	39	
第19図 鯉喉塙台調査区 平面図5	40	
第20図 鯉喉塙台調査区 平面図6（石撤去後）	41	
第21図 鯉喉塙台調査区 石垣1930S・土留石垣 立面図	42	
第22図 鯉喉塙台調査区 石垣1930S・土留石垣 垂直断面図	43	
第23図 鯉喉塙台調査区 石垣1930S・土留石垣 石材観察図	44	
第24図 鯉喉塙台調査区 石垣1930S・土留石垣 石材観察図 状況	45	
第25図 鯉喉塙台調査区 石垣1930W 立面図・垂直断面図	46	
第26図 鯉喉塙台調査区 石垣1930W 石材観察図・写真。 1930E 立面図・垂直断面図・石材観察図	47	
第27図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP1-3	48	
第28図 鯉喉塙台調査区 土層注記 SP1-3	49	
第29図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP4-7 1	50	
第30図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP4-7 2	51	
第31図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP8-9・SP10-11・ SP12-13・SP14-15	52	
第32図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP19-21 (SK01)	53	
第33図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP16-18	54	
第34図 鯉喉塙台調査区 石垣1934N・1933N・1800S 立面図、 1933N 石材観察図	55	
第35図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP22-24、石垣1934N・ 1800S 石材観察図	56	
第36図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP25-26・SP27-28	57	
第37図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP29-30	58	
第38図 鯉喉塙台調査区 石垣1931S 立面図・石材観察図		
第39図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP31-32 1	60	
第40図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP31-32 2	61	
第41図 鯉喉塙台調査区 土層断面図 SP33-34	62	
第42図 北岸調査区 全体図	64	
第43図 北岸調査区 平面図1	65	
第44図 北岸調査区 平面図2	66	
第45図 北岸調査区 平面図3	67	
第46図 北岸調査区 平面図4	68	
第47図 北岸調査区 平面図5	69	
第48図 北岸調査区 平面図6	70	
第49図 北岸調査区 平面図7	71	
第50図 北岸調査区 平面図8	72	
第51図 北岸調査区 土層大別図 SP1-3	73	
第52図 北岸調査区 土層断面図 SP1-2・SP4-1	74	
第53図 北岸調査区 土層断面図 SP2-3	75	
第54図 北岸調査区 土層注記 SP1-3・SP4-1	76	
第55図 北岸調査区 土層断面図 SP5-6・SP7-8	77	
第56図 北岸調査区 土層断面図 SP9-8	78	
第57図 北岸調査区 土層断面図 SP10-11	79	
第58図 北岸調査区 土層大別図 SP12-16	80	
第59図 北岸調査区 土層断面図 SP12-15	81	
第60図 北岸調査区 土層断面図 SP15-16	82	
第61図 北岸調査区 土層注記 SP12-16	83	
第62図 北岸調査区 土層断面図 SP17-18・SP18-19・ P20-21 (P01)	84	
第63図 北岸調査区 土層断面図 SP22-23・SP24-25・ P26-27	85	
第64図 北岸調査区 土層大別図 SP28-32	86	
第65図 北岸調査区 土層断面図 SP28-29・SP30-31		
第66図 北岸調査区 土層断面図 SP31-32	87	
第67図 北岸調査区 土層注記 SP28-32	88	
第68図 北岸調査区 土層断面図 SP33-34・SP35-36・ SP36-37・SP34-38	89	
第69図 北岸調査区 土層断面図 SP38-39・SP40-41	90	
第70図 北岸調査区 土層断面図 SP42-43・SP48-49	91	
第71図 北岸調査区 土層断面図 SP44-45・SP46-47	92	
第72図 北岸調査区 土層断面図 SP50-51・SP52-53・ SP56-57	93	
第73図 北岸調査区 土層断面図 SP54-55・SP58-59	94	
第74図 土塙調査区 全体図	95	
第75図 土塙調査区 区割図	98	
第76図 土塙調査区 平面図1	99	
第77図 土塙調査区 平面図2	100	
第78図 土塙調査区 平面図3	101	
第79図 土塙調査区 石垣1810E・1810W, 石列 立面図	102	
第80図 土塙調査区 石垣1810E・1810W, 石列 石材観察図	103	

第81回	土橋調査区 土層断面図 SP1-2・SP13-14	104	SP3-5・SP5-6	145
		105	SP3-5・SP5-6	146
第82回	土橋調査区 土層大別図 1	106	第119回 南岸調査区 2006-2地点 土層注記 SP1-2・	
第83回	土橋調査区 土層断面図 SP2-5	107	SP3-5・SP5-6	146
第84回	土橋調査区 土層断面図 SP5-6	108	第120回 南岸調査区 2006-1地点 平面図、土層断面図 SP1-2	148
第85回	土橋調査区 土層断面図 SP7-8	109	第121回 南岸調査区 2006-1地点 土層断面図 SP3-4・ SP4-5、土層注記 SP1-2・SP3-4・SP4-5	149
第86回	土橋調査区 土層断面図 SP9-10	110	第122回 南岸調査区 2008地点 平面図 1 (2a~3b面)	
第87回	土橋調査区 土層断面図 SP11-12	111		152
第88回	土橋調査区 土層大別図 2	112	第123回 南岸調査区 2008地点 平面図 2 (3c・3d面)	
第89回	土橋調査区 土層断面図 SP15-16	113		153
第90回	土橋調査区 土層断面図 SP16-17	114	第124回 南岸調査区 2008地点 平面図 3 (A-BcK1b-1c面)	
第91回	土橋調査区 土層断面図 SP18-19	115		154
第92回	土橋調査区 土層断面図 SP19-20	116	第125回 南岸調査区 2008地点 平面図 4 (IIJK2b-4面)	
第93回	土橋調査区 土層断面図 SP20-21	117		155
第94回	土橋調査区 土層断面図 SP22-23	118	第126回 南岸調査区 2008地点 土層大別図	156
第95回	土橋調査区 土層注記 SP22-23、土層断面図 SP24-25	119	第127回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP1-2	
第96回	土橋調査区 土層断面図 SP26-27	120		157
第97回	土橋調査区 土層断面図 SP28-29	121	第128回 南岸調査区 2008地点 土層注記 SP1-2	
第98回	土橋調査区 土層注記 SP28-29、土層断面図 SP30-31	122		158
第99回	稲荷屋敷下調査区 全体図	125	第129回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP2-4	
第100回	稲荷屋敷下調査区 平面図 1	126		159
第101回	稲荷屋敷下調査区 平面図 2	127	第130回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP4-6	
第102回	稲荷屋敷下調査区 石垣1941S 立面図	128	第131回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP6-8・ SP16-17	160
第103回	稲荷屋敷下調査区 石垣1941S 石材観察図	129	第132回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP8-9	
第104回	稲荷屋敷下調査区 土層断面図 レンチ 1	130	第133回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP9-11	
第105回	稲荷屋敷下調査区 土層断面図 レンチ 4・ SP17-18	131		163
第106回	稲荷屋敷下調査区 土層断面図 レンチ 2	132	第134回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP11-13、 SX01平面図	164
第107回	稲荷屋敷下調査区 土層断面図 レンチ 3	133	第135回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP14-15	
第108回	南岸調査区 調査区位置図	135	第136回 南岸調査区 2008地点 土層注記 SP14-15	
第109回	南岸調査区 総図照合図 (近世前期)	136		166
第110回	南岸調査区 総図照合図 (近世後期)	137	第137回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 P01・SD02・ P02・SK02	167
第111回	南岸調査区 2007地点 平面図	138	第138回 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SD06・SX02 ・P05	168
第112回	南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP1-2	139	第139回 陶磁器 1 鰐喉擂台調査区	178
			第140回 陶磁器 2 鰐喉擂台調査区	179
第113回	南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP3-4・SP8-9	140	第141回 陶磁器 3 鰐喉擂台調査区	180
			第142回 陶磁器 4 鰐喉擂台調査区	181
第114回	南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP2-5・SP6-7	141	第143回 陶磁器 5 鰐喉擂台調査区	182
			第144回 陶磁器 6 鰐喉擂台調査区	183
第115回	南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP10-11・ SP11-12・SP13-14・SP14-15	142	第145回 陶磁器 7 北岸調査区	184
第116回	南岸調査区 2007地点 土層断面図 P01～P03・ P05～P07	143	第146回 陶磁器 8 北岸調査区	185
第117回	南岸調査区 2006-2地点 平面図、土層断面図 P02・P03	144	第147回 陶磁器 9 北岸調査区	186
第118回	南岸調査区 2006-2地点 土層断面図 SP1-2・		第148回 陶磁器 10 北岸調査区	187
			第149回 陶磁器 11 北岸調査区	188
			第150回 陶磁器 12 土橋調査区	189
			第151回 陶磁器 13 土橋調査区	190

第152圖	陶磁器14	土橋調查區	191	第205圖	瓦39	鰐喉槽台調查區	244	
第153圖	陶磁器15	鵝荷屋敷下調查區	192	第206圖	瓦40	北岸調查區	245	
第154圖	陶磁器16	鵝荷屋敷下調查區	193	第207圖	瓦41	北岸調查區	246	
第155圖	陶磁器17	鵝荷屋敷下調查區	194	第208圖	瓦42	北岸調查區	247	
第156圖	陶磁器18	南岸調查區	2007地點	195	第209圖	瓦43	北岸調查區	248
第157圖	陶磁器19	南岸調查區	2007地點	196	第210圖	瓦44	北岸調查區	249
第158圖	陶磁器20	南岸調查區	2008地點	197	第211圖	瓦45	北岸調查區	250
第159圖	陶磁器21	南岸調查區	2008地點	198	第212圖	瓦46	北岸調查區	251
第160圖	陶磁器22	南岸調查區	2008地點	199	第213圖	瓦47	北岸調查區	252
第161圖	軒丸瓦	瓦當文樣分類		200	第214圖	瓦48	北岸調查區	253
第162圖	軒平・軒枝瓦	瓦當文樣分類1		201	第215圖	瓦49	北岸調查區	254
第163圖	軒平・軒枝瓦	瓦當文樣分類2		202	第216圖	瓦50	北岸調查區	255
第164圖	軒平・軒枝瓦	瓦當文樣分類3		203	第217圖	瓦51	北岸調查區	256
第165圖	軒平・軒枝瓦	瓦當文樣分類4		204	第218圖	瓦52	北岸調查區	257
第166圖	瓦	胎土分類		205	第219圖	瓦53	北岸調查區	258
第167圖	瓦1	鰐喉槽台調查區		206	第220圖	瓦54	北岸調查區	259
第168圖	瓦2	鰐喉槽台調查區		207	第221圖	瓦55	北岸調查區	260
第169圖	瓦3	鰐喉槽台調查區		208	第222圖	瓦56	北岸調查區	261
第170圖	瓦4	鰐喉槽台調查區		209	第223圖	瓦57	北岸調查區	262
第171圖	瓦5	鰐喉槽台調查區		210	第224圖	瓦58	北岸調查區	263
第172圖	瓦6	鰐喉槽台調查區		211	第225圖	瓦59	北岸調查區	264
第173圖	瓦7	鰐喉槽台調查區		212	第226圖	瓦60	北岸調查區	265
第174圖	瓦8	鰐喉槽台調查區		213	第227圖	瓦61	北岸調查區	266
第175圖	瓦9	鰐喉槽台調查區		214	第228圖	瓦62	北岸調查區	267
第176圖	瓦10	鰐喉槽台調查區		215	第229圖	瓦63	北岸調查區	268
第177圖	瓦11	鰐喉槽台調查區		216	第230圖	瓦64	北岸調查區	269
第178圖	瓦12	鰐喉槽台調查區		217	第231圖	瓦65	北岸調查區	270
第179圖	瓦13	鰐喉槽台調查區		218	第232圖	瓦66	北岸調查區	271
第180圖	瓦14	鰐喉槽台調查區		219	第233圖	瓦67	北岸調查區	272
第181圖	瓦15	鰐喉槽台調查區		220	第234圖	瓦68	北岸調查區	273
第182圖	瓦16	鰐喉槽台調查區		221	第235圖	瓦69	北岸調查區	274
第183圖	瓦17	鰐喉槽台調查區		222	第236圖	瓦70	北岸調查區	275
第184圖	瓦18	鰐喉槽台調查區		223	第237圖	瓦71	北岸調查區	276
第185圖	瓦19	鰐喉槽台調查區		224	第238圖	瓦72	北岸調查區	277
第186圖	瓦20	鰐喉槽台調查區		225	第239圖	瓦73	北岸調查區	278
第187圖	瓦21	鰐喉槽台調查區		226	第240圖	瓦74	北岸調查區	279
第188圖	瓦22	鰐喉槽台調查區		227	第241圖	瓦75	北岸調查區	280
第189圖	瓦23	鰐喉槽台調查區		228	第242圖	瓦76	北岸調查區	281
第190圖	瓦24	鰐喉槽台調查區		229	第243圖	瓦77	北岸調查區	282
第191圖	瓦25	鰐喉槽台調查區		230	第244圖	瓦78	北岸調查區	283
第192圖	瓦26	鰐喉槽台調查區		231	第245圖	瓦79	北岸調查區	284
第193圖	瓦27	鰐喉槽台調查區		232	第246圖	瓦80	土壤調查區	285
第194圖	瓦28	鰐喉槽台調查區		233	第247圖	瓦81	土壤調查區	286
第195圖	瓦29	鰐喉槽台調查區		234	第248圖	瓦82	土壤調查區	287
第196圖	瓦30	鰐喉槽台調查區		235	第249圖	瓦83	土壤調查區	288
第197圖	瓦31	鰐喉槽台調查區		236	第250圖	瓦84	土壤調查區	289
第198圖	瓦32	鰐喉槽台調查區		237	第251圖	瓦85	土壤調查區	290
第199圖	瓦33	鰐喉槽台調查區		238	第252圖	瓦86	土壤調查區	291
第200圖	瓦34	鰐喉槽台調查區		239	第253圖	瓦87	土壤調查區	292
第201圖	瓦35	鰐喉槽台調查區		240	第254圖	瓦88	土壤調查區	293
第202圖	瓦36	鰐喉槽台調查區		241	第255圖	瓦89	土壤調查區	294
第203圖	瓦37	鰐喉槽台調查區		242	第256圖	瓦90	土壤調查區	295
第204圖	瓦38	鰐喉槽台調查區		243	第257圖	瓦91	土壤調查區	296

第258図	JG92 土橋調査区	297		402	
第259図	瓦93 土橋調査区	298	第305図	ボーリングコア詳細柱状図2 (HB-2地点)	403
第260図	瓦94 稲荷屋敷下調査区	299			
第261図	JG95 南岸調査区	300	第306図	ボーリングコア詳細柱状図3 (HB-3地点)	404
第262図	金属製品1 鯉喉槽台調査区	301	第307図	ボーリングコア詳細柱状図4 (HB-4地点)	405
第263図	金属製品2 鯉喉槽台調査区	302			
第264図	金属製品3 鯉喉槽台調査区	303	第308図	ボーリングコア詳細柱状図5 (HB-5地点)	406
第265図	金属製品4 鯉喉槽台調査区	304	第309図	ボーリングコア詳細柱状図6 (8-6地点)	407
第266図	金属製品5 鯉喉槽台調査区	305	第310図	ボーリングコア詳細柱状図7 (HB-1地点)	408
第267図	金属製品6 鯉喉槽台調査区	306	第311図	ボーリングコア詳細柱状図8 (HB-2地点)	409
第268図	金属製品7 北岸調査区	307	第312図	ボーリングコア詳細柱状図9 (HB-3・HB-4地点)	410
第269図	金属製品8 北岸調査区	308	第313図	ボーリングコア詳細柱状図10 (HB-5・HB-6地点)	411
第270図	金属製品9 北岸調査区	309			
第271図	金属製品10 土橋調査区	310	第314図	ボーリングコア詳細柱状図11 (HB-1地点)	412
第272図	金属製品11 土橋・稻荷屋敷下・南岸調査区	311	第315図	ボーリングコア詳細柱状図12 (HB-2地点)	413
第273図	石製品1 鯉喉槽台調査区	312	第316図	ボーリングコア詳細柱状図13 (HB-3地点)	414
第274図	石製品2 鯉喉槽台・北岸調査区	313			
第275図	石製品3 北岸調査区	314	第317図	ボーリングコア詳細柱状図14 (HB-4地点)	415
第276図	石製品4 土橋調査区・堀北部・南岸調査区	315	第318図	ボーリングコア詳細柱状図15 (HB-7-1地点)	416
第277図	木製品1 鯉喉槽台調査区	316	第319図	ボーリングコア詳細柱状図16 (HB-7-2地点)	417
第278図	木製品2 鯉喉槽台調査区	317	第320図	ボーリングコア詳細柱状図17 (HB-7-3地点)	418
第279図	木製品3 北岸調査区	318	第321図	ボーリングコア詳細柱状図18 (HB-7-4地点)	419
第280図	木製品4 北岸調査区	319	第322図	ボーリングコア詳細柱状図19 (HB-8-1地点)	420
第281図	木製品5 北岸調査区	320	第323図	ボーリングコア詳細柱状図20 (HB-8-2地点)	421
第282図	木製品6 北岸調査区	321	第324図	ボーリングコア詳細柱状図21 (HB-8-3地点)	422
第283図	木製品7 土橋調査区	322	第325図	本丸南堀・いもり堀検出ライン (一部推定)	425
第284図	木製品8 土橋調�ina区	323	第326図	本丸南堀 (土橋周辺) の景観変化 (模式図)	426
第285図	木製品9 土橋調査区	324	第327図	いもり堀断面模式図 (推定復元)	427
第286図	木製品10 土橋調査区	325	第328図	いもり堀～鯉喉槽台～辰巳槽台断面模式図	428
第287図	木製品11 土橋調査区	326			
第288図	木製品12 土橋調査区	327			
第289図	木製品13 土橋調査区	328			
第290図	木製品14 南岸調査区	329			
第291図	木製品15 南岸調査区	330			
第292図	俵1 土橋調査区	331			
第293図	俵2 土橋調査区	332			
第294図	金沢城跡・いもり堀出土木製品・加工木の光学顕微鏡写真(1)	383			
第295図	金沢城跡・いもり堀出土木製品・加工木の光学顕微鏡写真(2)	384			
第296図	単体測定試料の放射性炭素年代測定結果	388			
第297図	ウィグルマッチングを行なった試料	389			
第298図	塗膜の赤外分光スペクトル	392			
第299図	漆器模の試料採取位置(a)、塗膜構造(b)、反射電子像(c)	393			
第300図	大型部材表面黒色部の採取位置(a)、塗膜構造(b)、反射電子像(e)	395			
第301図	ボーリング調査地点位置図	399			
第302図	ボーリング調査地点 柱状断面配列図1	400			
第303図	ボーリング調査地点 柱状断面配列図2	401			
第304図	ボーリングコア詳細柱状図1 (HB-1地点)				

表目次	頁		
第1表 周辺の近世遺跡地名表	10	第52表 出土遺物観察表 木製品2・俵	379
第2表 金沢城の沿革	14	第53表 いもり塙出土木製品・加工木の樹種集計	380
第3表 金沢城跡発掘調査一覧（1）	21	第54表 いもり塙出土木製品・加工木の樹種同定結果	382
第4表 金沢城跡発掘調査一覧（2）	22	第55表 単体測定試料および処理	385
第5表 刻印の種類と数	129	第56表 ウィグルマッチング測定試料および処理	385
第6表 出土遺物観察表 陶磁器・土器1	333	第57表 単体測定試料の放射性炭素年代測定および暦年較正	
第7表 出土遺物観察表 陶磁器・土器2	334	の結果	387
第8表 出土遺物観察表 陶磁器・土器3	335	第58表 放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチン	
第9表 出土遺物観察表 陶磁器・土器4	336	グの結果	387
第10表 出土遺物観察表 陶磁器・土器5	337	第59表 分析対象一覧	390
第11表 出土遺物観察表 陶磁器・土器6	338	第60表 生漆の赤外吸収位置とその強度	390
第12表 出土遺物観察表 陶磁器・土器7	339	第61表 赤色塗膜層等のX線分析結果	391
第13表 出土遺物観察表 陶磁器・土器8	340	第62表 塗膜分析結果	391
第14表 出土遺物観察表 陶磁器・土器9	341	第63表 分析対象	394
第15表 出土遺物観察表 瓦1	342	第64表 塗膜分析結果	394
第16表 出土遺物観察表 瓦2	343	第65表 ポーリング地点一覧表	400
第17表 出土遺物観察表 瓦3	344		
第18表 出土遺物観察表 瓦4	345		
第19表 出土遺物観察表 瓦5	346		
第20表 出土遺物観察表 瓦6	347		
第21表 出土遺物観察表 瓦7	348		
第22表 出土遺物観察表 瓦8	349		
第23表 出土遺物観察表 瓦9	350		
第24表 出土遺物観察表 瓦10	351		
第25表 出土遺物観察表 瓦11	352		
第26表 出土遺物観察表 瓦12	353		
第27表 出土遺物観察表 瓦13	354		
第28表 出土遺物観察表 瓦14	355		
第29表 出土遺物観察表 瓦15	356		
第30表 出土遺物観察表 瓦16	357		
第31表 出土遺物観察表 瓦17	358		
第32表 出土遺物観察表 瓦18	359		
第33表 出土遺物観察表 瓦19	360		
第34表 出土遺物観察表 瓦20	361		
第35表 出土遺物観察表 瓦21	362		
第36表 出土遺物観察表 瓦22	363		
第37表 出土遺物観察表 瓦23	364		
第38表 出土遺物観察表 瓦24	365		
第39表 出土遺物観察表 瓦25	366		
第40表 出土遺物観察表 瓦26	367		
第41表 出土遺物観察表 瓦27	368		
第42表 出土遺物観察表 瓦28	369		
第43表 出土遺物観察表 瓦29	370		
第44表 出土遺物観察表 瓦30	371		
第45表 出土遺物観察表 瓦31	372		
第46表 出土遺物観察表 金属製品1	373		
第47表 出土遺物観察表 金属製品2	374		
第48表 出土遺物観察表 金属製品3	375		
第49表 出土遺物観察表 金属製品4	376		
第50表 出土遺物観察表 石製品	377		
第51表 出土遺物観察表 木製品1	378		

写真図版

- | | | | |
|--------|------------------|--------|---------|
| 写真図版 1 | 螺喉槽台調査区1 | 写真図版52 | 南岸調査区16 |
| 写真図版 2 | 螺喉槽台調査区2 | 写真図版53 | 南岸調査区17 |
| 写真図版 3 | 螺喉槽台調査区3 | 写真図版54 | 南岸調査区18 |
| 写真図版 4 | 螺喉槽台調査区4 | 写真図版55 | 南岸調査区19 |
| 写真図版 5 | 螺喉槽台調査区5 | 写真図版56 | 南岸調査区20 |
| 写真図版 6 | 螺喉槽台調査区6 | 写真図版57 | 南岸調査区21 |
| 写真図版 7 | 螺喉槽台調査区7 | 写真図版58 | 南岸調査区22 |
| 写真図版 8 | 螺喉槽台調査区8 | 写真図版59 | 出土瓦写真1 |
| 写真図版 9 | 螺喉槽台調査区9 | 写真図版60 | 出土瓦写真2 |
| 写真図版10 | 螺喉槽台調査区10 | | |
| 写真図版11 | 螺喉槽台調査区11・北岸調査区1 | | |
| 写真図版12 | 北岸調査区2 | | |
| 写真図版13 | 北岸調査区3 | | |
| 写真図版14 | 北岸調査区4 | | |
| 写真図版15 | 北岸調査区5 | | |
| 写真図版16 | 北岸調査区6 | | |
| 写真図版17 | 北岸調査区7 | | |
| 写真図版18 | 北岸調査区8 | | |
| 写真図版19 | 北岸調査区9 | | |
| 写真図版20 | 北岸調査区10 | | |
| 写真図版21 | 北岸調査区11 | | |
| 写真図版22 | 北岸調査区12 | | |
| 写真図版23 | 北岸調査区13 | | |
| 写真図版24 | 北岸調査区14 | | |
| 写真図版25 | 北岸調査区15・土塗調査区1 | | |
| 写真図版26 | 土塗調査区2 | | |
| 写真図版27 | 土塗調査区3 | | |
| 写真図版28 | 土塗調査区4 | | |
| 写真図版29 | 土塗調査区5 | | |
| 写真図版30 | 土塗調査区6 | | |
| 写真図版31 | 土塗調査区7 | | |
| 写真図版32 | 土塗調査区8・稻荷星敷下調査区1 | | |
| 写真図版33 | 稻荷星敷下調査区2 | | |
| 写真図版34 | 稻荷星敷下調査区3 | | |
| 写真図版35 | 稻荷星敷下調査区4 | | |
| 写真図版36 | 稻荷星敷下調査区5 | | |
| 写真図版37 | 南岸調査区1 | | |
| 写真図版38 | 南岸調査区2 | | |
| 写真図版39 | 南岸調査区3 | | |
| 写真図版40 | 南岸調査区4 | | |
| 写真図版41 | 南岸調査区5 | | |
| 写真図版42 | 南岸調査区6 | | |
| 写真図版43 | 南岸調査区7 | | |
| 写真図版44 | 南岸調査区8 | | |
| 写真図版45 | 南岸調査区9 | | |
| 写真図版46 | 南岸調査区10 | | |
| 写真図版47 | 南岸調査区11 | | |
| 写真図版48 | 南岸調査区12 | | |
| 写真図版49 | 南岸調査区13 | | |
| 写真図版50 | 南岸調査区14 | | |
| 写真図版51 | 南岸調査区15 | | |

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1. 金沢城公園の開設に至る経緯

金沢城は、16世紀半ばに成立した金沢御堂（金沢坊舎）を前身とし、天正8年（1580）以降、織田政権下の城郭となった。天正11年（1583）には前田利家が入城し、これより前田家歴代当主14代が約300年間にわたり城主となり、江戸幕府成立後最大の大名の居城として機能した。

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年（1945）まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和24年（1949）には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和53年（1978）、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成5年（1993）3月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成3年（1991）8月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成5年3月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成7年（1995）3月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成8年（1996）1月に28.5haを都市公園に利用する都市計画を決定し、同年3月に国から大学跡地21.77haを取得した。

2. 金沢城公園整備（第一期整備から第三期整備）

平成8年度に始まった第一期金沢城公園整備は、平成16年度（2004）まで公園としての基盤整備とする10カ年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各種広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓、内堀等）を進めることとした。また、保存目的として、石垣の記録化（石垣現況測量）や動態観測にも着手した。

公園の開設は、平成9年度（1997）の本丸等の暫定開園に始まり、平成13年（2001）9月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

公園整備の実施に先立ち、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課は、金沢城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事に伴い埋蔵文化財に影響が生じる場合は前もって発掘調査等の保護措置を講ずるべく、事前協議を進めていた。

その結果、平成9年度（1997）に県立埋蔵文化財センターが実施した内堀及び菱櫓台石垣上面遺構の確認調査を皮切りに、園地整備に係る工事設計と埋蔵文化財調査がほぼ同時並行状態で急ピッチに進み、平成10年（1998）には、新たに設立された財団法人石川県埋蔵文化財センターを調査担当として、いもり堀、本丸附段階段、菱櫓南（五十間長屋折曲部）、三ノ丸北便所の発掘調査、平成11年（1999）には、前年度から継続の建物復元整備に伴う内堀・五十間長屋に加えて、新丸広場（湿性植物園）、三ノ丸休憩所、新丸大手門便所、鶴ノ丸便所、二ノ丸園路等の整備に係る発掘調査が行われた。

公園整備に係る調査は以後も引き継がれ、平成12年度（2000）には北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）、尾坂門、三ノ丸北、鶴ノ丸、いもり堀、平成13年度（2001）には風呂屋口門等、橋爪門、尾坂門で、園路整備に伴う遺構確認調査が実施されている。

石川県は、今後の金沢城公園の整備計画を検討するため、平成16年（2004）2月に「金沢城復元

基本方針検討委員会」を設置し、金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加え、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

この基本方針に基づき、平成 26 年（2014）までとする第二期整備計画が策定され、復元整備の拡充をはかった。具体的には、①三御門（河北門・橋爪門・石川門）の整備、②いもり堀の段階的整備、③玉泉院丸庭園整備である。また、保存目的として玉泉院丸南西石垣の保存修理も行っている。

平成 26 年をもって第二期整備が完了となることから、平成 27 年（2015）3 月に「金沢城公園第三期整備計画策定懇話会」を設置、同年 6 月には来園者へのアンケート調査などを実施し、12 月には第三期整備を策定した。①鼠多門の復元整備、②鶴ノ丸休憩所一帯の再整備、③石垣の保全を掲げ、石垣の計画的な「金沢城の石垣の保存管理及び保全対策に係る計画書」を作成、基本計画の策定やそれに基づく保全対策の実施を目指し、現在も事業を進めている。

3. 金沢城の調査研究

公園整備を進める一方で、石川県は、平成 13 年（2001）7 月、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室を設置し、金沢城に係る学術的な調査研究を推進することとした。（平成 19 年（2007）石川県金沢城調査研究所に改組）

平成 14 年度（2002）からは、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）などを対象に金沢城の総合的な調査研究に着手した。埋蔵文化財では、金沢城跡の変遷と構造を探る目的で平成 14 年度（2002）より国庫補助を得て本丸一帯の確認調査を実施している。平成 24 年度以降は、とくに城郭の庭園に焦点を当て、東ノ丸の庭園遺構の確認や、庭園の構成要素でもある切石積石垣の確認調査を継続している。また、平成 19 年度（2007）から 23 年度（2011）には、石川門の修理に伴う遺構確認調査も実施した。一方、金沢城公園整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査も主幹部局である土木部の依頼により実施している。第二期整備事業では平成 10 年（1998）から続いたいもり堀の調査を始め、平成 18 年（2006）には河北門（～H20）、平成 20 年（2008）に玉泉院丸（～H25）、平成 22 年（2010）に橋爪門（～H24）を、第三期整備では、鼠多門の整備に係る遺構確認調査を実施している。

4. 国史跡指定

こうしたなかで、整備着手から 12 年後の平成 20 年（2008）1 月 11 日に、金沢城跡の主要部分 275,155.14 m²について、石川県が文部科学大臣に国史跡指定の申請を行い、平成 20 年 5 月 16 日に国の文化審議会の文部科学大臣への答申を得て、平成 20 年 6 月 17 日付け文部科学省告示第 100 号で国の史跡に指定された。また、平成 20 年 12 月 24 日には石川県が管理団体に指定された。翌 21 年から『史跡金沢城跡保存管理計画書』に着手し、23 年 4 月に策定された。

5. いもり堀の調査経緯

上記と一部重複するが、本項では今回報告するいもり堀の状況について補足する。いもり堀については、公園区域内（堀全体の南東部）を対象として、上記 1 の「金沢城跡整備実施設計報告書」からすでに整備計画が示されており、金沢城公園整備の主要な要素として位置づけられていた。ただし後述する通り、近代に埋め立てられた後、元の堀の大部分は道路用地となっており、整備への大きな課題となっていた。また当初整備計画については、都市公園としての景観・機能が優先され、範囲や形

状に課題があったのが実情であった。平成 8・9 年度にボーリング調査・試掘調査を行った後、平成 13 年（2001）9 月の「全国都市緑化いしかわフェア」開催までの整備に向け、平成 10 年度から本格的に埋蔵文化財調査が実施されたが、検出遺構と当初整備計画との調整を要する状況が明確になった。一方で二ノ丸菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の復元整備を優先する計画の変更を受けて、緑化フェア期間中は暫定駐車場として整備する方針が固められ、平成 12 年度の埋蔵文化財調査は、10 年度の成果を補足する目的で実施された。

平成 13 年 12 月に行なった庁内会議（金沢城周辺整備連絡調整会議）の段階では、いもり堀の復元は、近世後期の絵図や埋蔵文化財調査結果を踏まえ、地割・構造等を決定することが基本方針となっており、市道や南岸以南の敷地（堂形）を占める石川県庁の移転（平成 14 年 12 月末）後の状況との関係が課題とされていて、以降のいもり堀の整備計画はこの流れにおいて進められることとなった。平成 15・16 年度においては、それまでは確認されていなかった堀底とこれに至る法面・石垣の埋蔵文化財調査を実施し、16・17 年度にはこれに随連してボーリング調査も行った。

上記 2 に示した「金沢城復元基本方針検討委員会報告書」（平成 17 年 3 月）では、いもり堀は、その東側部分について、「過半が公園区域内にあり、城外周部の城郭景観の向上を図るうえで効果的な復元の範囲や段階的な復元手法について、具体的に検討を進めることが望ましい」との方針が示されており、これを受けて平成 17 年度に府内に「金沢城公園いもり堀復元検討会」を設け、協議を進めることとなった。この検討会では、いもり堀の全体復元を視野に入れながら、金沢城公園区域内での段階的整備計画の策定を目指し、堀・石垣（堀南東の鯉喰櫓台石垣）の復元のみならず、景観や取水排水、水質確保等にわたり実務的・技術的な検討を進めることとした。なお 17 年度には、鯉喰櫓台石垣の遺存部最上面を露呈させる暫定的な整備が行われた。

以後の埋蔵文化財調査に関しては、全体復元との整合性を図る上で、堀の南岸の範囲確認の必要性が協議され、平成 18・19 年度の公園区域外の調査が具体化することとなった。また堀の湛水化にかかり、兼六園側の辰巳用水から県庁跡地（現・しいのき園地）を経由するルートが検討され、これが平成 20 年度の調査の原因となった。

平成 18 年度以後は、「金沢城河北門等の復元整備専門委員会」を設置し、第二期整備事業として並行していた河北門の復元整備と併せ、設計・施工上の指針等について検討し、助言を得ることとなった。この検討作業において、いもり堀の暫定的な復元範囲が確定し、平成 20 年度から整備が進められるに至った。また鯉喰櫓台石垣の復元についても方針が定められ、平成 21 年度には櫓台石垣南面・東面の調査、上面残存部分の積み直し調査を実施した。

以上の経緯・経過を経て、平成 21 年度の鯉喰櫓台石垣復元整備を以っていもり堀の整備は一段落することとなった。

第 2 節 調査の経過

1. 発掘調査

平成 10 年度 当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、4 月 1 日付で業務委託契約を締結した。文化財保護法第 57 条第 1 項に基づく発掘調査届出書（金沢城跡いもり堀等）については 4 月 1 日付で提出出した。

調査は 7 月 21 日に着手し、いもり堀東部（いもり坂口より南東）の北岸全域を対象に実施した（いもり堀第 1 次）。当初の想定通り、北岸全体が大規模に削平を受けており、絵図にみえる北西部櫓台は基礎部分も失われていた。しかし削平面での北岸ライン、南東の櫓台（鯉喰櫓台）の位置が確認で

きた他、より城内側に先行する堀の存在が認められ、調査区北西にはこの堀に伴う土橋の存在が判明した。ただし整備計画の見直しにより、二ノ丸五十間長屋の調査を早急に進める必要が生じ、本地点の遺構の詳細検討については次年度以降に持ち越しとなつた。11月1日には現地説明会を行つた。現地の作業は10月30日に完了し、調査面積は約3,300m²である。

平成12年度 当初は平成11年度に調査を予定していたが、整備計画の見直しにより当該年度の調査となつた。土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、4月3日付で業務委託契約を締結した。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書（金沢城跡いもり堀等）については4月7日付で提出した。

当該年度は城内全体の整備・計画上、いもり堀については2回に分けて調査を実施した。第1回目（いもり堀第2次）は10年度調査の北西側の延長部（稲荷屋敷下）を対象とし、5月16日に着手し、いもり堀の築造年代を示唆する元和年間（1615～24）頃の特徴をもつ堀石垣を確認した。6月17日には現地説明会を行い、現地の作業は6月21日に完了した。第2回目（いもり堀第3次）は、10年度調査区北西部の土橋と南東部の鯉喰櫓台の2箇所について、遺構の構造の詳細検討を進めるべく8月10日に着手した。この調査では土橋及び鯉喰櫓台石垣の特徴や成立・改修過程が整理され、いもり堀の変遷の大略について知見を得た。10月19日には現地説明会を行い、現地の作業は11月22日に完了した。当該年度の調査面積は合わせて約3,950m²である。

平成15年度 上記第1節で記述した通り、平成13年度以降、いもり堀の整備計画は改めて検討されることとなつた。当該年度と16年度は、いもり堀東部北岸の堀底までの状況を確認することを目的に、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室が発掘主体となって、埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第58条の2第1項に基づく発掘調査報告については4月21日付で提出した。

当該年度は南東の鯉喰櫓台と北岸中央付近の2箇所を対象とし、それぞれ第1地点・第2地点と呼称した。堀底までは、過年度のボーリング等により10mを越える深さが予測され、調査地点を鋼矢板で囲んで壁面を保護する措置を採り、第1地点は鯉喰櫓台の南西側2辺を、第2地点は東・西・南の3辺を囲う形状とした。調査は9月1日に着手した。堀の埋土については、上部が明治40年（1907）以後の埋立土であるため、この部分については重機で掘削し、およそ2m程度の深さを単位として法面の検出・精査を人力で行うことを繰り返し堀底に至った。一定の深さ以後は、25tクレーンを用いて排土の搬出を行つた。これらの作業の結果、鯉喰櫓台石垣の規模や石積の特徴、堀の深さ、法面（土羽）の形状・規模や堆積状況に関する知見を得ることができた。12月4日に測量、12月21日には現地説明会を行い、現地の作業も同日に完了した。調査面積は1,280m²である。

平成16年度 当該年度は平成15年度第2地点の東西に2箇所の調査区を設け（第3・4地点）、いもり堀北岸の構造について所見を補足することとした。前年度同様、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室が埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第58条の2第1項に基づく発掘調査報告については6月28日付で提出した。調査は8月17日に着手した。15年度と同じく調査区を鋼矢板で三方を囲み、堀底まで調査を進めた結果、15年度調査で得た法面の特徴がおおよそ堀東部全体に及ぶ見通しを得た。12月2日に測量、12月19日には現地説明会を行い、現地の作業は12月22日に完了した。調査面積は1,280m²である。なお本年度と翌年度にいもり堀及び先行する本丸南堀の範囲を対象に地質ボーリングを実施した。

平成18年度 当該年度の調査は、平成17年度の「金沢城公園いもり堀復元検討会」で協議されたように、いもり堀南岸の位置を確認することを目的とした。調査地点は南岸に2箇所を設定した（第1・2地点）。金沢城公園区域外であり、金沢市の市道の一部に相当している。前年度と同様、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室が埋蔵文化財調査を

実施した。文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査報告については9月11日付けで提出した。調査は9月15日に着手し、堀南岸の肩部に加え、堀の南側に広がる堂形馬場や辰巳用水に関する遺構も一部検出した。測量については、第1地点は10月5日、第2地点は10月30日に実施した。また10月5日には第1地点を対象に報道機関に向けて現地説明を行った。現地の作業は11月1日に完了した。調査面積は50m²である。

平成19年度 当該年度の調査は、平成18年度調査地点（第2地点）の西側において、いもり堀南岸の屈曲部付近の確認を目的とした。前年度と同じく調査地点は金沢城公園区域外であり、旧金沢市広坂消防出張所敷地に位置する。土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県金沢城調査研究所（前年度に改組）が埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査報告については7月18日付けで提出した。調査は8月17日に着手し、やはり堀南岸の肩部や堂形の遺構を検出した。9月19日に測量を実施し、9月21日には報道機関に向けて現地説明を行った。現地の作業は9月27日に完了した。調査面積は48m²である。

平成20年度 当該年度は、復元整備を進めていたいもり堀への取水ルート部分を対象に、緊急発掘調査を実施した。この部分は、金沢市の市道及び県庁跡地東部（広坂東園地、現・しいのき園地）に相当し、財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成15年度に発掘調査を実施した金沢城跡（堂形）のI区と交錯していた。土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県金沢城調査研究所が埋蔵文化財調査を実施した。文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査報告については7月3日付けで提出した。調査は7月8日に着手し、いもり堀南岸、辰巳用水、石垣基礎・石列・溝・土坑等の遺構を検出した。8月21日・9月5日に測量を実施し、9月22日に完了した。調査面積は48m²である。なお、遺構や造成土のうち、最下面で検出したものについてはできる限り保護措置を執った。また調査地点北部で検出した辰巳用水石管については、取水管がその下部を潜るように調整し、保存を図った。

平成21年度 当該年度は、前年7月18日に現状変更の許可を得た鯉喰櫓台石垣の復元整備の一環として、石垣南面・東面の部分的な検出、上面残存部の石垣の一部積み直しに係る調査を目的とし、土木部公園緑地課の依頼を受け、石川県金沢城調査研究所が実施した。調査は5月11日に着手し、鯉喰櫓台石垣の特徴にかかる知見が追加される等の成果を得た。6月17日に立面、7月5日に平面の測量を実施し、7月6日に現地作業を完了した。調査面積は70m²である。

2. 出土品整理

出土品整理については、主として財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託し、平成14～22年にかけて実施した。

平成19年5月22日には、いもり堀北岸調査区出土資料を始めとする越前赤瓦の検討会を行い、下記の方々の指導・協力・助言を得た。

吉岡康暢・久保智康・森島康雄（金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会）

河村健史（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター・当時）

堀 大介（越前町教育委員会）

令和元年6月17日には、土橋調査区出土の建築部材について改めて検討し、麓 和善委員（金沢城調査研究建造物専門委員会）の指導・助言を得た。

3. 委員会

石川県は平成18年10月27日付で「金沢城河北門等の復元整備専門委員会」を設置し、「河北門」及び「いもり堀」の設計・施工上の指針等について、専門的・技術的視点から検討、助言を得ることとした。委員は以下の6氏で、石川県知事が委嘱した。

金沢城河北門等の復元整備専門委員会委員（敬称略 肩書きは当時）

北浦 勝 金沢大学大学院自然科学研究科教授（土木）

北垣聰一郎 元東大阪短期大学教授（石垣）

北野 博司 東北芸術工科大学助教授（考古）

中村 利則 京都造形芸術大学教授（建築）

新谷 洋二 東京大学名誉教授（城郭・土木）【副委員長】

平井 壽 昭和女子大学学長（城郭・建築）【委員長】

会議は以下の日程で計6回開催した。埋蔵文化財の調査状況については、適宜報告し、専門的な指導・助言を得た。下記議題はいもり堀関連について抽出した。

第1回 平成18年11月27日（月）

・復元整備計画等の概要

・復元設計の基礎資料について（埋蔵文化財調査の状況 文献史料の状況）

・設計の基本的事項について

第2回 平成19年2月1日（木）

第3回 平成19年5月24日（木）

・いもり堀の復元計画について（復元の基本的な考え方 埋蔵文化財調査の結果 段階整備に向けた課題）

第4回 平成19年11月14日（水）

・いもり堀の復元計画について

第5回 平成20年2月21日（木）

・いもり堀の設計（案）について（鯉喰橋台石垣について 堀の構造について）

第6回 平成21年2月19日（木）

・いもり堀整備工事現場

・鯉喰橋台石垣について（埋蔵文化財調査結果による石垣の特性について 石垣の削付けの基本方針について）

平成13年度に金沢城研究調査室が設置されて以降は、金沢城調査研究委員会の総括的指導の下、主に金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会・伝統技術（石垣）専門委員会より指導・助言を得た。

金沢城調査研究委員会

平井 壽（委員長） 北垣 聰一郎（平成18年度まで） 嶋崎 丞（故人） 中村 利則

飛田 篤夫 吉岡 康暢 脇田 修（故人）

金沢城調査研究埋蔵文化財専門委員会

吉岡 康暢（委員長） 久保 智康 千田 嘉博 森島 康雄

金沢城調査研究伝統技術（石垣）専門委員会

〔平成14～23年度〕

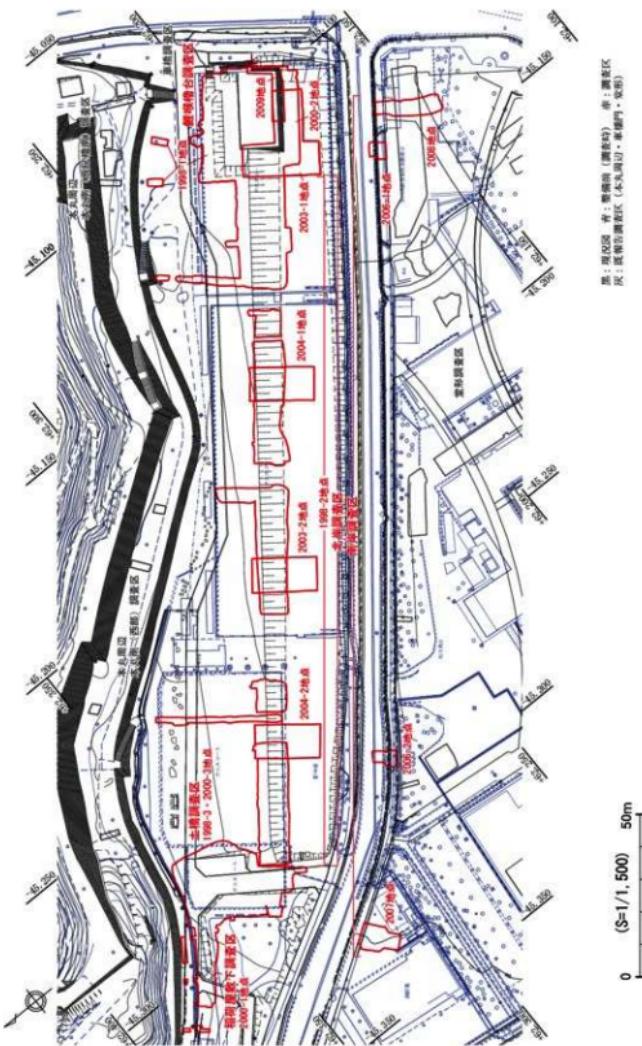
北垣 聰一郎（委員長：平成18年度まで） 吉岡 康暢（委員長：平成19年度から兼任）

北島 俊朗 北野 博司 斎藤 慎一（平成15年度まで） 金森 安孝（平成16年度から）

楠 正勝（平成18年度から）

〔平成24年度～〕

北野 博司（委員長） 市川 浩文 金田 明大 西形 達明 宮里 学



第1図 調査区・調査地点位置図 (S=1/1, 500)

第2章 位置と環境

第1節 金沢城と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10m、最高所である本丸で30m以上を測る。本丸からは、低地の金沢平野のみならず小立野台地方面へも眺望がきく。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく〔藤1999〕、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

城下町は、金沢城を中心に小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

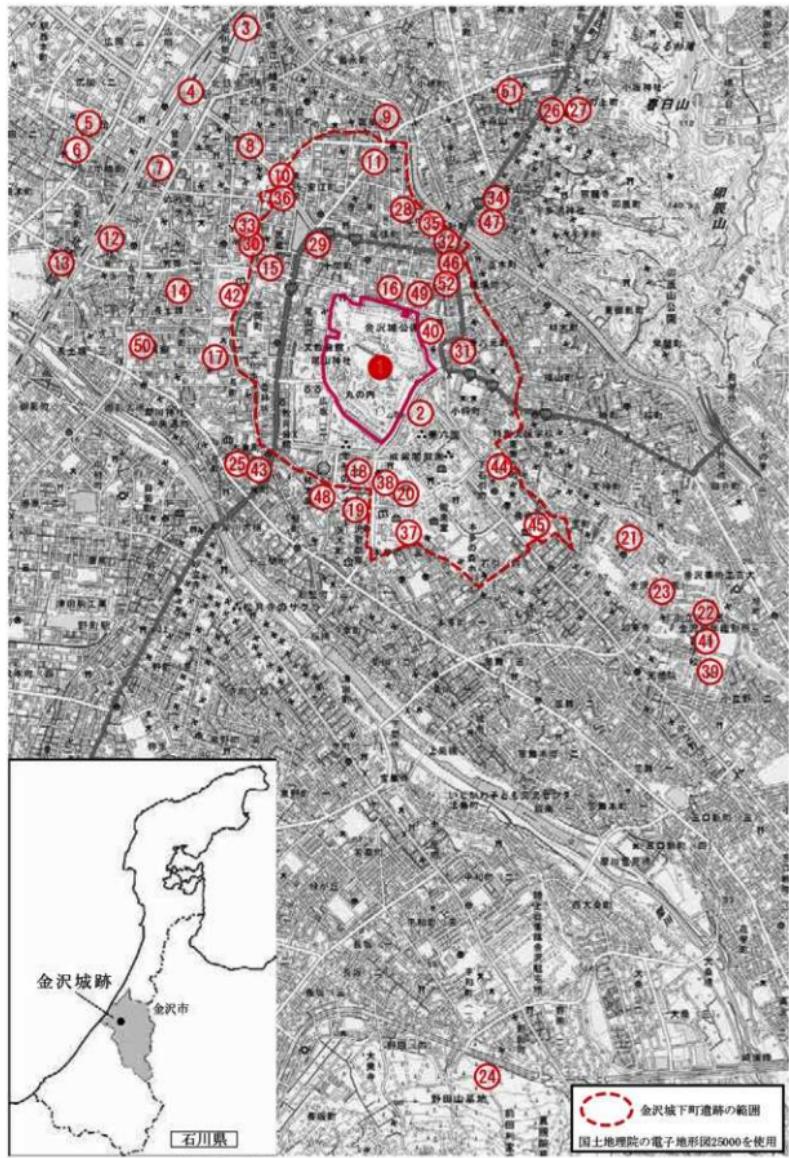
金沢城跡周辺は、絵図等の資料から近世以降の市街化が確認できるものの、それ以前の様相については文献等からの推定にとどまっていたが、城跡自体や城地に隣接する金沢城下町遺跡（前田氏（長種系）屋敷跡地点）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2019c〕・（丸の内7番地点）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2014a・2015a〕、広坂1丁目遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a・2005c・2006a・2007a・2009a〕の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b・2011a・2011b・2012d・2013b・2014b・2018a〕や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年4月1日には、第2図の赤破線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知されている。

旧石器時代の遺跡は、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内7番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。

縄文時代の遺跡は、丸の内7番地点で草創期の有尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下町の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂1丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a〕で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡〔金沢市埋蔵文化財センター1999〕や彦三町一丁目地点〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b〕では中期の遺構が、広坂1丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で7世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面鏡、帶金具、奈良三彩等が確認されている。県庁跡地（堂形）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2010・



第2図 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の近世遺跡地名表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容		文献
			上塗地層	鉄正平塗	
1	金沢城跡	(前周)	城郭	(前周)	(前周)
2	金八郎	(前周)	城郭	(前周)	(前周)
3	木ノ内城跡 (丸の内遺跡)	SI(1990)・SI(1997)	城郭 (施設)	近世城郭跡	金沢市埋蔵文化財センター-2000b。
4	木ノ内城跡	SI(1990)・SI(1995)	寺子屋 (施設) → 一種施設 → 木ノ内武家宅、木ノ内居宅、近世居宅 （施設 - 木ノ内小屋、施設跡 - 木ノ内基壇、木臼）	木ノ内武家宅、木ノ内居宅、近世居宅 （施設 - 木ノ内小屋、施設跡 - 木ノ内基壇、木臼）	木ノ内城郭跡シナリオ-2002b 木ノ内城郭跡シナリオ-2002c
5	御十井遺跡	SI(1990)・SI(1991)(1998)	古墳地 - 一井城武家宅	古田城 (足利) 下塗地 木戸、水引施設 (石垣、井戸)	金沢市埋蔵文化財センター-2000c 日刊工業新聞-2000
6	鶴来町遺跡	SI(1994)	下塗武家宅		金沢市埋蔵文化財センター-1999
7	鶴来町遺跡	SI(1990)～SI(1995)	町人地 - 下塗武家宅	延宝4年 (1676) 大火資料出土、近世町人地名 （延宝4年 - 1676年）	金沢市埋蔵文化財センター-2001a・2002b・2004c
8	木村一丁目遺跡	SI(1990)・SI(1994)・ SI(2000)・SI(2001)	町人地	施設地元、施設跡、多摩川流域、 施設地元 (施設跡 - 木村一丁目)	金沢市埋蔵文化財センター-2001b 木村一丁目埋蔵文化財調査報告書-2000a
9	鶴来町遺跡	SI(1990)	上塗武家宅	近田氏 (主家) 上塗地、整地から築物多岐出土	金沢市教育委員会-1991
10	木村町内町遺跡 (金沢市地区) (金沢市 市街地)	SI(1990)～SI(2001)	町人地 - 中塗武家宅	佐柳町 (主家) 豊後多良山、西田川、横浜河 主。施設、施設、施設、井戸、土塁	金沢市埋蔵文化財センター-2019a
11	金沢市内町遺跡 (今二丁目地)	SI(1995)	中塗武家宅		金沢市埋蔵文化財センター-2002
12	二社町遺跡	SI(1993)・SI(1997)	古墳地 - 町人地	近塚・御殿、近塚の門、離人門からしら	（付）石川県埋蔵文化財センター-2001a・2007
13	又吉町遺跡	SI(1997)・SI(1998)	古墳地 - 町人地		石川県埋蔵文化財センター-1999 （付）石川県埋蔵文化財センター-2014d
14	穴水町遺跡	SI(1990)	上塗武家宅	長谷川・足利	金沢市埋蔵文化財センター-1998
15	穴水町遺跡 (穴水町地区)	SI(1990)・SI(1998)～ SI(2011)・SI(2017)	上塗人地、水路	施設地元、施設地元、施設地元、穴水号 （施設を含む「びわ」）、石引壁塗、施設跡	金沢市埋蔵文化財センター-2001a・2003a （付）穴水町埋蔵文化財センター-2002
16	寺田町内町遺跡 (寺田町、寺田町地)	SI(1990)・SI(2013)	町人地 - 上塗武家宅	延喜式前の寺田町遺跡	（付）寺田町内町遺跡-2001a 寺田町内町遺跡シナリオ-2019
17	美町遺跡	SI(1990)	中塗武家宅		金沢市埋蔵文化財センター-1999
18	広坂丁目遺跡	SI(1990)～SI(2000) SI(2000)～SI(2006)	中 - 上塗武家宅	東北の大久保地番、大空寺跡、 （東北土塁、土塁下、南門）、寺施道跡、 施設地元、施設地元 (施設跡) は基守寺跡地	金沢市埋蔵文化財センター-2004a 2004a・2005・2006・2007a・2008a
19	下本町内町遺跡	SI(1992)	下塗武家宅 - 上塗武家宅	宝塚の大木による火災資料	金沢市埋蔵文化財センター-1999
20	金沢市内町遺跡 (木本北光院跡地)	SI(1990)・SI(1998)・ SI(2013)・SI(2016)・ SI(2017)・SI(2018)	上塗武家宅、武家宅	道、通路 (宝塚)、 木本家上塗地、施設石塀、門牌、土塁、近塚	石川県埋蔵文化財センター-1998 金沢市埋蔵文化財センター-2012a・2012b （公財）石川県埋蔵文化財センター-2018、原田2019
21	寺内大学文庫跡 (松任町内町地区)	SI(1997)～SI(2002)	下 - 中塗武家宅用	延喜式多数	金沢大学埋蔵文化財センター-2004a・2017
22	寺内大学文庫跡 (松任町内町地区)	SI(1998)～SI(1999)	下 - 中塗武家宅等		金沢大学埋蔵文化財センター-2004a・2017
23	理工寺内町遺跡	SI(2000)～SI(2001)	寺内		（付）石川県埋蔵文化財センター-2002c
24	寺田町内町遺跡	SI(2000)～SI(2002)	寺内	延喜式の寺内、施設の寺内跡、土塁地	金沢市埋蔵文化財センター-1998 2004a・2005a・2012a・2013a・2013a
25	月町二丁目遺跡	SI(1993)～SI(2013)	武家宅		金沢市埋蔵文化財センター-2004a
26	伊原町内町遺跡	SI(2000)	寺内、多室		金沢市埋蔵文化財センター-2004a
27	二安寺町内町遺跡	SI(2004)	寺内、多室		金沢市埋蔵文化財センター-2004a
28	金沢市内町遺跡 (寺内町 - 二安寺町地区)	SI(2004)	武家宅		金沢市埋蔵文化財センター-2007a
29	金沢市内町遺跡 (丁寧 - 金澤町地区)	SI(2005)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター-2007
30	金沢市内町遺跡 (金澤町内町跡地)	SI(2005)～SI(2009)	寺内	施設当時の領、領内変更地、土塁土塀	金沢市埋蔵文化財センター-2008a・2011b
31	金沢市内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2005)～SI(2011)～ SI(2012)～SI(2013)	武家宅	戸所、土塁、石縫塀、石垣、不利	金沢市埋蔵文化財センター-2005a・2012a・2016a・2019a
32	寺内町内町遺跡	SI(2006)	寺内	延喜式の寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2006a
33	寺内町内町遺跡 (寺内町内町跡地)	SI(2006)	寺内	延喜式の寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2006a
34	月町内町遺跡	SI(2006)	寺内	土塁、寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2004a
35	寺内町内町遺跡 (寺内町内町跡地)	SI(2006)	寺内	寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2004a
36	寺内町内町遺跡 (寺内町内町跡地)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	施設小屋、寺内 - 施設当時の施設遺構	金沢市埋蔵文化財センター-2011a
37	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	延喜式、寺内、施設地元、石縫塀	金沢市埋蔵文化財センター-2012a・2013b・2019a
38	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	延喜式、寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2011a
39	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	寺内、土塁跡	金沢市埋蔵文化財センター-2011b
40	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2011b
41	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2011b
42	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	寺内上塗地、柱穴、施設地元、土塁基礎	金沢市埋蔵文化財センター-2011c
43	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	延喜式、寺内、施設地元、土塁、土壇	金沢市埋蔵文化財センター-2011c
44	寺内町内町遺跡 (寺内 - 二安寺町地区)	SI(2006)～SI(2016)	寺内	寺内 (施設地元)、有利 (有利以西)	（付）寺内町内町埋蔵文化財センター-2017
45	金沢市内町遺跡 (梅町 - 三番町)	SI(2012)～SI(2015)	武家宅	寺田氏 (寺内)、久喜丸・利勢 土塁 (寺内跡地)、廻下室、寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2019a
46	金沢市内町遺跡 (梅町 - 三番町)	SI(2012)～SI(2015)	武家宅	寺	金沢市埋蔵文化財センター-2014b
47	金沢市内町遺跡 (金沢町内町跡地)	SI(2012)～SI(2015)	寺内		金沢市埋蔵文化財センター-2014b
48	箕山内町遺跡	SI(2009)	寺内		金沢市埋蔵文化財センター-2019a
49	寺本町遺跡	SI(2010)～SI(2017)	武家宅	曲木造鐘、住跡 (土台、壁、梁)、区画溝、 方柱 (柱頭)、石縫塀、石垣、土塁、井戸	金沢市埋蔵文化財センター-2017・2018a
50	金沢市内町遺跡 (大手町 - 三番町)	SI(2012)～SI(2015)	武家宅	延喜式、寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2018
51	寺町二丁目遺跡	SI(2012)	武家宅	土塁 (寺内)、廻下室、寺内	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
52	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
53	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
54	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
55	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
56	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
57	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
58	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
59	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
60	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
61	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
62	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
63	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
64	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
65	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
66	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
67	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
68	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
69	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
70	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
71	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
72	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
73	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
74	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
75	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
76	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
77	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
78	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
79	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
80	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
81	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
82	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
83	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
84	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
85	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
86	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
87	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
88	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
89	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
90	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
91	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
92	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
93	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
94	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
95	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
96	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
97	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
98	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
99	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
100	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
101	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
102	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
103	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
104	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
105	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
106	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
107	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
108	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
109	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
110	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
111	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
112	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
113	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
114	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
115	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
116	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
117	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
118	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
119	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
120	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
121	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
122	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
123	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
124	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
125	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
126	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
127	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
128	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
129	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
130	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
131	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
132	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
133	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
134	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
135	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
136	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
137	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
138	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)	SI(2012)	寺内	延喜式 (寺内)	金沢市埋蔵文化財センター-2018a
139	寺町二丁目遺跡 (寺町地区)				

2012、石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター 2014c] でも 7世紀後半から 10世紀初頭の遺物が出土し、堅穴建物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂 1丁目遺跡では 7世紀初め頃から 11世紀の遺物が確認されるとともに、藤原宮式、平城宮式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、堅穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏(長種系)屋敷跡地点、丸の内 7番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂 1丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～17世紀初頭は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、県庁跡地(堂形)では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土星が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内 7番地点では遺構は不明であるが 13世紀頃から 17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では 16世紀第3四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では薬研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは 14世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎庵市」が成立し、天文 15年(1546)には現在の城地に金沢御堂(金沢坊舎)が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂(金沢坊舎)は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

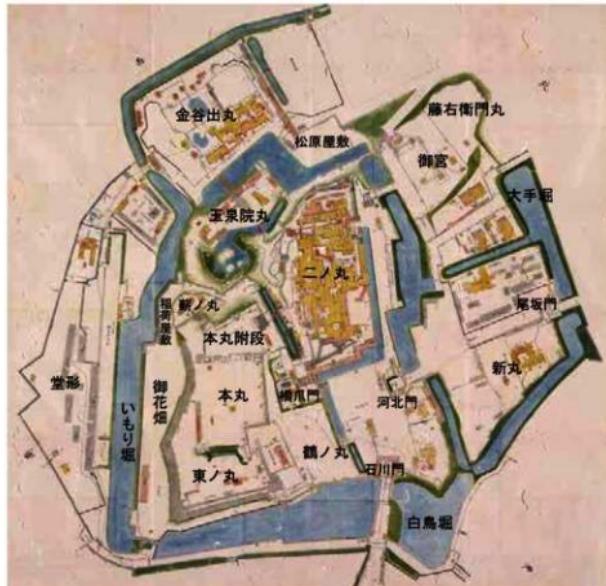
徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は 50 か所を数えるが(第2図・第1表)、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している[金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008b・2011a・2011b・2012d・2013b・2014b・2018a、木越 2013]。城下町はその後度重なる火災等の災害(寛永 8年(1631)・同 12年(1635)の大火等)に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間(1661～1672)までにはほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂 1丁目遺跡、前田氏(長種系)屋敷跡地点、丸の内 7番地点がある。広坂 1丁目遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また 17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏(長種系)屋敷跡地点は、寛永 16年(1639)以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内 7番地点では、16世紀後半～17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永 8年大火頃の町屋→大火以降から万治 2年の武家屋敷→万治 2年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡[金沢市・金沢市教育委員会 1997a]は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺

跡〔金沢市教育委員会 1995〕は町人の居住地に該当し、富籠の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保（久昌寺含む）・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b〕では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b〕では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容をうかがうことができ、三社町遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2007〕でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡〔石川県金沢城調査研究所 2008e・2013c〕は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の9割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d・2008a・2012e〕。辰巳用水〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b〕は寛永9年（1632）に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管（木樋、石樋）が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。



「御城中老分基絵図」（横山隆昭氏蔵）文政13年（1830）

第3図 近世後期の金沢城全体図

第2節 金沢城の沿革

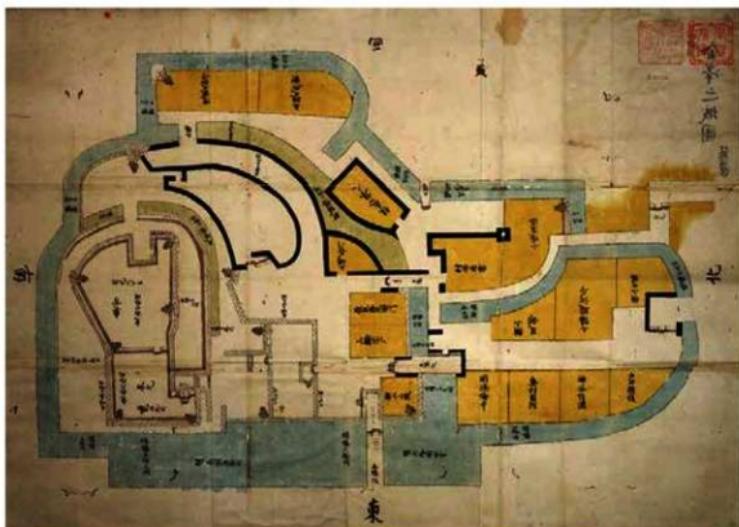
金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』[石川県金沢城調査研究所 2008d]が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第2表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を4期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した4つの時期については、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火灾までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった灾害のうち、寛永8年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壯麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、今まで受け継がれることとなる。一方、宝暦9年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後では、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



「加州金沢之城圖」（東京大学総合図書館蔵）近世初期
第4図 近世初期の金沢城

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
初期金沢城	天文15年	1546	本願寺別院として金沢御坊（金沢坊舍）を設置、金沢城の前身
	天正8年	1580	佐久間盛政が入城、土壘や堀を整備
	天正11年	1583	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後前田家が14代にわたり金沢城主をつとめる
	天正14年	1586	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のものとしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされる
	天正15年	1587	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	1592	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長7年	1602	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	1620	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永8年	1631	城下町から出火、辰巳橋に飛び火し本丸御殿など城内も延焼 【寛水の大火】 大火後二ノ丸を造成拡張し御殿を造営。大規模な城普請でほぼ現在の繩張りに近い状態になる
	寛永9年	1632	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	1634	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年	1640	
	万治3年	1660	20年間藩主不在、城内が荒廃
	寛文元年	1661	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内及び城下町整備や新田開発、文化振興等をすすめる
	寛文2年	1662	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
	寛文11年	1671	
	宝暦9年	1759	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害 【宝暦の大火】
	宝暦10年	1760	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、修築
宝暦の大火後	宝暦11年	1761	河北門石垣を修築
	宝暦12年	1762	橋爪門を再建
	宝暦13年	1763	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教ニノ丸御殿に入る
	明和2年	1765	石川門石垣を修築
	安永元年	1772	河北門を再建
	天明8年	1788	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門続櫓台修理
	文化5年	1808	二ノ丸火災
	文化6年	1809	橋爪門を再建、12代藩主齊広ニノ丸御殿に移徙
	寛政11年	1799	
	安政2年	1855	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
	安政5年	1858	
近代以降	明治4年	1871	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治9年	1876	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	1881	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	1882	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	1907	辰巳橋下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2/3が取り壊され、現在残るようになん段で設けて改修
	昭和24年	1949	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	1995	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	1996	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成13年	2001	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓を復元
	平成20年	2008	国史跡に指定
	平成22年	2010	河北門を復元、いもり堀の段階復元
	平成27年	2015	橋爪門を復元、玉泉院丸庭園を再現復元

第3節 いもり堀の沿革

位置

いもり堀は白鳥堀や蓮池堀（百間堀）と同じく金沢城の外堀で、東ノ丸・本丸の南から玉泉院丸の西に至っていた。本報告では、確認調査等を実施したこのうちの南東部（東ノ丸・本丸・薪ノ丸南側）を対象とする。

近世初期の様相

当該区域では、本丸縁辺に近く地形に沿う形で、先行する堀（本丸南堀）が文禄年間（1592～96）には存在していた。この遺構は元和年間（1615～24）に埋め立てられ、南側におおよそ並行する形で直線的な平面形状の外堀が開削された。これが明治期まで遺存したいもり堀である。寛永8年（1631）以後には最南東北岸に櫓台石垣が造営された。以上の状況は文献・絵図史料からは窺えず、後述する埋蔵文化財調査により明らかにされたものである。

近世前期の様相（第5・6図）

正保元年（1644）にはいもり堀南東の石垣が修理された（「前田貞里書状」金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵「加賀藩史料」七六、[石川県金沢城調査研究所2019b]所収）。いもり堀に関する文献史料の初見で、この頃付近に「薬蔵」（弾薬庫か）があったことが知れる。この箇所は「辰巳之方崩石垣」とされているが、宝永3年（1706）の史料（「先祖由緒井跡々勤方等之覚」金沢市立玉川図書館後藤文庫、[日本海文化研究室1976]所収）では「崩丁場」とあり、以後近世後期にはほかに「鯉喉之御櫓」（「御城内等秘抄<御城中等御手配之事>」所蔵・所収前掲の通り）等の名称が史料にみえる。寛文2年（1662）にも損壊を受け（第5図絵図①記載、「古より公儀江被上候御城絵図・御国絵図改申品々之帳<寛文式年 公儀江被上候絵図>」加越能文庫、[石川県教育委員会事務局金沢城研究調査室2003b]所収）、同4年（1664）に改修された（「先祖由緒井跡々勤方等之覚」）。この時普請を担当した穴生として、後藤権兵衛（「先祖由緒井跡々勤方等之覚」）や奥源三郎が知られる（「奥源兵衛家系（穴太家旧蔵）」、[石川県金沢城調査研究所2008c]所収）。

改修された鯉喉櫓台石垣は、「加賀國金沢之絵図」（第5図②）等によると、高さが水底より8間（約14.5 m）あり、享和から文政期に活躍した穴生で技術書や史書を多く著した後藤彦三郎に「石法極め積み立てたる石垣にて、御城中第一番の石垣に候」（「文政七年 唯子一人伝」金沢市立玉川図書館後藤文庫、[石川県金沢城調査研究所2011b]所収）等と記されている。石垣は明治期に上部（高さ8間とすると約1/3）を失っているため現状では不明であるが、彦三郎による「のり合つよく相見え」等の記載（「文政七年 唯子一人伝」）から、反りの強い勾配だったと思われる。

いもり（守宮）堀の名称は、近世前期の史料では確認できず、また『越登賀三州志』（寛政10～文政2年（1798～1819））にも見えないが、「御城内等秘抄」など文政7年（1824）頃にまとめられた穴生役後藤家の文書に現れる他、天保15年（1844）作成の「加州金沢御城來因略記」（石川県立図書館蔵）等に記されている。

いもり堀の全容は、17世紀後半以降、絵図に描写されている。第5図①～④、第6図⑤は17世紀後半～18世紀前半の状況で、南東の鯉喉櫓台を伴う景観が描かれている。玉泉院丸の泉水南東といもり堀とが連絡する表現が認められ、この部分がもとといもり堀ないし先行する本丸南堀から分岐した堀であったことを示唆している。ただし④の描写のように、18世紀代に入っても玉泉院丸泉水南東部に水を湛えた部分が伸びていたのかは実際には疑問で、②の絵図が示す延宝年間には埋没してい

る可能性も考えられる。

③では、いもり堀北岸縁の遮蔽施設の大部分（南東の鯉喰櫓台・北西の稲荷屋敷付近以外、以下主要部とする）が土塹であることが明記されている。また鯉喰櫓台・稲荷屋敷付近の描写表現は土塹ではなく、太鼓塹と想定される。③～⑤には塹の内側に4棟の長屋があり、後の史料によるとこれは武具を収めた土蔵とされる。④は18世紀前半の状況で、凡例によると描かれた塹は二重塹である。なお詳細な年代は不明ながら、宝暦以前とされる⑤では、稲荷屋敷付近に小規模な櫓台の表現があり、近世後期の絵図と共通する。

なお絵図にみる通りいもり堀は水堀であり、③では辰巳用水の分流とみられる水路が接続している。ただし堀の構築時期は辰巳用水開削に先行し、初期の状況は判然としない。

近世後期の様相（第6図）

第6図⑥～⑧は19世紀以後の状況である。宝暦9年（1759）の大火で一帯は焼失し、発掘調査でも被災の痕跡が窺われるが、絵図によると土蔵が一棟のみ再建されている。⑥～⑧の三葉は近世後期を代表する絵図であるが、堀縁の遮蔽施設の表現がそれぞれ異なっている。文政13年（1831）作成の⑥では、主要部は土塹、鯉喰櫓台付近は掛塹か突斗立とみられる表現であるが、天保4～9年（1833～1838）頃の景観年代が考えられる⑦では主要部に「堀跡」、鯉喰櫓台付近に「無双突斗立」との記載がある。そして嘉永3年（1850）作成の⑧では稲荷屋敷付近を除き、遮蔽施設が描かれていない。なお南岸の大部分では、いずれも堂形馬場の土壘が堀縁まで迫っている。また⑥・⑧の絵図では、土壘の内側に平行するように辰巳用水の埋樋が描写されている。絵図には記されていないが、⑥では木樋、⑧では石樋になっているとみられる。

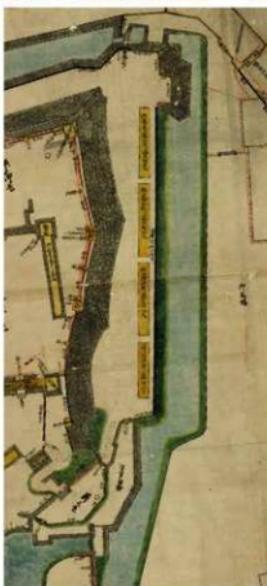
近代以降の様相

明治4年（1871）には城域が兵部省（のち陸軍省）の管轄になった。明治5年（1872）の「金沢旧城廓總図」（石川県立図書館蔵）では御花畠に土蔵の表現がなく、この時までに撤去されていた可能性が高い。明治34年（1901）、広坂の道路整備にともない、いもり堀南東の一部に土砂が投棄された『稿本金沢市史 市街編第四』P958）。さらに明治40年（1907）、被服庫の敷地増設に伴い、いもり堀北部・御花畠の南側大部分、高さ約7～8mが削平され堀は埋め立てられるに至った。この時城内側の石垣に影響が及んだらしく、大鏡一帯が崩壊したため、対処として本丸・東ノ丸南面石垣全体の上部が撤去されることとなった（同前P1035、[石川県金沢城調査研究所 2008d] P22・23）。戦後に入り昭和22年（1947）には、第2回国民体育大会開催に際しテニスコートが設営され、平成10年（1998）まで一般に利用されていた。



①「加賀金沢城絵図」〔(公財) 前田育德会蔵〕寛文2年(1662)

②「加賀国金沢之輪図」〔金沢市立玉川図書館蔵〕寛文8年～延宝年間(1668～1681) 図

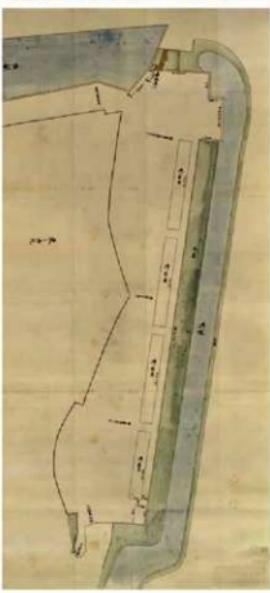


③「金沢城絵図幅」〔石川県立歴史博物館蔵〕延宝4年～元禄4年(1676～1710) 図



④「金沢城図(奥村家蔵袋内・箱入り)」〔金沢市立玉川図書館蔵〕18世紀前半

第5図 いもり塗絵図1



⑦「金沢城内外御建物绘図」（「解之御丸辺」「中百之御堀辺」「既巳之御堀辺」
「御堀」堂形御馬場并御細工所辺）天保4～9年（1833～38）
〔（公財）前田育徳会蔵〕



⑥「御城中老分基绘図」（横山降昭氏蔵）文政13年（1830）
〔（公財）前田育徳会蔵〕嘉永3年（1850）

第4節 既往の調査成果

1. 金沢城の発掘調査（第7図・第3・4表）

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50～61年には金沢大学が主体となり、大学施設設置工事に伴う調査を実施している。

平成4～6年には県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成8年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことにより始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成9～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は（財）石川県埋蔵文化財センター）が二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査を実施した。

平成13年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が設置され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、伝統技術（石垣）の4分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手道（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出など多くの成果がある。

平成15年度以降は公園整備事業に係る調査が再開され、いもり堀・河北門・玉泉院丸庭園・橋爪門・鼠多門等で復元整備にかかる確認調査が実施された。このほか、都心地区整備推進事業として（財）石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査している。

2. いもり堀周辺の調査（第8図）

（1）車橋の調査〔石川県立埋蔵文化財センター 1996〕

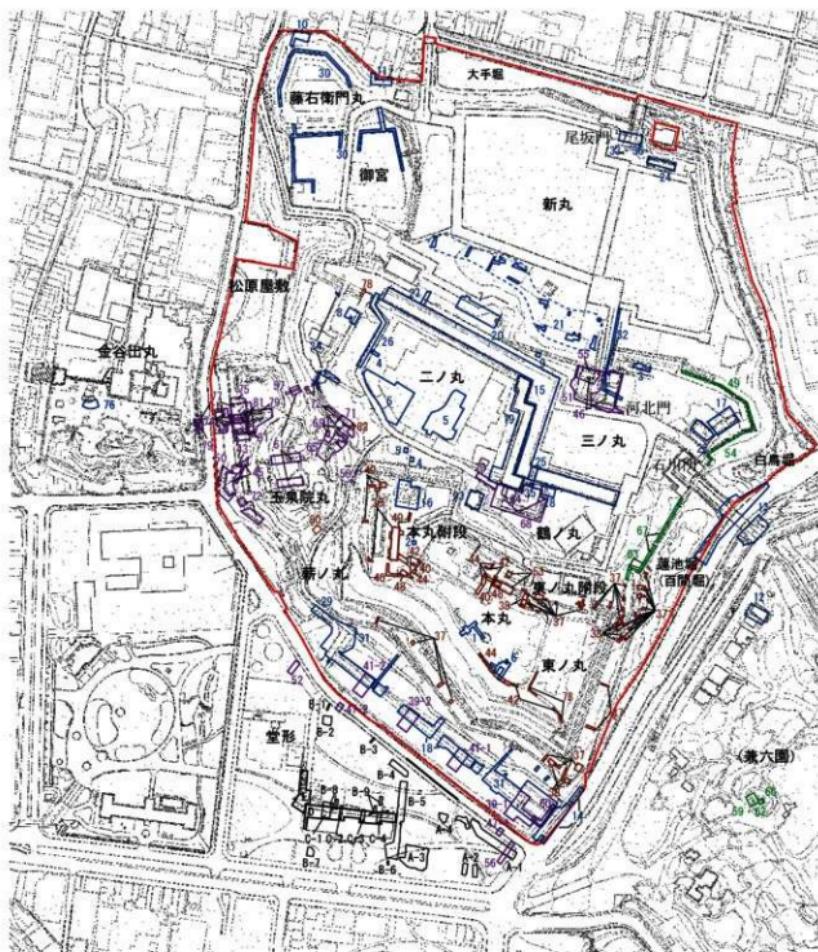
いもり堀調査区の南東に隣接する。平成6年（1994）、道路整備を原因とし、石川県立埋蔵文化財センターが調査した。近世の遺構として東西方向に三条の石垣・石積が検出されており、いずれもいもり堀調査区に延長している。石垣3（1800S）はいもり堀造営以前の構築、石垣2（1934N）は鯉喰櫓台改修に関わる櫓台内部の石積、石垣4（1931S）は鯉喰櫓台東面（1930E）に入角をもって連続する石垣である。

（2）金沢城跡埋蔵文化財確認調査 本丸南（辰巳櫓下）の調査〔石川県金沢城調査研究所 2008d〕

いもり堀調査区の北側、明治40年（1907）に削平された御花畠の残存部に位置する。平成14・15年度（2002・2003）に初期金沢城の構造解明に係り、金沢城研究調査室が確認調査を実施した。南東の辰巳櫓南（2002-28～31地点）では、東西方向に二条（1801S・1802S）、南北方向に一条（1803W）の石垣を検出した。本丸南堀の北岸に相当する遺構で、文祿～元和年間にかけて、構築・廃絶時期は一様ではないが、重複しつつ存続した。いもり堀の北岸となった御花畠造営に際し、最後まで残っていた1802Sも埋め立てられている。

（3）県庁跡地の調査〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012〕

いもり堀調査区の南側に位置する。一帯は近世において「堂形」と称され、藩政期には米蔵や馬場等があった。石川県庁の移転後の都心地区整備推進事業に係り、平成15・16・19・20年度に財團法人石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。このうち15年度I区は、いもり堀調査区（南部）2008年度調査区と重複している。いもり堀調査区と連続する遺構として、馬場跡・辰巳用水管・池状遺構等がある。また20年度調査区では、堀跡とされる遺構が検出された。胴木や石材碎片の存在から切石積石垣の護岸が想定されているが、遺構の性格や構築年代の詳細等検討を要する。



第7図 金沢城跡発掘調査位置図（～令和元年度）

第3表 金沢城跡発掘調査一覧（1）

調査箇所	調査年度	調査主体	調査範囲	備考	文献
1 本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調査委	西御門・礎石建物跡		界上1969・吉岡1985・増山1999
2 本丸南段	昭和43(1968)	金大金沢城調査委	西御門・礎石建物跡		界上1969・吉岡1985・増山1999
3 三ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調査委	西御門・礎石建物跡		界上1969・吉岡1985・増山1999
4 二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調査委	西御門・礎石建物跡		界上1969・吉岡1985・増山1999
5 二ノ丸	昭和44(1969)	私教委・金大	校舎増築	校舎跡・排水施設・用水路	私教委1970・吉岡1985・増山1999
6 本丸	昭和44(1969)	私教委・金大	西御門・三十四間廊跡		私教委1970・吉岡1985・増山1999
7 四十間廊	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋敷石・礎石跡	上野1976・吉岡1985・増山1999
8 二ノ丸	昭和52(1977)	金大	西御門・礎石建物跡		金大木1981・吉岡1985・増山1999
9 三ノ丸～四十間廊屋根通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無縫アンテナ設置	大型礎石	金大木1980・吉岡1985・増山1999
10 鶴右衛門丸北側法面断部	昭和56(1981)	金大考古学研究室	西御門・礎石建物跡		資本12号1986・増山1999
11 黒門北側壁塗装	昭和61(1986)	金大考古学研究室	地盤防護用各防止工事	石垣跡・切石礎跡、瓦	資本12号1989
12 鶴六間（江戸町衛定地）	平成元年(1989)	私隸文センター	店舗改修	17世紀初期の造構面（礎石建物等）	私隸文センター1992
13 石川門前土塁（石川城）	平成4～6(1992～94)	私隸文センター	道路整備	土塁の形成過程 16世紀後半頃の鉄冶開進造構等	私隸文センター1997・1998
14 亭橋	平成6(1994)	私隸文センター	道路整備	石垣	私隸文センター1996
15 内堀第1次・兼備	平成9(1997)	私隸文センター	公園整備（復元整備）	堀・橋脚（埋置された刀・槍・鏡）・愛憎礎石等	金沢城調査研究会2011d・2012b
16 本丸南段	平成10～12(1998～2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	堀跡	金沢城調査研究会2019c
17 三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)私隸文センター	公園整備（復元設置）	鉄冶所跡（鉄冶場造構）、鉄部品	金沢城研究調査会2006b
18 いもり櫓第1次	平成10(1998)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	天正～元和頃の堀・土塁、元和以後の堀・櫓台	三浦1999
19 五十間廊	平成10～11(1998～99)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	石垣内部構造 壁・長屋敷石、17世紀初頭の造構面	金沢城調査研究会2011d・2012b
20 内堀第2次	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	西手堀・無石垣の構造把握	金沢城調査研究会2011d・2012b
21 新丸第1次	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	近代に埋没した堀の範囲確定	金沢城調査研究会2016d
22 三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	礎石建物（番屋跡）、石垣井戸	(財)私隸文センター2002a
23 鶴ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元設置）	木構・石築（辰巳永作）	金沢城調査研究会2016d
24 新丸第2次	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元設置）	16世紀後半から水害調節の造構面	(財)私隸文センター2002a
25 鶴ノ門外接続跡基礎	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	接続基礎の築造記録	金沢城調査研究会2011d・2012b
26 二ノ丸闘闘	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	礎石、土礎造構	金沢城調査研究会2016d
27 三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)私隸文センター	公園整備（設置設置）	土坑	金沢城調査研究会2011d・2012b
28 鶴ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	16世紀末期頃の造構面	金沢城調査研究会2015c
29 いもり櫓第2次	平成12(2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	東北門半手から水害調節の造構面	金沢城調査研究会2011c
30 北ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	大寺門櫓、空堀跡、石垣等	金沢城調査研究会2019c
31 いもり櫓第3次	平成12(2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	元和以前の堀・土塁・土壠護岸 金箔瓦	油屋・田辺はか2001
32 三ノ丸第4次	平成12(2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	河北門石垣台・礎石、16世紀後半～元和頃の造構面 第2段と合せて石垣門脇をとして報告	金沢城調査研究会2011c
33 新丸第3次	平成12(2000)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	足利坂石段、16世紀後半～元和頃の造構面 第3段と合せて石垣門脇をとして報告	金沢城調査研究会2016d
34 瓢箪屋門等	平成13(2001)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	石段、石礎構	金沢城調査研究会2016d
35 鶴小門移形	平成13(2001)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	土壁、ピット	金沢城調査研究会2015c
36 尾山門	平成13(2001)	(財)私隸文センター	公園整備（復元整備）	石繩張、路溝 33号と合せ尾山門脇をとして報告	金沢城調査研究会2016d
37 本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査委	保存目的の調査	本丸虎口安通の把關	金沢城調査研究会2008d
38 本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査委	保存目的の調査	三十間屋根櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究会2008d
39 いもり櫓	平成15(2003)	金沢城研究調査委	公園整備（復元整備）	解説看板設置場所として報告	金沢城研究調査委2004a
40 本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査委	保存目的の調査	寛永水火以降の2層の造構面	金沢城研究調査委2008d
41 いもり櫓	平成16(2004)	金沢城研究調査委	公園整備（復元整備）	城城内側の櫓の規模を確認	金沢城研究調査委2005a
42 本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査委	保存目的の調査	本丸三層櫓石垣	金沢城調査研究会2014d
43 玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査委	公園整備（石研磨等）	近代の改修、石垣上部の二重層の基礎構造の把關	金沢城調査研究会2010a
44 本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査委	保存目的の調査	元和の大幅な改修造成、初期の金沢城の礎石建物	金沢城調査研究会2014d
45 玉泉院丸（衛西石垣）	平成18(2006)	金沢城研究調査委	公園整備（石研磨等）	部分修理の把關、初期金沢城の礎石建物	公園地図・調査研究会2010

第4表 金沢城跡発掘調査一覧(2)

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	現存状況、範囲、改修、創建時期の把握	金沢城調査研究所2011c
47	いもり塀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	南郭の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永8年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
49	石川門(右方太鼓解)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修復(建造物)	狸柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
50	玉泉院丸(衛西右田)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修復)	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	公園緑地・調査研究所2010
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	移形門御城前(長慶後期以前)の遺構確認	金沢城調査研究所2011c
52	いもり塀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南北の位置確認	金沢城調査研究所2008a
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	保存目的調査	寛永8年大火以前の大型遺構	金沢城調査研究所2014d
54	石川門(右方太鼓解)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修復(建造物)	狸柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石垣解体作業(ニラミ櫓台、一ノ門周辺)	金沢城調査研究所2011c
56	いもり塀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南北の位置確認	金沢城調査研究所2008a
57	玉泉院丸(京水)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	東北部の遺構確認	金沢城調査研究所2015d
58	玉泉院丸(いもり坂右田)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	石垣変形箇所の基礎部試掘	金沢城調査研究所2019c
59	兼六園栗山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修復(建造物)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
60	いもり塀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	壁礎帶石垣東部の残存状況確認、一部解体	金沢城調査研究所2010a
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	東水中央部、北部の遺構確認(中島、出島、築石等)	金沢城調査研究所2015d
62	兼六園栗山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修復(建造物)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
63	石川門(左方太鼓解)	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修復(建造物)	狸柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
64	鶴爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門櫻石根回坑、石礎暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015c
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	東北東部の遺構確認(瀬岸石礎、築石等)	金沢城調査研究所2015d
66	兼六園栗山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修復(石垣修復)	石垣・石物の解体調査	管理事務所・調査研究所2012
67	石川門(左方太鼓解)	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修復(建造物)	狸柱跡の確認	金沢城調査研究所2014c
68	鶴爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門櫻石根回坑、石礎暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所2015c
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認・復元整備)	色紙帯石横石下の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
70	桃爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石礎暗渠、石垣台、桟脚跡面	金沢城調査研究所2015c
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	色紙帯石横石周辺と丸石組上部の遺構確認	金沢城調査研究所2018d
72	玉泉院丸(衛右衛門)	平成25(2013)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修復・復元整備)	石垣の解体調査、近世初期の土壘確認	公園緑地・調査研究所2017
73	東ノ丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	保存目的調査	東ノ丸周囲の遺構確認	金沢城調査研究所2018c
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	風呂門周囲の遺構確認	金沢城調査研究所2015a
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	風呂門・武門周辺の遺構確認	金沢城調査研究所2015e~2016a
76	金谷出丸	平成27(2015)	金沢市文化センター	建設新築	駒たはれ跡、瓦度塗土坑、石礎遺構	金沢市立文化財センター~2016a
77	玉泉院丸	平成28(2016)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	武門・武門周辺の遺構確認	金沢城調査研究所2016e~2017a
78	敷容屋敷北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石横石垣解説調査	金沢城調査研究所2018a
79	玉泉院丸	平成29(2017)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	武門・武門周辺の遺構確認	金沢城調査研究所2018a
80	玉泉院丸(南東)	平成30(2018)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石横石垣解説調査	金沢城調査研究所2018e~2019a
81	玉泉院丸	平成30(2018)	金沢城調査研究所	公園整備(道構確認)	武門・武門周辺の遺構確認	金沢城調査研究所2019a
82	玉泉院丸(北)	令和元(2019)	金沢城調査研究所	保存目的調査	切石横石垣解説調査	金沢城調査研究所2019d
A	稟亭跡場(生堂)	平成15(2003)	(財)昭文センター	都心地区(構造調査)	都心(生堂)遺構(構造調査)、近世初期以前土壌遺構	(財)昭文センター~2010
B	稟亭跡場(生堂)	平成16(2004)	(財)昭文センター	都心地区(構造調査)	足利番所、生堂馬場	(財)昭文センター~2010
C	稟亭跡場(生堂)	平成19(2007)	(財)昭文センター	都心地区(施設・施設建設)	古町へ~云堀の遺構面	(財)昭文センター~2012
D	稟亭跡場(生堂)	平成20(2008)	(財)昭文センター	都心地区(施設・施設建設)	笠置建物、石垣、礎跡、古代~中世の遺構面	(財)昭文センター~2012
E	稟亭跡場(生堂)	平成21(2012)	(財)昭文センター	都心地区(施設・施設建設)	石垣、石礎遺構	(財)昭文センター~2014c

私教委:石川市教育委員会 私教文センター:石川県立埋蔵文化財センター (財)私教文センター:石川県教育委員会 (財)石川私教文文化財センター(2013年度から公財團法人) 金沢城研究調査室:石川県教育委員会埋蔵文化財課金城研究調査室 金沢城調査研究所:石川県立金城調査研究所

管理事務所・調査研究所:石川県立金城城・兼六園管理事務所 石川県立金城調査研究所 公園緑地課・調査研究所:石川県立石川市公園緑地課 石川県立金城調査研究所



車橋調査区 石垣2 (1800S・左)・3 (1934N) 西から



本丸南（辰巳櫓南）調査区 遠景 北西から



本丸南（辰巳櫓南）調査区 1801S（上）・1802S 南から



本丸南（辰巳櫓南）調査区 1801S 西から



本丸南（辰巳櫓南）調査区 1802S 南から



本丸南（辰巳櫓南）調査区 1803S 西から

第8図 既往の調査区

第3章 調査の概要

第1節 調査の目的と対象区域

1. 調査の目的

本報告の対象となるいもり堀の埋蔵文化財発掘調査は、金沢城公園整備事業を原因とし、いもり堀の復元のために、堀の深さや幅および法面の形状、鯉喉檜台石垣の規模・様式等の基礎的データを得ること、および復元いもり堀に伴う取水路設置を目的としたものである。

2. 対象区域

いもり堀は東ノ丸・本丸の南から玉泉院丸の西に至る金沢城の南西側を囲む外堀である。本報告の対象区域は堀東部の北岸および南岸に相当するが、本書では前者をいもり堀北部、後者をいもり堀南部として報告している。

調査箇所について、最小の単位である一続きの発掘調査範囲を調査地点、近接する調査地点のまとまりが展開する区域を調査区とする。本報告では調査区単位を優先し、鯉喉檜台調査区・北岸調査区・土橋調査区・稻荷屋敷下調査区・南岸調査区の順に記述した。また、調査成果の報告については、調査地点の調査年次・着手時期に関わらず、調査区全体の特徴や調査目的等に応じた順序だてで記述している。

鯉喉檜台調査区の調査は、平成10年度（1998-1地点）・平成12年度（第3次：2002-2地点）・平成15年度（2003-1地点）・平成21年度（2009地点）に行われた。各調査地点が隣接・重複していることから、一体的に報告する。

北岸調査区の調査は、平成10年度（1998-2地点）・平成15年度（2003-2地点）・平成16年度（2004-1・2地点）に行われた。各調査地点が隣接・重複していることから、一体的に報告する。

土橋調査区の調査は、平成10年度（1998-3地点）と平成12年度（第3次：2000-3地点）に行われた。両調査地点が重複していることから、一体的に報告する。

稻荷屋敷下調査区の調査は、平成12年度（第2次：2000-1地点）に行われた。

南岸調査区の調査は、平成18年度（2006-1・2地点）・平成19年度（2007地点）、平成20年度（2008地点）で調査を実施した。各調査地点間の距離が離れているため、地点ごとに報告する。

また、発掘調査と並ぶ現地調査の一環として、平成16・17年度にボーリング調査を実施した。ボーリング調査の範囲は、いもり堀北部（平成16年度）および本丸南堀（平成17年度）の内部各4箇所である。このほか、平成8・9・18年度には、いもり堀復元のための基礎的データを得ることを目的に、石川県土木部公園緑地課がいもり堀北部および本丸南堀、鯉喉檜台石垣の内部の15箇所で、ボーリング調査を実施しており、第7章でその結果も併せて報告する。なお、調査地点の名称については、発掘調査地点との混同を避けるため、例えば平成16年度の第1地点をH16-1地点と称することとした。

第2節 調査の方法

1. 調査区・調査地点の設定

調査区・調査地点については、いもり堀の復元のための基礎的情報の確認および取水路設置を目的として、条件に適した箇所を選別し設定した。各調査区・調査地点の区分については第9図に示した。また、調査地点をさらに小区画に区分して調査を進めた部分があり、詳細については第4章掲載の各

調査区の区割図を参照されたい。

鯉喉櫓台調査区については、1998-1・2000-2 地点を A（1～3）～E（1～3）区の小区画に区分して調査を進めたが、2003-1・2009 地点では小区画を設定していない。北岸調査区では、1998-2 地点を F～I 区に区分して調査を行ったが、2003-2、2004-1・2 地点においては区画割を行っていない。土橋調査区では、1998-3 地点全体を I 区として区分し、2000-3 地点について E 1～6・B 1～4・W 1～6 の小区画に区分して調査した。稲荷屋敷調査区の調査（2000-1 地点）では区画割を行わず調査した。南岸調査区の 2006-1・2、2007 地点は小規模なため区画割を行わなかったが、2008 地点では A～H 区の小区画を設定して調査を行った。

2. 調査の方法

発掘調査

発掘調査においては、近代以後に堆積した土層を重機により掘削し、近世以後（一部近世以前も）の遺構埋土および堆積土・造成土について人力で掘削し、精査した。

調査記録については、写真撮影・実測図の作成を行った。写真撮影は 35 mm および 120 mm のフィルムカメラでカラー・白黒・リバーサルの各種フィルムを用いたほか、デジタルカメラも使用した。実測図については、土層断面図・個別遺構の詳細平面図は直営、空中写真測量および三次元レーザー計測による調査地点の全体平面図、石垣立面・断面図は業者委託により作成した。

ボーリング調査

ボーリング調査は委託業務として実施した。ボーリング調査は、発掘では到達できない深度からの土壤の採取が可能であり、大型遺構や大規模造成土の規模・構造、造成以前の旧地形等の探求に関して有効である。調査の詳細については第 7 章にまとめた。

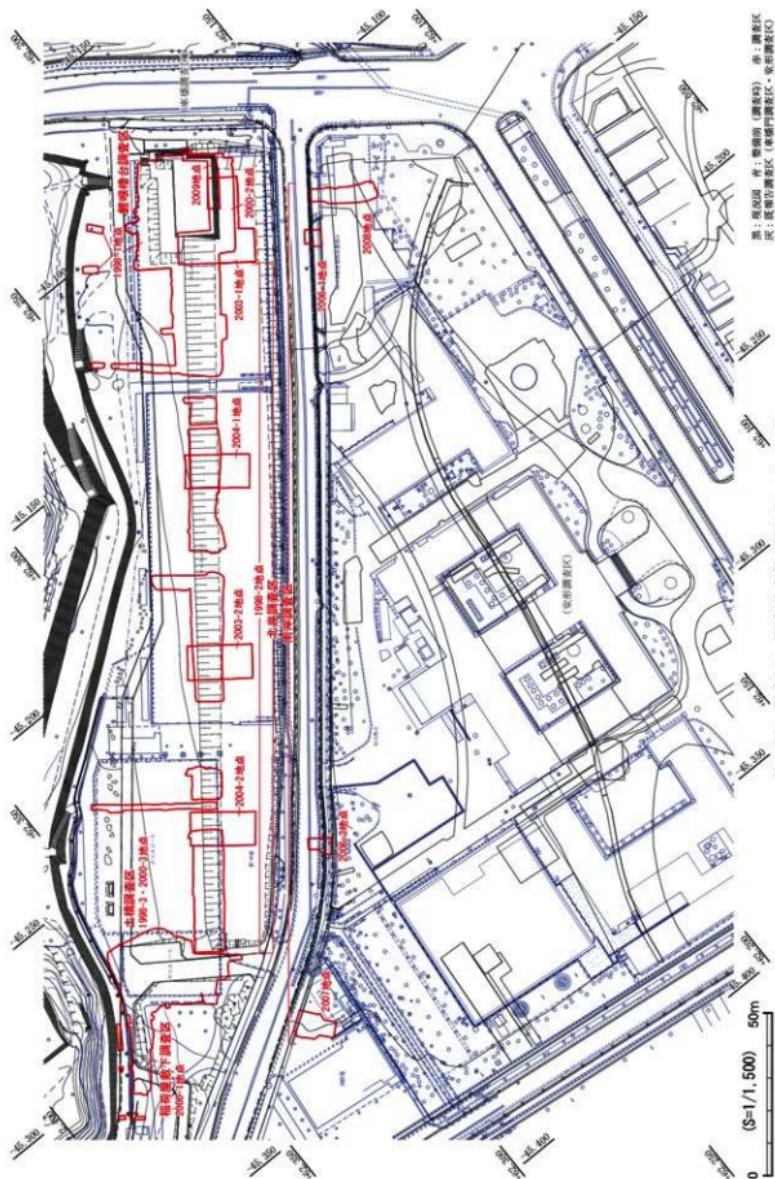
出土品整理

出土品整理の経過・内容については既に第 1 章第 2 節で述べているが、出土遺物の洗浄・記名・分類・接合および実測・トレースの大部分については、石川県教育委員会から委託を受けて（財）石川県埋蔵文化財センターが平成 14～22 年度に実施し、一部を直営で平成 30～令和元年度に実施している。遺物の写真撮影は、平成 30～令和元年度に直営で行った。報告書の原稿作成および編集等は、平成 30 年度～令和元年度にかけて実施した。また、いもり堀北岸調査区出土の越前赤瓦および本丸南堀出土の大型木製品についての検討にあたり、指導・助言を受けた（越前赤瓦：吉岡埋蔵文化財専門委員長ほか（平成 19 年度）、木製品：龍建造物専門委員（令和元年度））。

このほか、平成 30～令和元年度にかけて、出土資料の自然科学的調査として、出土木製品について、樹種同定、放射性炭素年代測定および塗膜分析を業者委託により実施した。これらの調査成果については第 6 章にまとめた。

黑：施設区 紫：警備用（施設外） 红：測量区
浅紫：警備用施設区（施設内）・施設測量区

第9図 調査区・調査地点位置図 (S=1/1,500)



第4章 遺構

第1節 いもり堀北部の調査

1. 調査区の概要（第10図）

いもり堀の埋蔵文化財調査は、堀東部の北岸および南岸で実施されており、本書では堀北岸で行われた調査をいもり堀北部の調査、南岸で行われた調査をいもり堀南部の調査として報告する。

いもり堀北部の埋蔵文化財調査は、平成10・12・15・16・21年度の5ヶ年にわたり実施された。調査範囲が広範にわたるため、鯉喉櫓台調査区（平成10・12（第3次）・15・21年度）・北岸調査区（平成10・15・16年度）・土橋調査区（平成10・12（第3次）年度）・稻荷屋敷下調査区（平成12年度（第2次））に分けて報告する。

なお、いもり堀北部における基本的な層序は、以下のように大別される。

I層：近現代層。明治40年（1907）のいもり堀の埋立土、旧陸軍時代の造成土、金沢大学時代のテニスコート造成土等からなる。

II層：近世後期（宝暦大火（宝暦9年（1759））以後）から明治40年にいもり堀が埋め立てられる直前までの土層で、いもり堀の底および土羽の堆積層に対応する。

III層：近世前期（いもり堀構築後～宝暦大火以前）の土層で、IIIa～IIId層に細分される。IIIa層はいもり堀内外の堆積土に対応する。IIIb層～IIIc層は鯉喉櫓台石垣の構築および改修に伴う土層で、IIIc層は鯉喉櫓台石垣の寛文4年（1664）改修に伴う造成土、IIIc層は鯉喉櫓台石垣の正保元年（1644）改修に伴う造成土、IIIc層は鯉喉櫓台石垣構築（寛永大火（寛永8年（1631））後）に伴う造成土にそれぞれ対応する。

IV層：近世初期の土層で、いもり堀構築に伴う造成土（IVa層）、本丸南堀（いもり堀に先行する堀）埋立土（IVb層）に細分される。

V層：近世初期の本丸南堀段階の土層で、周辺表土層（Va層）、本丸南堀第2段階の自然堆積層（Vb層）、本丸南堀第2段階の造成土（Vc層）、本丸南堀第1段階の造成土（Vd層）に細分される。

VI層：本丸南堀構築以前の土層。

2. 調査の結果

鯉喉櫓台調査区

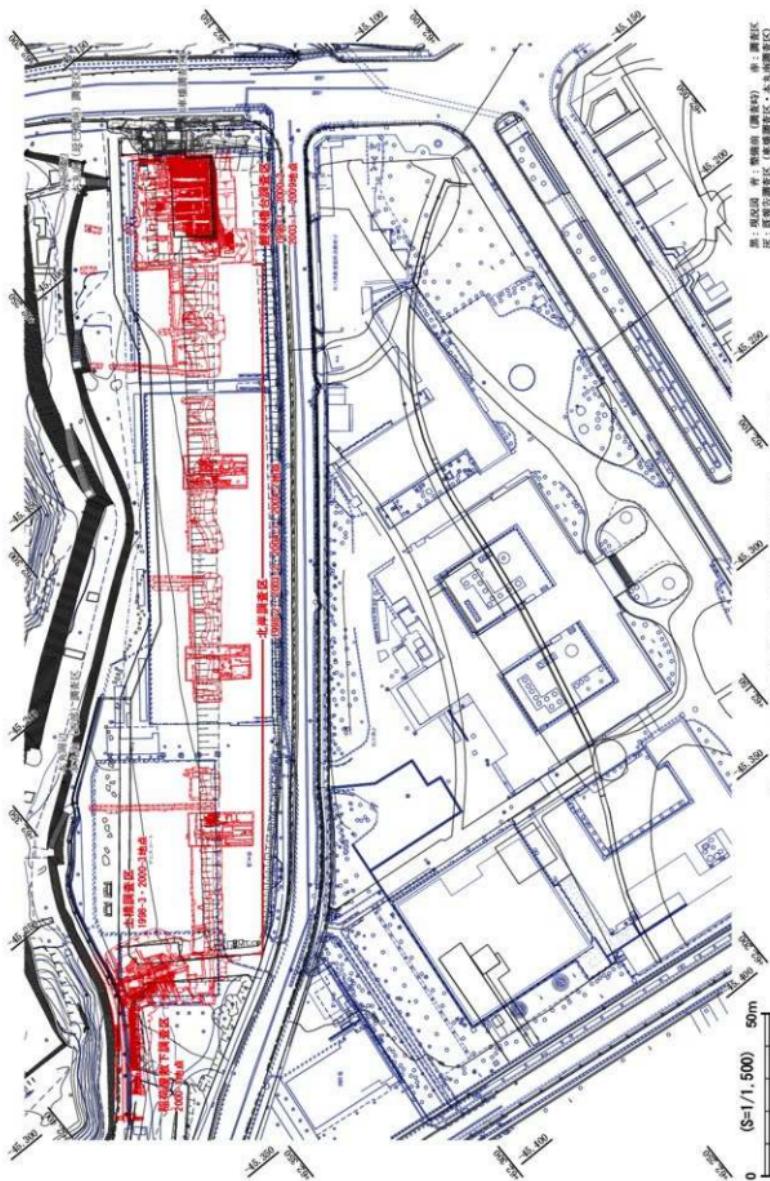
（1）概要（第11～20図）

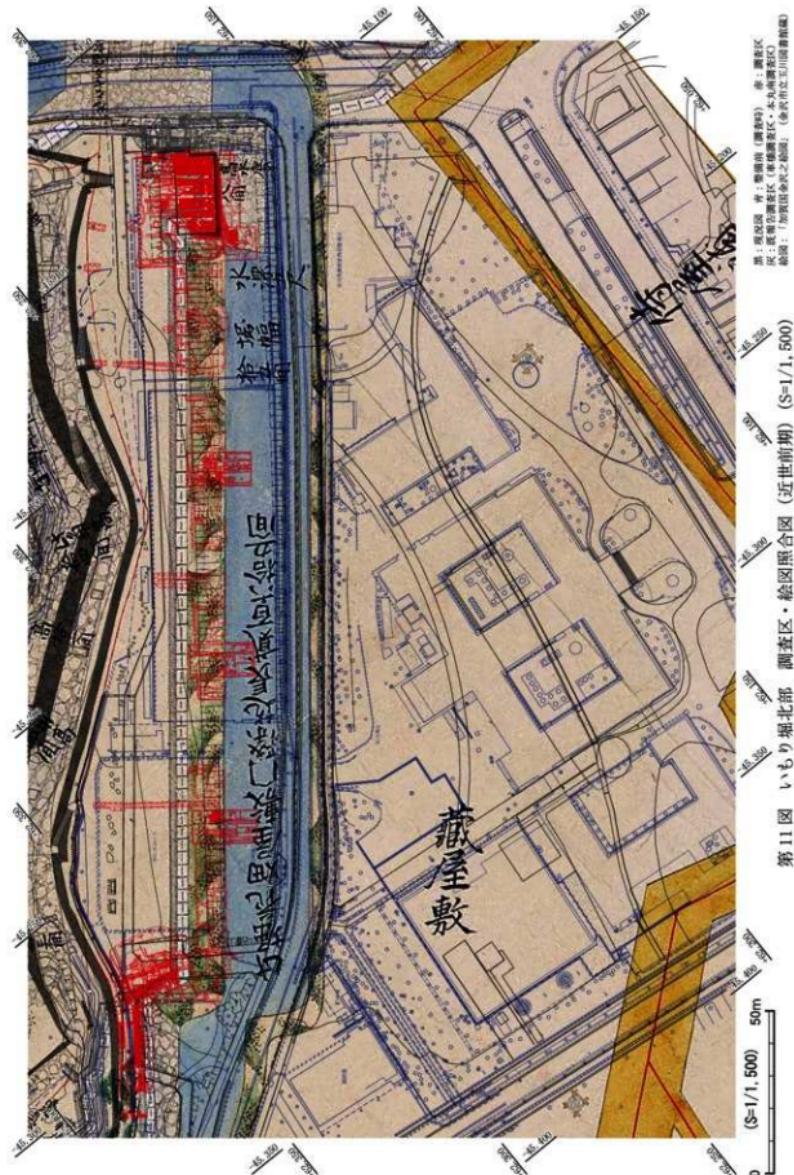
本調査区は近世の絵図によると、金沢城の南端、いもり堀東端の鯉喉櫓台が位置した地点にあたる。南東に隣接する車橋調査区は、平成6年度（1994）に石川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査されている〔石川県立埋蔵文化財センター1996〕。

調査着手前は、平成9年までテニスコートとして利用されていたため、標高約28.6mで平坦に整地されていた。平成10年度調査（1998-1地点）において重機によりテニスコート造成土を除去し、車橋調査区で確認された南東～北西方向に延びる石垣1934N（車橋門報告書では石垣2として報告）、1800S（同石垣3）、1931S（同石垣4）の続きを検出した。また、1931Sから続く鯉喉櫓台（1930E・1930S・1930W）を平面的に検出した。さらに、土層断面の観察から、いもり堀北岸および櫓台の張り出し以北は南に向かって傾斜する土羽であり、櫓台の張り出しが河原石を石垣内に充填する事により造成されていることが分かった。また調査地点北端で、北に向かって傾斜し東西に延びる落ち込みの南端が検出された。この落ち込みは、いもり堀全体の調査成果を総合的に判断して、いもり堀に先

基：施設図 基：施設図(調査区) 基：施設図(調査区)

第10図 いもり堀北部 調査区位置図 (S=1/1,500)

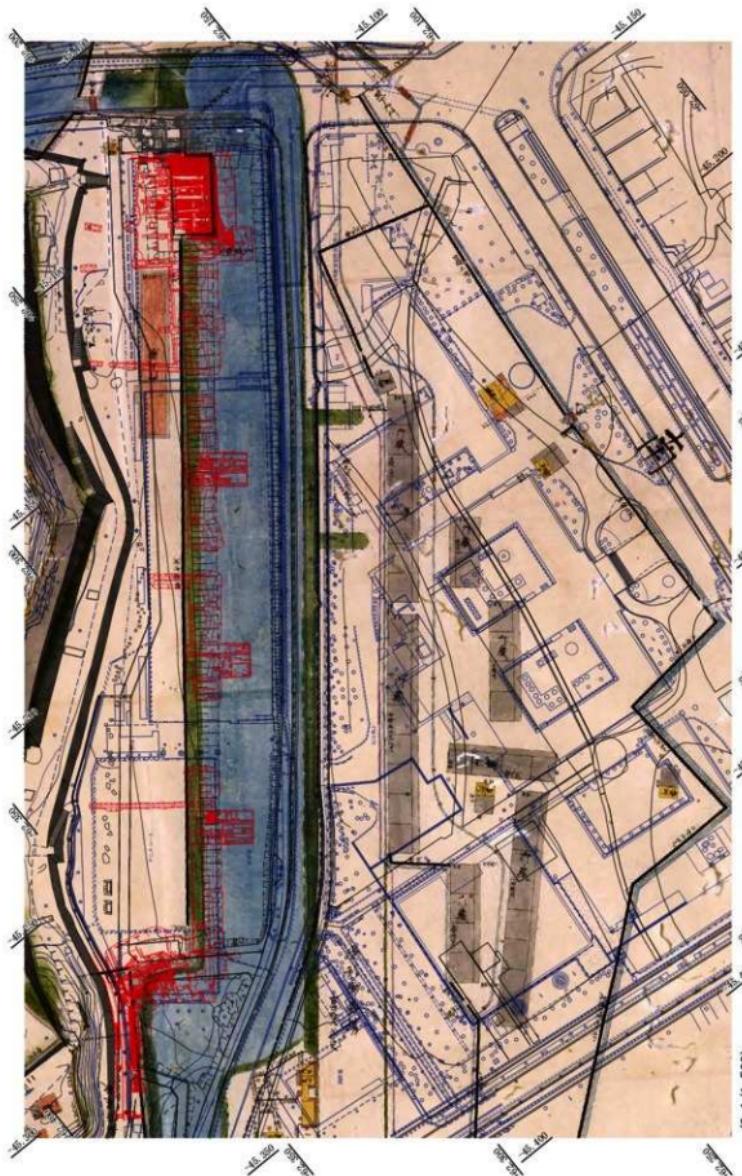




地図：JR西日本 岐阜支社
測量用地図（測量区）
図：岐阜市営地下鉄工事部
地図：岐阜市営地下鉄工事部

第12図 いもり堀北部 調査区・検査区・検査合図（近世後期）(S=1/1,500)

(S=1/1,500) 50m



立ち存在した堀（本丸南堀）ではないかと考えられた。

鯉喉櫓台周辺は、明治 40 年代以前に建設された旧陸軍第七連隊被服庫等のコンクリート基礎や溜柵等により破壊されている箇所が多々あり、テニスコート造成土の下には煉瓦ブロックや土管の残骸などが散在していた。平成 12 年度調査（2000-2 地点）では可能な限りこれらを除去し、旧陸軍が削平したレベルでの鯉喉櫓台の姿を検出すること、鯉喉櫓台設置以前と設置後の周辺景観の変遷を把握することに努めた。また、石垣台外周を地表から約 2.4 m 地点（標高約 26 m、現在の湧水点）まで重機掘削し、石垣石の石材加工状況や改修痕跡を観察し、裏込層の断面精査等の詳細調査を行った。平成 15 年度調査（2003-1 地点）では、更に深く掘り下げ、いもり堀の堀底の深さ・形状、鯉喉櫓台石垣（1930S・W）の規模・形状および根石の確認を行った。平成 21 年度調査（2009 地点）では、いもり堀南東端に位置する鯉喉櫓台の復元整備に伴い、過年度に実施した調査を補完するため、上面・立面の一部について精査した。

石垣および石積みの配置については、車橋調査区で検出された 1934N の続きは、櫓台東部で張り出しの付け根に沿って検出しているが、絵図ではこの石垣を確認できない。この続き部分に関しては、調査の結果、鯉喉櫓台の改修に伴う内部の石積みとして性格付けている。本丸南堀の南に位置する石垣 1800S は 1934N と向かい合う位置で検出しているが、これも絵図では確認できない。鯉喉櫓台石垣とは直接結びつかず、石の加工状況が金沢城跡の石垣では古相を示す。鯉喉櫓台構築以前に単独で存在した石垣と考えられる。また、車橋調査区で検出した 1931S の続きを調査区東端部で検出しており、1930E の北端と入角を形成していた。

櫓台石垣各面および裏石積（1933N・1934N）、1800S で使用されている石垣石は、控えの長さや面の加工状況などに違いが見られるが、これらは時代による相違と考えられ、その認識は本調査で判明した栗石の積まれ方や土層堆積状況と整合している。これら調査成果を総合し、鯉喉櫓台の周辺景観については、①本丸南堀のみが存在し、いもり堀はまだ掘削されていない段階、②本丸南堀が廃絶し、いもり堀が掘削された段階、③鯉喉櫓台が設置された段階、④櫓台設置後 1 度目の改修が行われた段階（正保元年（1644））、⑤櫓台設置後 2 度目の改修が行われた段階（寛文 4 年（1664））、という 5 つの段階を踏んで変遷していると想定される。

（2）遺構

①鯉喉櫓台石垣（第 15・17～23・24 ①～⑤・25・26 ①②・27～30・31 ①図）

鯉喉櫓台はいもり堀に南南西方向に張り出しており、石垣は南南西、西北西、東南東に面を向けて築かれているが、煩雑な表記を避けるため、本報告では櫓台石垣に関しては南南西を南、西北西を西、東南東を東として記述した。

検出した櫓台石垣は、堀に向かって突出した主要部分は長辺 23.4 m、短辺 11.8 m の規模で、現存上面の標高 28.6 m を測る。鍵の手に折れ曲がりながら東側の車橋門へ続いている。明治 40 年（1907）に旧陸軍により上部が撤去され、いもり堀とともに埋め立てられており、発掘調査で基底部（堀底）からの残存部分約 9.6 m を確認した。また、石垣周辺の堀底について、寛文 4 年改修項（標高 19.0 m）と構築当初（標高 18.0 m）の新旧 2 面を確認している。寛文 8 年の「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）では高さ 8 間（約 14.5 m）と記載されていることから、現存石垣上面より約 4.9 m 削平されたと考えられる。

石材は全て戸室石で、青戸室石が多数を占める。特に築石には比較的多様な面形状の粗加工石が用いられ、面はノミ・ツル等の工具により丁寧に加工され、平坦に整えられていたが、西面（1930W）のものは南面（1930S）・東面（1930E）に比べるとやや小ぶりの石で、面の調整が粗く、凹凸の残るものが多い。また、大型刻印を残す旧材も見られた。積みは布積みを基本とするが、やや被打つたり、乱積み・落とし積み状を呈する部分も見られた。隅角部は角石、角脇石、角尻石で構成される。

角石、角脇石は精緻に整えられた切石材で、角石はほぼ直方体状を呈し、大面側では角尻石が1石、小面側では角脇石が2石隣接する。二番角脇石への角石の掛かりは総じて小さい。角石と角尻石の上面が一直線に揃っており段差が見られない。隅角縁線部には片幅2~6cmの明瞭な縁取り加工が施されていた。間詰石には戸室石が多く用いられたが、小型の河原石も西面や根石付近等の箇所で比較的多く見られた。戸室石間詰には、石口の隙間に合わせた、略三角形ないし台形に加工した板状の材（概ね10cm弱の厚さ）が用いられたが、板状材のほかに控えの長い（概ね20cm前後）楔状のものも見られた。

堀底の根石は隅角部では切石材を使用していた。角石では石面周縁部を削り込み（上部は上段の築石の石面に揃えるように加工されている）、瘤状に残された内側には精緻なノミ加工が施されていた。角脇石では石面上部を削り込み、上段の築石の石面に揃えるように加工されており、瘤状に残された下部には精緻なノミ加工が施されていた。西面では根石だけではなく根石直上の石（角石・角脇石）にも同様の削り込み加工が見られる。また、根石前面には、多量の戸室チップを含む層が確認でき、現地で石材の調整等が行われたことがうかがえる。

刻印は大型のものを残す旧材の転用も見られたが、概して少ない（南面で8種15石、西面で7種9石）。また、南面の一部の築石の上面に、石を積む順番を書いたものと考えられる漢数字（二十五、二十六等）が縱書きで朱書きされたものを確認した。

裏込めは栗石で充填されており、大（長辺の平均25.4cm、短辺の平均18.1cm、重量の平均6.8kg）・中（長辺の平均19.9cm、短辺の平均13.7cm、重量の平均3.1kg）・小（長辺の平均15.3cm、短辺の平均10.5cm、重量の平均1.4kg）の粒径に区分できた。栗石（大）は檐台の西・南・東側で確認され、栗石（中）は石垣1933N・1934Nに伴って見られ、栗石（小）は栗石（中）の下位で確認されたことから、栗石（小）は構築時鯉喰檐台石垣の裏込め、栗石（中）は正保元年（1644）改修の裏込め、栗石（大）は寛文4年（1664）改修の裏込めに対応すると考えられる。このほか、南西・南東の隅角部で、楔状の敷金5点（南西3、南東2）と敷金が置かれていたとみられる痕跡2箇所（南東）を確認した。また、堀の水位は、石垣南面西側の標高約27.5m（堀底から約8.6m）の辺りで排水用の石樋を検出したことから、通常27.5m以下と推測される。これらの石垣の特徴および文献記録から、現存石垣は寛文4年（1664）の改修後（金沢城石垣編年5期）の姿を残していると考えられる。なお、西面のいもり堀法面に接する部分も、同様の特徴を示しており、先行する石垣が残されることなく改修を受けたと考えられる。また、南西および南東角の一部を除いた上部のほぼ全面に、宝曆大火により溶解した鉛瓦の付着痕が見られた。

②鯉喰檐台石垣寛文4年改修に伴う遺構（SX01、土留石垣）（第15・18・21~23・24⑥・31②③・32・33図）

SX01は鯉喰檐台石垣西面の改修に際し、石垣前面のいもり堀土羽を掘り込んだ、平面規模約9×4mの大規模な掘り込みである。瓦・礫を多く含む土砂で埋め戻され、その前面の堀底側に土砂流出防止のための土留石垣が構築された。土留石垣の築石は全て戸室石で、青戸室石が多い傾向にある。粗加工石積だが、一部に割面や自然面を残したものも見られる。また、面調整については、鯉喰檐台石垣と比べるとやや粗い傾向にある。高さは約3.7mを測る。

③鯉喰檐台石垣正保元年改修に伴う遺構

檐台内部を構成する栗石の中から、絵図では確認できない北面の石積みを2列検出した。車橋調査区から続く石垣1934N（車橋門調査報告書では石垣2）およびその西側で1930Sに平行して延びる1933Nで、これらは鯉喰檐台の正保元年（1644）改修に伴う内部の石積みと考えられる。

石垣1934N（第16・17・27・28・34①・35①②・36・37図）

調査時に裏石積1と呼称していた北面の石積みで、車橋調査区の石垣2からの延長である。本調査区では延長8mを検出し、車橋調査区での検出分を合わせると18.8mを測る。本調査区での検出

最大高は 1.6 m（最高点の標高 28.58 m）で、22 石を確認している。根石は確認できていない。車橋調査区の石垣 4（1931S）最上部から約 6.8 m の距離でほぼ並行に並ぶ。この石積みは、北に面する石垣 1800S 前面の焼土層およびその上層（鰐喉櫓台石垣構築当初の裏込め：III d 層）を掘り込み、掘方を粒径が中位の栗石を多量に含む層（III c 層）で埋めて構築されている。

確認された石材は、全て戸室石であった。築石の積みは、面が揃っておらず、上部の石が下部の石よりも前に迫り出していた。あえて勾配を言うなら、ほぼ垂直な積みであった。縦目地が通っており、石垣の積みと言うよりは、石垣石を崩れない程度に積み上げたような印象である。

面の加工痕には、線状および滴状のノミ痕が認められるが、自然面、割面を残すものも見られる。刻印は 6 石の正面に 6 種類確認している。その内訳は、「○」1 石、「□」1 石、「団」1 石、「冂」1 石、「卍」1 石、「○○○」1 石である。

石垣 1800S との間層にみられる栗石を多く含む層は、1934N を設置する際の掘方を埋めた層と考えられる。南の掘方は 1930S に伴う栗石（寛文 4 年（1664）改修）によって埋められているため検出していない。また、石材の特徴から、寛永期以前の石を使用していると考えられる。

石垣 1933N（第 15・16・29・30・34②④図）

調査時に裏石積 2 と呼称していた北面の石積みで、検出全長約 15.7 m を測る。検出最大高は 1.8 m（最高点の標高 28.29 m）で、29 石を確認している。根石は確認していない。石垣 1930S とは面の検出最上部間が約 6.8 m でほぼ平行関係にある。石積みの西端は、1930W とは重ならない。一方、東端は 1930E から約 5 m 西で検出している。石材は全て戸室石である。積み方は面が揃っておらず、1934N 同様、石垣石を崩れない程度に積み上げたという印象である。

面の加工痕は、1934N 同様、線状、滴状のノミ痕が認められるが、自然面、割面を残すものも見られる。刻印は 2 石の面に 2 種類確認している。その内訳は、「瓢箪」1 石、「丸弧」1 石である。

掘方は判然としないが、1934N 同様、石積み前面にも掘方があって、石積み設置後そこに栗石を埋め込んだと考えれば、前面の栗石層がその埋土とも考えられる。また、石垣裏込めの精査により、面の上部から控え、石尻にかけては、栗石は人頭大程度のものが使われており、櫓台南面石へと続く。1934N 同様、寛永期以前の石を使用していると考えられる。

④石垣 1931S（第 17・38 図）

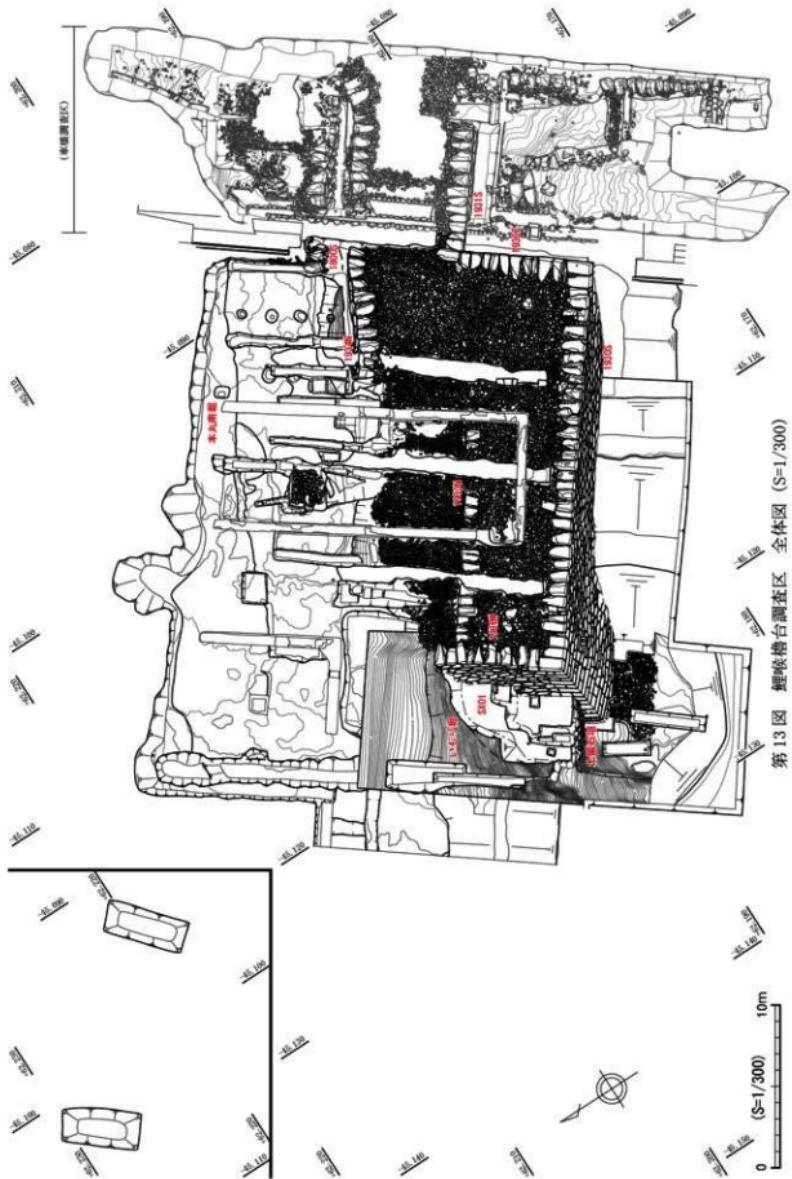
車橋調査区から続く石垣（報告書では石垣 4）の西端部で、1930E と入角を形成する。調査では戸室石の粗加工石による 6 石、1.8 m を検出しておらず、車橋調査区での検出分を合わせた延長は 7.8 m を測る。築石には方形ないし長方形を呈する規格化された粗加工石が用いられ、面は丁寧に加工され、平坦に整えられていた。積みは布積みである。間詰石には石口の隙間に合わせて石を加工しているものが見られた。これらの特徴から、金沢城石垣編年 5 期（寛文～元禄年間頃（1661～1704）の石垣とみられ、寛文 4 年改修の鰐喉櫓台石垣と一体のものと考えられる。

⑤いもり堀（第 15・18・31・39～41）

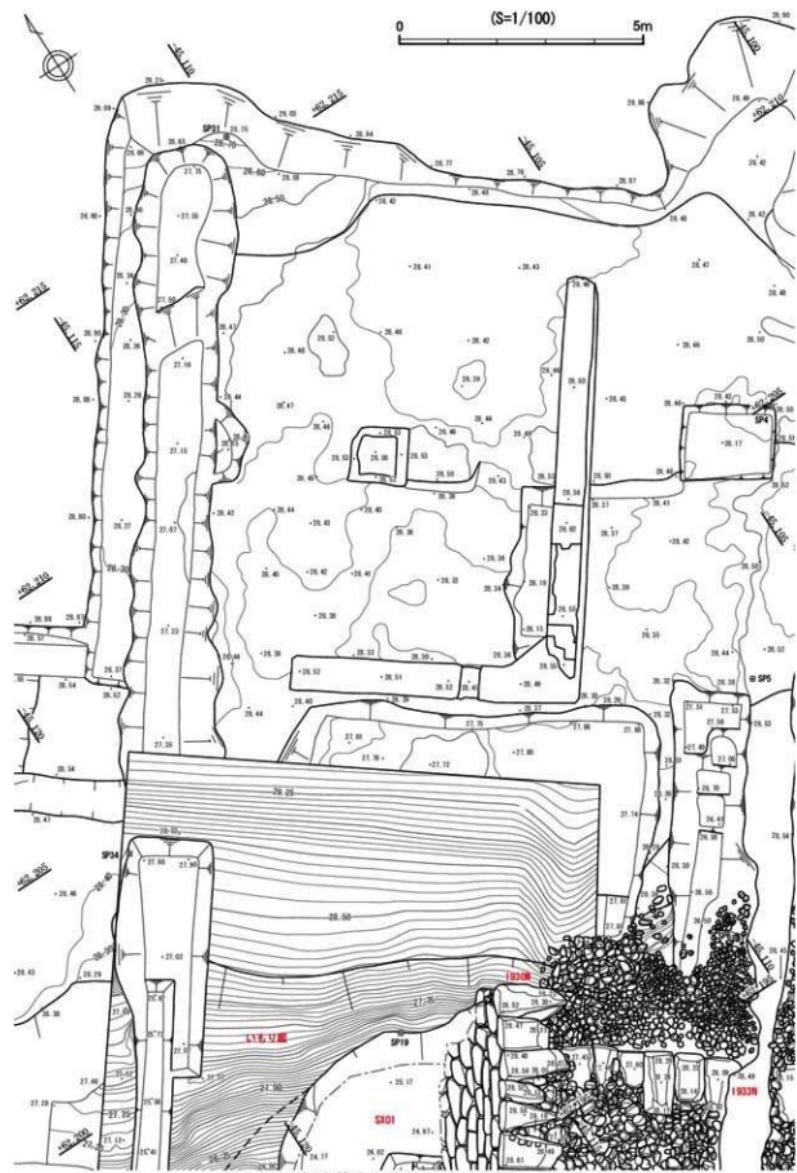
櫓台の西側で、北岸の土面を検出した。また、土層観察により、いもり堀構築当初の土羽を構成する盛土層（IV a 層）を確認した。盛土は基本的に疊の多い砂質土からなり、検出した土羽の幅は約 11 m であった。また、前述したが、堀底は寛文 4 年改修（標高 19.0 m）と構築当初（標高 18.0 m）の新旧 2 面を確認している。鰐喉櫓台の背後から調査区東端にかけての状況を見ると、構築当初のいもり堀南東端には櫓台は設けられなかったと考えられる。正保元年（1644）石垣改修時に掘り込まれたため、一部で構築当初のいもり堀土羽の状況が明らかでない部分も見られるが、堀北岸が後述する石垣 1800S に連続していた可能性がある。

出土遺物は、瓦が多く出土しているが、鰐喉櫓台石垣掘付近の堀堆積層（II 層）から、宝曆 9 年（1759）の大火で被災したとみられる鉛瓦・銅板・銅釘がまとまって見られた。

第13図 鰐塚焼台調査区 全体図 (S=1/300)







第15図 鯉喉櫓台調査区 平面図1(S=1/100)



第16図 鯉喉櫓台調査区 平面図2(S=1/100)



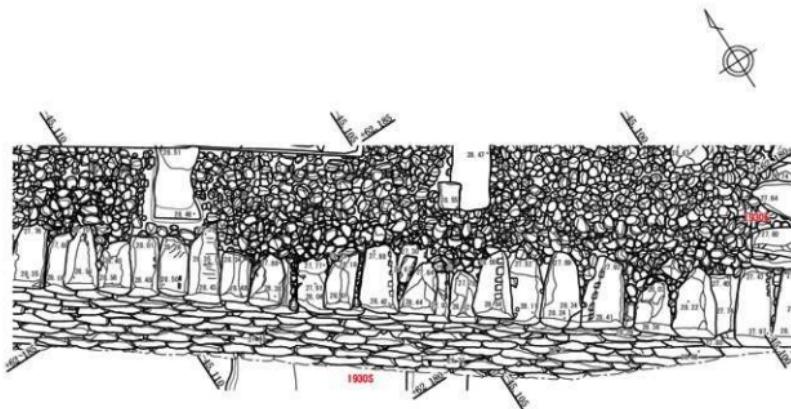
第17図 鯉喉槽台調査区 平面図3 (S=1/100)



第18図 蝦蛄檣台調査区 平面図4 (S=1/100)

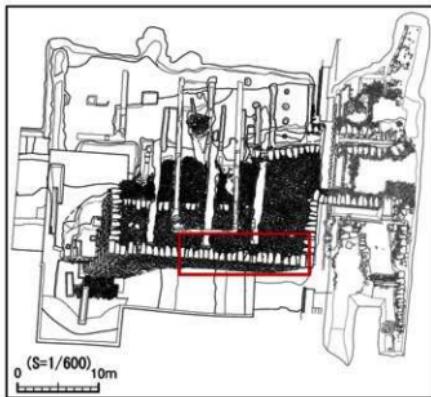
第19図 横嶺橋台調査区 平面図 5 ($S=1/100$)



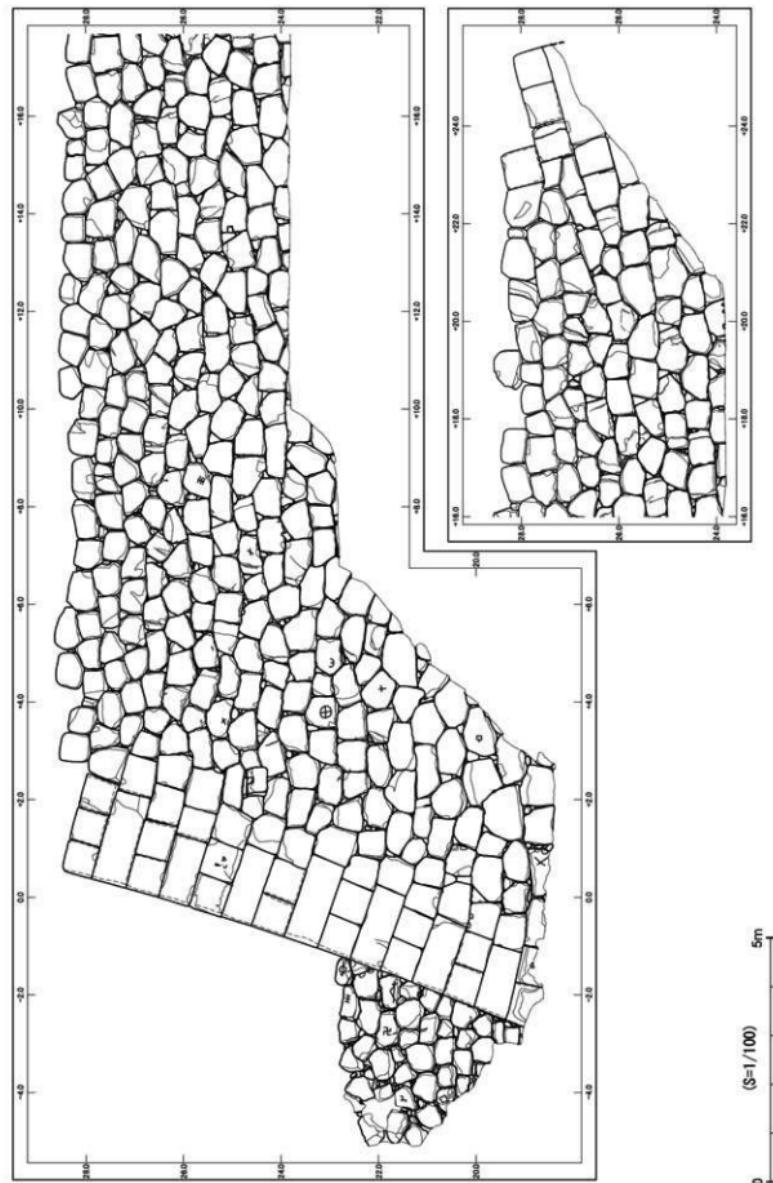


*本図は、平成21年度調査時に平成15年度調査終了後に埋め戻した土を再剥削した際、原位置から移動した石を撤去した後、石垣1900s上面について再実測した図である。

0 (S=1/100) 5m



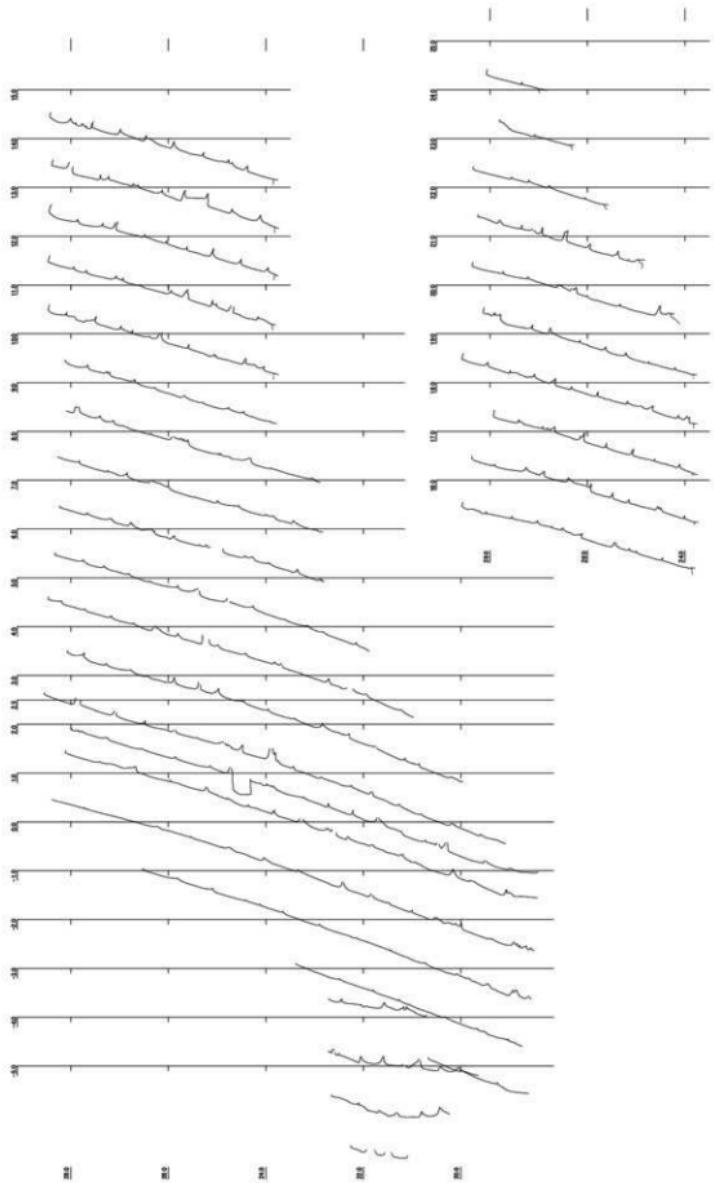
第20図 鯉喉櫓台調査区 平面図6（石撤去後）(S=1/100)

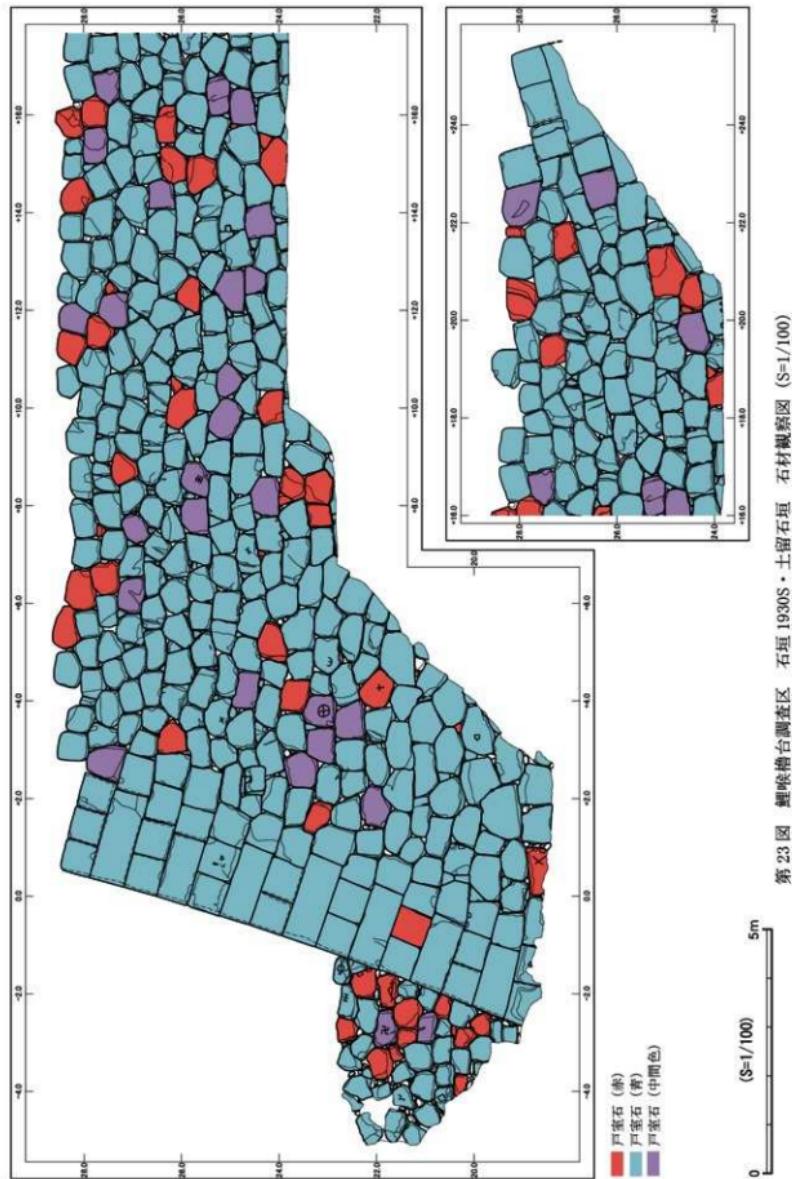


第21図 鯉喉槽台調査区 石垣1930S・土留石垣 立面図 (S=1/100)

(S=1/100)

第22図 鯉塚船台調査区 石垣1930s・土留石垣 垂直断面図 (S=1/100)





①1930S 囲角部の石加工（東側）



稜線部の縁取り加工



合端の切り合わせ加工



角脇石に隣接する築石側面
の合端調整に、丁寧な縦ノ
ミ加工が見られた



角尻石の築石との合端は角
石側よりやや粗く仕上げら
れていた

③1930S 基底部の様相



②1930S 間詰石



板石状



クサビ状（控えが長い）



④1930S 朱書



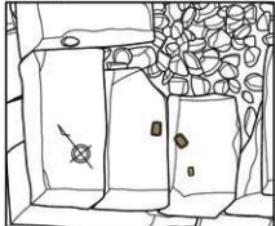
「二十六」



「二十口」

⑤1930S 敷金・敷金痕跡検出状況

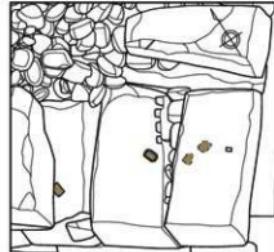
【南西角】



■敷金・敷金痕跡

0 (S=1/50) 1m

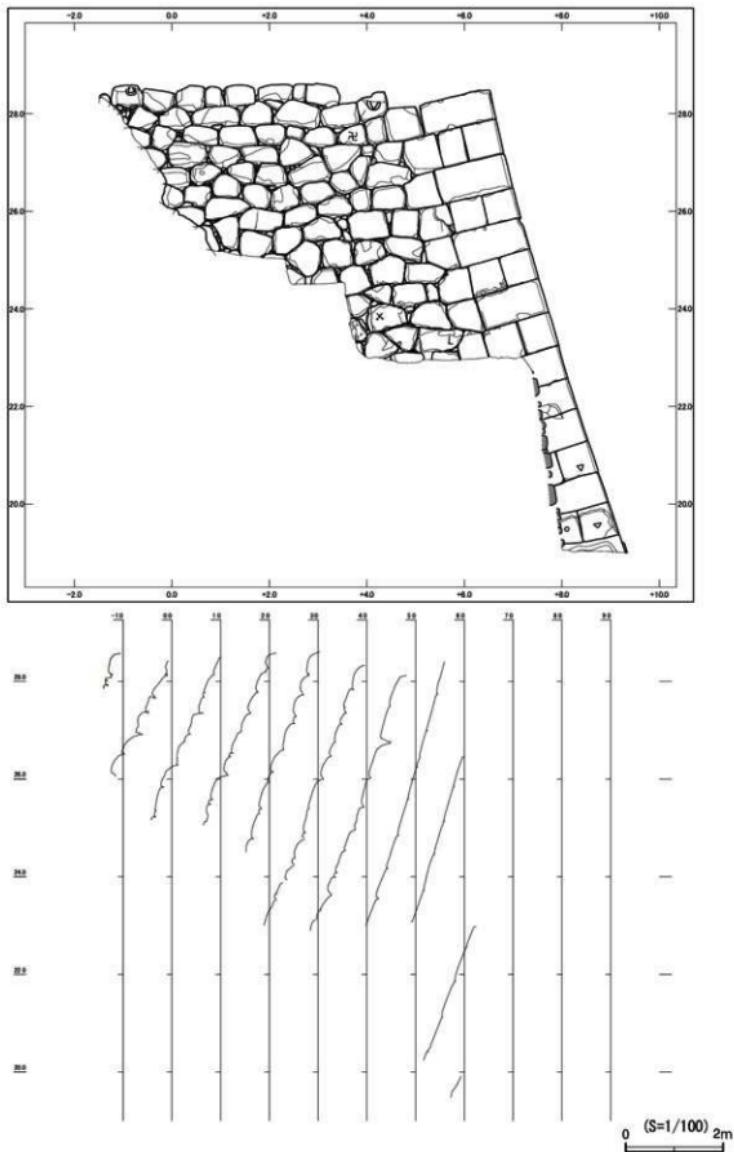
【南東角】



⑥土留石垣 基底部の様相

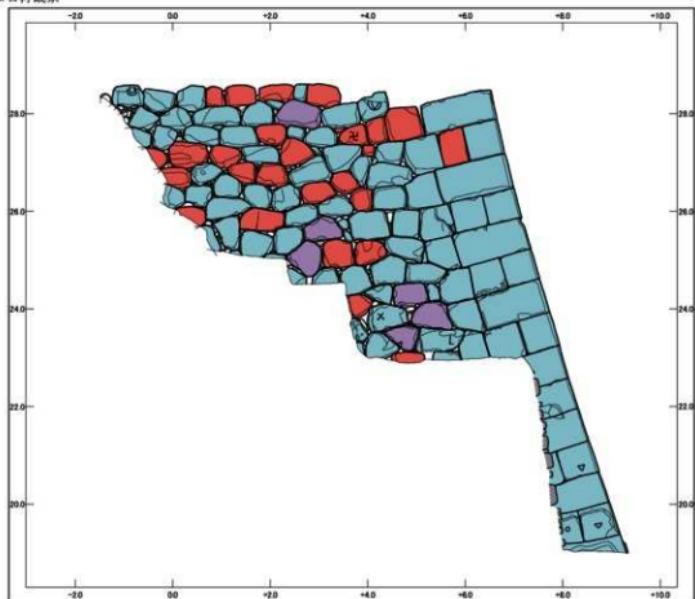


第24図 鯉喉櫓台調査区 石垣 1930S・土留石垣 石材観察状況

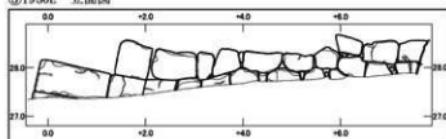


第25図 鯉喉櫓台調査区 石垣 1930W 立面図・垂直断面図 (S=1/100)

①1930W石材観察



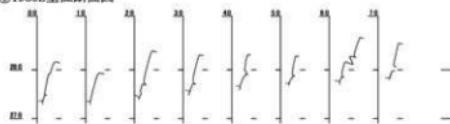
③1930E 立面図



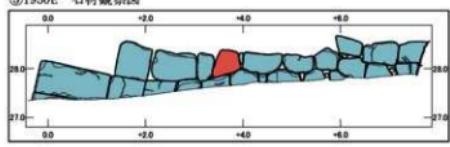
②1930W 基底部の様相



④1930E 垂直断面図



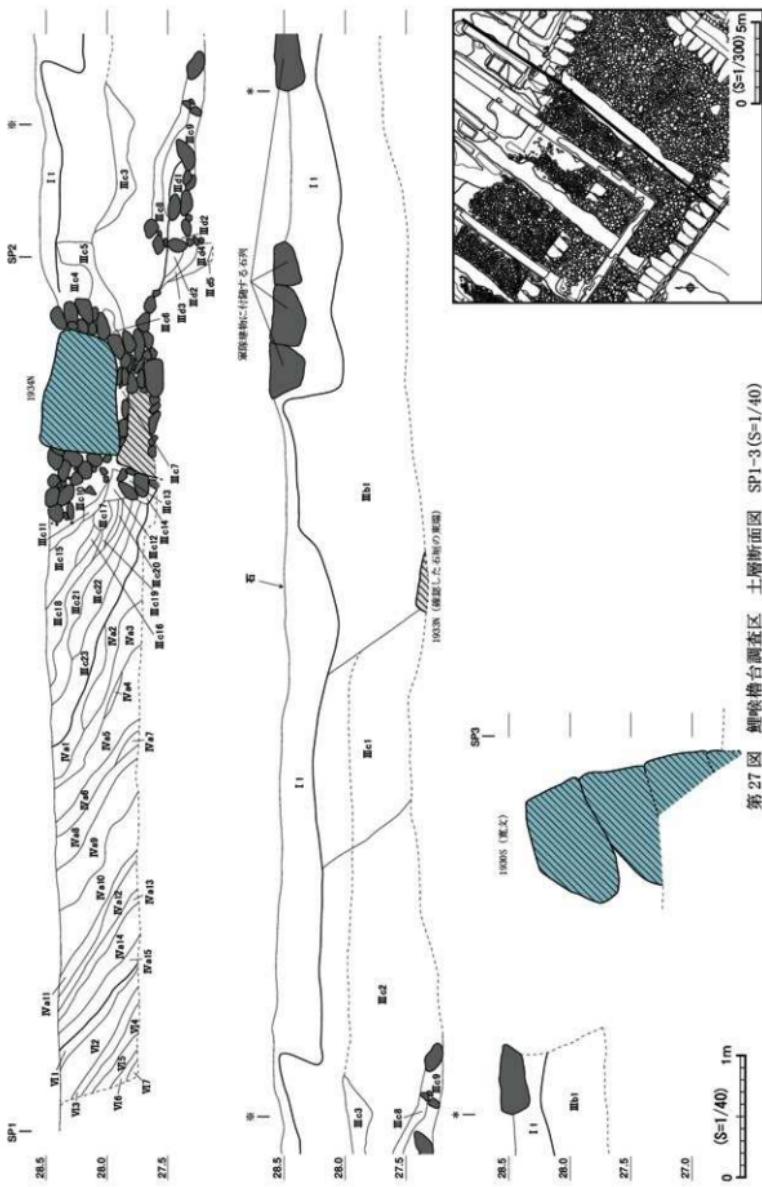
⑤1930E 石材観察図



■ 戸室石（赤）
■ 戸室石（青）
■ 戸室石（中間色）

0 (S=1/100) 2m

第26図 鰐喉滑台調査区 石垣 1930W 石材観察図・写真、1930E 立面図・垂直断面図・石材観察図 (S=1/100)



第27図 鯉喰檜台調査区 土層断面図 SP1-3(S=1/40)

I層：近現代層	
II 層：近世時代の焼土	
III-a 层：近世前期：鯉喉櫓台石垣（寛文4年改修）に伴う造成土	
III-b 层：裏込石 大粒	
III-c 层：近世前期：鯉喉櫓台石垣（正保元年改修）に伴う造成土	
III-d 层：裏込石 大粒より小さく	
III-e 层：裏込石 大粒より小粒	
III-f 层：暗褐色土、径5cm以下の織合む 燃土多量に含む 遺物少量あり	
III-g 层：灰褐色織合土、径1~2cmの織多い 黒石も少量入る	
III-h 层：灰色織合土、径1~2cmの織多い 黒石も少量入る 鉄分の沈着多い	
III-i 层：灰色織合土、径1~2cmの織多い 鉄分の沈着多い	
III-j 层：灰褐色土、ややシルト質 滲白色シルト・淡黄色シルトブロック・淡黄色砂質土	
III-k 层：灰褐色土、ややシルト質 滲白色シルト・淡黄色シルトブロック・淡黄色砂質土	
III-l 层：暗褐色砂質土 径1~3cmの織・黒石多く含む 最下に鉄分の沈着 -SP29-30断面C1層	
III-m 层：暗褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
III-n 层：淡褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
III-o 层：e12層に似ている	
III-p 层：黃白色砂質土	
III-q 层：黃白色砂質土 滲灰色白色シルトブロック・径2~3cmの織・含む 黄褐色砂質土 径1cm以下の織・灰含む	
III-r 层：暗褐色砂質土 径1cm以下の織・灰含む	
III-s 层：暗褐色砂質土 径1cm以下の織・灰含む	
III-t 层：暗褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
III-u 层：淡褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
III-v 层：黃褐色砂質土 径2cm以下の織多く含む	
III-w 层：淡褐色砂質土 径2cm以下の織多く含む	
III-x 层：黃褐色砂質土 径1~2cmの織多く含む	
III-y 层：黃褐色砂質土 径1~2cmの織多く含む	
III-z 层：黃褐色砂質土 径1~2cmの織多く含む	
IV-a 层：近世初期：いもり堀構築に伴う造成土	
IV-b 层：暗褐色砂質土、しまりあり 径5cm以下の織合む II-2層よりも小粒で、燃土層の跡が残っているとみられる	
IV-c 层：暗褐色砂質土 径2cm以下の織合む	
IV-d 层：灰白色砂質土 径2cm以下の織合む	
IV-e 层：灰白色砂質土 滲灰色砂質土の織合入	
IV-f 层：灰褐色砂質土 径2cm以下の織合入	
IV-g 层：近世初期：いもり堀構築に伴う造成土	
IV-h 层：暗褐色砂質土、しまりあり 径5cm以下の織合む	
IV-i 层：暗褐色砂質土 滲灰色色土の織合入	
IV-j 层：黄褐色砂質土、1cm程の織多い	
IV-k 层：黄褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
IV-l 层：黄褐色砂質土 径5cm以下の石・鐵非常に多い	
IV-m 层：黄褐色砂質土 径2cm以下の織多く含む	
IV-n 层：黄褐色砂質土 径3cm以下の織多く含む	
IV-o 层：黄褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
IV-p 层：黄褐色砂質土 径6cm以下の織多い	
IV-q 层：黄褐色砂質土 径3~10cmの石多く含む	
V1層：本丸南堀以前の層：地山か	
V1 层：本丸南堀以前の層：地山か	
V2 层：灰褐色砂質土 径1cm以下の織合む	
V3 层：灰色砂 径1cm以下の織多く含む やや褐色がかる	
V4 层：灰色砂 径1cm以下の織合む	
V5 层：灰色砂 径1cm以下の織多く含む やや褐色がかる	
V6 层：灰色砂 径1cm以下の織合む	
V7 层：灰色砂 径1cm以下の織多く含む	

第28図 鯉喉櫓台調査区 土層注記 SP1-3

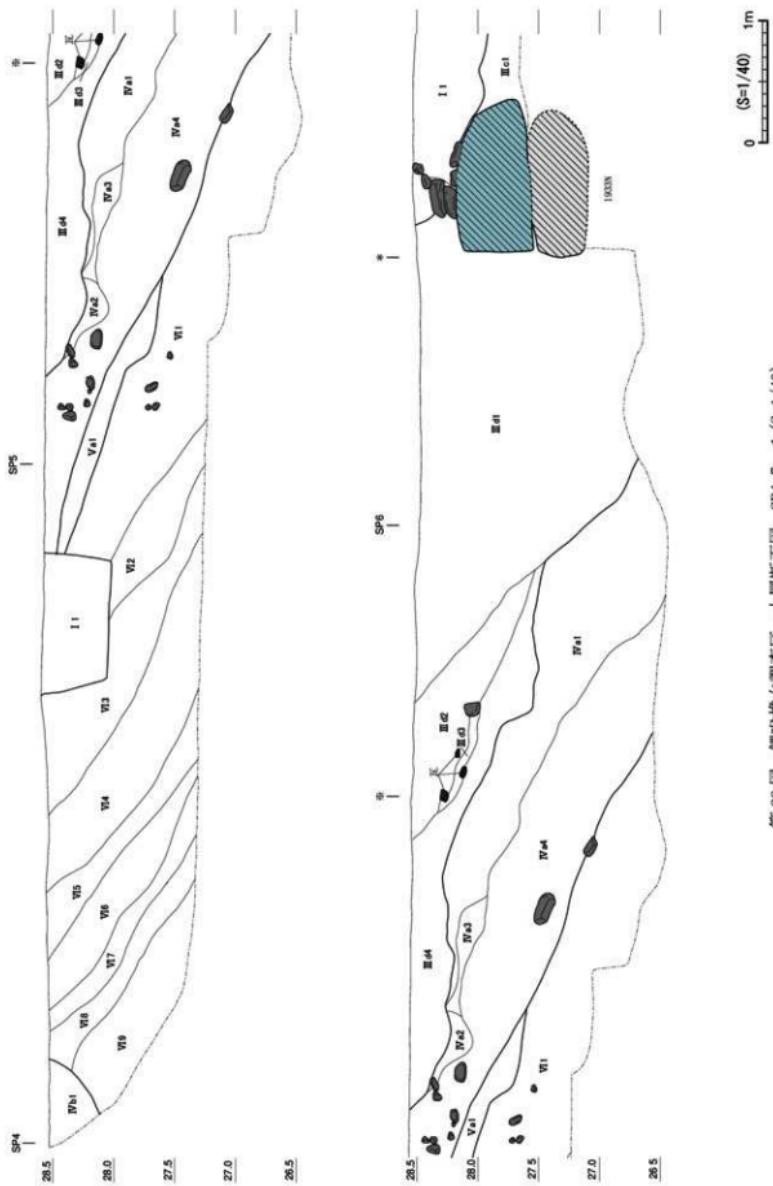
⑥いもり堀構築以前の遺構

石垣 1800S (第 17・34 ③・35 ①③・36 ②図)

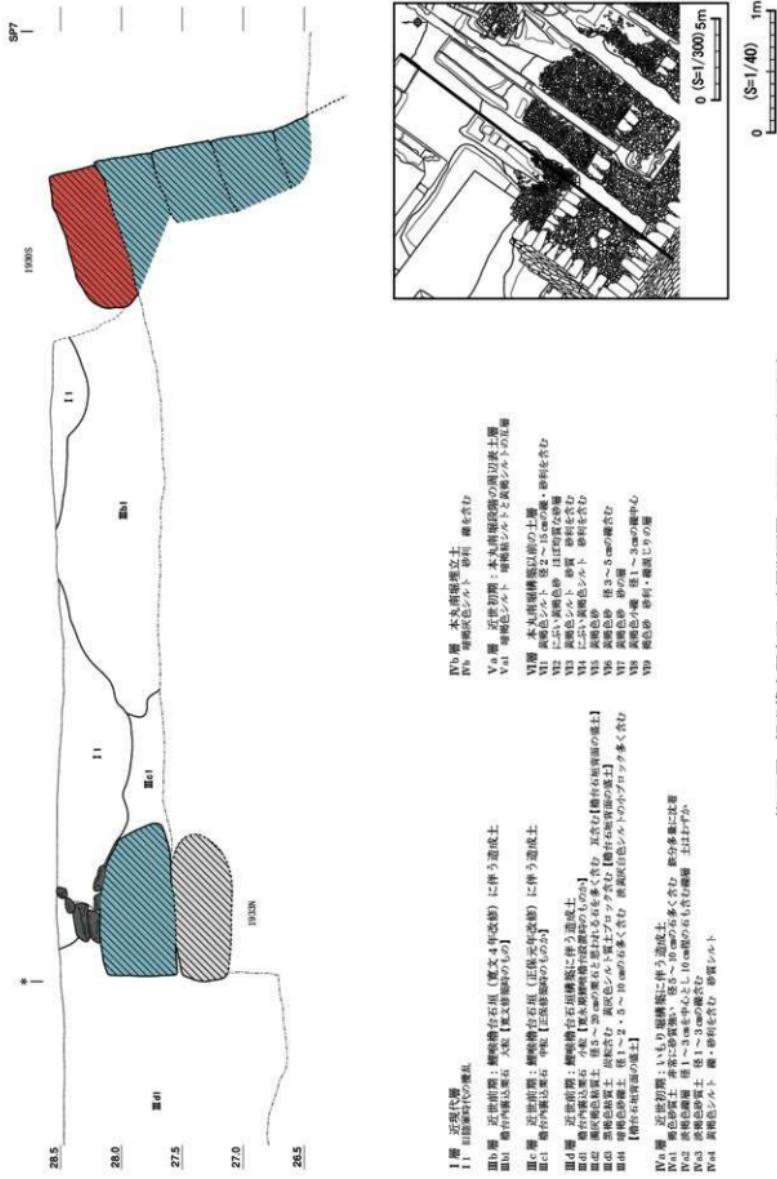
絵図に記載されていないが、後述する本丸南堀の南側で検出された石垣で、堤の南面を構成していた可能性がある。本調査区では戸室石を5石（青戸室3石、赤戸室が2石）、検出長1.7mを確認し、車橋調査区での検出分（石垣3）を合わせると延長11mとなる。積みは落とし積みの部分が目立つ。根石は確認していない。石垣1934Nとは面を向き合って約1.3mの間隔を持ってほぼ並行する。築石は割石で、面の形状が揃っておらず、控えも短い。また、面は自然面および割面のみで、割面が目立つ。刻印は確認されていない。河原石の間詰石が多用されていた。裏込めは栗石を主体とし、抽出した栗石100個の大きさを計測したところ、その平均値は長辺14.9cm、短辺が10.6cm、重量1.6kgであった。これらの特徴から、金沢城石垣編年2期（慶長年間頃（1596～1615））の構築と考えられる。また、この石垣の前面には、場所によって層の厚みに差があるが、焼土層が堆積していた。既調査成果から、この焼土層が寛永8年大火（1631）に係る火災片付層とみられることから、鯉喉櫓台の構築は寛永8年以後と考えられる。よって、1800Sは後述する本丸南堀が存在する時期に構築され、本丸南堀の廃絶後も、いもり堀の北岸に鯉喉櫓台石垣が構築されるまで（元和期～寛永大火以前）存続しており、当該期のいもり堀北岸の一部を構成していた可能性が想定される。

本丸南堀 (第 16・17・29・30・39・40図)

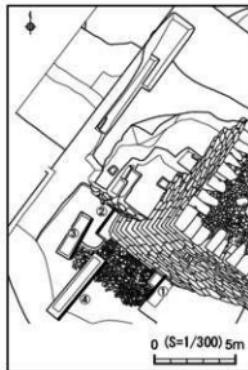
絵図に記載されていないが、調査区北端部で、いもり堀に先行する堀の南岸の一部を検出している。この堀は、從前より「いもり堀古段階」、「旧いもり堀」、「古いもり堀」、「いもり堀に先行する堀」、「本丸南堀」等と呼称されていたが、本報告書では「本丸南堀」とする。本丸の南から稻荷屋敷までの石垣の形状に沿って蛇行するかのような形状を呈するとみられるが、南東端には櫓台ではなく、土羽が続いている。本調査区内で検出した範囲は調査区東端から約23m分で、堀底の確認には至っていない。ベースとなる層は黄褐色系の砂質土または砂層で、埋土は暗灰褐色系の砂礫層である。元和年間（1615～1624）に埋め立てられ、いもり堀に切り替えられたと考えられる。



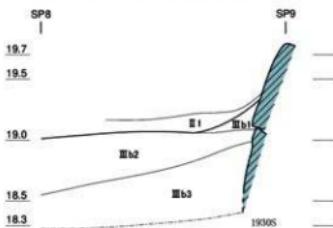
第29図 鯉喉嚨台調査区 土層断面図 SP4-7 1 (S=1/40)



第30図 鯉喉槽台調査区 土層断面図 SP4-7 2 (S=1/40)



①1930S根石付近 SP8-9土層断面



II層 近世後期堆積土

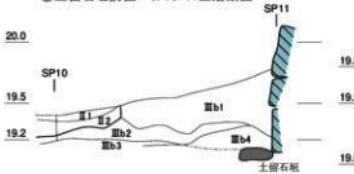
II1 灰褐色砂質土 砂利多く含む

II2 灰褐色砂質土 戸室礫片・チップ非常に多く含む

II3 灰褐色砂質土 戸室礫片・チップ多く含む

II4 大きな砾石の層

②土留石垣前面 SP10-11土層断面



II層 近世後期堆積土

II1 灰褐色砂質土 砂利多く含む

II2 灰褐色砂質土 植物遺体・礫維多く含む 鉛瓦層(鉛瓦は宝曆大火被災か)

③土留石垣前面 SP12-13土層断面



IIb層 近世前期：蝦夷檜台石垣(寛文4年改修)に伴う造土

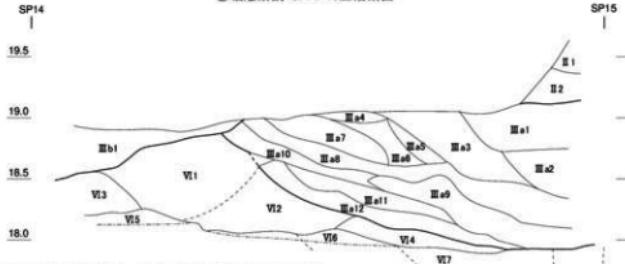
IIb1 淡褐色砂質土 [蝦夷檜台石垣]

IIb2 灰褐色粘質土 密緻土壌状に入り、砂含む

IIb3 灰褐色土 小石・戸室チップ多く含む

IIb4 前面堅石層

④蝦夷断面 SP14-15土層断面



II層 近世中後期堆積土：寛文4年石垣改修以後の層堆積層

II1 淡褐色粘土 砂多く含み、植物遺体含む

II2 黒灰褐色粘土

IIb層 近世前期：蝦夷檜台石垣(寛文4年改修)に伴う造土
IIb1 黑石層 青灰細砂・小砂利・戸室礫片若干含む

IIIa層 近世前期：寛文4年石垣改修以前の層堆積層

IIIa1 黄褐色砂質土+礫石 (ジャリケフ)

IIIa2 黄褐色粘土

IIIa3 灰色細砂

IIIa4 灰灰褐色細質土 程10~15cmの礫石含む

IIIa5 灰褐色粘土 ブロックで入ったものか

IIIa6 黃褐色細砂 程15~20cmの礫石含む

IIIa7 淡灰色砂質土 程20~30cmの礫石含む

IIIa8 單色細砂 岩繊土

IIIa9 淡褐色粘土

IIIa10 増灰色砂質土 小礫多く含む

IIIa11 淡灰褐色粗砂

IIIa12 淡灰褐色粗砂 淡褐色粘土を大きなブロックで含む

VI層 本丸南堀構築以前の層：地山

VI1 淡褐色砂質土 淡褐色粗砂、礫石に入る

VI2 淡灰褐色粗砂 VI1層よりやや松子細かい。径3~10cmの石多く含む

VI3 淡褐色細砂

VI4 淡灰褐色砂

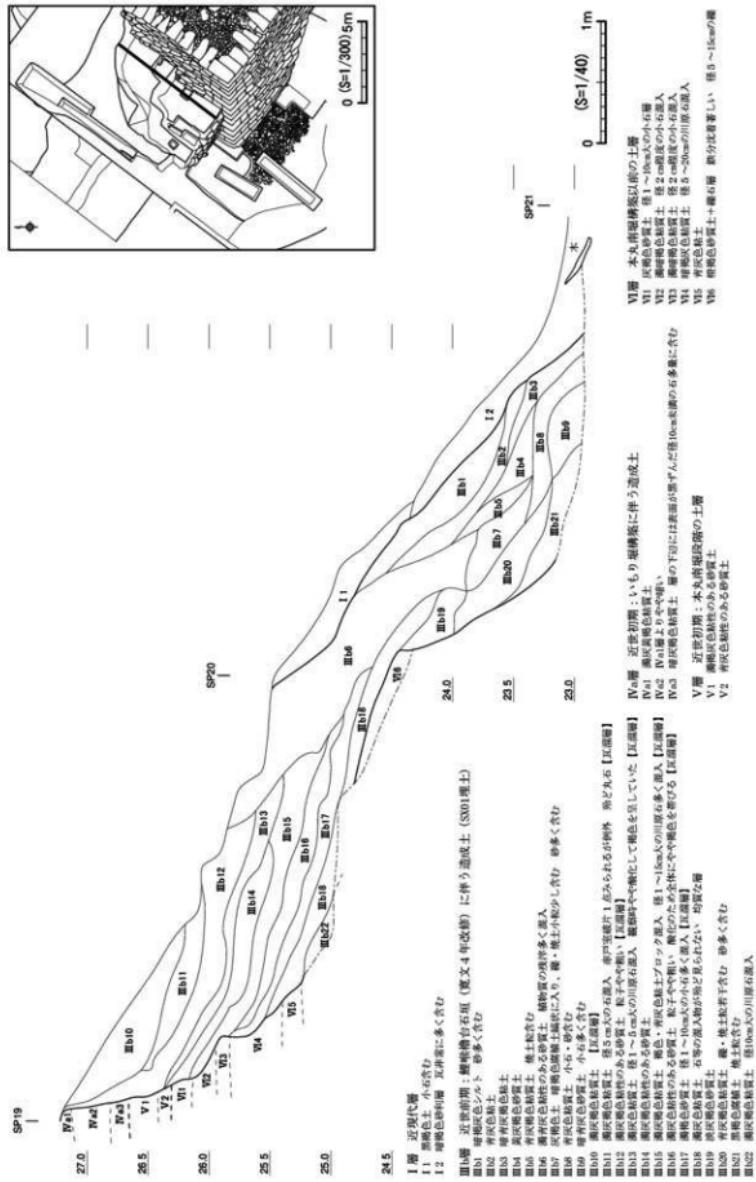
VI5 淡褐色粘土 非常に硬くしまる

VI6 底緑灰褐色

VI7 灰色粘土 硬い岩質

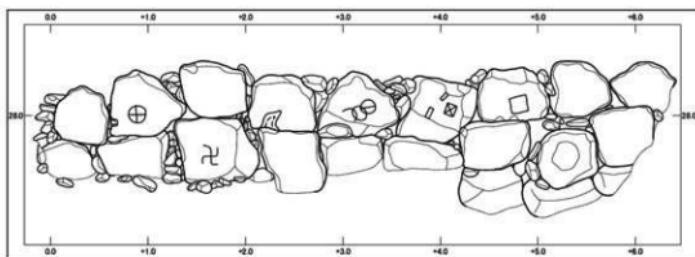
0 (S=1/40) 1m

第31図 蝦夷台地調査区 土層断面図 SP8-9・SP10-11・SP12-13・SP14-15(S=1/40)

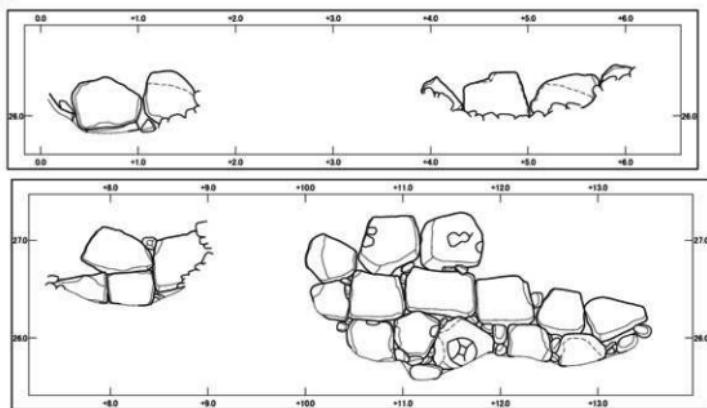


第32図 蝙蝠検査区 十層断面図 SP19-21 (SX01) (S=1/40)

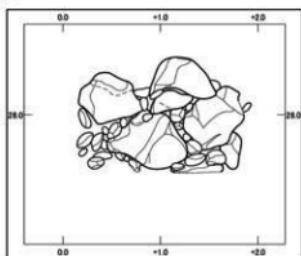
①1934N



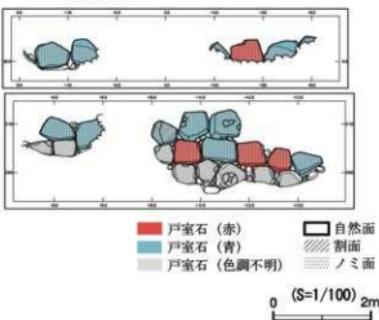
②1933N



③1800S

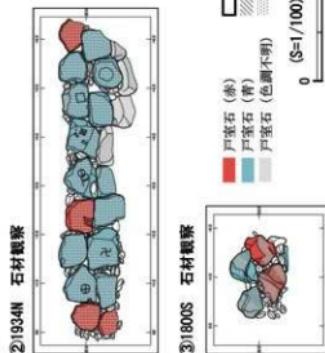
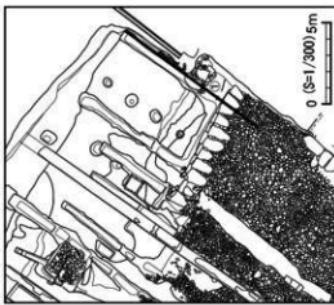
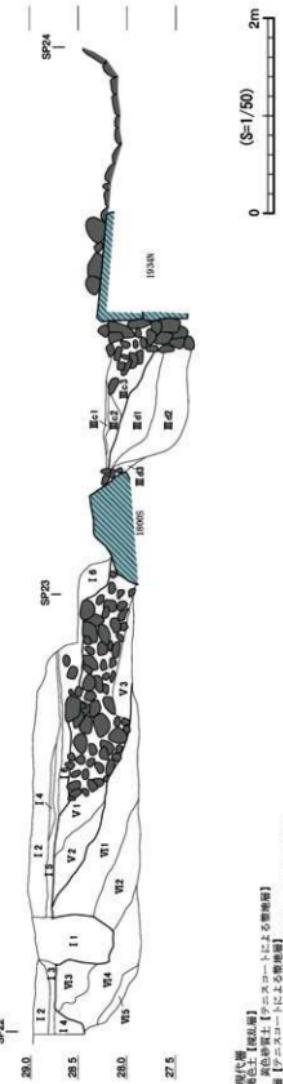


④1933N 石材観察図

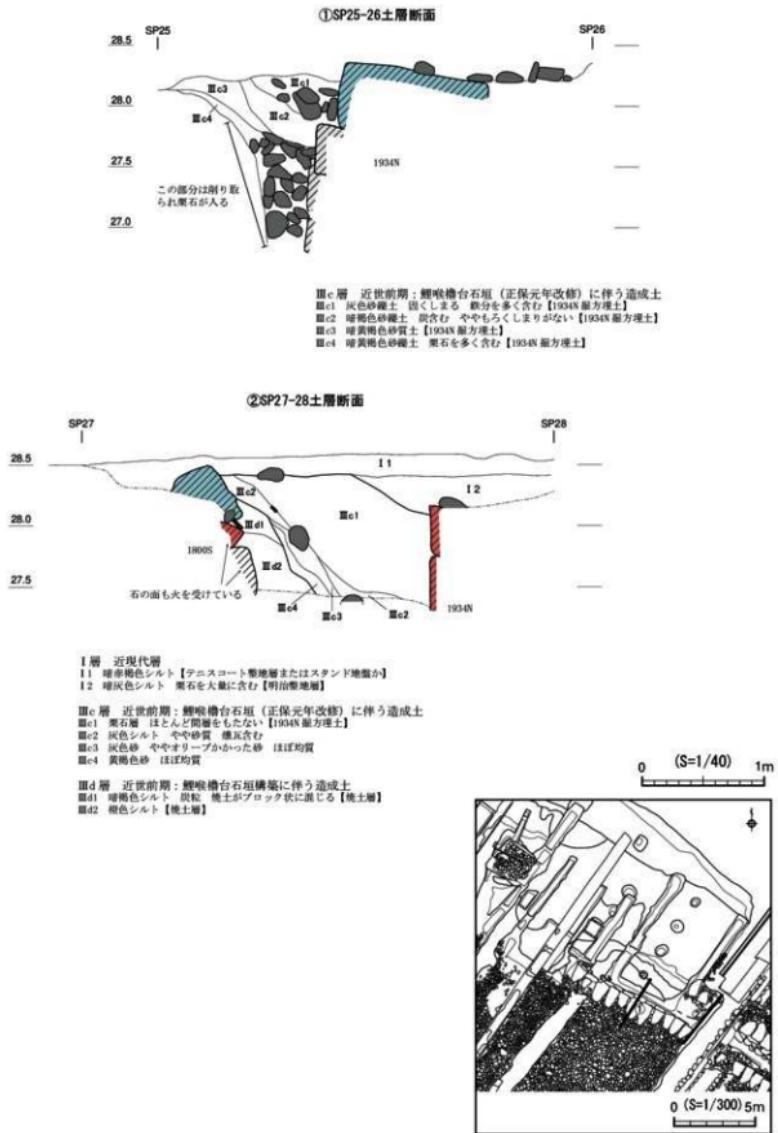


第34図 鯉喉櫓台調査区 石垣 1934N・1933N・1800S 立面図 (S=1/50)、1933N 石材観察図 (S=1/100)

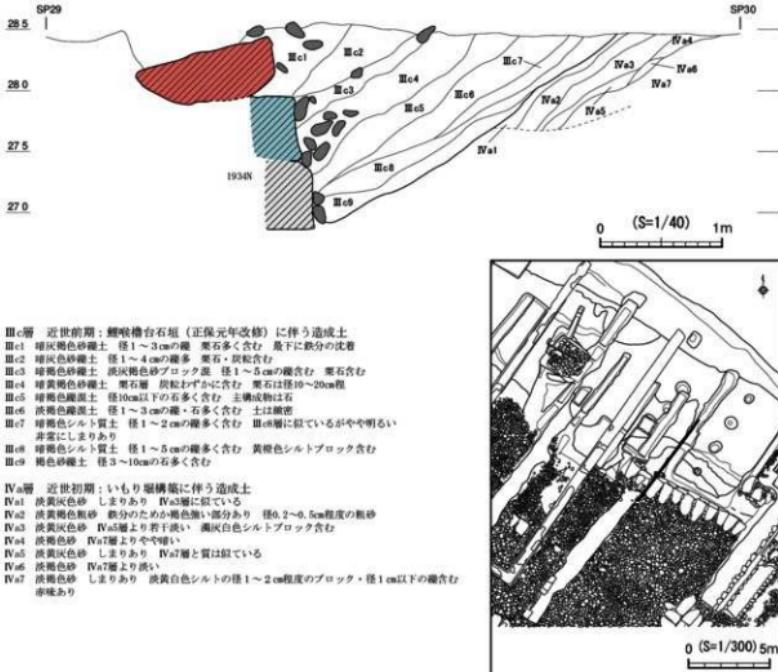
①SP22-24 土層断面



第35図 鰐塚櫓台調査区 土層断面図 SP22-24 (S=1/50)、石垣 1934N・1800S 石材観察図 (S=1/100)



第36図 鯉喉檜台調査区 土層断面図 SP25-26・SP27-28 (S=1/40)

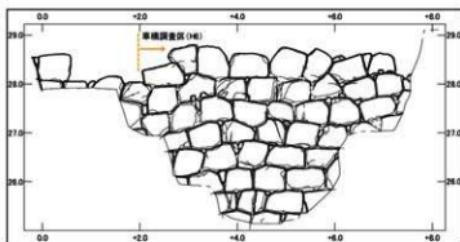


第37図 鯉喰櫓台調査区 土層断面図 SP29-30 (S=1/40)

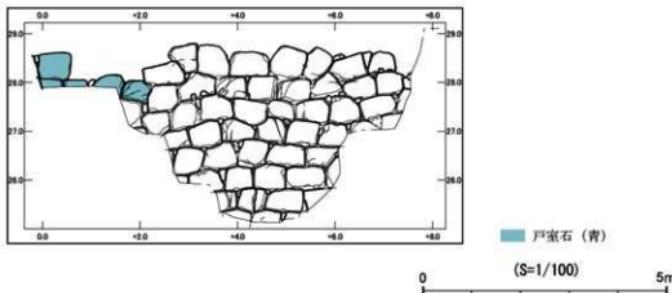
(3) 小結

- ・調査により、鯉喰櫓台石垣（1930S）が高さにして約9.6m残存していることを確認した。寛文8年（1668）の「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）では、水底より高さ八間と記載されていることから、本来の高さが14.5mと推定され、現存石垣の上面より約4.9m高かったことになる。
- ・鯉喰櫓台石垣は、文献や埋蔵文化財調査の成果により、寛永8年大火（1631）後に築造され、正保元年（1644）・寛文4年（1664）に改修を受けたと考えられるが、石垣の精査により、現存石垣が寛文4年改修の姿を残していることが確認された。
- ・鯉喰櫓台の寛文4年改修に伴う遺構として、石垣西側に接する土羽において大規模な掘り込みSX01と、堀底側に設けられた土留石垣が検出されている。
- ・鯉喰櫓台の正保元年改修を示す痕跡として、櫓台内部で検出された石積み1934Nおよび1933Nが挙げられる。
- ・城内の石垣に使用された戸室石は赤戸室石が多く見られる傾向にあるが、鯉喰櫓台石垣で使われた石垣石については、青戸室石が多数を占めることが特徴的である。その理由が如何なるものかは特定できないが、金沢城の石材利用を考える上で興味深い事例である。
- ・鯉喰櫓台周辺における景観の変遷は大きく五段階に分けることができ、櫓台設置後は2度の大きな崩壊と修築による内部構造の変化があったと考えられる。

①1931S 立面図



②1931S 石材観察



第38図 鯉喰櫓台調査区 石垣1931S 立面図・石材観察図 (S=1/100)

第1段階：いもり堀掘削以前の段階。本丸高石垣に沿って本丸南堀が存在した。

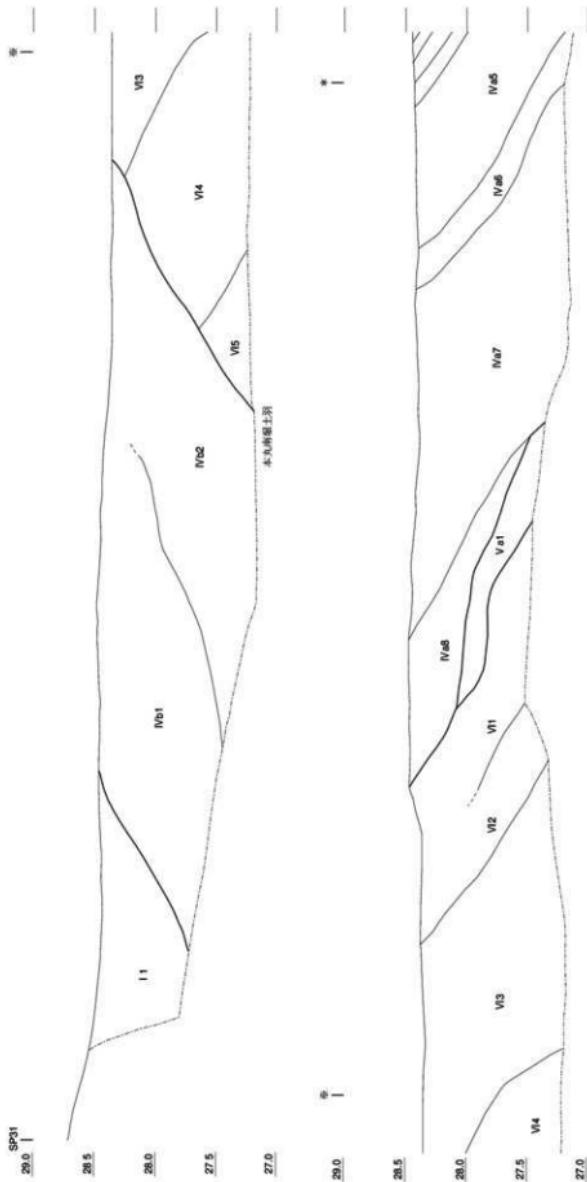
第2段階：いもり堀掘削後～鯉喰櫓台設置以前の段階。元和年間（1615～1624）と考えられる本丸南堀の廃絶に伴い、その南側にいもり堀が掘削される。堀北岸は土羽で、構築当初のいもり堀南東端には櫓台はなかったとみられるが、前段階から存続する石垣1800Sが当初の堀南東端を構成していたとみられる。

第3段階：寛永8年（1631）の大火後、鯉喰櫓台石垣が設置された段階。土羽を礫の多い土で整地した後に、小粒の河原石でいもり堀を埋め立てて、櫓台を構築したとみられる。石垣台には面に刻印が施された石垣石が使用された。

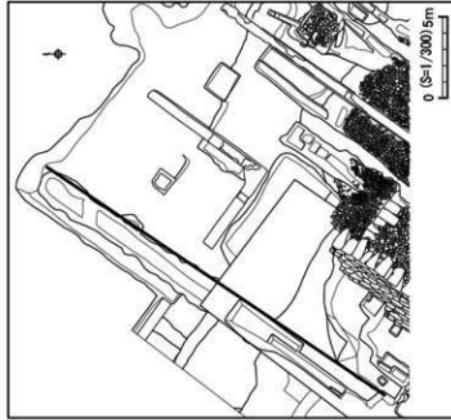
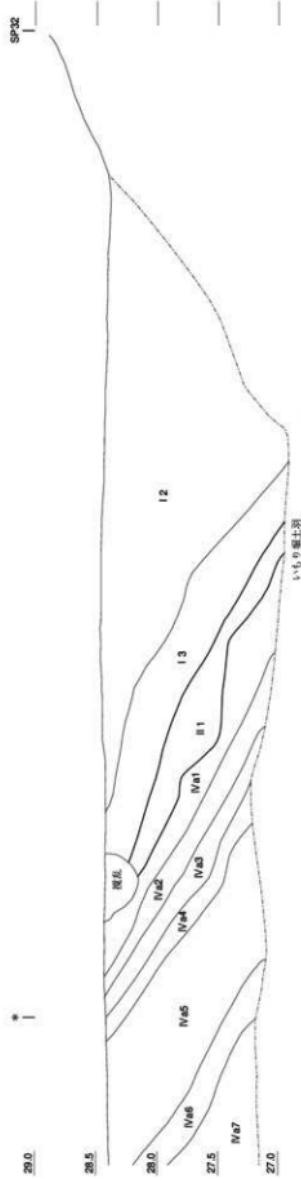
第4段階：正保元年（1644）、鯉喰櫓台石垣の1度目の改修が行われた段階。設置当初の石垣石や栗石はいもり堀に崩れ落ち、大規模な修復を行っている。修復には設置当初より大きい河原石を栗石として用い、石垣石も新たにした。また、土砂や栗石の崩壊、流出を防ぐために、崩れ落ちた石垣石を再利用して1934N・1933Nを設置した。

第5段階：寛文4年（1664）、鯉喰櫓台石垣の2度目の改修が行われた段階。改修には、前段階よりさらに大きい河原石を栗石として用い、石垣石も新たにした。調査時検出した石垣は、この段階のものである。

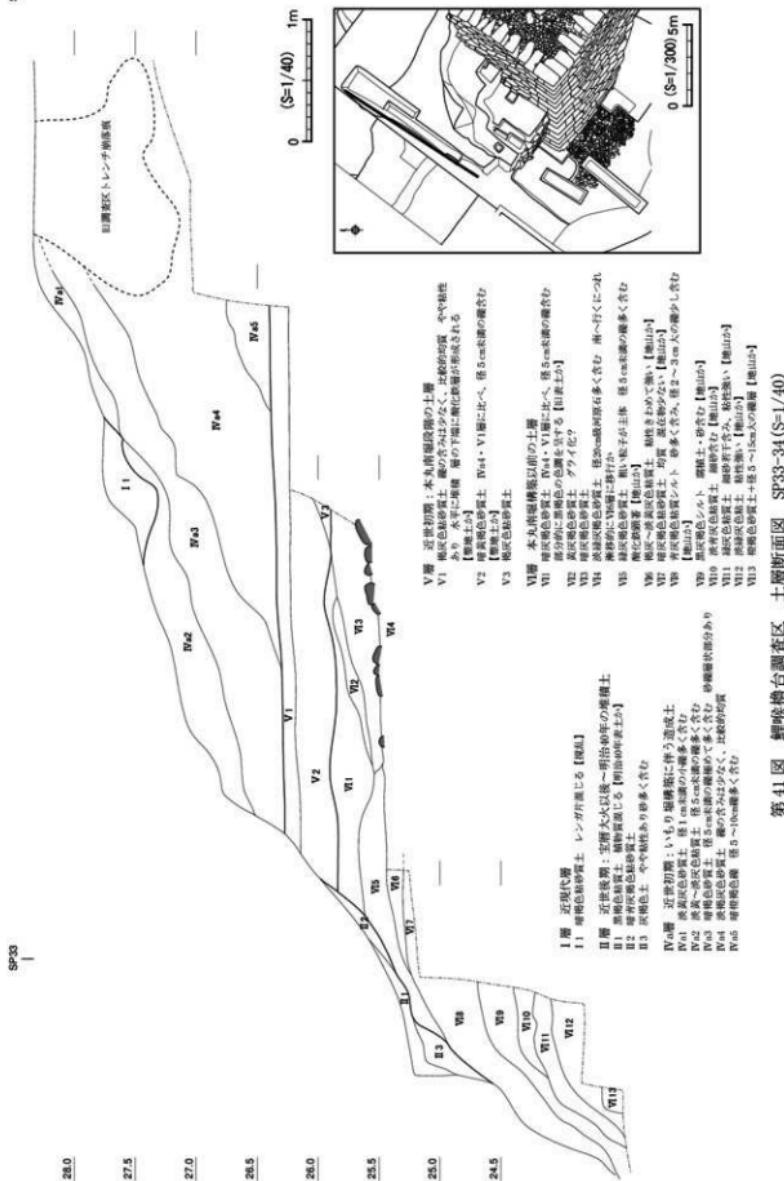
0 (S=1/40) 1m



第39図 煙袋檜台測査区 土層断面図 SP31-32 1 (S=1/40)



第40図 鯉喰檜台調査区 土層断面図 SP31-32 2 (S=1/40)



第41図 蝶ヶ谷調査区 土層断面図 SP33-34 (S=1/40)

北岸調査区

(1) 概要 (第 11・12・42 ~ 50 図)

本調査区は絵図によると、いもり堀北岸へいもり堀内部に対応する部分で、鯉喉櫓台調査区～土橋調査区間の、北西 - 南東方向に延長約 210 m に及ぶ長大な調査区である。平成 10 年度 (1998-2 地点)・平成 15 年度 (2003-2 地点)・平成 16 年度 (2004-1・2 地点) の 3 次にわたり調査が行われた。調査は、いもり堀復元計画策定にかかる遺構確認を目的とするもので、いもり堀の土羽の状況、堀底の深さ・形状等の基礎データを得ることを目的とした調査が行われた。また、出土遺物からいもり堀周辺の建物の屋根瓦についての知見を得た。

(2) 遺構

①いもり堀 (第 43 ~ 62 ①②・63 ~ 70 ①・71 ~ 73 図)

堀の土羽については、近世初期の築造当初から明治 40 年 (1907) の埋立直前に至る状況を確認した。堀中央部の 2003-2 地点では、近世初期の築造当初の面と、その上層の宝曆 9 年 (1759) 大火までに法面崩落による土砂が土羽斜面から堀底にかけて堆積して形成された面 (III a 層上面)、および明治 40 年の堀埋立直前までの面を確認した。また、堀西部の 2004-2 地点、東部の 2004-1 地点では、近世初期の築造当初の面と明治 40 年の堀埋立直前までの面を確認した。この両地点の堀底でも、宝曆大火以前に法面崩落により短期間で堆積したとみられる土砂を確認した (III a 層)。このような堀底の状況から、いもり堀では堀構築当初の姿に戻すような大規模な堀ざさえ行われなかつたと考えられる。また、土羽の斜面上から石垣石や礫がまとまって検出される状況も見られた。III a 層の上には焼土 (粒・塊) や溶解した鉛片や鉛瓦を含む宝曆大火後の土 (II 層) が堆積していた。なお、堀構築時のベース (VI 層) には、古代の遺物包含層も含まれる。

検出した構築当初の土羽の幅は、2004-2 地点で 15 ~ 16 m、2003-2 地点で 15 ~ 16 m、2004-1 地点で 14 ~ 15 m であった。また、構築当初の堀底の標高は、2004-2 地点で約 16.6 m、2003-2 地点で約 17.5 m、2004-1 地点で推定 17.5 ~ 18 m (確認した最下部の標高は 19.3 m) で、現地表からの堀の深さは 10 ~ 11 m を測る。堀底が西に向かって低くなつておらず、堀の深さを維持しながら地形の傾斜に合わせて掘削されたと考えられる。

出土遺物には陶磁器や瓦、金属製品、木製品が見られたが、III a 層より越前赤瓦がまとまって出土している点が特筆される。

②本丸南堀 (第 57 ~ 59・61・63・72・73 ①図)

部分的にではあるが、土層断面精査の際、鯉喉櫓台調査区で検出された堀の続きを延長約 150 m の範囲で確認している。土層断面の観察で得られた最大幅は 21.4 m 以上、深さ 1.9 m 以上を測る。

③SK01 (第 48・49・70 ②図)

2004-1 地点で、いもり堀と重複して検出された土坑である。平面橢円形と推定され、長径 255 cm、短径 224 cm 以上、深さ 78 cm を測る。II 層土で埋め立てられていた。

④SX01 (第 50・73 ②図)

1998-2 地点 F 区で、いもり堀に近接して検出された。IV a 層を基盤とした遺構で、土層断面で確認した幅は 2.54 m、深さ 1.34 m を測る。近代に廃絶されたとみられる。遺物を伴わず、遺構の性格は明らかではないが、堀への排水施設の可能性があろうか。

⑤PO1 (第 46・47・62 ③図)

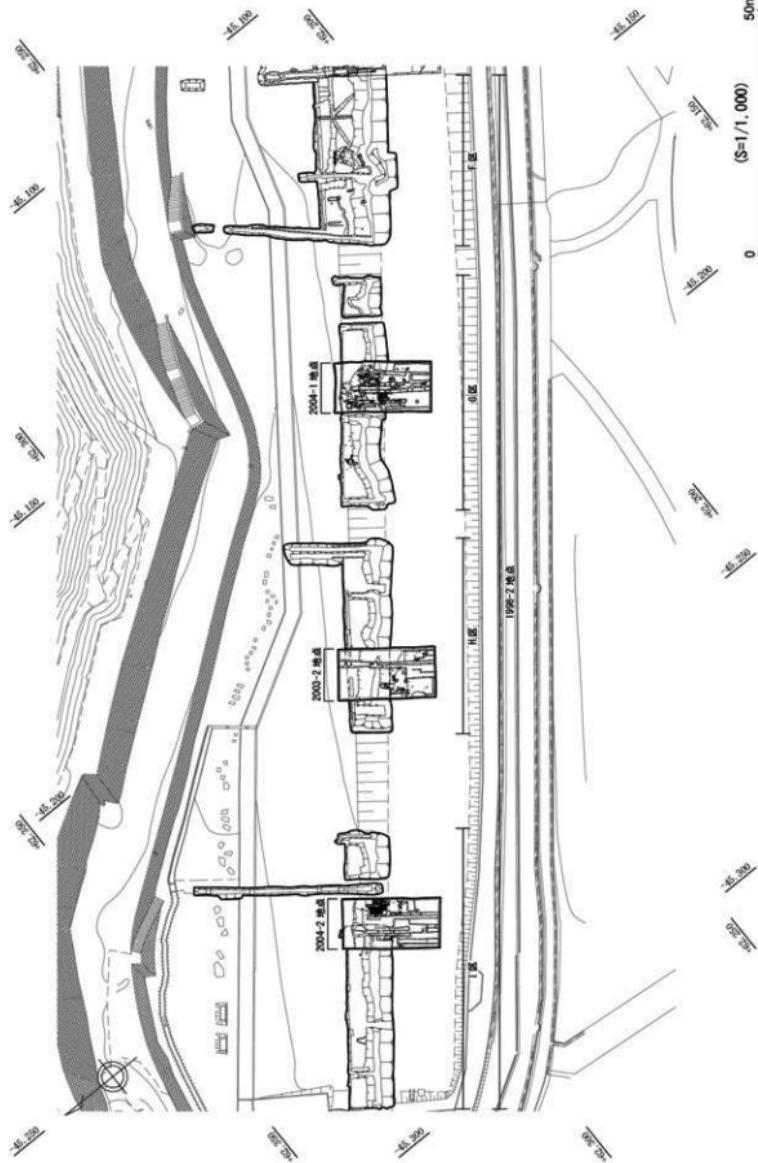
2003-2 地点中央部のトレチ内で検出した平面円形のピットで、7 世紀頃と推定される遺構面を切り込んでいる。径約 40 cm、深さ 22 cm を測る。遺物は出土せず、遺構の性格も明らかでない。

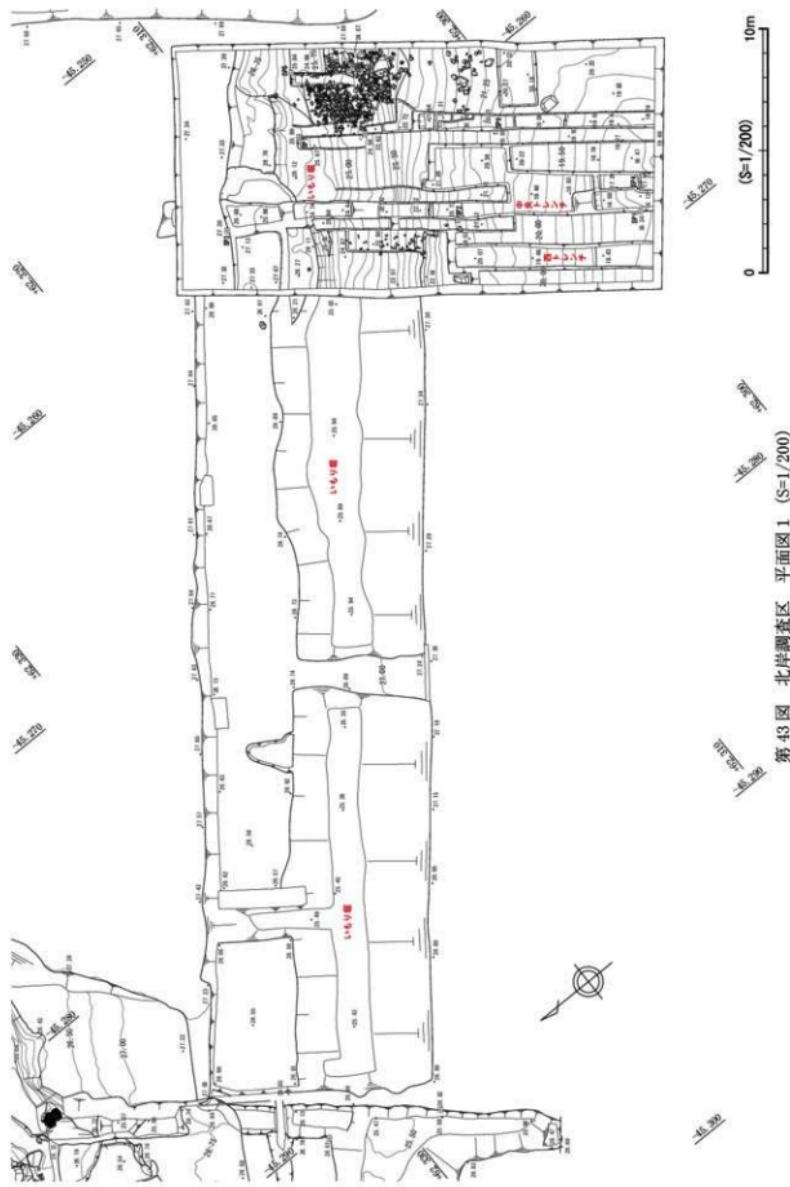
(3) 小結

・いもり堀の土羽について、近世初期の築造当初の面と明治 40 年の堀埋立直前までの面の新旧 2 面

(S=1/1,000) 50m

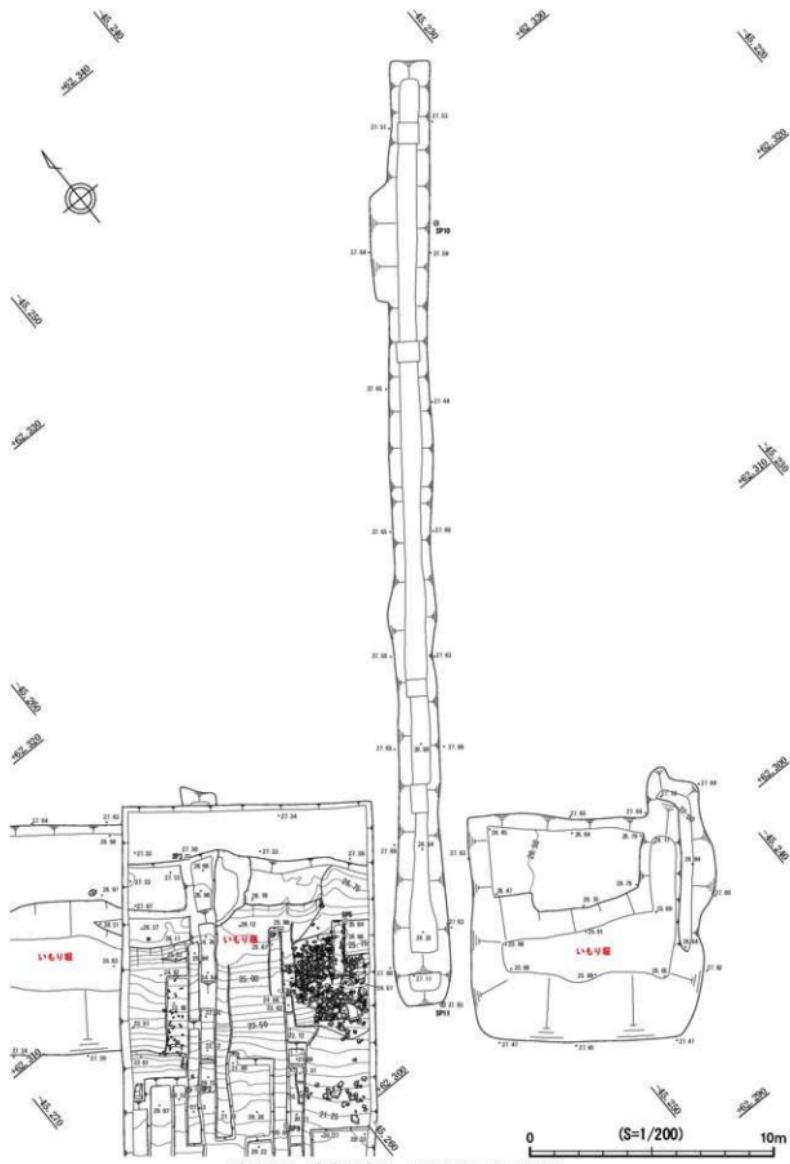
第42図 北岸調査区 全体図 (S=1/1,000)



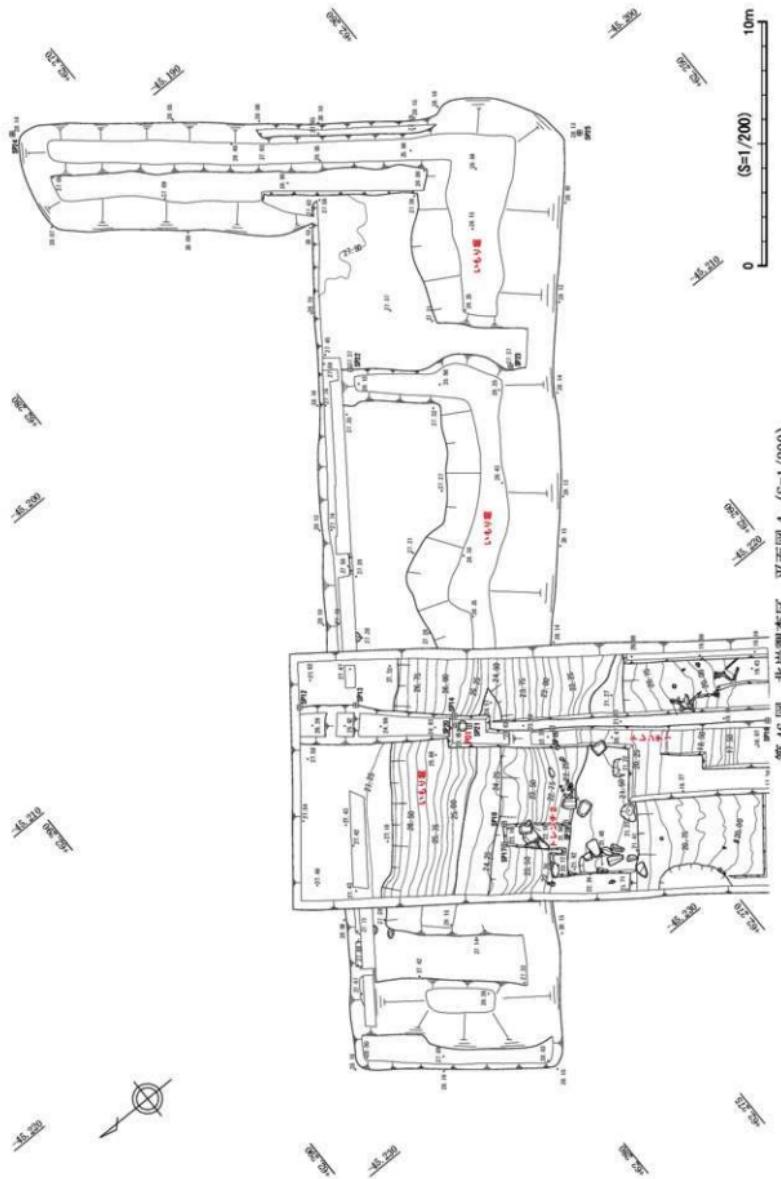




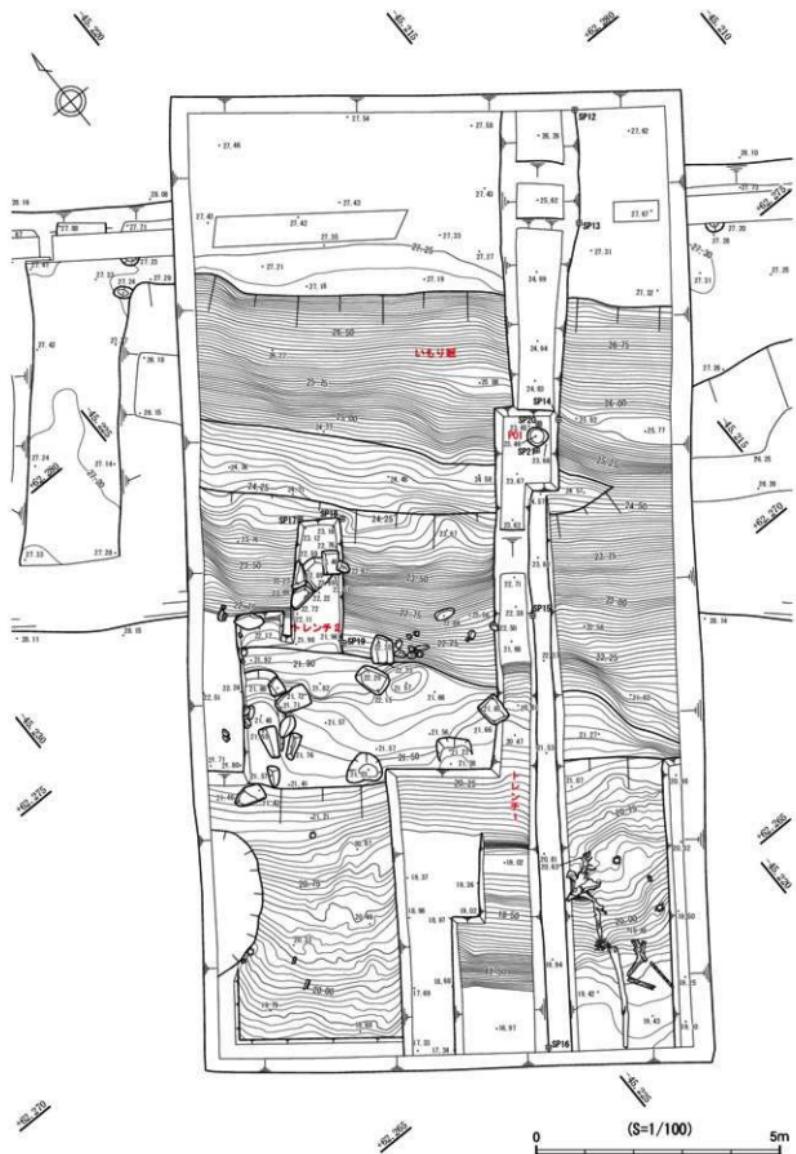
第44図 北岸調査区 平面図2 (S=1/100)

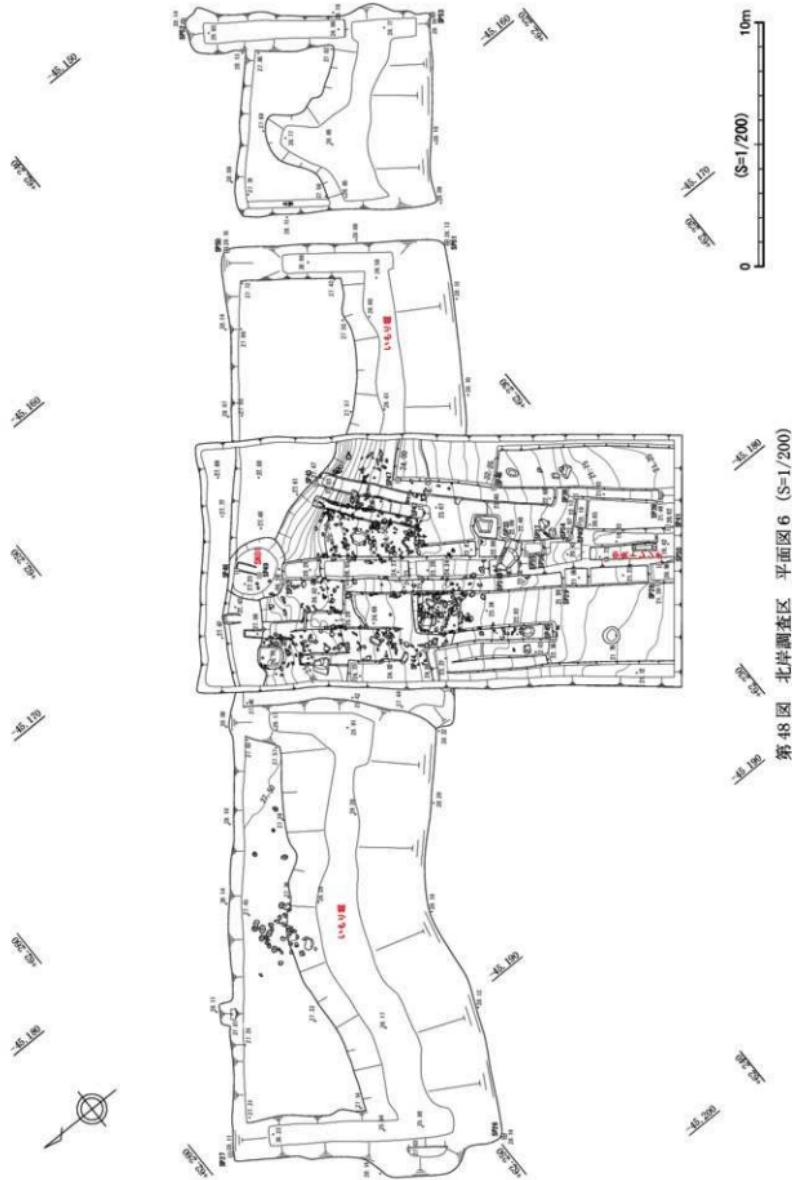


第45図 北岸調査区 平面図3 (S=1/200)



第46図 北岸調査区 平面図4 (S=1/200)



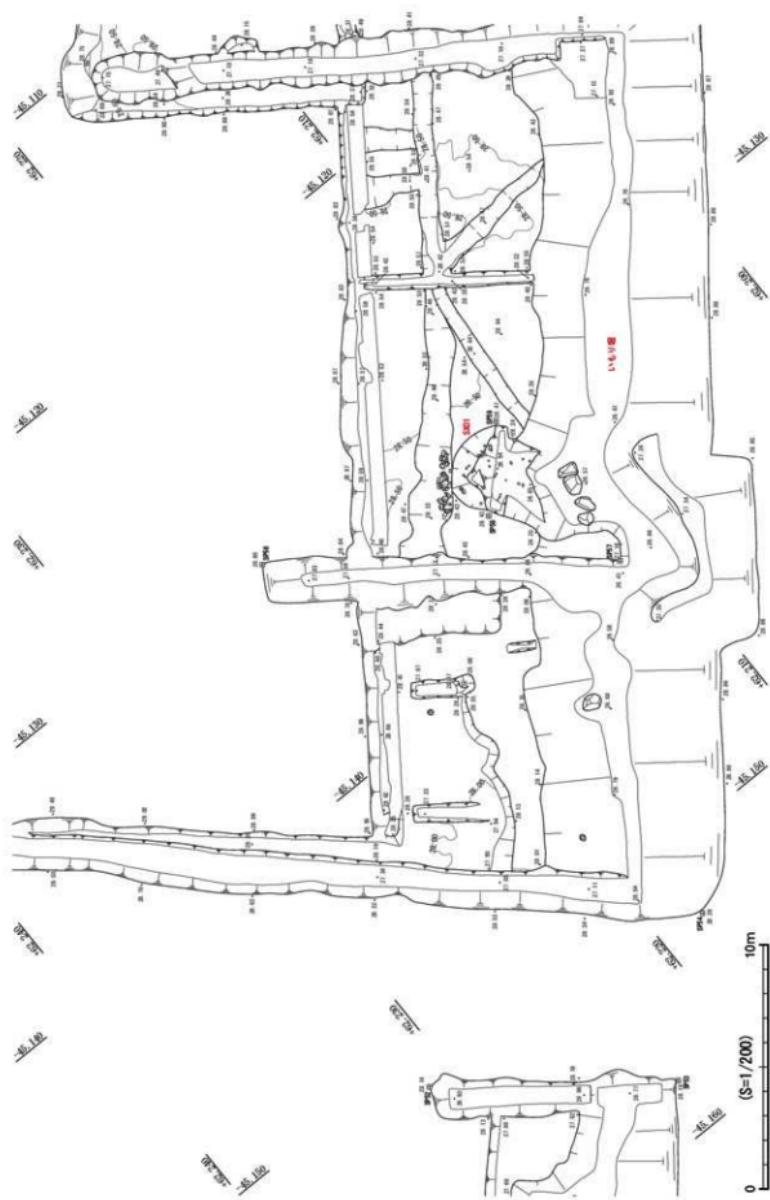


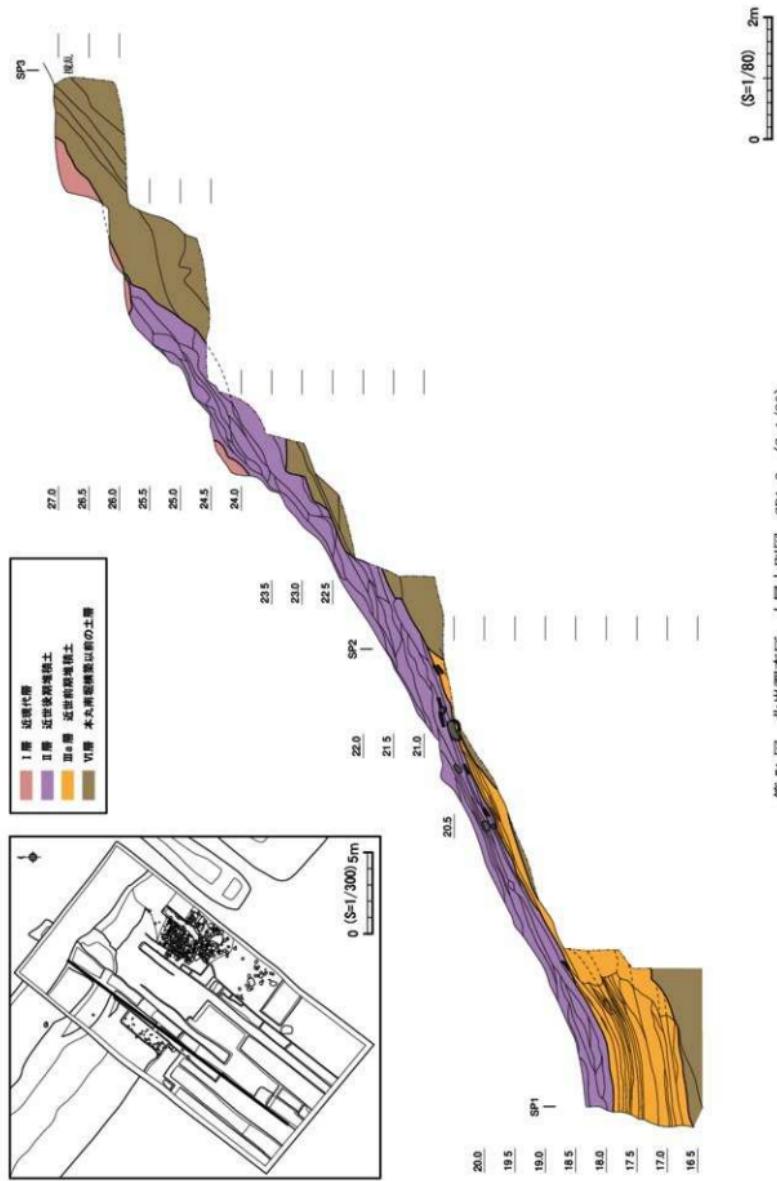
第48図 北岸調査区 平面図6 (S=1/200)



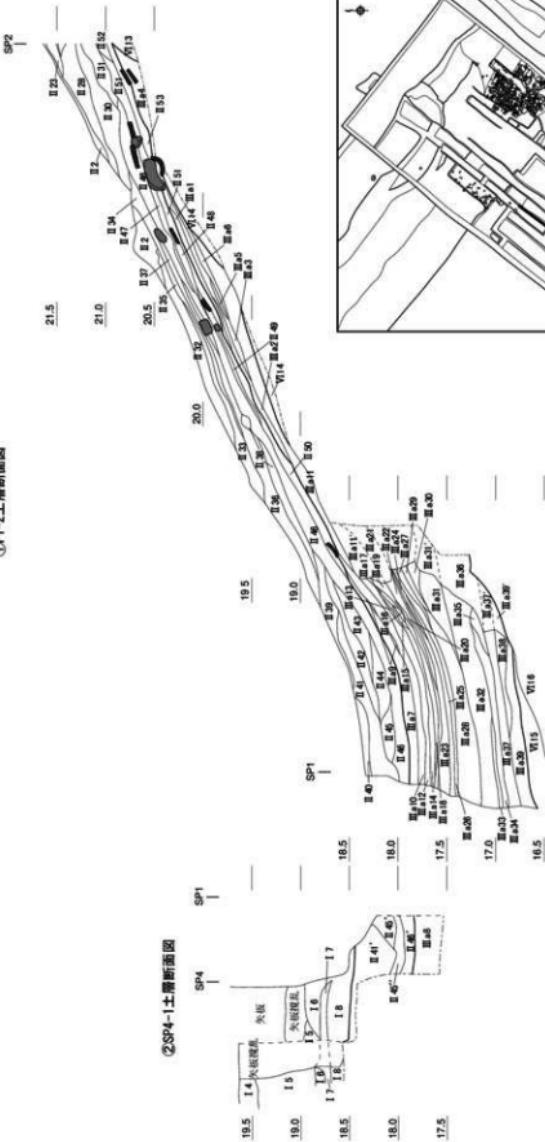
第49図 北岸調査区 平面図7 (S=1/100)

第50図 北岸調査区 平面図8 (S=1/200)

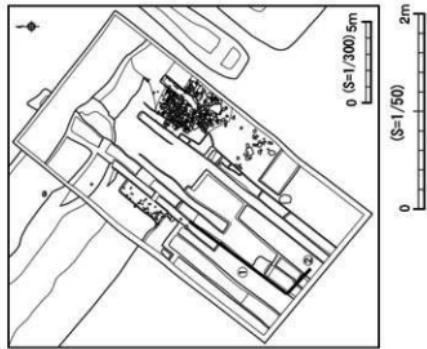


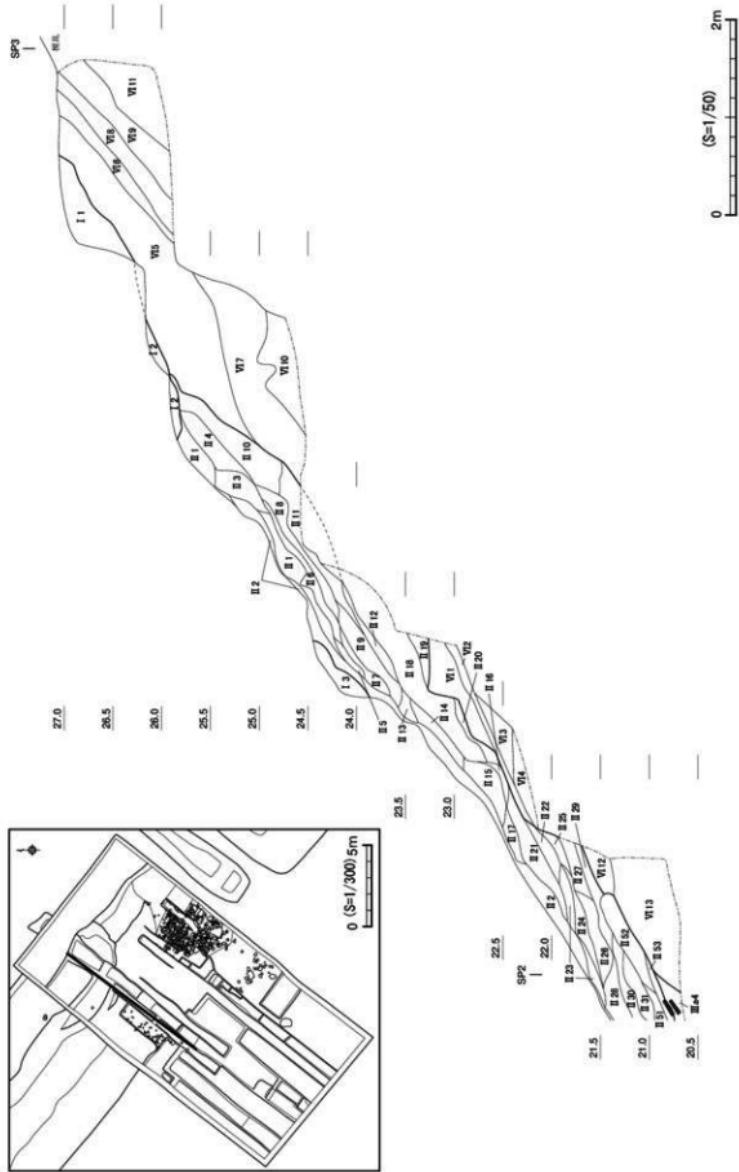


①P1-2土層断面図



第 52 図 北岸調査区 土層断面図 SP1-2・SP4-1(S=1/50)

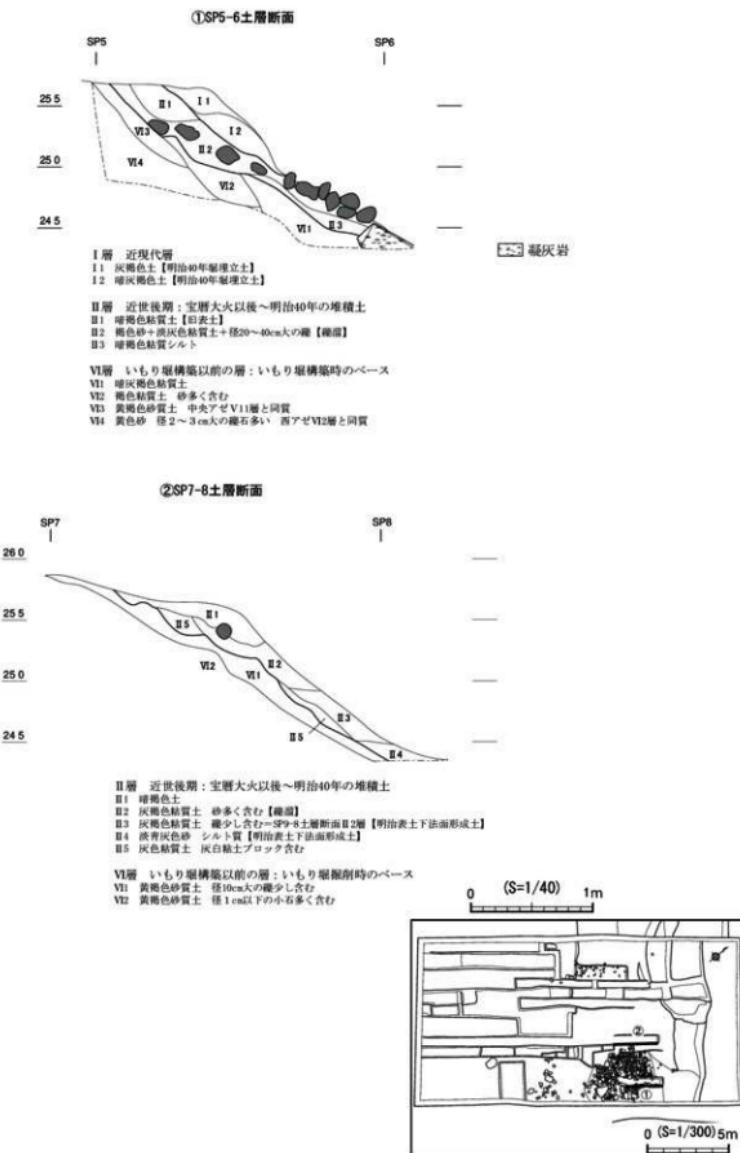




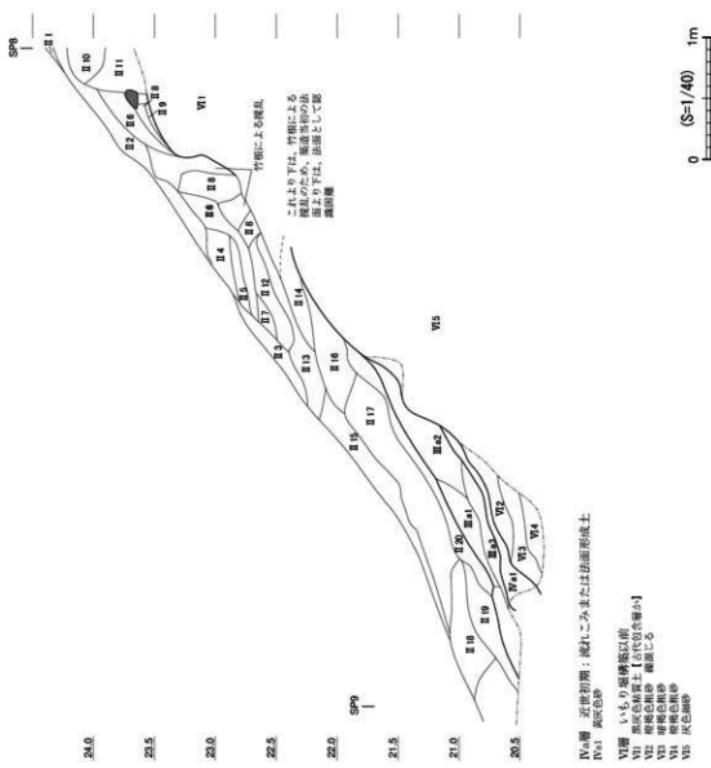
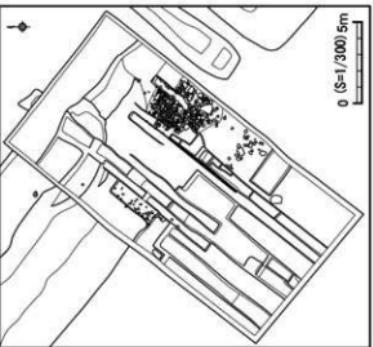
第 53 図 北岸調査区 土層断面図 SP2-3 (S=1/50)

I 层	近現代層
1	黄色砂質土 粒度～5mmの小石多く含む【堆肥土】
2	黄色砂 地下鉄粉土を含む【堆肥土】
3	灰褐色砂 【堆肥土】
4	暗灰褐色地質土
5	灰色粘土質土 粗砂多く含む
6	黒灰色粘土
7	灰色粘土質土
8	黒灰色粘土
II 層	近世後期：宝曆大火以後～明治40年の堆積土
9	暗灰褐色トントル【堆肥土上】
10	暗褐色土【堆肥土上】
11	暗灰褐色土 砂・礫含み、鉢分数が多い
12	褐色土 シルト・小石多く含む
13	暗褐色地質シルト
14	灰褐色トントル
15	暗褐色地質シルト+小石。小石
16	褐色シルト 鉢分沈着あり
17	褐色地質土 砂・礫・小石
18	暗褐色地質土 砂・鉢分少しある
19	黄褐色粗砂
20	灰褐色粘土質土
21	II 10層と同質 竹籠の埋立でせり上がったもの
22	黒灰褐色土 竹根混在多い
23	暗灰褐色土 砂多く含みしまらない、竹籠多い
24	褐色粘土質土
25	暗褐色地質土 砂・礫
26	暗褐色地質シルト
27	暗褐色地質土 砂・鉢分少しある
28	暗褐色地質土 砂・鉢分多く含む
29	暗褐色地質土 砂・鉢分多く含む【堆肥層】
30	暗褐色地質土 II 18層出来、崩落したものか
31	暗褐色地質土 砂・鉢分多く含む
32	暗褐色地質土 砂鉢多く含む
33	暗褐色地質土 数mmの細砂が入る互層状 本の皮、板等若干含む
34	暗褐色地質土 数mmの細砂が入る互層状 本の皮、板等若干含む
35	暗褐色地質土 数mmの細砂が入る互層状 本の皮、板等若干含む
36	暗褐色地質土 数mmの細砂が入る互層状 本の皮、板等若干含む
37	暗褐色地質土 数mmの細砂が入る互層状 本の皮、板等若干含む
38	暗褐色地質土 砂・鉢分多く含む
39	暗褐色土 30cm以上砂多く含む
40	暗褐色地質土 数mmの細砂が入る互層状 本の皮、板等若干含む
41	黒灰色砂質土 細砂多く含む
42	暗褐色地質土 砂鉢多く含む
43	淡灰褐色粘土
44	暗褐色地質土 黄褐色地質土ブロック含む
45	黒灰色粘土質土 こぶし大の砂と鉢分含む 廃植物含む
46	灰色粘土質土
47	暗褐色地質土 砂鉢多く含む
48	暗褐色地質土 砂鉢多く含む
49	暗褐色地質土 砂鉢多く含む
50	暗褐色地質土 砂鉢多く含む
51	灰色粘土質土 白色ブロック混
52	黒灰色粘土
53	灰色粘土
IIIa 層	近世前期：宝曆大火以前の堆積土
54	暗灰褐色地質土 粗砂の細砂が入る 互層状
55	暗灰褐色地質土 粗砂の細砂が入る 互層状
56	暗灰褐色地質土 粗砂の細砂が入る 互層状
57	褐色砂
58	暗灰褐色地質土 粗砂の細砂が入る 互層状
59	暗灰褐色地質土 粗砂の細砂が入る 互層状
60	淡褐色粘土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廃植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
61	暗褐色地質土
62	褐色砂
63	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廃植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
64	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廃植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
65	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
66	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
67	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
68	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
69	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
70	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
71	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
72	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
73	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
74	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
75	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
76	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
77	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
78	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
79	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
80	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
81	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
82	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
83	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
84	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
85	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
86	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
87	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
88	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
89	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
90	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
91	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
92	暗褐色地質土 蘭蟹壳に1～2mmの砂入る 廉植物若干入る 【堆肥の崩落に伴う砂と粘土の互層】
93	淡黄灰褐色地質土
94	淡黄灰褐色地質シルト
95	黃褐色砂質土 細砂多く含む【堆肥か】
96	黃褐色砂質土 砂2～5mmの小石含む【堆肥か】
97	褐色砂、黄色土+河原土(径3～5cm大やか)【堆肥か】
98	黄色砂質土 黃褐色土鉢分少しある【堆肥か】
99	黄色砂質土 黃褐色土鉢分少しある【堆肥か】
100	黄色砂質土 黃褐色土鉢分少しある【堆肥か】
101	黄色砂質土 黃褐色土鉢分少しある【堆肥か】
102	黃褐色地質土 砂2～3cmの小石多く含む【堆肥か】
103	黃褐色粗砂
104	黃褐色粗砂 細砂【堆肥か】
105	黃褐色粗砂 砂5～10cmの礫多く含む
106	黃褐色粗砂 大きな礫多く含む【堆肥か】
107	黃褐色粗砂 砂5～10cmの礫多く含む【堆肥か】
108	黃褐色粗砂 砂5～10cmの礫多く含む【堆肥か】
109	黃褐色粗砂 大きな礫多く含む【堆肥か】
110	黃褐色粗砂 砂5～10cmの礫多く含む【堆肥か】
111	黃褐色粗砂 砂5～10cmの礫多く含む【堆肥か】
112	黃褐色粗砂 砂5～10cmの礫多く含む【堆肥か】
113	黃褐色粗砂 細砂【堆肥か】
114	灰色粗砂 【堆肥か】
115	黃褐色地質土 【当初鉛面】
116	灰色砂礫 【堆肥】

南端地区東側付近では、尖板付近まで木の根が残る
多竹林は見られないが、ヒゲ根はII38～II42層で多く見られる



第55図 北岸調査区 土層断面図 SP5-6・SP7-8(S=1/40)



第56図 北岸調査区 土層断面図 SP9-8(S=1/40)

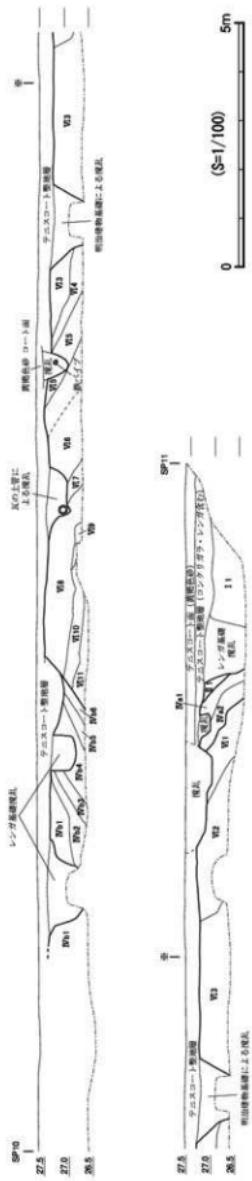


図 5 近世灰岩
1) 明治灰岩シート 約(15 ~ 20 m)含む [明治 40 年の地盤上]

Ⅱ層 近世灰岩層 : 宝曆大正以降 - 明治 40 年の地盤上
Ⅲ層 帰化灰岩層 : 路盤地盤 [日立土]

Vn 層 進化初期 : まいり塩類系に伴う過成土
Vn1 淡色灰岩シート、灰白色シート・コブ (厚さ 15 ~ 20 m) が入る。ブロックの間に薄紫色の質シートが入る。土羽中に赤り付け顕著した面か】

Vn2 淡色灰岩シート、灰白色シートと薄紫色シート (厚さ 15 ~ 30 m) が混在する。

Vn3 淡色灰岩シート、灰白色シート・コブ (厚さ 2 ~ 3 m) が入る。

Vn4 黄褐色シート、薄褐色シート・コブ (厚さ 1 ~ 3 m) 小量

Vn5 黄褐色シート、薄褐色シート・コブ (厚約 1 cm) 少量

Vn6 黄褐色シート、灰白色シート・コブ (厚さ 2 ~ 3 cm) 少量

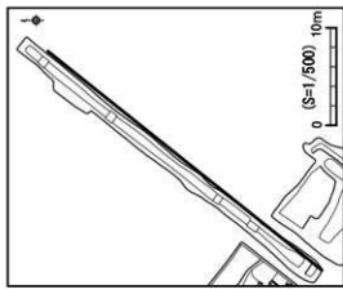
Vn7 本層の過成土層

Vn8 黄褐色シート、薄褐色シート・コブ (厚さ 5 cm) が入る。

Vn9 黄褐色シート、薄褐色シート・コブ (厚さ 5 cm) が入る。

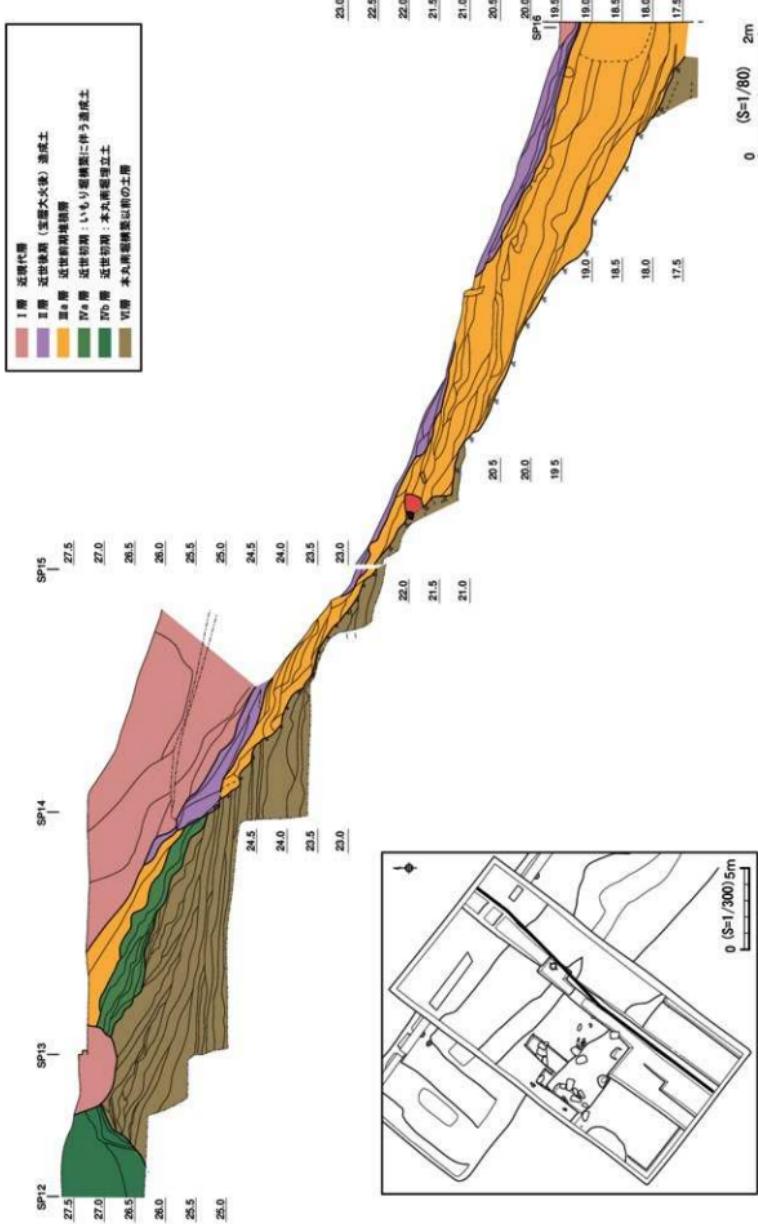
Vn10 黄褐色シート、薄褐色シート・コブ (厚さ 5 cm) が入る。

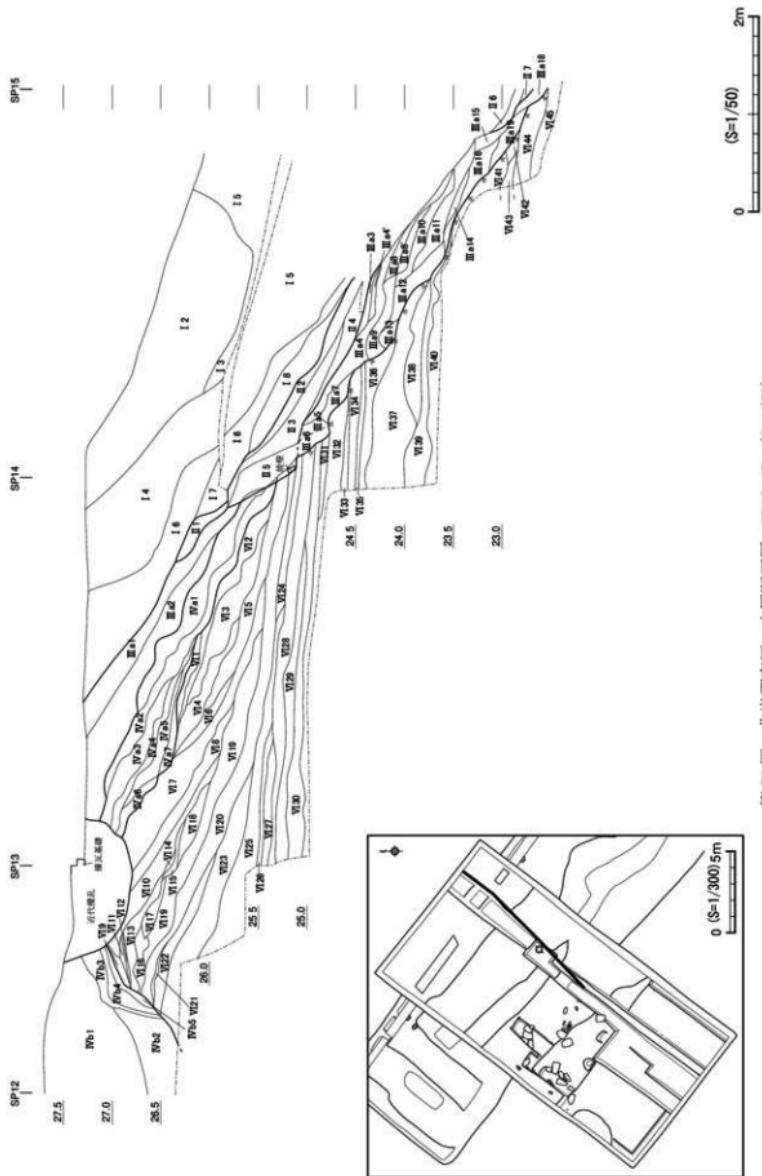
Vn11 黄褐色シート、赤色シート (厚さ 1 ~ 2 m) 少量



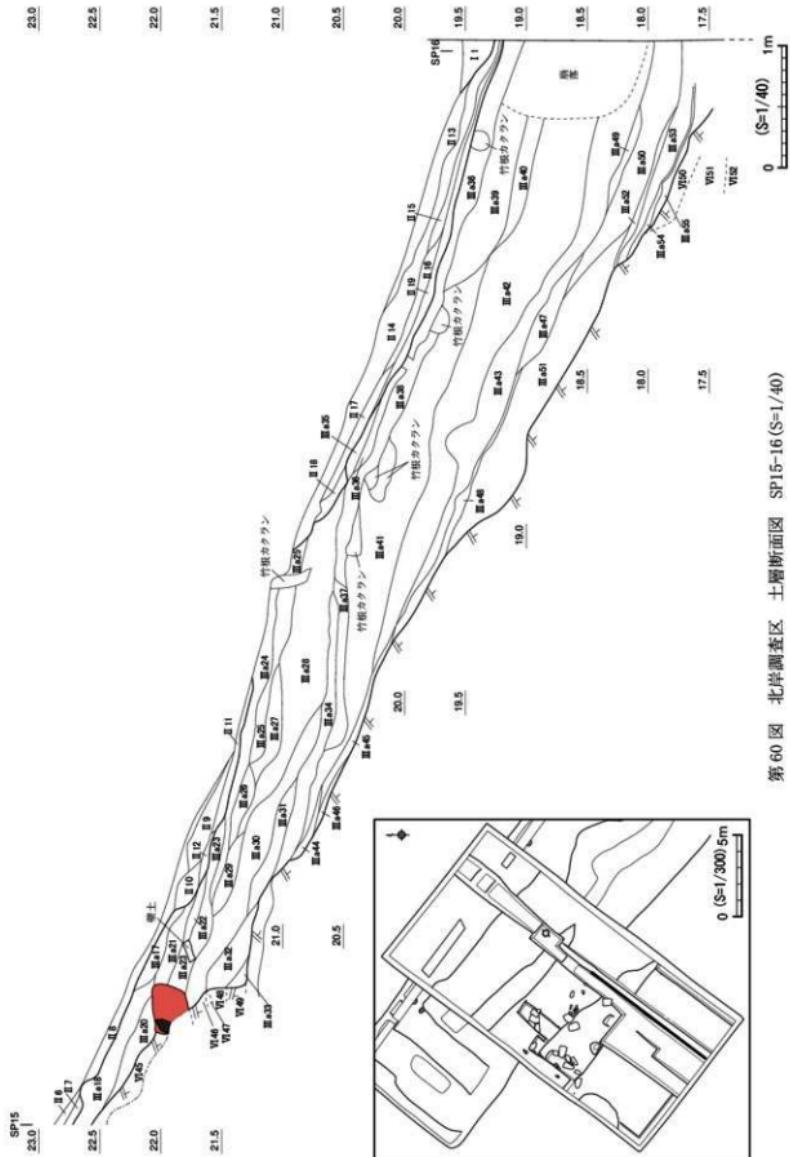
0 (S=1/80) 2m

第58図 北岸調査区 土層大別図 SP12-16 (S=1/80)



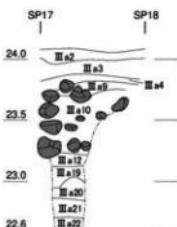


第 59 図 北岸調査区 土壌断面図 SP12-15 (S=1/50)

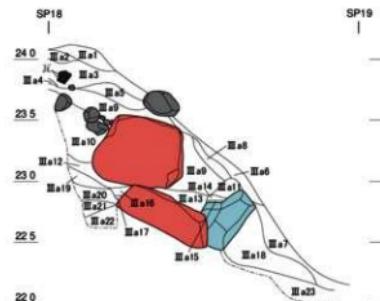


第60図 北岸調査区 土層断面図 SP15-16(S=1/40)

①SP17-18土層断面

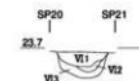


②SP18-19土層断面

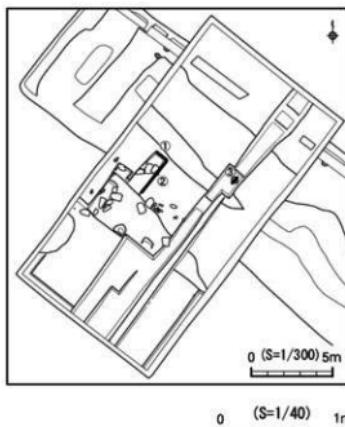


- IIIa層：近世前期：宝曆大火以前の堆積土
- IIIa1 液状褐色粘土
 - IIIa2 濁褐色粘土質土—SP14-15IIIa4層
 - IIIa3 濁茶褐色粘土質土—SP14-15IIIa5層
 - IIIa4 濁茶褐色粘土質土—褐色粘土ブロック混入
 - IIIa5 濁灰色粘土土—褐色粘土ブロック混入
 - IIIa6 濁褐色粘土土
 - IIIa7 灰色砂質土
 - IIIa8 濁茶褐色粘土質砂土
 - IIIa9 増灰色粘土質土
 - IIIa10 茶褐色砂質土 鉄分沈着 トレンチ1の西壁面では存在する層
 - IIIa11 茶褐色粗砂
 - IIIa12 濁茶褐色粘土土
 - IIIa13 濁茶褐色粘土土
 - IIIa14 濁褐色粘土土+淡褐色細砂
 - IIIa15 濁褐色粘土土
 - IIIa16 茶褐色粘土質土 非常にやわらかく
 - IIIa17 増茶褐色粘土
 - IIIa18 濁茶褐色粘土
 - IIIa19 濁茶褐色細砂 非常に硬くしまる
 - IIIa20 茶褐色粘土細砂 硬くしまる
 - IIIa21 茶褐色粗砂 硬くしまる 径3cm程度の小石含む
 - IIIa22 増茶褐色粗砂 并靱に硬くしまる 径2cm程度の小石含む
 - IIIa23 灰色粘土質土—SP15-16IIIa20層

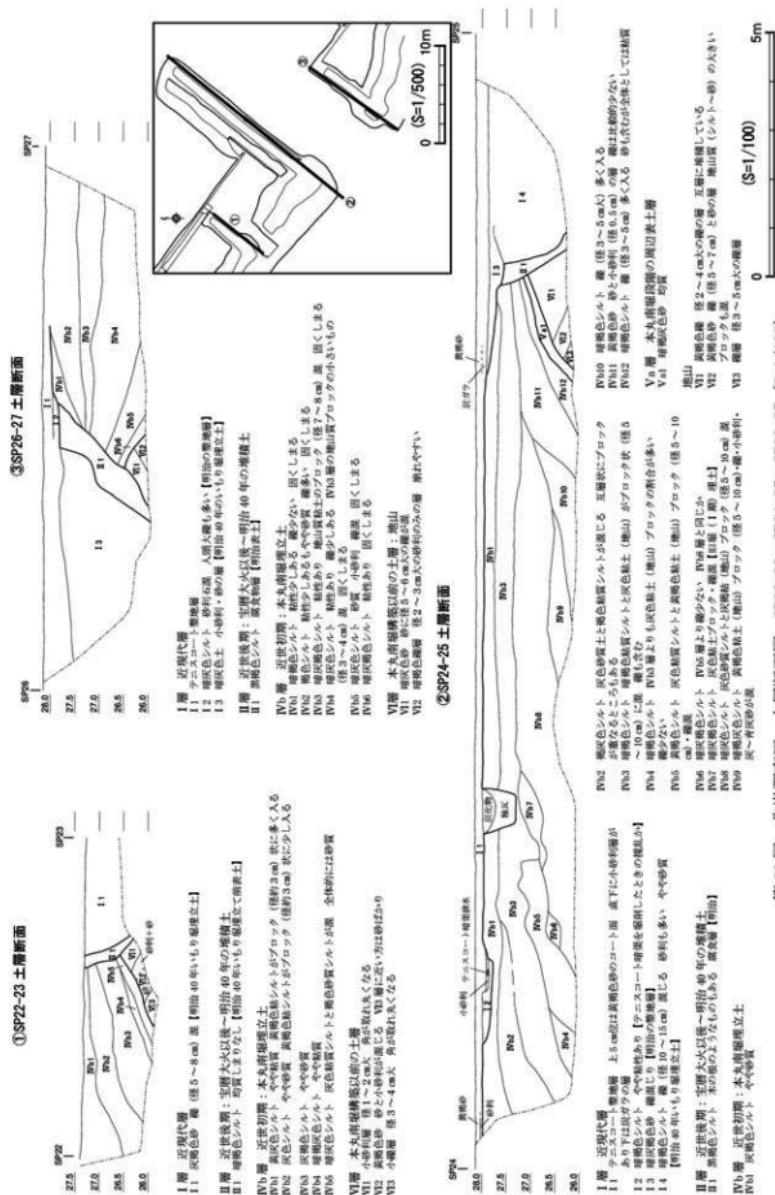
③SP20-21土層断面 (P01)



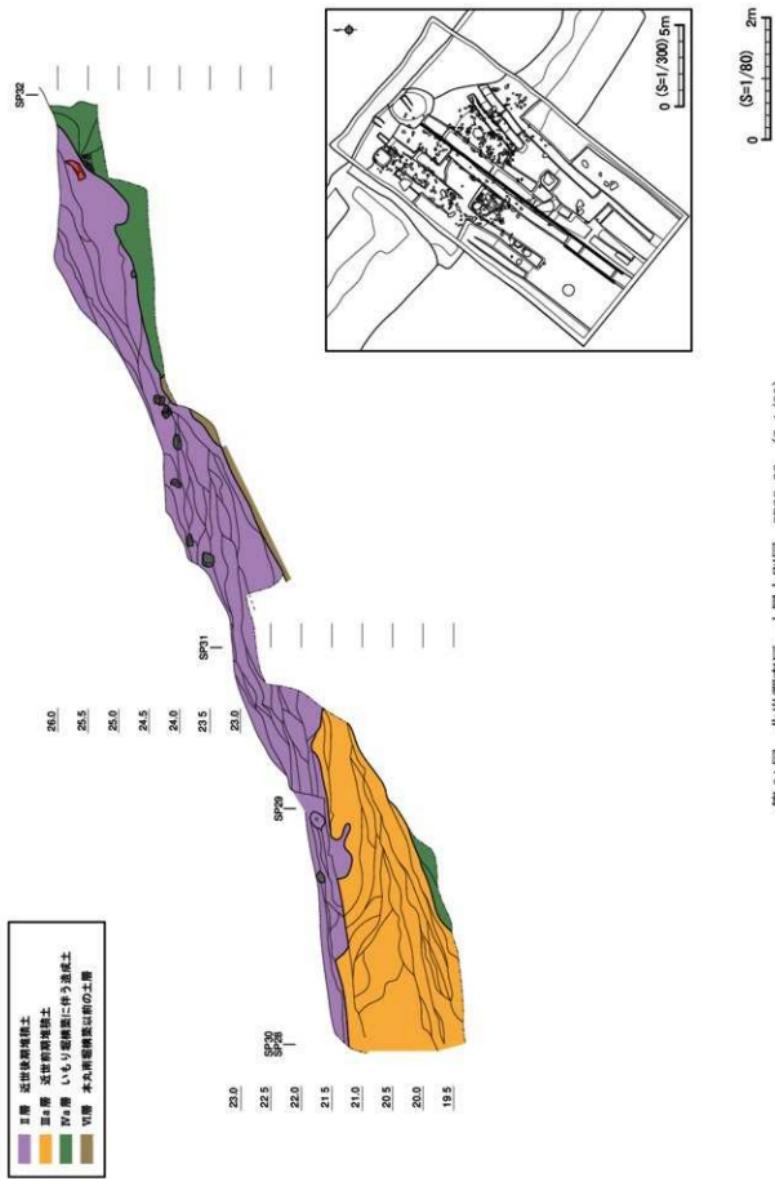
- V1層：本丸南堀構築以前の層
- V11 濁黒褐色粘土 茶褐色粘土混入
 - V12 濁茶褐色粘土 茶褐色粘土多く混入
 - V13 液状褐色粘土 黑褐色粘土混入



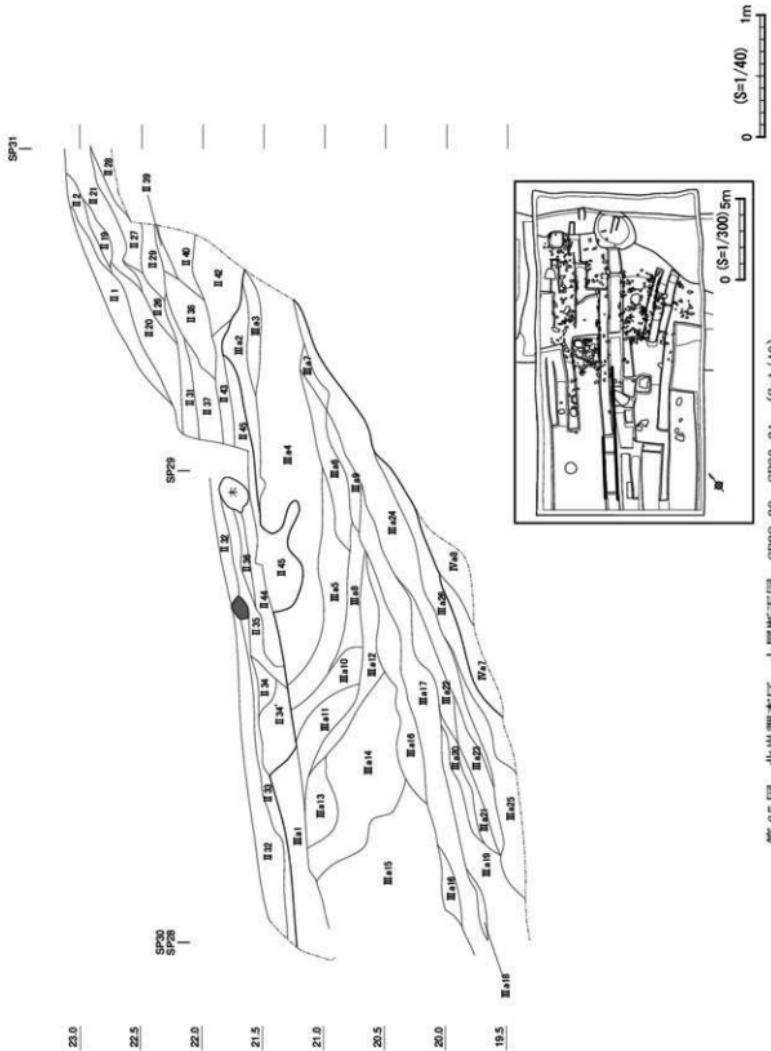
第62図 北岸調査区 土層断面図 SP17-18・SP18-19・SP20-21 (P01) (S=1/40)

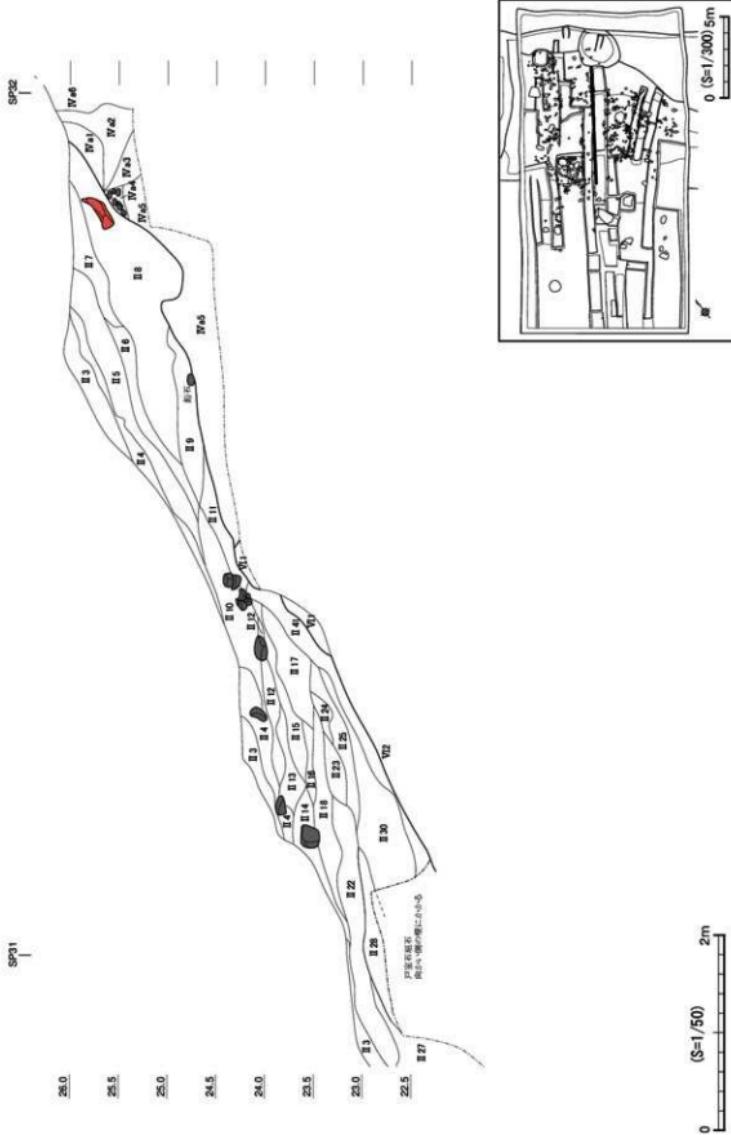


第63図 北岸調査区 土層断面図 SP22-23・SP24-25・SP26-27 (S=1/100)



第64図 北岸調査区 土層大別図 SP28-32 (S=1/80)





第66図 北岸調査区 土層断面図 SP31-32(S=1/50)

II層	近世後期：宝曆大火以後～明治初年の堆積土
B1	黒褐色土【昭治表土】
B2	暗褐色砂質土
B3	黒褐色土 砂・石・植物遺体多く含む 細かい燒土粒含む =SP42-43 II層下【日表土】
B4	黒褐色土 シルト質 施土粒・石・砂・瓦含む 鉛瓦瓦含む =SP42-43 II層下【日表土】
B5	暗褐色土+纖 烧土粒・石・砂・瓦含む 鉛瓦瓦含む =SP42-43 II層下【日表土】
B6	暗褐色粘質シルト 植物遺体 細かい焼土粒含む
B7	暗褐色砂質土 砂・小石・砂瓦含む SP48-49 II層
B8	暗褐色砂質土 砂 粗分沈着著しい
B9	暗褐色土+纖
B10	灰褐色土 砂多く含む 烧土粒含む
B11	暗褐色土 砂・焼土粒少し含む
B12	褐色質土 粒分沈着多い
B13	暗褐色土 砂・小繊合み 烧土粒少し含む、鉛分沈着あり
B14	黒褐色シルト 烧土粒・焼土粒多く含む
B15	黒褐色粘質土 砂・小石多く含む 戸室石片あり
B16	暗褐色土 砂含む
B17	褐色質土 小繊非常に多く含み、砂多く、鉛分沈着あり
B18	暗褐色砂質土
B19	灰褐色砂質土
B20	灰褐色細砂
B21	灰褐色砂
B22	II层 I同上層 淡灰色砂 砂鉢と細砂4~5cm厚の互層状
B23	淡灰色砂+纖
B24	淡灰色砂 砂含む
B25	暗褐色土 小繊多く含む
B26	灰褐色砂
B27	灰褐色粘質土 砂・小繊多く含む
B28	灰褐色砂+纖
B29	灰褐色 粗砂・小繊多く含む
B30	淡灰色細砂
B31	青灰褐色土 酸化して黄化
B32	灰褐色粘質土
B33	黄褐色粘質土 酸化して黄化・淡青色
B34	暗褐色粘質土 球状團塊土+ブロック含む
B34'	淡青褐色砂質土=SP28-30 II層
B35	淡青褐色砂質土 砂・繊維多く含む
B36	淡青褐色粘質土
B37	灰褐色砂 繊維多く含む
B38	灰褐色質土 黒褐色土・層状に入る
B39	灰褐色土
B40	灰褐色砂質土 小繊・小砂利・粘土ブロック含む
B41	暗褐色粘質土 砂・小繊多く含む
B42	暗褐色粘質土 相思木 繊合む
B43	灰褐色粘質土 開闢土
B44	暗褐色粘質土 開闢土
B45	暗褐色粘質土

IIIa層	近世前期：宝曆大火以前堆積土
IIIa-1	淡灰色粘質土=SP38-39 II層か
IIIa-2	淡褐色粘質土
IIIa-3	淡褐色細砂土
IIIa-4	青灰褐色砂 砂化著しい
IIIa-5	淡黃褐色粗砂 小繊多く含む
IIIa-6	淡黃褐色粗砂 粘土少し含む
IIIa-7	暗褐色粘質土
IIIa-8	淡褐色粘質土 小繊少し含む
IIIa-9	暗褐色粘質土 繊維少し含む
IIIa-10	暗褐色粘質土
IIIa-11	灰褐色砂質土
IIIa-12	黄褐色粗砂
IIIa-13	灰褐色粘質土 砂織土含む
IIIa-14	灰褐色粘質土 砂多く含む
IIIa-15	暗褐色粘質土
IIIa-16	暗褐色粘質土
IIIa-17	暗褐色粘土
IIIa-18	黒褐色粘土 焼土粒ブロック含む
IIIa-19	黑灰色粘土 砂・小石・腐植物・竹含む
IIIa-20	灰褐色粘質土 砂多く含む
IIIa-21	淡灰褐色粘質土
IIIa-22	黒灰色土 粗砂・腐植物・小繊多く含む
IIIa-23	黒灰色粘質土
IIIa-24	暗褐色粘土
IIIa-25	黑灰色粘質土
IIIa-26	黑灰色粘土
IIIa-上位層	(IIIa-15)は土羽の崩落に伴い、短時間で堆積か

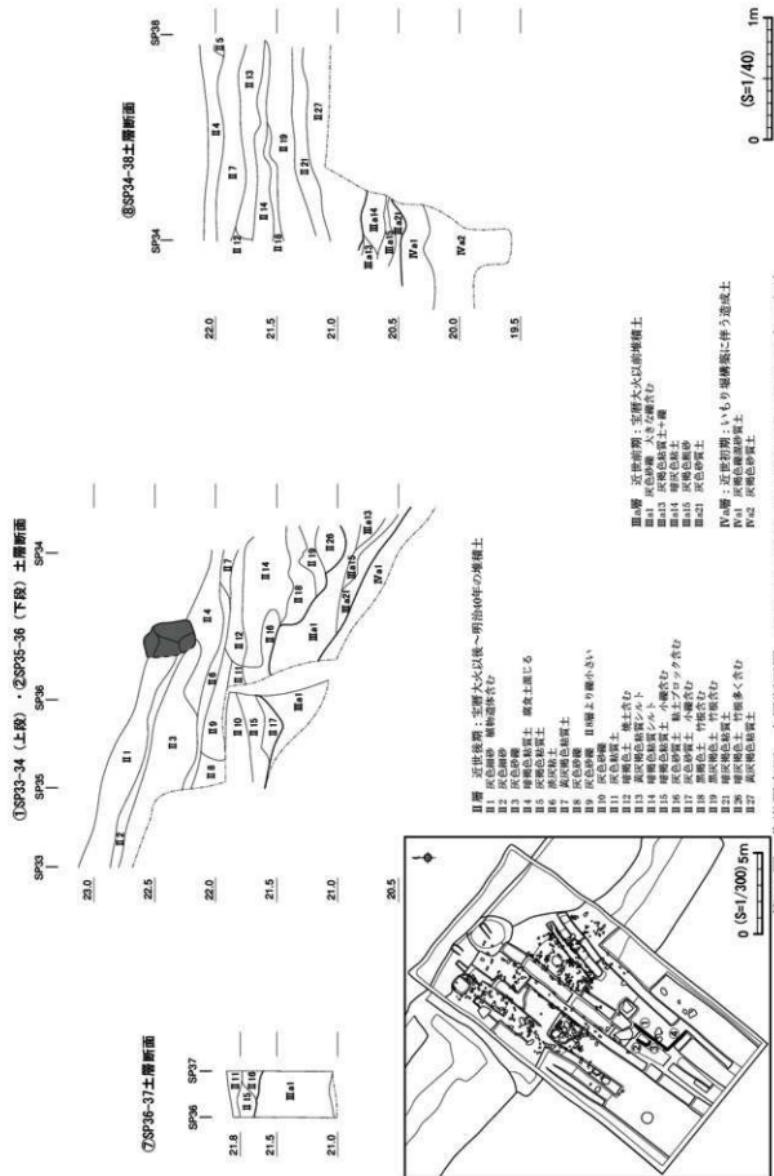
IVa層	近世初期：いもり塙構築時に伴う造成土
IVa-1	淡灰褐色土 砂多く含み、小繊少し入る
IVa-2	淡褐色シルト IVa層より粒子細かく、小石入る 鉛分沈着少しあり
IVa-3	淡褐色土 著生植物含む
IVa-4	黄灰褐色砂+纖 繩はこぶし大でそろう
IVa-5	黄褐色シルト
IVa-6	淡青褐色土 小石含む
IVa-7	淡灰砂質土
IVa-8	淡灰砂質土 小繊多く含む

VI層	本丸南塙構築以前の層
VI-1	黒灰色シルト【古代の含層】
VI-2	灰色粘土【山地 いもり塙築造当初表面か】

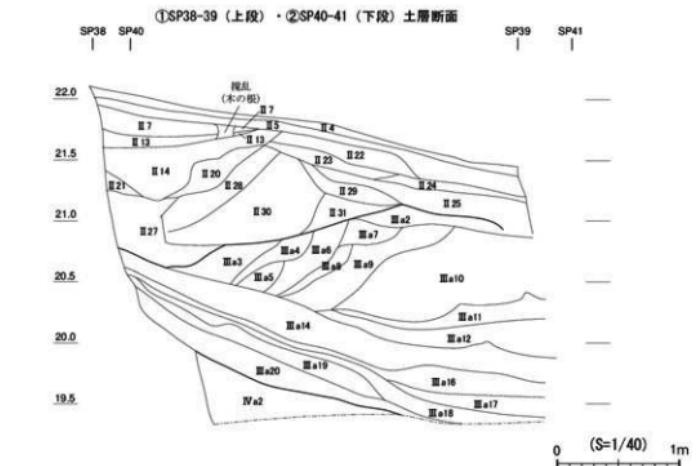
第 67 図 北岸調査区 土層注記 SP28-32

および部分的に近世前期～宝曆大火直前までの面を確認した。

- いもり塙の土羽斜面および塙底に、宝曆大火（宝曆9年（1759）以前の法面崩落に伴う土砂が堆積している状況を確認しており（III a層）、いもり塙では構築当初の姿に戻すような大規模な塙ざらえが行われなかつたと考えられる。
- 検出した構築当初の土羽の幅および高さは、2004-2地点で幅15~16m、高さ約10.5m、2003-2地点で幅15~16m、高さ約9.8m、2004-1地点で幅14~15m、高さ約9.5~10.0m（推定）であった。
- 塙底は西に向かつて低くなつており、塙の深さ（約10m）を維持しながら地形の傾斜に合わせて掘削されたと考えられる。
- いもり塙の宝曆大火以前の堆積層（III a層）から、越前赤瓦がまとまって出土しており、塙周辺の建物に使用されていたと考えられる。越前赤瓦は城内の出土事例から、17世紀中葉から後半に使用されたと考えられている〔金沢城調査研究所2008d〕。また、その上層（II層）から宝曆大火で被災したとみられる鉛瓦が出土しており、宝曆大火時には、既に鉛瓦に葺き替えられていたと考えられるが、越前赤瓦はII層からも出土しており、本調査区付近の屋根瓦の変遷については、詳細の解明になお課題が残る。



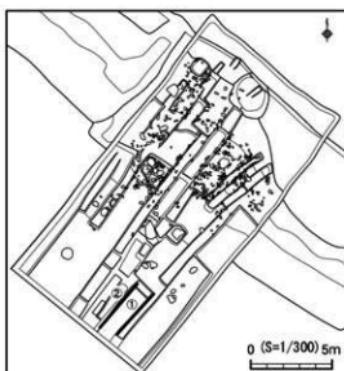
第68図 北岸調査区 土層断面図 SP33-34・SP35-36・SP36-37・SP34-38(S=1/40)



II層 近世後期：宝町大火以後～明治40年堆積土
 Ⅲ-1 塗覆色粘質土・腐植土じる
 Ⅲ-2 黄褐色粘質土・腐植土じる
 Ⅲ-3 黄褐色粗砂
 Ⅲ-4 黄褐色粗砂 黒磚ブロック含む
 Ⅲ-5 黄褐色粘質土
 Ⅲ-6 黄褐色粗砂
 Ⅲ-7 黄褐色粗砂 黒磚多々含む
 Ⅲ-8 黄褐色粘質シルト
 Ⅲ-9 黄褐色シルト 黄灰色シルトブロック含む
 Ⅲ-10 黄褐色粘質土
 Ⅲ-11 黄褐色粗砂 黃褐色
 Ⅲ-12 黄褐色粗砂 黃褐色
 Ⅲ-13 黄褐色粘質土 小礫・砂含む
 Ⅲ-14 黄褐色粘質土 黄灰色細砂を層状に含み、腐植土ブロック含む
 Ⅲ-15 黄褐色粘質土 上部で少しある
 Ⅲ-16 黄褐色シルト 砂・小礫少し含む
 Ⅲ-17 黄褐色シルト 砂・小礫少し含む
 Ⅲ-18 黄褐色粘質土 砂含む
 Ⅲ-19 黄褐色粘質土 砂含む
 Ⅲ-20 黄褐色粘質土 砂含む
 Ⅲ-21 淡灰色砂礫土=SP28-29西壁 Ⅲ-4層

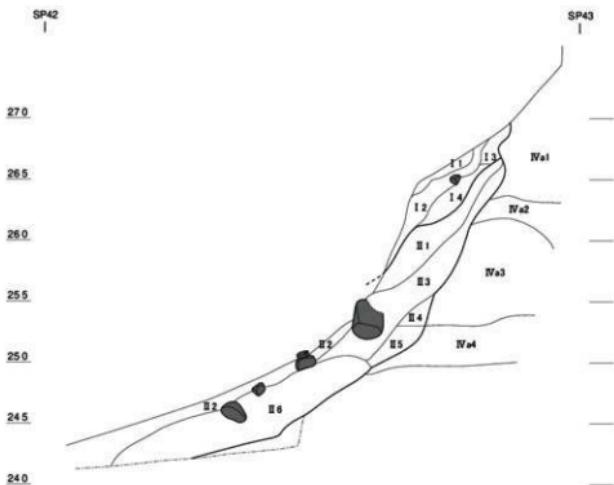
III-a層 近世前期：宝町大火以前堆積土
 Ⅲ-a1 淡灰色粘質土
 Ⅲ-a2 黄褐色粘質土=SP30-31Ⅲ-a1層か
 Ⅲ-a3 黄褐色粗砂
 Ⅲ-a4 黄褐色粗砂 黑磚ブロック含む
 Ⅲ-a5 黄褐色粘質土
 Ⅲ-a6 黄褐色粘質土
 Ⅲ-a7 淡黄色粘質土 砂多く含む
 Ⅲ-a8 淡黄色粘質土
 Ⅲ-a9 黄褐色粘質土 砂・礫含む
 Ⅲ-a10 黄褐色粘質土 Ⅲ-a9より礫少い
 Ⅲ-a11 黄褐色粘質土 砂含む
 Ⅲ-a12 淡灰色粘質土 砂多く含み、植物の根含む
 Ⅲ-a13 黄褐色粘土
 Ⅲ-a14 黄褐色粘土
 Ⅲ-a15 淡灰色粗砂質土 遺物多く含む
 Ⅲ-a16 淡灰色粗砂質土 遺物多く含む
 Ⅲ-a17 淡灰色粘土 遺物多く含む
 Ⅲ-a18 黄褐色粘土 遺物多く含む
 Ⅲ-a19 淡灰色砂質土 遺物多く含む
 Ⅲ-a20 淡灰色砂質土 遺物多く含む
 Ⅲ-a21 黄褐色砂質土

IV-a層 近世初期：いもり塙構築時に伴う造成土
 IV-a2 黄褐色砂質土



第69図 北岸調査区 土層断面図 SP38-39・SP40-41(S=1/40)

①SP42-43土層断面



I層 近現代層

- I1 黄褐色砂質土+雜【明治40年いもり埋理立土】
- I2 成黄灰紺砂【明治40年いもり埋理立土】
- I3 黄褐色砂【明治40年いもり埋理立土】
- I4 成灰色砂【明治40年いもり埋理立土】

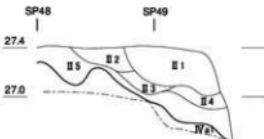
II層 近世後期：宝町大火以後～明治40年の堆積土

- II1 黄褐色砂質土、植物遺体含む【Ⅲ表土】
- II2 黄褐色砂、植物遺体含む=SP39-31 II 3層か【Ⅲ表土】
- II3 硫灰褐色砂質土、植物遺体含む=SP31-32 II 5層【Ⅲ表土】
- II4 硫灰褐色土+礫（径20cm以下）
- II5 硫灰粗砂
- II6 灰褐色砂質土+礫=SP31-32 II 7層

IVa層 近世初期：いもり埋構築に伴う造成土

- IVa1 深青灰褐色シルト、小石含み、鉛分沈着あり
- IVa2 橙色土、こぶし大の小礫含む
- IVa3 淡色シルト、こぶし大の小礫含む
- IVa4 淡褐色シルト+こぶし大の小礫層

②SP48-49土層断面 (SK01)

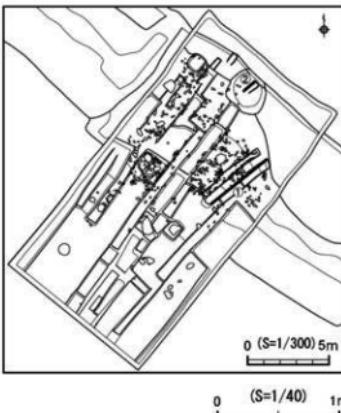


II層 近世後期：SK01埋土

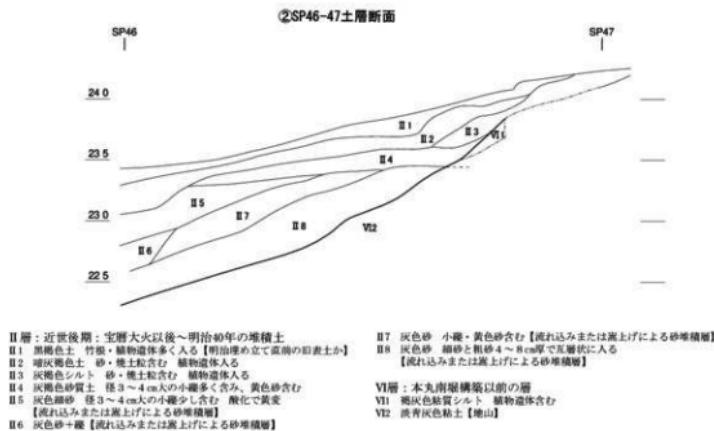
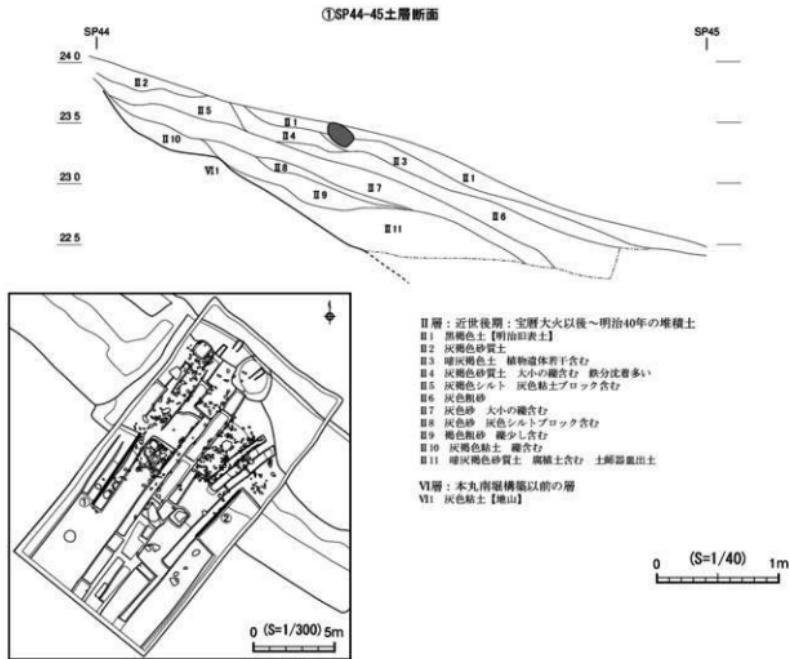
- II1 淡灰褐色シルト、細かい焼土粒若干含み、小石、小礫若干含む
- II2 淡褐色細砂 小礫多く含む
- II3 淡灰褐色シルト
- II4 淡灰褐色土 II層と同質だがやや粗い
- II5 灰褐色砂質土+礫=SP31-32 II 7層

IVa層 近世初期：いもり埋構築に伴う造成土

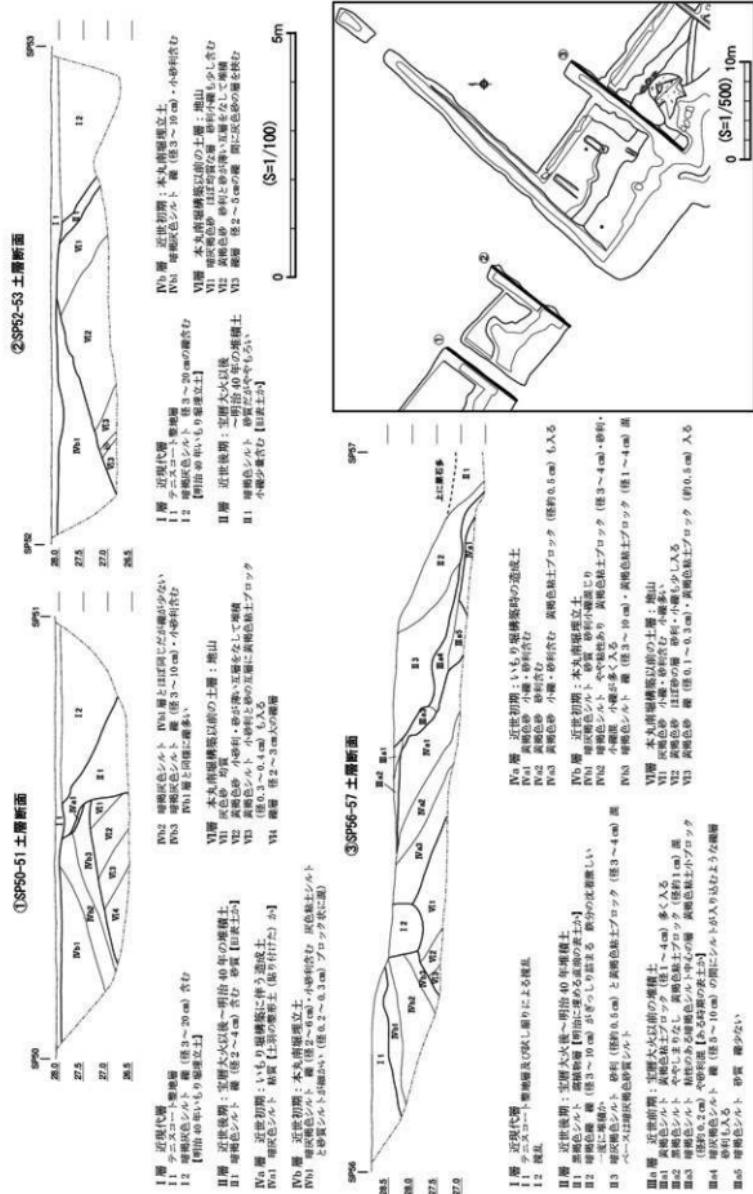
- IVa1 淡青灰褐色質土



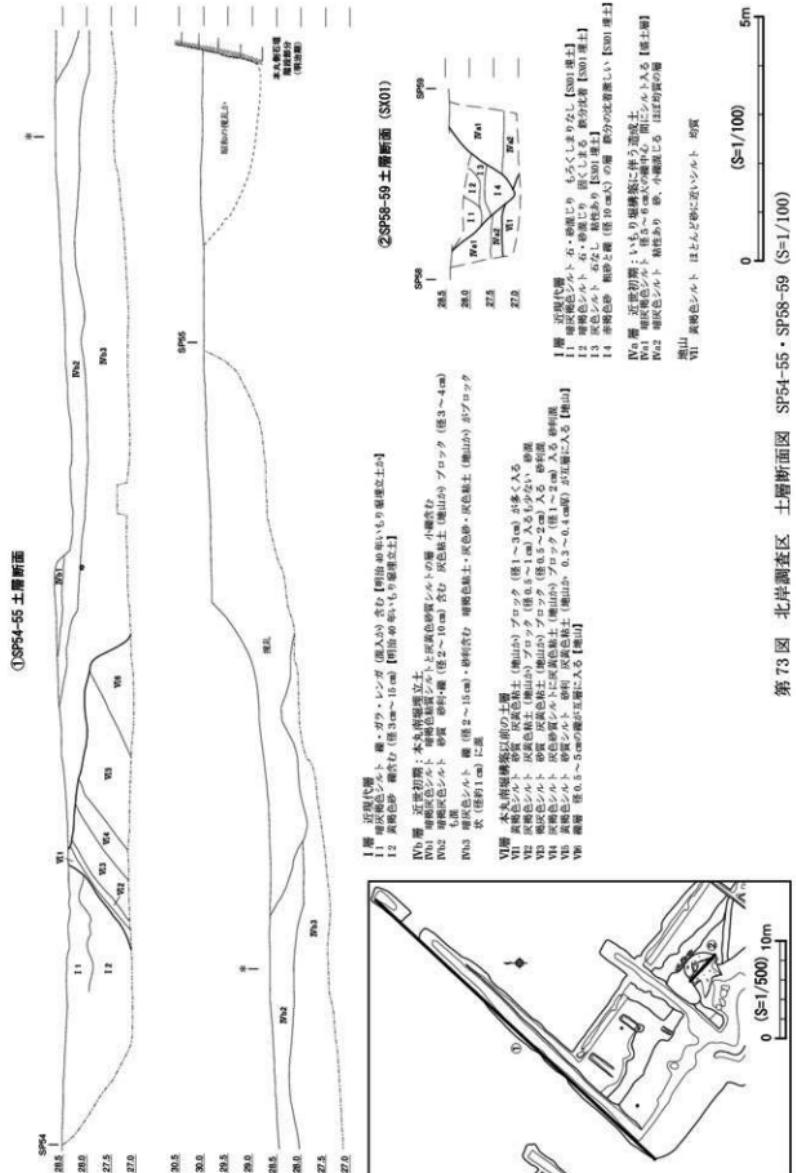
第70図 北岸調査区 土層断面図 SP42-43・SP48-49 (S=1/40)



第71図 北岸調査区 土層断面図 SP44-45・SP46-47(S=1/40)



第72図 北岸調査区 土層断面図 SP50-51・SP52-53・SP56-57 (S=1/100)



土橋調査区

(1) 概要 (第 11・12・74 ~ 78 図)

調査区は、北岸調査区と稲荷屋敷下調査区に挟まれた位置にある。江戸時代前期の『加賀国金沢之図』(寛文 8 年 (1668)) (金沢市立玉川図書館蔵) と調査地点を照合すると、稲荷屋敷南東の御花畠といもり堀の一角に相当する。いもり堀岸は、稲荷屋敷下が石垣で築かれている以外は、すべて土羽として描写されている。寛文期のいもり堀の様相は、大方幕末まで引き継がれるが、部分的に変化の様相を示しており、南北にクランクする御花畠南西部の土羽は、江戸時代後期の絵図では、土羽斜面から立上がる鉢巻状の石垣が描かれていた。

平成 10 年度 (1998-3 地点) と平成 12 年度 (2000-3 地点) の 2 次にわたって実施された調査では、いもり堀に先行する本丸南堀の存在を明確にし、また、本丸南堀に伴う石垣土橋を検出し、その構造と変遷を把握した。

その結果、土橋は構築から廃絶までの間に改修、拡幅されており、それと連動して本丸南堀も浅い空堀から深さを増したと考えられる。

(2) 遺構

①構築当初の土橋と本丸南堀 (第 76 ~ 80・81 ②・82 ~ 85・87 ~ 98 ①図)

調査により、いもり堀に先行する本丸南堀に伴う南北方向 (主軸方位はおよそ N-17° -W) に延びる土橋を検出した。構築当初の土橋は、東西両側面が石垣となっていた (東面: 1810E、西面: 1810W)。南端及び上部が失われていたが、検出長 (南北方向) 約 17.4 m、残存高約 1.9 m を測る。

周辺の土層観察によると概ね北高南低の斜面地となっており、旧地形は、北から南に向けて、低く傾斜しながら張り出す尾根状地形であったと考えられる。

土橋の構築基盤面を整地するため、地山レベルが低い地点を盛土造成していた。南端から中央東側の範囲は、標高約 25.3 m 前後で整地し、ほぼ水平に基盤面を仕上げた上に、石垣の根石を据えている。一方、中央西側から北端の範囲は、地山が高く、地山直上に根石が据えられている。地山レベルに高低差があり均一となっていなかったことから、基盤面のレベルを揃えてから土橋を造り始めたものではないと考えられる。土橋石垣根石下端の基底高は、中部以南は、ほぼ同一レベルで 25.1 ~ 25.2 m で、北部が高くなっていた。北端付近の東西面で比較すると、東面では、築石 1 石程 (約 30 cm) 高く、西面では、築石 2 段分程度 (約 80 cm) 高い。土橋の基底幅は、北端が 5.8 m、南端が 5.3 m で、北 → 南にその幅を狭めていた。

土橋石垣は乱積みで、石の控えは短めであった。築石の正面は、石材の平坦面を向けて積まれている。間詰石には河原石が用いられており、寸法は拳大のものが主体で、これに 20 ~ 30 cm 大のものが加わる。石垣の勾配は、西面が約 60°、東面が約 65° 前後を測り、東面の傾斜の方がやや大きくなっている。築石の大半が戸室石 (赤、青、中間色 (ニタリ) が見られ、赤戸室が多くを占める) で構成されるが、河原石も若干見られた。自然石主体である。これらの積みや石材等の特徴から、金沢城石垣編年 1 期 (文禄年間頃 (1592 ~ 1596)) に属すると考えられる。また、明確に矢穴が確認されたのは、1 石のみで、石垣下面での痕跡だったため、形状や寸法等の記録を取れなかった。墨書きと刻印がわずかに見られ、墨書きは 1810E の 3 石 4 箇所 (正面および側面)、刻印は 1810E・1810W の 8 石 8 箇所 (正面・上面・側面) で確認されている。墨書きは、丸や一本線などが記されていた。刻印は、鱗紋や十文字など一定の形を示すものもあるが、不定形のものもある。土橋石垣の構築工程は、根石を据え、裏込めとして築石約 1 ~ 2 石分程度 (約 50 cm) 盛土し、その最上面を粘質土で整地し作業面を形成して築石を積み、裏込めに河原石主体 (若干戸室石片を含む) の栗石を石垣際へ少量入れて土を盛り、作業面を形成して更に上段の石を積み上げていったと考えられる。なお、栗石 100 石を抽出して得られた寸法と重量の平均値は、長辺 17.5 cm、短辺 11.95 cm、重量 2.444 kg である。

本丸南堀の底において、自然堆積層である砂質土の堆積は非常に薄く、限定的な検出にとどまり、水成堆積特有の粘土層等は見られなかった。このことから、この段階における本丸南堀は空堀であったと考えられる。また、自然堆積層の薄さから、この状態が短期間であったと考えられる。上記の堀と土橋の状況について、「第1段階」とする。

②土橋と本丸南堀の改修（第76～84・86～91・93～98①図）

土橋東側では、第1段階の石垣の前面に盛土され土羽となる。盛土による拡幅は基底部で約1.7～2m。土羽は約45°の傾斜で形成され、傾斜に沿って第1段階の底から約2.3m掘削して新たな堀底が形成された。そのレベルは23.1mを測り、堀底から土羽斜面に沿って、水中堆積特有の粘土層と砂質土が、交互に堆積している。この堆積層の検出レベルは最高所で26.0～26.3mで、層厚は堀底を確認したE2区で最大約1.8mを測る。このことから、第1段階の空堀から深さを増す同時に、この一帯が湛水していたことが判明した。また、土羽面から1段ないし2段積みされ列状に配置された土俵積みが検出されている。これらの土俵は稲藁で編まれ中に土が詰められたもの（土俵）、寸法は長さ約60cm、幅約40cm、厚さ約25cmを測る。このうち10俵分がほぼ完全な状態で検出された。粘土層の上端レベルから復元される当時の水際附近に配置されており、浸食防止のための護岸目的で埋設されたものと考えられる。土俵積みの検出レベルは、土橋北部で約26.0～26.4m、南部で約25.4～25.8mを測る。土俵の残存状況は、全体的に比較的良好であるほか、両端に棧橋を当てるタイプであることが確認された。なお、土俵については、一部を剥ぎ取って取り上げて実測図を作成しており、詳細については次章で紹介する。

土橋西側では、第1段階の石垣面から約2.2～2.9m前面に、南北方向の石列が構築された。石列を構成する石は、土橋北部では良好に残されていたが、南部では失われていた。石列は、残存状況の制約から規模・構造について不明な点を残すが、石垣土橋拡幅に伴う構造物（護岸目的か）と考えられる。石列を構成する石材は、平坦に掘削した地山上に直接据えられていたが、部分的に石の下面や石材間に河原石が置かれた箇所も見られた。また、石材は小さく控えの短い戸室石と河原石で、自然石および面に自然面を残す割石からなり、平坦な面を正面に向けて据えられている。石列内部の構造は、栗石として多くの河原石が充填されており、多少の盛土も混入している。また、栗石100石を抽出して得られた寸法と重量の平均値は、長辺14.87cm、短辺0.79cm、重量1.591kgで、土橋石垣内部の栗石と比較すると小ぶりであった。石列の前には、約35～45°の傾斜で堀の斜面が形成されているが、調査による掘削深度の範囲内では、堀底および水成粘土堆積層は確認できなかった。以上に述べた土橋と堀の状況について、「第2段階」とする。

なお、平成8・9・17年度に実施されたボーリング調査において、本丸南堀の土橋以東の範囲内に調査地点を設定したところ、堀堆積層の連続性が乏しく、検出範囲が限定的であったことが確認されており、当該範囲における湛水が全体に及ばず部分的であった可能性がある。また、土橋西側においても水成堆積を確認できなかったことから、本丸南堀全体が湛水していたと断定するに至らなかつた。

③土橋・本丸南堀の廃絶（第76～78・81～84・86～91・93～98①図）

土橋は、その上部が取り壊されるとともに、南端部において南北幅約7m、深さ約3mにわたって掘り込まれ、破壊されていた。掘込内の埋土は、本丸南堀の埋立土と連続していることから、本丸南堀廃絶時における一連の造作と考えられる。おそらく、堀の埋立て時に土橋の南端部を取り壊し、水抜きを行ったものと考えられる。また、この掘り込みの南岸でも、中に土が充填された約5～6段の土俵積みが検出されている。土橋の廃絶と本丸南堀の埋立ては、いもり堀の掘削と連動する一連の普請であったと考えられる。この段階を「第3段階」とする。

なお、本丸南堀の廃絶およびいもり堀の開設は、堀埋立土（IVb層）からの出土遺物および後述す



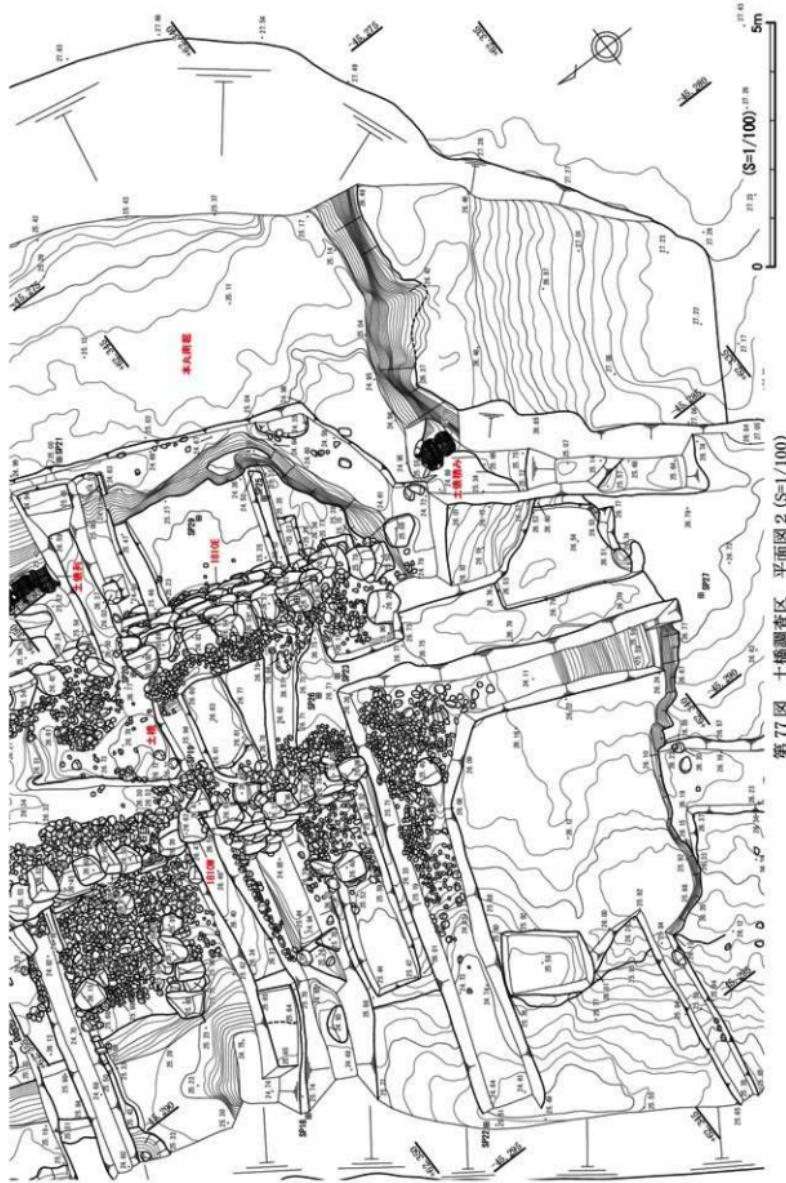
第74図 土橋調査区 全体図 (S=1/200)



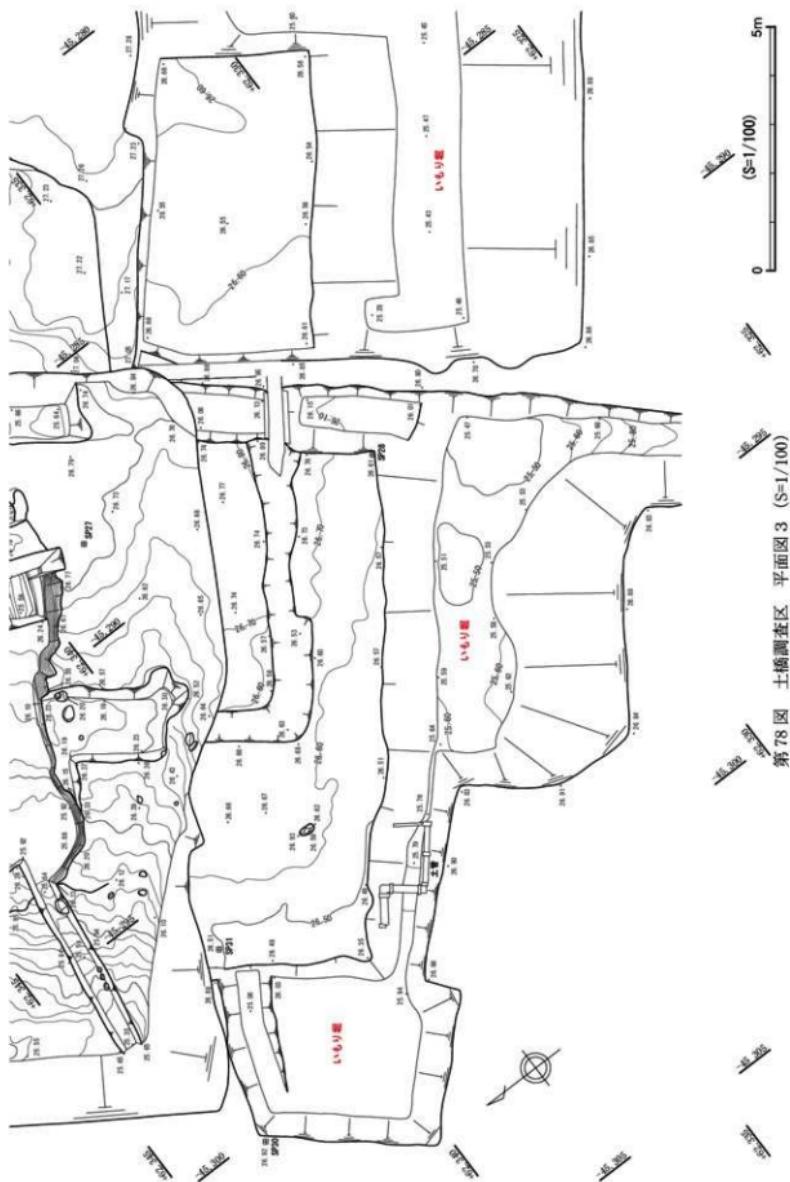
第75図 土橋調査区 区割図 (S=1/200)

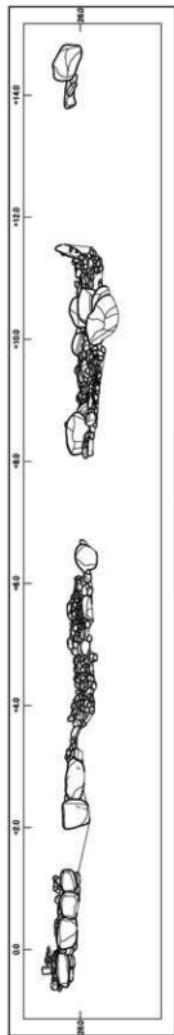
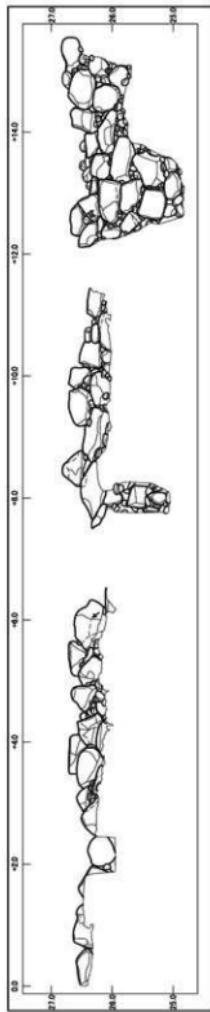
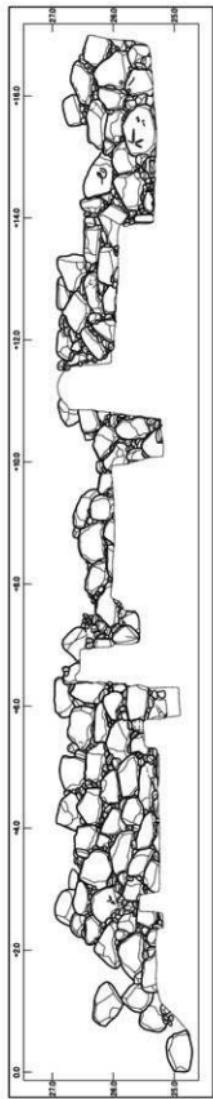
第76図 土壌調査区 平面図1 ($S=1/100$)





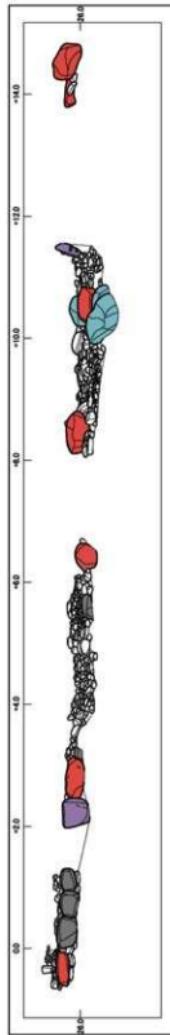
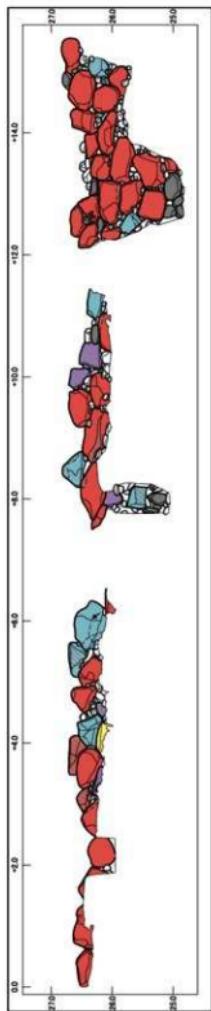
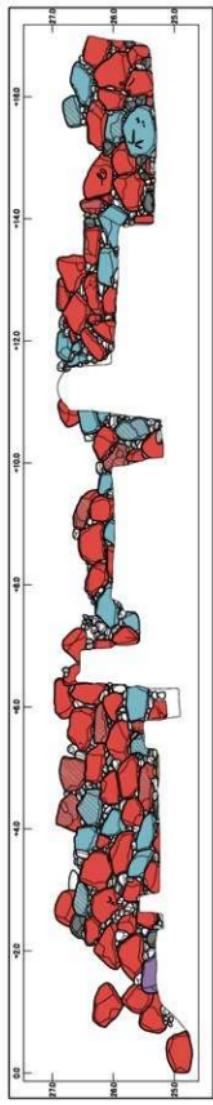
第77図 土橋調査区 平面図2 (S=1/100)





(S=1/80) 4m

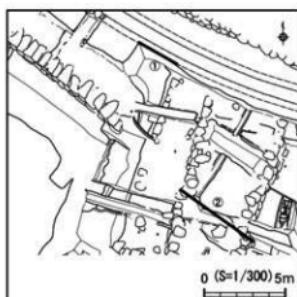
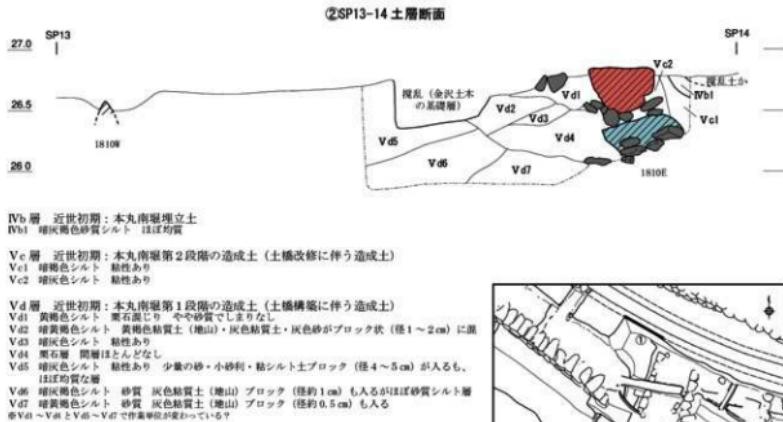
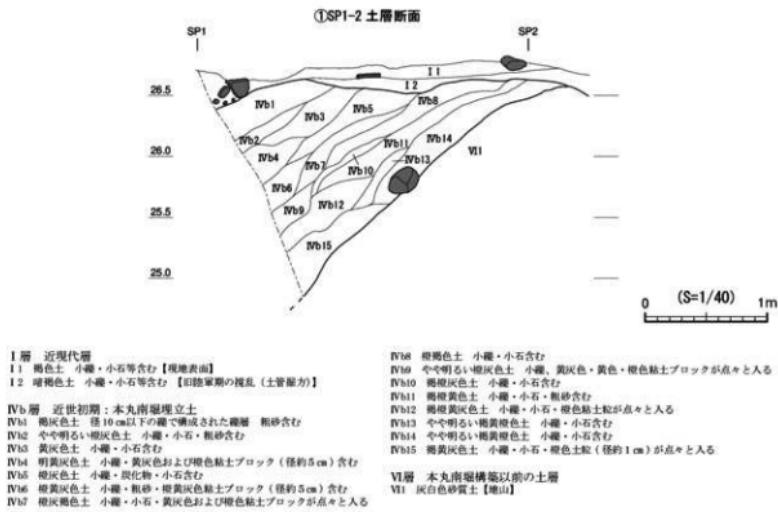
第79圖 石垣 1810E・1810W、石列 立面圖 (S=1/80)



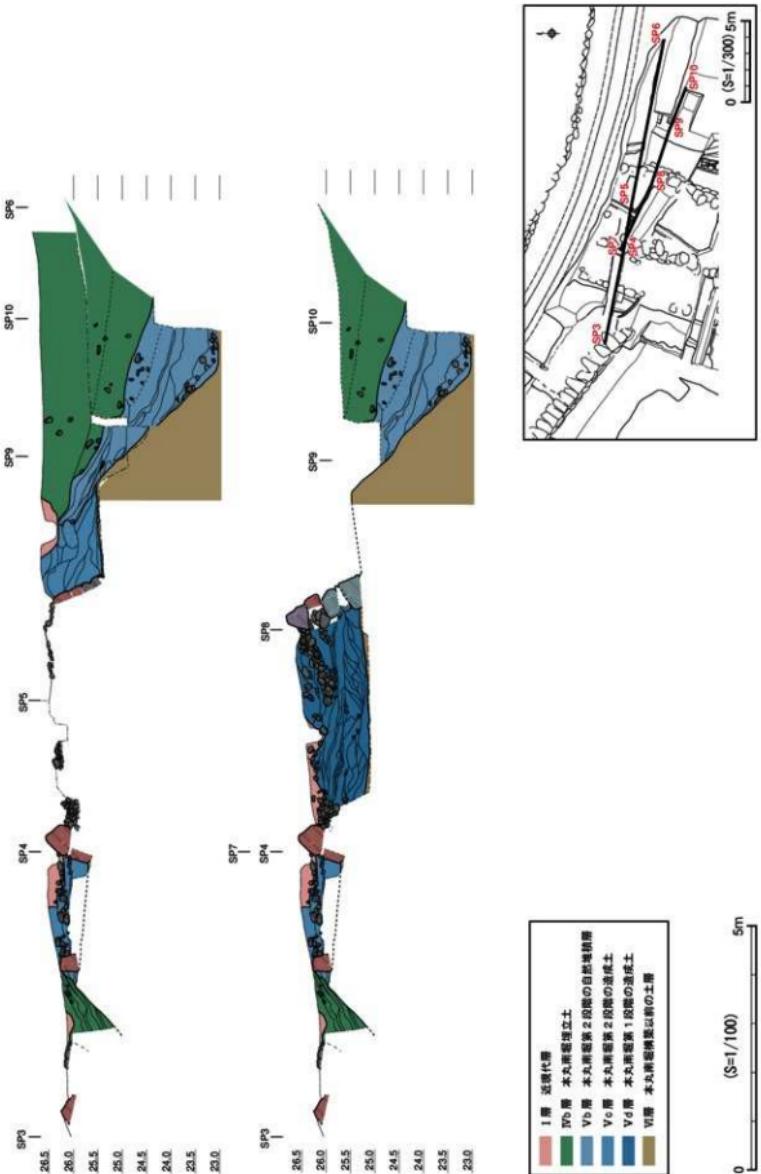
第80図 石垣 1810E・1810W、石列 石材観察図 (S=1/80)

戸塚石 (赤)	□ 自然面
戸塚石 (青)	▨ 開面
戸塚石 (中間色)	▨ 加工面
河原石	■ 横列木

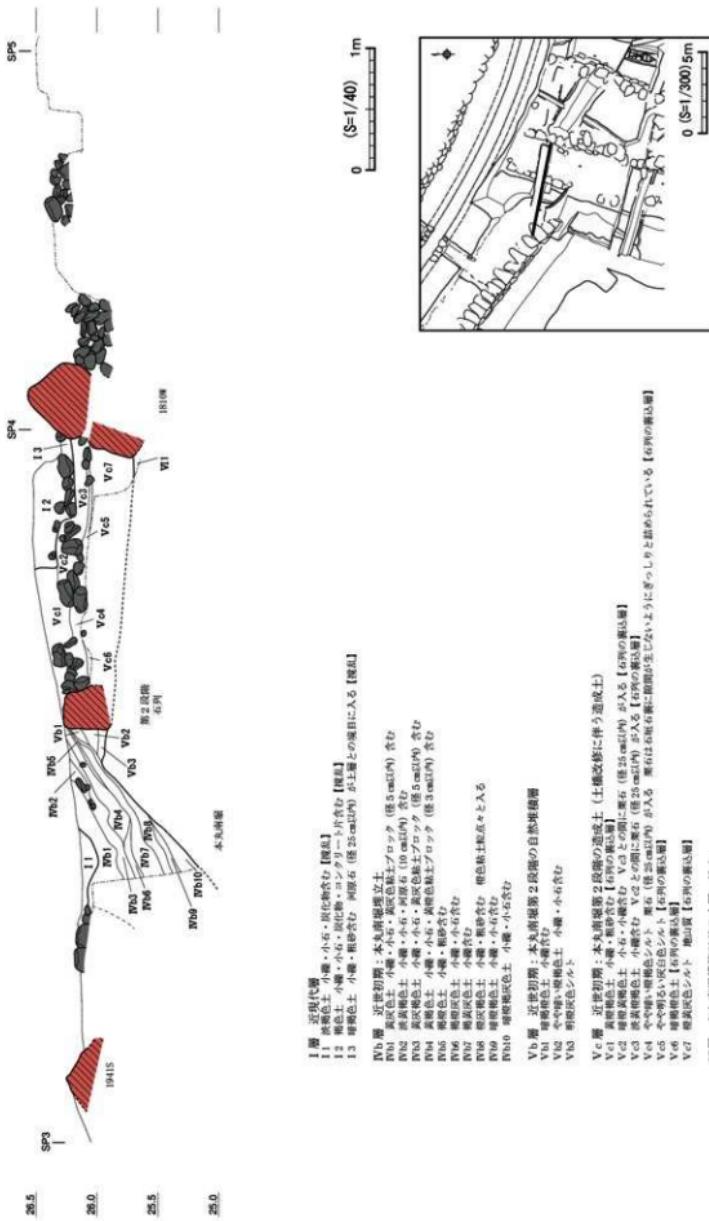
(S=1/80) 4m



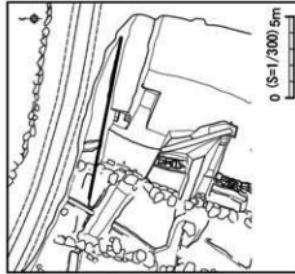
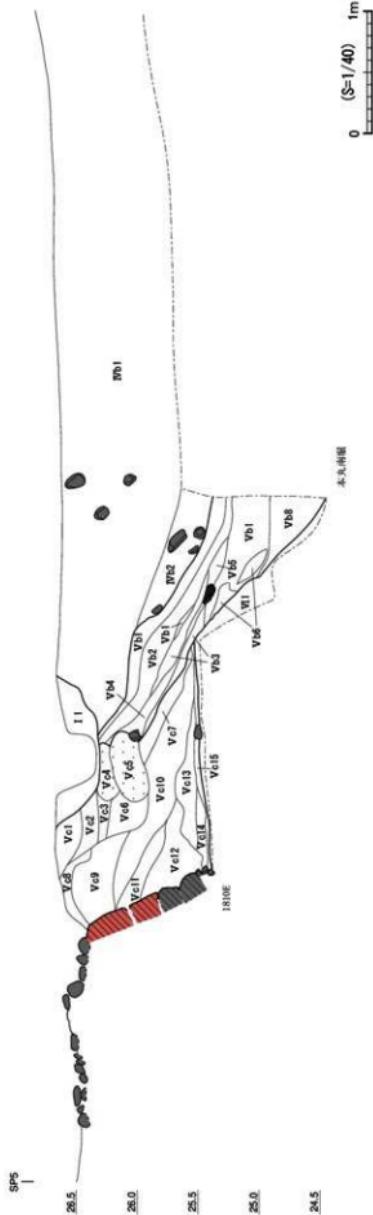
第 81 図 土橋調査区 土層断面図 SP1-2・SP13-14 (S=1/40)



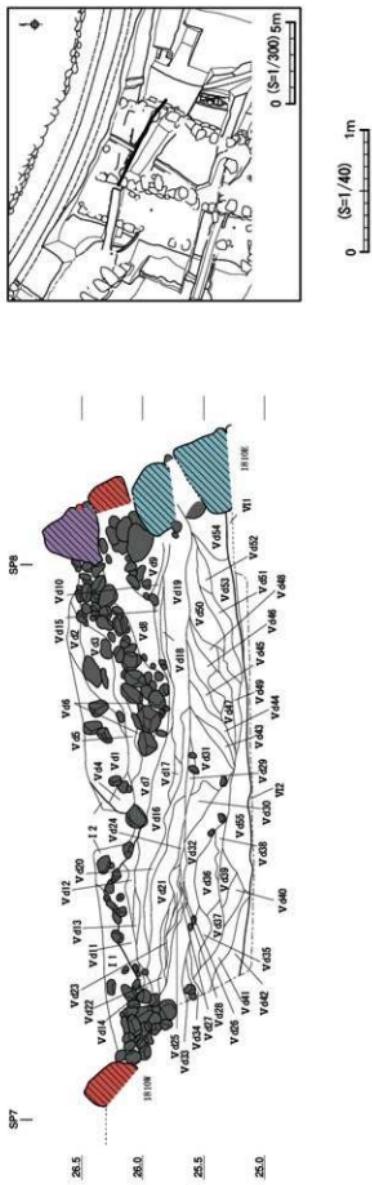
第82図 土壌調査区 土層大別図 1 (S=1/100)



第83図 土橋調査区 土層断面図 SP3-5 (S=1/40)



第84図 土橋調査区 土層断面図 SP5-6(S=1/40)



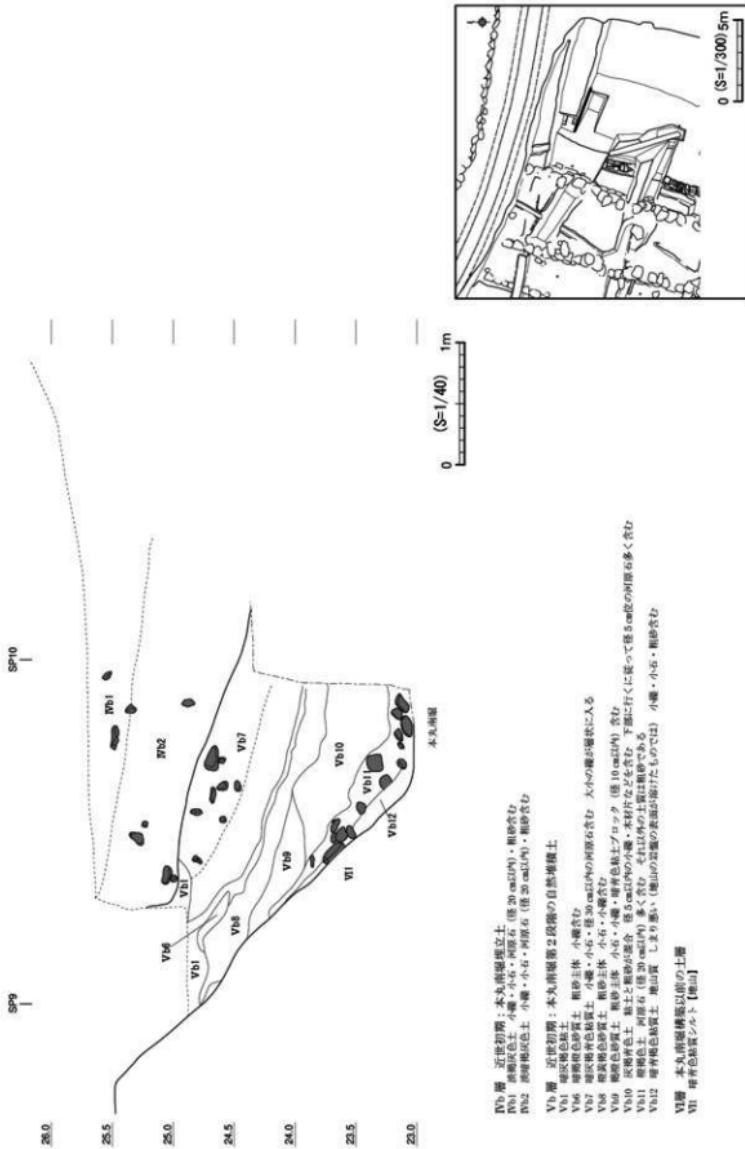
近現代層 1 暗褐色土 保水性など多くに入る 小礫含む【褐色】
2 暗褐色土 土管の下、両端に敷いた河原石、礫などが
入る【土管保水層】

中V61 ~ 11・16・17・20 ~ 28：先にV60を継続するために寅に入り、宝石が昇るまで、宝石が昇りてから、宝石よりも遅くが升るまでと見られる。西側の風の土をAながら、灰にBが付く。

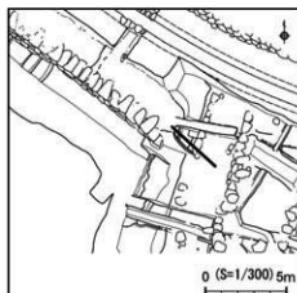
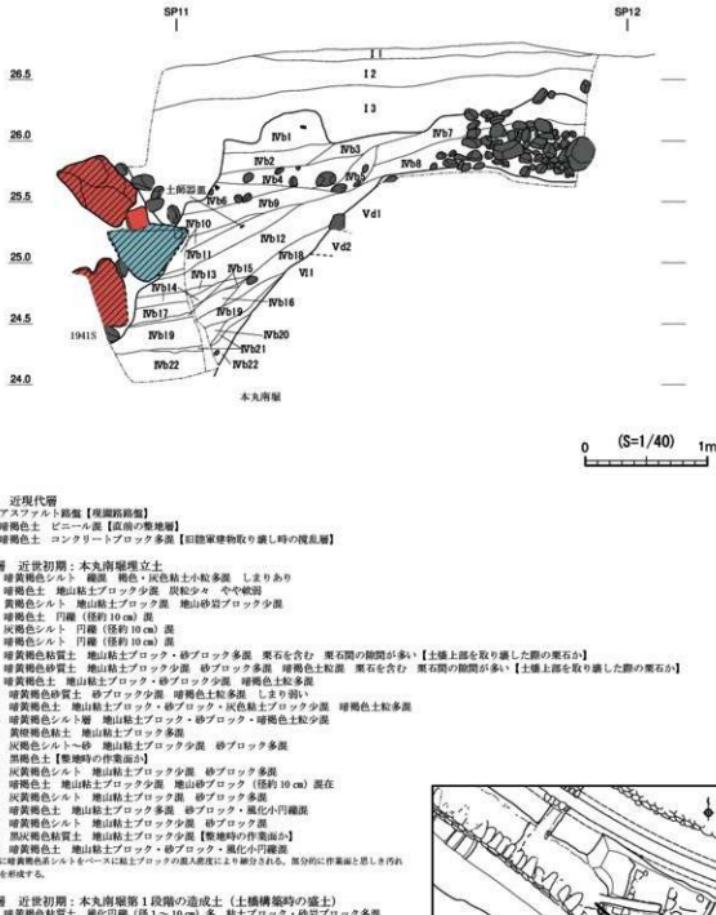
V430	灰褐色土	小礫・小石含む
V431	灰褐色土 （以降）	小礫・灰黄色粘土ブロック
V432	暗褐色土	小礫・小石含む
V433	暗褐色土	小石含む

Vd35	暗灰褐色土 小砾、粗砂含石	Vd37	暗灰褐色砂质土、粗砂主体 含砾
Vd36	褐灰色土 小砾、小石、粗砂、褐色粘土块	Vd38	暗灰褐色砂质土 + 粗砂含砾

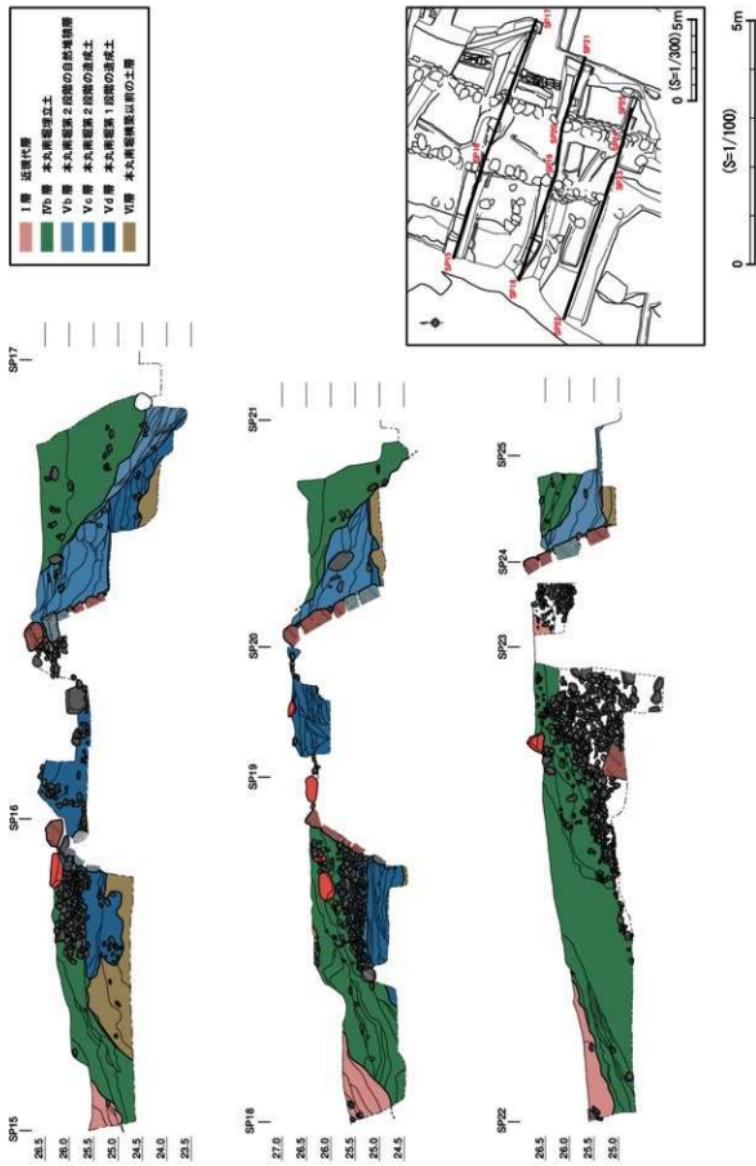
卷之三



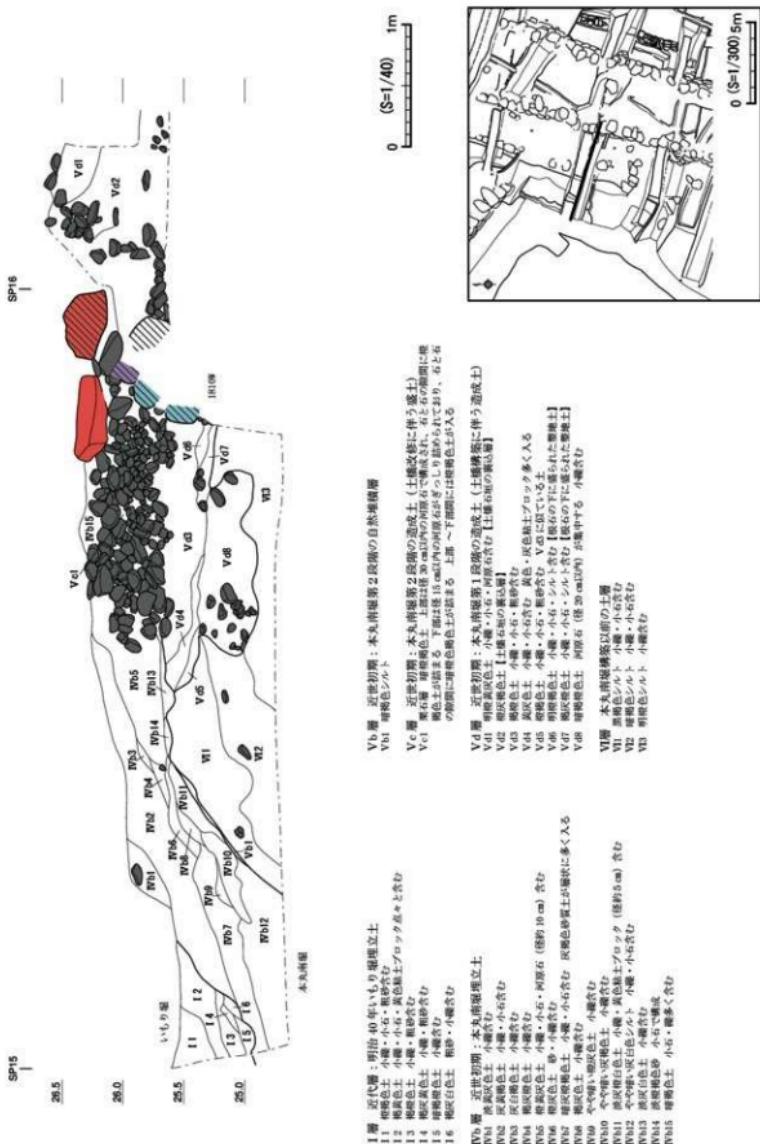
第 86 図 土壠調査区 土壠断面図 SP9-10 (S=1/40)



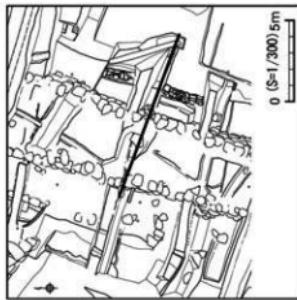
第 87 図 土橋調査区 土層断面図 SP11-12 (S=1/40)



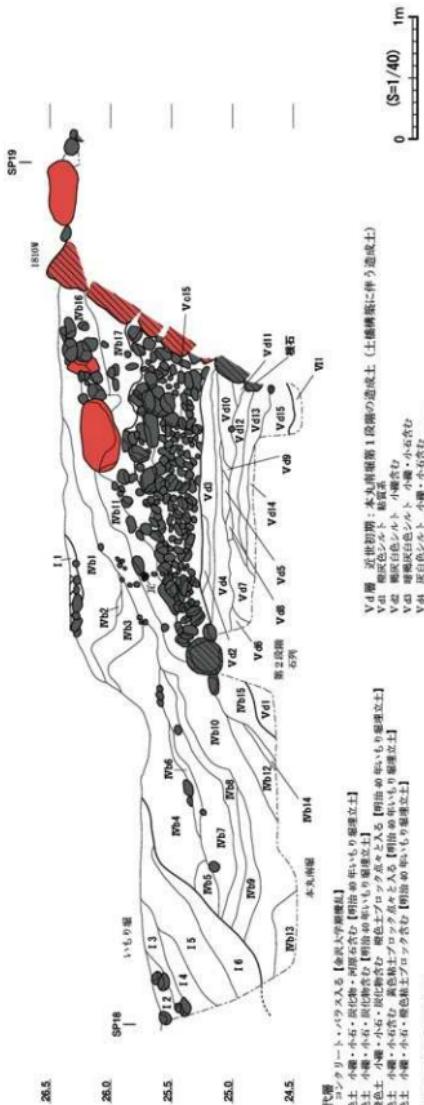
第88図 土橋調査区 土層大別図2 ($S=1/100$)



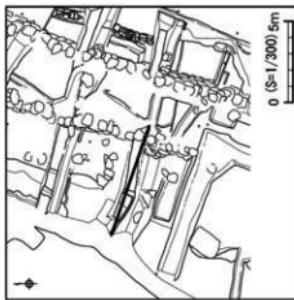
第89図 土橋調査区 土層断面図 SP15-16 (S=1/40)



第 90 図 土橋調査区 土層断面図 SP16-17 (S=1/50)



IVb



VII層 本丸南堀構築以前の
VII 緑青色粘土【地山】

【土壌等を貢献の意図であり、本件両種を埋める前に現状にあつたものが】

卷之三

王國學者之精神

第三章 民主政治の構築

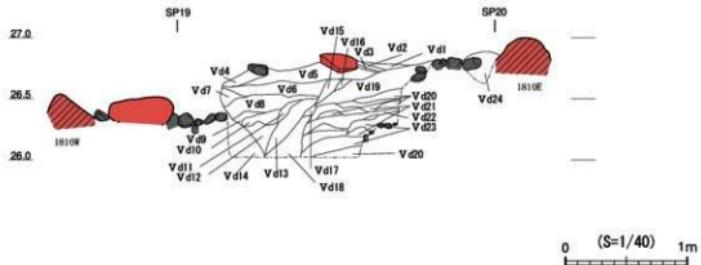
V6版 質問用紙(表題)に記載する「専門用語」の意味

（四）葉的基部半圓形向上半部近長圓形不規整形的葉子

《詩經》中之《召南·鵲巢》篇有云：「鳩占鵲巢，鶡子之育。」

THE HISTORY OF THE UNITED STATES. 1791

第91図 土橋調査区 土層断面図 SP18-19 (S=1/40)



Vd 層 近世初期：本丸南堀第1段階の造成土（土橋石垣の裏込層）

Vd1 明鏡灰褐色シルト

Vd2 深黒褐色土・小礫含む

Vd3 灰褐色土・小礫含む

Vd4 やや暗い灰褐色土・小礫・小石含む

Vd5 やや暗い灰褐色土・小礫・小石含む

※Vd5～5-2: 1941Sで削られたもの）裏込土単位

Vd6 黄褐色土・小石・小石含む

Vd7 灰褐色土・小礫含む

Vd8 灰褐色土・小礫含む

Vd9 灰褐色土・小礫含む

Vd10 黄褐色土・小石・小石含む

Vd11 灰褐色土・小礫含む

Vd12 黄褐色土・小石・シルト含む やや粘性あり

Vd13 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd14 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd15 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd16 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd17 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd18 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd19 黄褐色土・小石・シルト含む

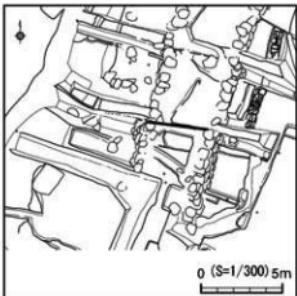
Vd20 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd21 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd22 黄褐色土・小石・シルト含む

Vd23 黄褐色土・小石・シルト含む

※Vd23～25: 1941Sで削られたもの）裏込土単位



第92図 土橋調査区 土層断面図 SP19-20 (S=1/40)

る稲荷屋敷調査区の石垣1941Sの特徴などから、元和年間（1615～1624）頃と考えられる。また、土橋周辺では、廃絶直前の堆積層（Vb層）および埋立土（IVb層）から、建築部材とみられる木製品や金箔瓦・鰐瓦を含む瓦が多数出土しており、この付近に何らかの建物が存在したと考えられる。

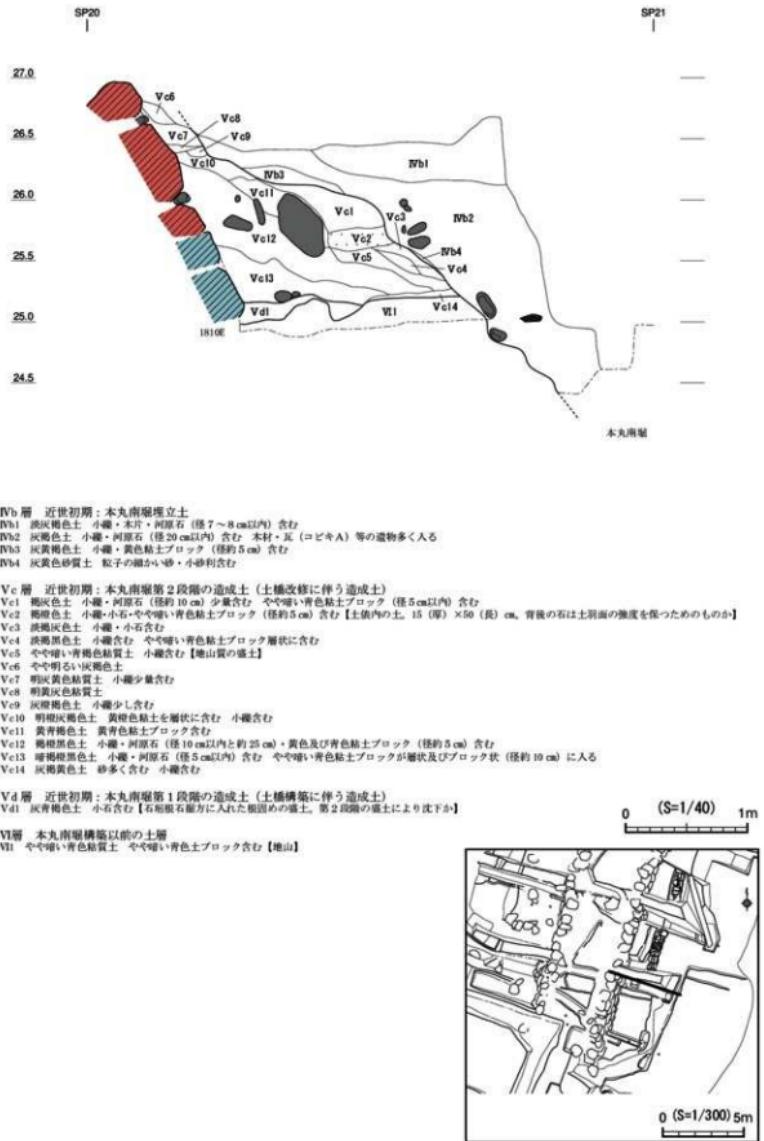
④いもり堀（第76～78・88・89・91・94・95①・98②図）

調査区南端部から北西部にかけて、北西～南東方向のいもり堀が北東に屈曲し、稲荷屋敷下調査区で検出された石垣（1941S）に接する箇所の土羽面を検出している。

（3）小結

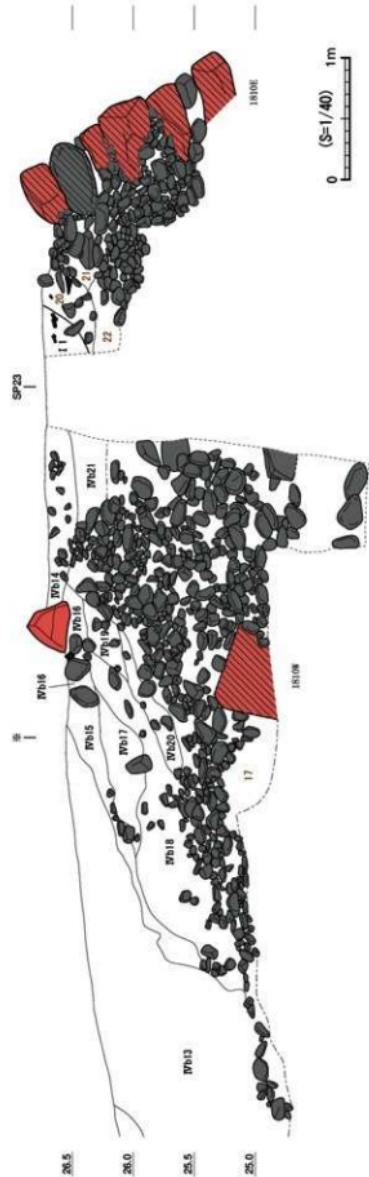
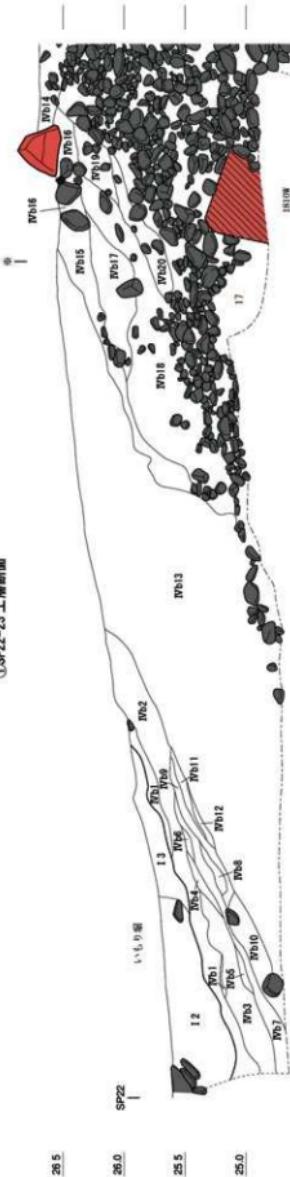
調査により、以下の所見を得た。

- ・検出した本丸南堀とそれに伴う土橋について、構築当初→改修→廃絶の3段階の変遷が見られた。
- ・構築当初の本丸南堀は空堀で、堀に伴う土橋は、堀に面する両側面が石垣となっていた（東面：1810E・西面：1810W）。石垣の積みの特徴などから、金沢城石垣編年1期（文禄年間（1592～1596）頃）の構築と考えられる。（第1段階）
- ・当初空堀であった本丸南堀は、改修時に、土橋東側では石垣の前面に盛土され、土羽面となった。その際、堀底が第1段階の堀底からさらに約2.3m掘削されて深さを増すとともに、水成堆積層が確認されたことから、少なくとも土橋東側では湛水していたことが明らかとなった。また、改修後の土橋東側の土羽面の一部では、当時の水際付近に、護岸目的とみられる土俵列が検出されている。（第2段階）



第93図 土橋調査区 土層断面図 SP20-21 (S=1/40)

① SP22-23 土層断面



第94図 土壌調査区 土層断面図 SP22-23 (S=1/40)

①SP22-23 土層注記

I 層 近現代層

- 11 喀斯特色土 小礫・小石含む 蘭のような小片多数入る【蘭丸】
- 12 喀斯特色土 小礫・小石・河原石 (径 10 cm 以内) 含む しまり悪い、【明治 40 年いもり層理立土】
- 13 喀斯特色土 小礫・小石・小石含む【明治 40 年いもり層理立土】

IV 層 近世初期：本丸南壁堆土

- IVa1 灰褐色色粘質土 小礫・小石含む 極色粘質土が層状に入る

IVa2 灰褐色色粘質土 小礫・小石含む

IVa3 灰褐色色粘質土 小礫・小石含む

IVa4 やや暗い灰褐色色粘質土 小礫含む

IVa5 黄褐色粘質土 小礫含む

IVa6 灰褐色色粘質土 小礫含む

IVa7 灰褐色黄色土 小礫・小石・炭化物含む

IVa8 喀斯特色粘質土

IVa9 喀斯特色粘質土 小礫・小石含む

IVa10 淡褐色色砂質土 小礫・小石・河原石 (径 25 cm 以内) 含む

IVa11 喀斯特色粘質土 小礫含む

IVa12 喀斯特色土 小礫含む

IVa13 灰褐色色土 小礫・小石・粗砂含む

IVa14 喀斯特色土 河原石・小石・小石含む

IVa15 明暗黃褐色砂質土 小礫・小石・粗砂含む

IVa16 鹿灰褐色土 砂気あり IVa15 に比べてしまなし 小礫含む

IVa17 淡褐色色土 小石含む

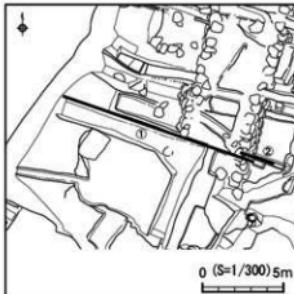
IVa18 やや暗い灰褐色色粘質土 小礫・小石含む

IVa19 喀斯特色 砂気あり IVa15 に比べてしまなし

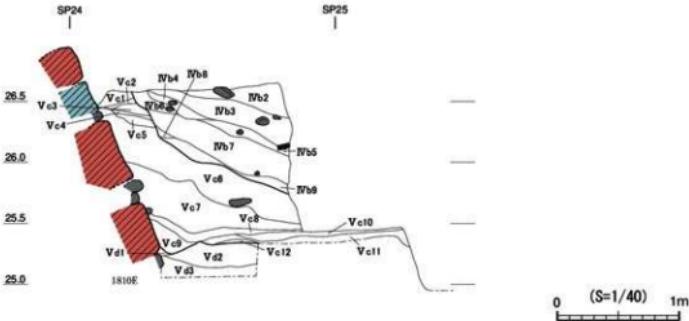
IVa20 喀斯特色粘質土 IVa19 に似る 灰色粘土+ロック少量含む

IVa21 喀斯特色粘質土 小礫・小石含む

合計 21 層は本丸南壁理立時に複数にわたって上塗基づか



②SP24-25 土層断面



IVb 層 近世初期：本丸南壁第 2 段階の造成土

IVb2 淡灰褐色色土 小礫・河原石 (径 10 ~ 15 cm) 黃色粘土ブロック (径 5 cm) 含む

IVb3 淡白褐色土 小礫・小石 (径 5 cm 以内) 含む 河原石 (径 10 cm 以内) 黃色砂質土ブロック部分的に含む

IVb4 喀斯特色土 小礫・石 (径 5 cm 以内) 含む 喀斯特色粘土と入る

IVb5 喀斯特色土 小礫・石 (径 7 cm 以内) 含む 喀斯特色粘土と入る

IVb6 明灰白色土 小礫・石 (径 10 cm 以内) 含む

IVb7 やや暗い灰褐色土 河原石 (径 10 cm 以内) 稍少し入る 下部で淡褐色粘土層状に入る

IVb8 淡褐色色土 砂・シルト含む

IVb9 喀斯特色砂質土 小礫・小石含む 砂の堆積土

Vc 層 近世初期：本丸南壁第 2 段階の造成土（土橋改修に伴う造成土）

Vc1 明灰白色粘質土 シルト含む

Vc2 喀斯特色粘質土 シルト・小礫含む

Vc3 喀斯特色土 小礫・小石含む

Vc4 淡白褐色土

Vc5 喀斯特色土

Vc6 淡灰褐色粘質土 シルト・やや暗い青色粘土ブロック (径 10 cm 以内) 含む ブロックは下部ほど多量で径も大きくなる 下部に全体的に砂入る 下部に淡褐色粘土層状に入る

Vc7 やや暗い青色粘質土 シルト・シルト含む 喀斯特色粘土ブロック (径 7 cm 以内) 部分的に入る 砂やや多く含む

Vc8 喀斯特色粘質土 シルト・小礫含む

Vc9 喀斯特色粘質土 シルト・小礫含む

Vc10 淡灰褐色色砂質土 シルト・小礫含む

Vc11 黄褐色土 小礫・小石含む

Vc12 白褐色土 砂・小礫含む

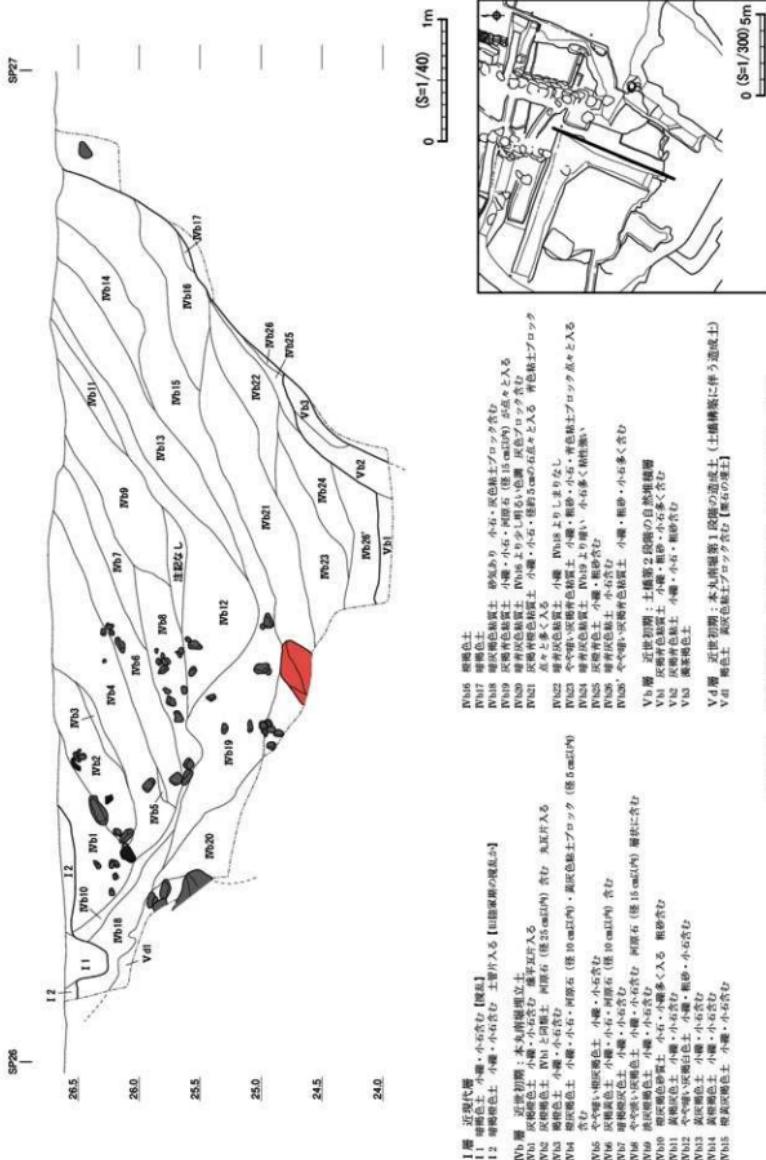
Vd 層 近世初期：本丸南壁第 1 段階の造成土（土橋の構築に伴う造成土）

Vd1 明灰白色粘質土 シルト含む

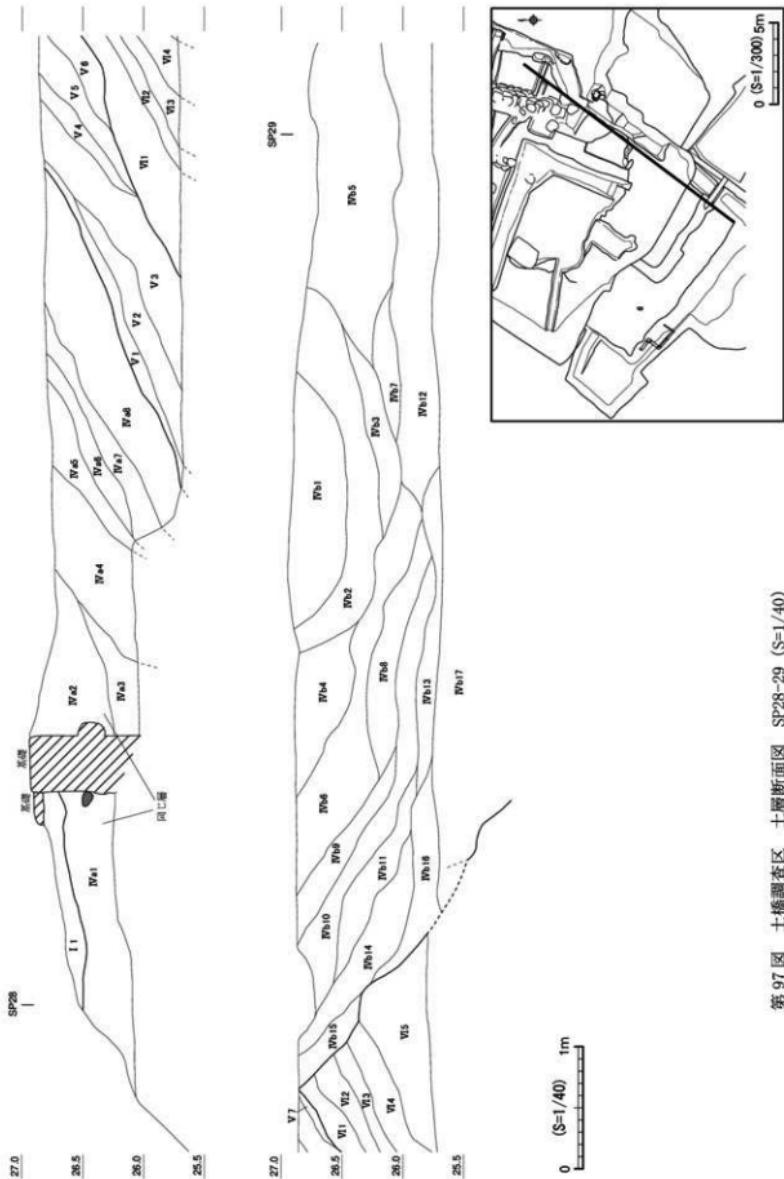
Vd2 黄褐色粘質土 シルト・小礫含む

Vd3 喀斯特色粘質土 粗砂・小礫含む

第 95 図 土橋調査区 土層注記 SP22-23、土層断面図 SP24-25 (S=1/40)



第96図 土壌調査区 土層断面図 SP26-27 (S-1/40)



第97図 土橋調査区 土層断面図 SP28-29 (S=1/40)

①SP28-29 土層注記

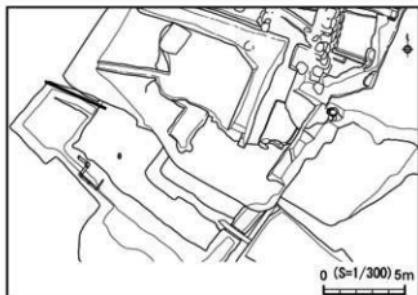
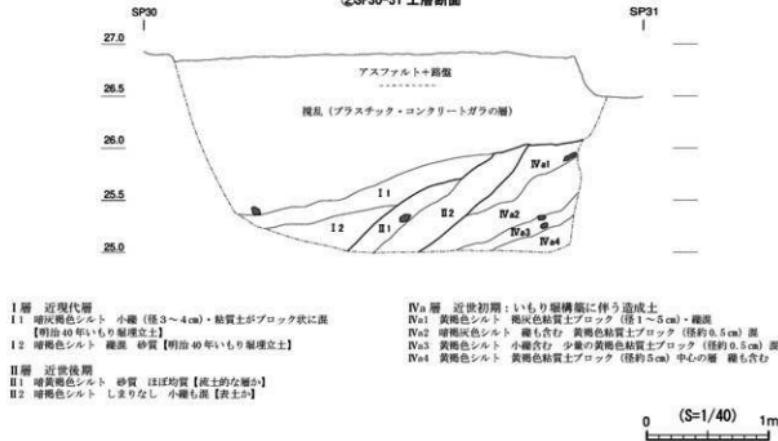
I層 近現代層
II 層 滅失土（基礎の堆積）

- IVa 層 近世初期：いもり型構築に伴う造成土
IVa1 黄褐色砂質土・粘性強い
IVa2 黄褐色砂質土と灰色砂質土の混合土 黄色粘土粒含む・粘性強い
IVa3 灰褐色砂質土・鉄分含む・粘性強い
IVa4 黄褐色砂質土と灰色粘土粒の混合土 黄色粘土粒を含む・粘性強い
IVa5 黄褐色砂質土と灰色粘土粒の混合土 黄色粘土粒含む・粘性強い
IVa6 黄褐色砂質土 黄色粘土粒を含む・粘性強い
IVa7 灰色砂質土 黄色粘土粒をブロック状に含む
IVa8 灰褐色砂質土 黄色粘土粒・鉄分含む
- IVb 层 近世初期：本丸南壁埋立土
IVb1 灰褐色砂質土 黄色粘土粒含む
IVb2 IVb1 + 鉄分
IVb3 IVb1 + 鉄分
IVb4 灰褐色砂質土 鉄分多く含む
IVb5 墓地色シルト 小砂利・粘土質土ブロック (約0.5cm) 複数
IVb6 灰褐色砂質土 黄色粘土粒含む IVb9 層より鉄分多い
IVb7 墓地色砂質土 ブルト
IVb8 灰褐色砂質土 鉄分多く含む
IVb9 灰褐色砂質土 黄色粘土粒・鉄分含む
IVb10 黄褐色砂質土 鉄分含む・黄色粘土粒を含む・粘性強い

- IVb11 灰褐色砂質土 黄色粘土粒含む
IVb12 墓地色粘質シルト 鉄分多く含む
IVb13 墓地色シルト 小砂利多く含む
IVb14 灰褐色砂質土 鉄分多く含む 黄灰色粘土粒含む
IVb15 灰褐色砂質土 黄色粘土粒含む
IVb16 灰色シルト 黄色粘土粒・鉄分多く含む
IVb17 墓地色粘質土
- V層 近世初期：本丸南壁基盤層（盛土）
V1 黄褐色粘土・礫層と黒色粘土小礫層との混合土 鉄分多く含む
V2 黑色粘土質土
V3 黑色粘土小礫層
V4 黄色粘土質土 黑色粘土質土を少量含む V3層との間に鉄分沈着
V5 灰色砂質土 小砂利多く含む
V6 黄褐色粘土小礫層と黒色粘土小礫層との混合土 鉄分多く含む
V7 黑色粘土質土 小砂利含む

- VII層 本丸南壁構築以前の土層：地山
V1 V3層よりやや暗く、黑色粘土粒を含む
V2 黄褐色砂質土 小砂利含む
V3 V3層よりやや暗く、黑色粘土粒を含む
V4 黄色粘土質土 黑色粘土小礫層との混合土
V5 V3層よりやや暗く、黑色粘土粒を含む

②SP30-31 土層断面



第98図 土橋調査区 土層注記 SP28-29、土層断面図 SP30-31 (S=1/100)

- ・改修後の土橋西側では、石垣前面に石列が確認されており、土橋の改修（拡幅）に伴う構造物と考えられる。なお、石列前面には堀の斜面が形成されていたが、調査では堀底および水成粘土堆積層は確認できず、土橋西側が東側と同様に湛水していたかは明らかではない。（第2段階）
- ・本丸南堀の廃絶およびいもり堀の開設は、元和年間（1615～1624）頃と考えられる。なお、元和6年に城内本丸で火災が生じており、本丸南堀の廃絶およびいもり堀の開削が、この火災を契機としている可能性も考えられる。土橋周辺から出土（IV b層およびV b層）した金箔瓦が、文禄期前後～元和期に使用されたこととも矛盾しない。（第3段階）

稻荷屋敷下調査区

（1）概要（第11・12・99～101図）

調査区は薪ノ丸の南方の近代石垣1810S3の南側に位置し、平成12年度に調査が行われた（2000-1地点）。調査区の位置を江戸時代前期の「加賀国金沢之図」（寛文8年（1668））（金沢市立玉川図書館蔵）に照合させると、いもり堀と稻荷屋敷の境界に相当し、境界を示す部分には石垣が描かれている。寛文期の堀の様相は、基本的に幕末まで引き継がれるが、江戸時代後期の絵図では石垣前面に土羽状の表現が見られる。近代以降は、明治40年（1907）にいもり堀が埋め立てられ、稻荷屋敷下石垣の上半部が取り壊された。そして、その北方に新たな石垣1810Sが設置されたと考えられる。旧陸軍の建物配置図では、事務所と柵包所の一角が確認できることから、検出した石垣1941Sは、近代の取り壊しを免れた下半部が、地中に埋まっていたものと考えられる。

石垣1941Sは、東西約30mにわたって検出された。調査地点東端は、石垣東端部に相当する。一方、石垣西端は、調査区外へ延びており、検出できなかった。また、石垣は、ほぼ直線状に延びているが、東部付近に近づくにつれ、やや南へ張り出している。検出高は、約1.5m（最深部約2.5m）、発掘停止面でみると標高約25m（最深部約24m）で、さらにその下方に続いている、根石の確認には至っていない。検出した築石の総個数は、約120個を数える。

（2）遺構

①石垣1941S（第100～103・104①・105①・106②・107①図、第5表）

東西約30m、高さ約1.5m（最深部約2.5m）分を検出し、南に面を向けていた。根石は検出されておらず、さらに下に続くと考えられる。築石には戸室石の粗加工石が使用されているが、面はノミ加工が少なく、自然面および割面部分を残すものが多い。また、築石は規格化されておらず、寸法・面の調整等は統一されていない。石垣の積みは乱積みで、部分的に落とし積みが窺える。なお、トレチ2の土層断面の観察より、石垣改修掘方の埋土の可能性のある層（第106②図IV a1～15層）を確認したが、平面的な広がり等詳細を明らかにできていない。問詰には戸室石片や河原石を詰めており、大きさはおよそ拳サイズのものが大半を占めるが、長径約20～30cmのものも見られた。戸室石片は色別（赤・青）に群集する傾向が見られた。石垣の勾配は、約80°を測る。築石の幾つかには、矢穴跡が見られた。矢穴の形状は、方形・長方形ないし若干逆台形気味のものが中心で、例外的に半円形・半長円形のものが加わる。刻印は、34種類・70個見られた（第5表）。小型のものが主体で、殆どが正面に刻まれており、種類毎にまとまる傾向が見られた。これらの特徴から、金沢城石垣編年3期（元和年間（1615～1624）頃）の構築と考えられる。

石垣内部の構造を把握するため、石垣に直行して入れた4本のトレチ（トレチ1～4）の土層断面を精査したところ、調査区西部では、石垣正面から約2.5m～3m後方地点で、地山が掘削された状況が確認できたが、東部では地山が確認されず、地山の代わりとして、固く締めた疊層が形成されていることが確認された。また、石垣の裏込めには河原石主体の栗石が充填されたが、戸室石も少量含まれていた。栗石は、築石に接する範囲では、径が大きめの河原石や戸室石片が使用されてい

るが、それ以外の範囲では、河原石が使用されていた。土層断面の観察から、作業単位の下層に径の比較的大きい栗石、中層に比較的小さい栗石、上層に中位の栗石が配されたと考えられ、築石約2～3段分（推定）の高さまで石垣を積み上げた段階で、裏込め全体に盛土し整地したとみられる。出土遺物は、裏込め整地層などから17世紀初頭頃の陶磁器が出土している。

②本丸南堀（第101・105②・107図）

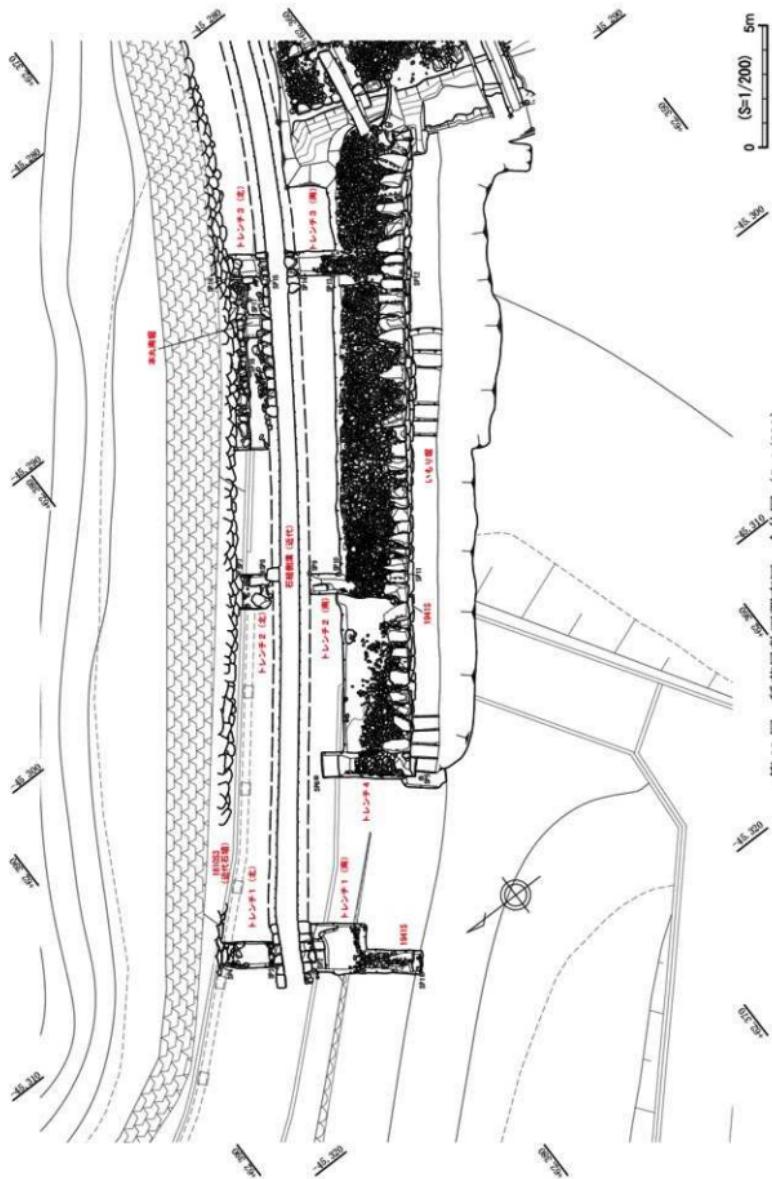
前述した、地山の代わりとして固く締めた礫層が形成されている範囲は、いもり堀が形成される以前に存在した、本丸南堀を埋め立てた範囲と考えられる。調査では、本丸南堀の法面を一部分確認することができた（第105②図）。検出した法面は、土橋の北西に位置し、地山を掘削して形成されていた。堀の北岸に相当すると考えられ、対岸となる南岸は、土橋調査区で検出されている。

（3）小結

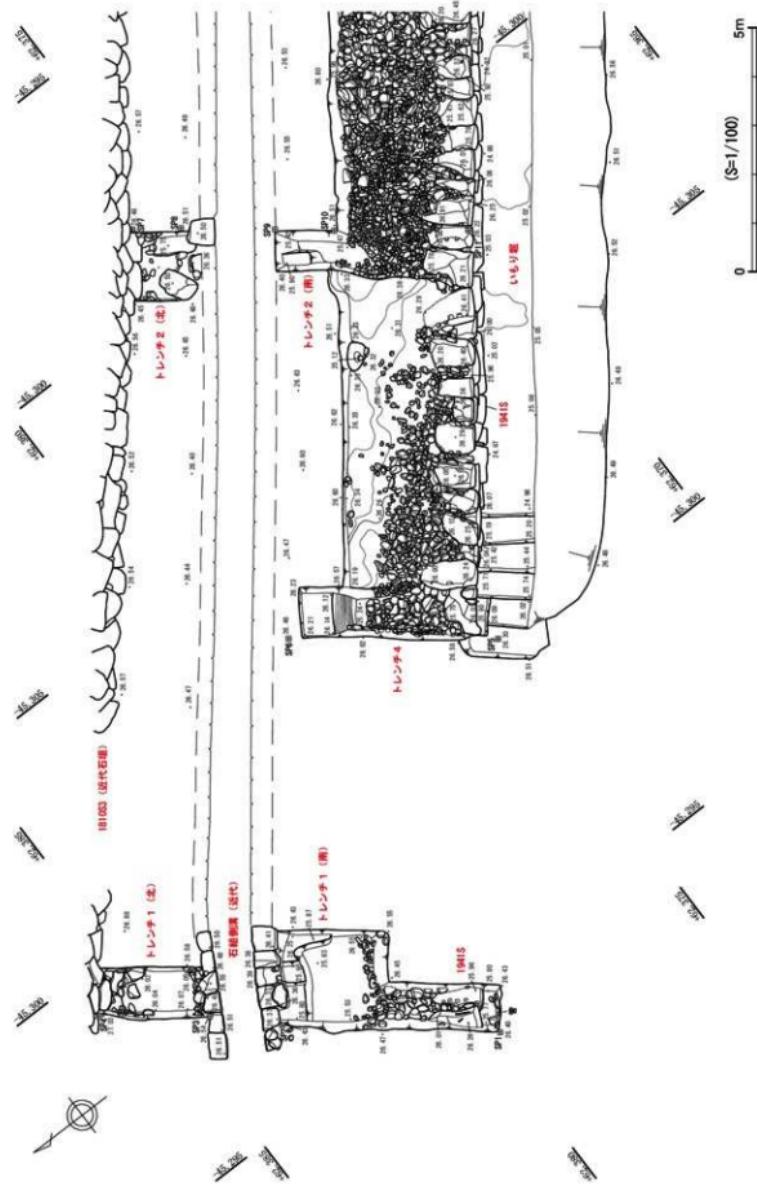
本調査区では、以下の所見を得た。

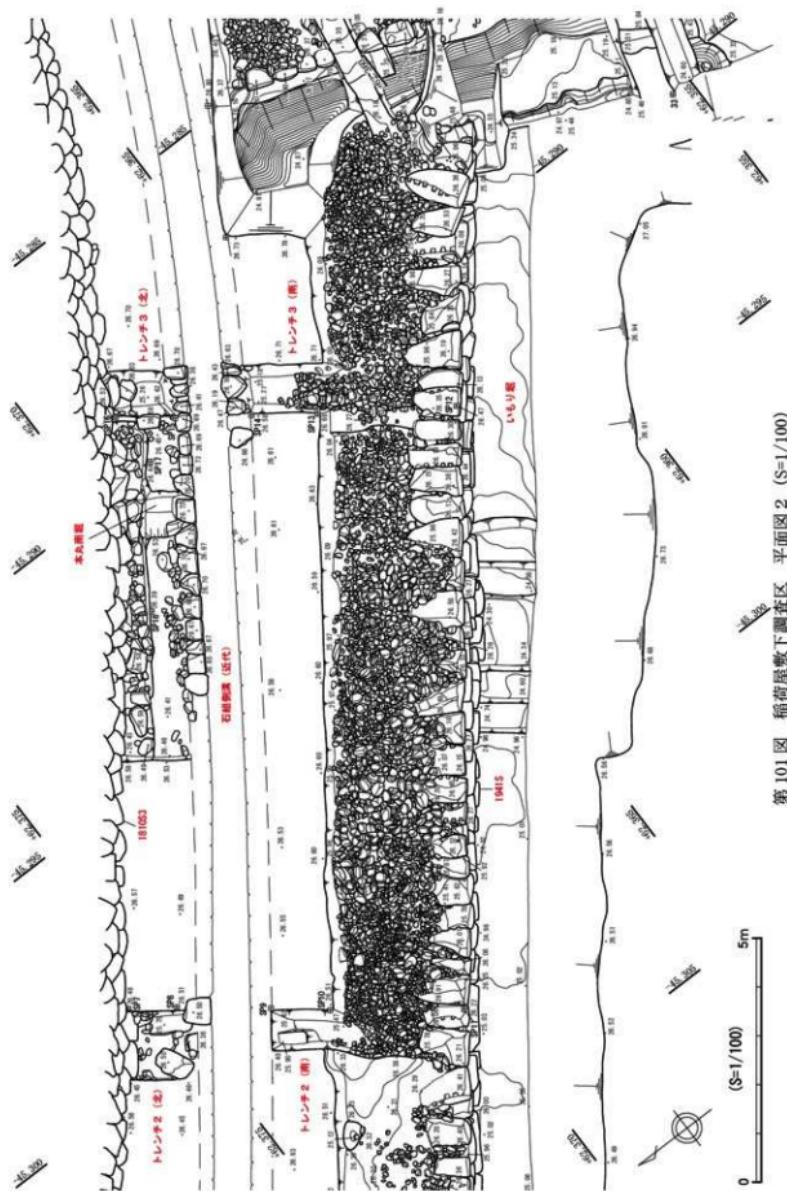
- 江戸時代の絵図に描かれた、いもり堀と稻荷屋敷の境界の石垣が、発掘調査により東西約30mにわたって検出された（1941S）。
- 石垣1941Sは、粗加工石積で、石垣の積み（乱積みで部分的に落とし積みも見られる）や石垣石の加工状態がやや未発達で、刻印が小型であることなどの特徴から、金沢城石垣編年3期（元和年間（1615～1624）頃）の構築と考えられる。いもり堀の造営時期を示す遺構である。
- いもり堀が掘削される以前に存在した本丸南堀の法面の一部を検出した。堀の西岸に相当すると考えられる。

第99図 稲荷屋敷下調査区 全体図 (S=1/200)



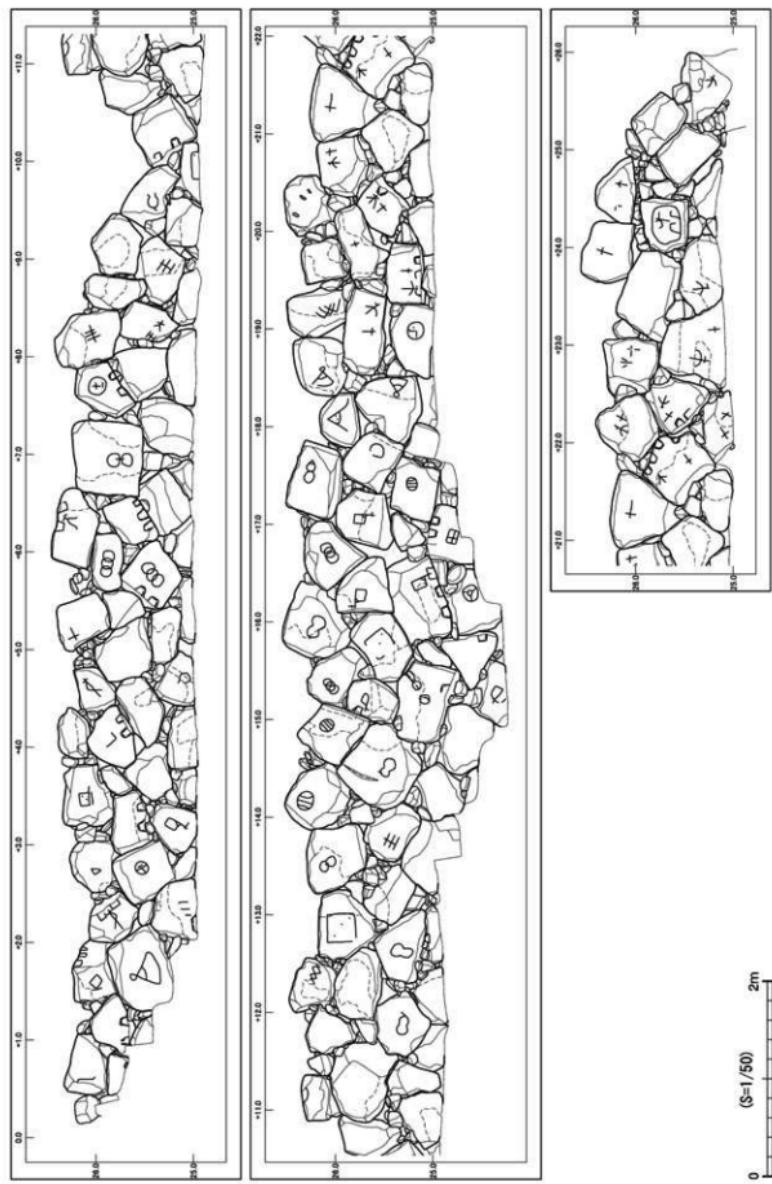
第100図 稲荷屋敷下調査区 平面図 1 (S=1/100)

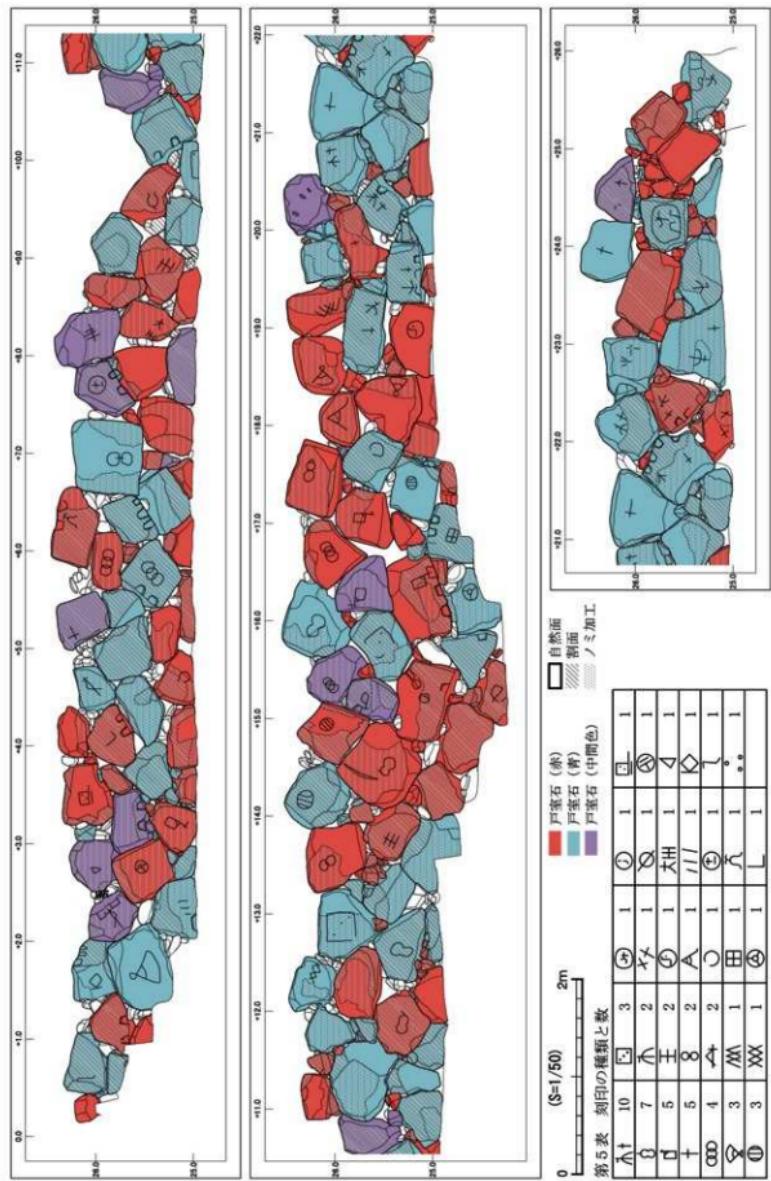




第101図 稲荷屋敷下調査区 平面図2 (S=1/100)

第102図 稲荷畠敷下調査区 石垣 1941S 立面図 ($S=1/50$)





第103図 稲荷屋敷下調査区 石垣 1941S 石材観察図

①トレンチ1南 (SP1-2) 土層断面

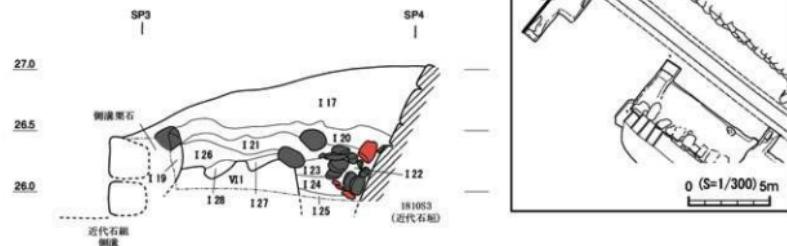


- I層 近現代層
 I-1 墓場褐色土・粗砂・小礫含む
 I-2 黒褐色質土・河原石 (径約10cm) 含む
 I-3 黄褐色質土・小礫層
 I-4 やや暗い灰褐色土・小礫・アスファルト・河原石 (径10~20cm) 含む
 I-5 黄褐色土・黄褐色粘土ブロック所々に入る
 I-6 灰白色土・小礫層
 I-7 やや明るい灰褐色粘土・粗砂土ブロック (径約1cm) 全体に含む
 I-8 灰白色粘土部分に入れる
 I-9 墓場褐色土・小礫・小礫層
 I-10 墓場褐色土・小礫層
 I-11 やや暗い灰褐色粘土・小礫・粗砂含む
 I-12 黄褐色土・小礫層
 I-13 墓場褐色土・小礫含む
 I-14 墓場褐色土・小礫含む
 I-15 やや暗い灰褐色質土・タイル片含む
 第11~15層: 現代の擾乱

- I-16 淡褐色灰土・小礫含む【近代整地土】
 I-18 黑褐色土・小石~径約20cmの石と側溝石面の裏込として入れる【近代石組側溝腹面土】
 I-19 黄褐色土・小礫含む【近代整地土】
 I-20 墓場褐色土・小礫・粗砂含む【近代整地土】
- IVa層 近世初期: いよいよ層構築に伴う造成土 (石垣1941S裏込め)
 IVa1 黄灰白土・粗砂含む・稚色土・黄色土・灰白色粘土ブロック (径1~5cm) 全体的に入る【近代土】
 IVb 層 墓場褐色土・粗黄色粘土ブロック (径1~2cm) 全体的に入る
 IVb1 河原石層 (約5cm) 入る
 IVa3 河原石層 (径約10~20cm) 石と石の隙間に褐色土入る【栗石層】
 IVa4 明黄色土・小礫層・灰白色粘土ブロック (径約1cm) 部分的に含む
 【本丸南側構築土の可能性もあり】

- V1層 本丸南側構築以前の土層
 VI1 灰白色質土・褐色砂質土が上層に入る【地山】

②トレンチ1北 (SP3-4) 土層断面

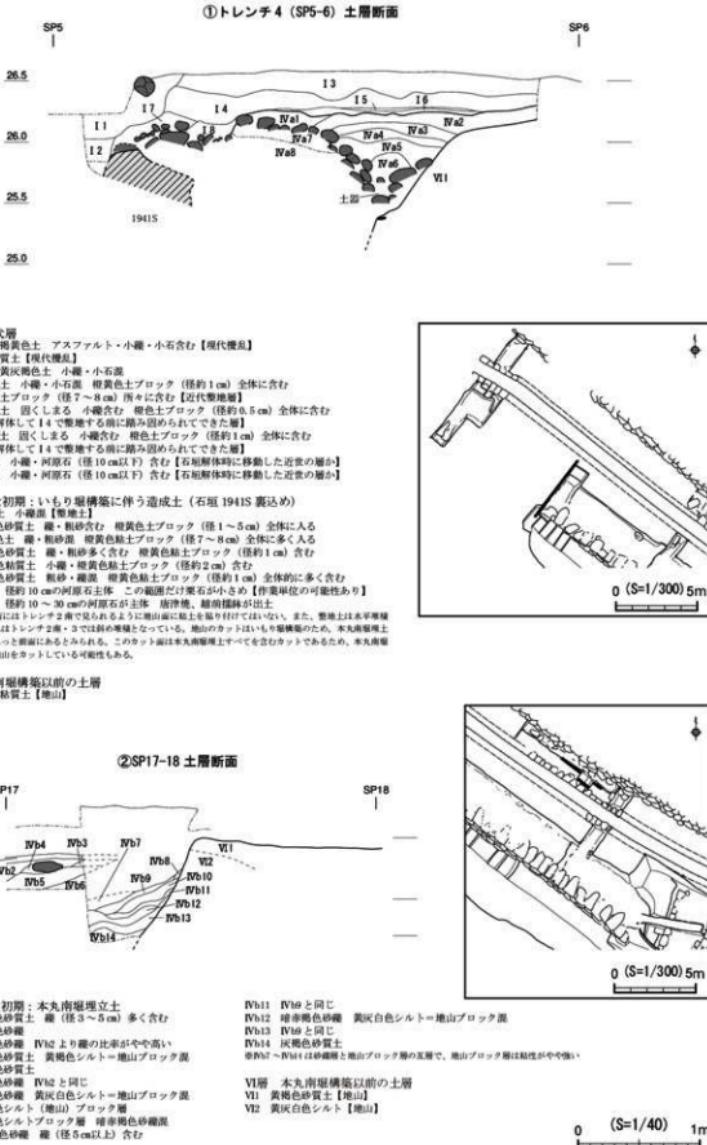


- I層 近現代層
 I-17 黒褐色土・ナイロン・プラスチック・鉛の棒など新しいものが多く入る 小礫層【現代地表】=トレンチ2北 I2層
 I-18 黄褐色土・粗砂層・泥じり・褐色粘土ブロック (径1cm) が所々に入る【近代石組側溝腹面土】
 I-19 にぶい黃褐色土・黒褐色土・黄褐色土ブロック少量入る 小礫層【近代整地土】=トレンチ2北 I5層・トレンチ3北 I10層
 I-21 浅黃褐色砂質土・粗砂・小礫土・黄褐色粘土 (径2~3cm)・黒褐色土ブロック入る【近代整地土】
 I-22 河原石 (径10~20cm) 主體で所々參戻石を入れる 石と石の隙間に褐色土入る【181053 崩方理土 (明治40年頃)】=トレンチ2北 I8層
 I-23 黄褐色土・褐色粘土ブロック (径約0.5cm) 少し入る【181053 崩方理土 (明治40年頃)】=トレンチ2北 I6層
 I-24 明黄色土・褐色粘土ブロックが点々と入る 灰白色粘土部分的には【181053 崩方理土 (明治40年頃)】=トレンチ2北 I9層
 I-25 明黄褐色粘土・灰褐色粘土 (径約5cm) 所々入る【181053 崩方理土 (明治40年頃)】
 I-26 にぶい黄褐色土・小礫・粗砂・河原石 (径約5cm) 入る 黄褐色土所々に入る 褐黄色砂質土 (径7~8cmの礫面) 部分的に入る【近代整地土】
 I-27 小やや暗い黄褐色土・小礫層【近代整地土】
 I-28 やや暗い、黄褐色土・小礫層・褐色粘土 (径約1cm) ブロック少しある近代整地土】
 第13~25層の右側は解説されていない。I-23~25を縦って石有りを示す方法で施工したとみられる(3D施工)。下方へ行くに従って灰白色粘土が混入し、地表面に近づいていく
 第13~25層の右側は解説されていない。I-23~25を縦って石有りを示す方法で施工したとみられる(3D施工)。下方へ行くに従って灰白色粘土が混入し、地表面に近づいていく

- V1層 本丸南側構築以前の土層
 VI1 灰白色質土・褐色砂質土が上層に入る【地山】

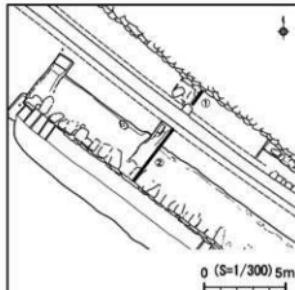
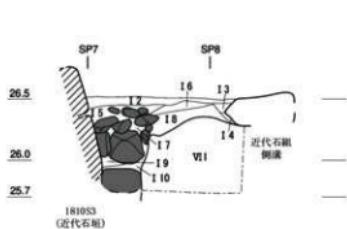
0 (S=1/40) 1m

第104図 稲荷屋敷下調査区 土層断面図 トレンチ1 (S=1/40)



第 105 図 稲荷屋敷下調査区 土層断面図 トレンチ 4・SP17-18 (S=1/40)

①トレンチ2北 (SP7-8) 土層断面



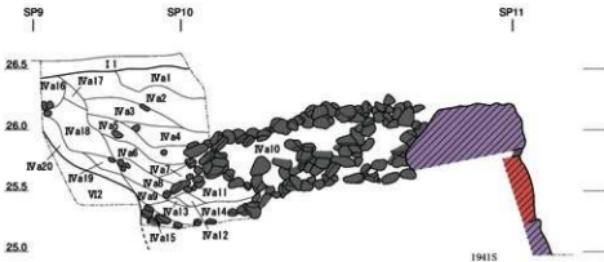
I層 近現代層

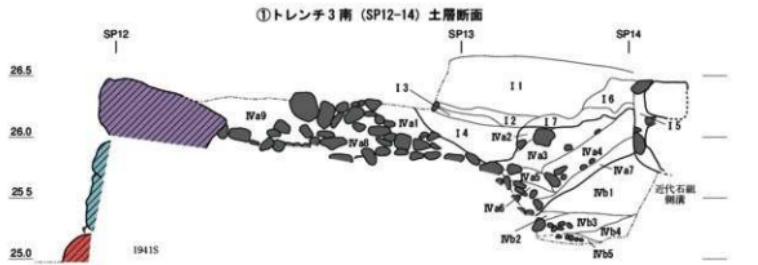
- 1 黒褐色土・泥炭・河原石 (径約5cm) 入る【近代石組方塊土】(明治40年頃)
- 2 黄褐色土・小礫・河原石 (径約5cm) 入る【近代石組方塊土】
- 3 やや明るい黄褐色土・土走りなし・黒褐色土・泥・河原石 (径5~10cm) 入る【近代石組方塊土】
- 4 にぶい黄褐色土・小礫・根付土・河原石 (径5cm以下) 【近代石組方塊土】→トレンチ1北 I-20層・トレンチ2北 I-10層
- 5 淡黄褐色粘質土・暗色土・ブロック点々ある【近代石組方塊土】→トレンチ1北 I-23層
- 6 ソメガ石・河原石 (径10~30cm) 主体・1石のみ青苔が生える・石と石の隙間に褐色土入る【近代石組方塊土】
- 7 黒褐色土・黒褐色土ブロック (径約5cm) 点々と入る・灰白色粘土 (径約5cm) 部分的に入る・褐色土ブロック (径約1cm) 含む【近代石組方塊土】→トレンチ1北 I-24層
- 8 淡黄色粘土・河原石 (径約20~30cm) の下にある【近代石組方塊土】
- 9 淡黄色粘土・河原石 (径約30cm) 入る【近代石組方塊土】
- 10 淡黄色粘土・河原石 (径約30cm) 入る【近代石組方塊土】
- 11 本丸南堀構築以前の土層
- 12 灰白色粘質土・褐色粘土が上層に入る【地山】

VII層 本丸南堀構築以前の土層

VII 层 灰白色粘質土・褐色粘土が上層に入る【地山】

②トレンチ2南 (SP9-11) 土層断面





第2節 いもり堀南部の調査

1. 南岸調査区の概要（第108～110図）

いもり堀南岸の位置の確認およびいもり堀復元に伴う取水路設置に伴い、平成18年度～20年度にかけて4箇所（2006-1・2地点、2007地点、2008地点）で調査を実施した。これらを南岸調査区と総称することとしたが、調査範囲が広範にわたっているため、個別の地点ごとに報告する。

なお、大別層は共通とし、以下のように分類した。

I層：近現代層で、明治40年（1907）の堀の埋立以降の土層に対応する。

II層：近世後期（宝暦大火（宝暦9年（1759）以後）の土層に対応する。

III層：近世前期（寛永大火（寛永8年（1631））～宝暦大火以前）の土層に対応する。

IV層：近世初期（寛永大火以前）の土層に対応する。

V層：近世以前の土層で、古代の遺物包含層などに対応する。

2. 調査の結果

2007地点

（1）概要（第109～111図）

本調査地点は、南岸調査区の西端に位置し、金沢中央消防署広坂出張所跡にあたる。調査では、大別層I～V層を検出した。宝暦大火後のII層出土遺物には、被熱や溶着痕の見られるものが確認された。V層は古代の遺物包含層である。また、明治40年に埋め立てられたいもり堀の南岸を検出した。調査地点南西部は大きく搅乱を受けていたが、堀の南側で堂形や馬場の造成に関わるとみられる江戸時代前期の整地層も確認された。

（2）造構

①石積側溝（近代）（第112図）

調査区中央付近で、東西方向の戸室石による3段の石積みと、その前面（南側）に接する逆L字状のコンクリート構造物で構成された近代の側溝を検出した。同様の側溝が2006-2・2006-1地点でも検出されている。

②いもり堀（第111～114図）

明治40年の堀埋立層直下で、堀南岸の法面を検出した。勾配は約30～40°を測る。堀南岸の法面については、①明治40年のいもり堀埋立直前の面、②①の面の基盤となる堆積層、③堀造営当初の基盤層を確認した。②のうちII la～c層は板ガラス等近代の遺物を含むため、①以前の面としてII 3a・b層面が推定されるが明確ではない。また、③による面は、崩落している可能性もあるが、およそ造営当初の法面を反映しているとみられる。

③堂形馬場（第112・113①・115・116②④～⑥図）

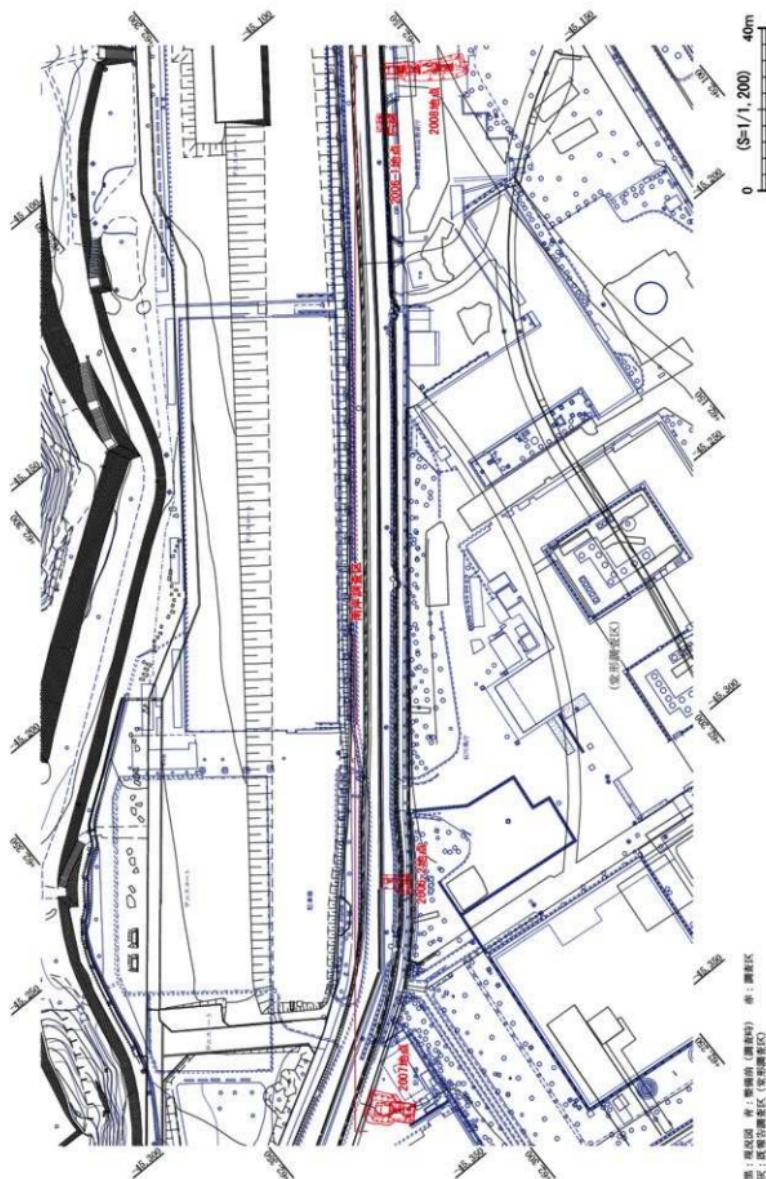
いもり堀南側の調査地点南西部で、均質な砂層および粘質土の層を確認した。絵図との対比から、堂形馬場の整地層と考えられる。また、SP1-2およびSP3-4の土層断面（第111・112図）の観察から、堀岸の南側に現況の頂部で標高25.0～25.1mを測る高まりを確認した。絵図との対比から、堀に接する土壘の一部とみられる。なお、土壘は堂形馬場の砂による整地以降明治40年のいもり堀埋立ての直前まで存続したが、構築時期の上限については明らかにできなかつたため、土壘盛土の構成土をII'層として大別した。

④SX01（第112・113図）

SP1-2およびSP3-4、SP8-9の土層断面の観察により確認した造構で、IV層を基盤とし、III層で埋め立てられていた。部分的な検出のため、平面形など詳細は不明である。1580～1610年代の肥前陶

第108図 南岸調査区 調査区位置図 (S=1/1, 200)

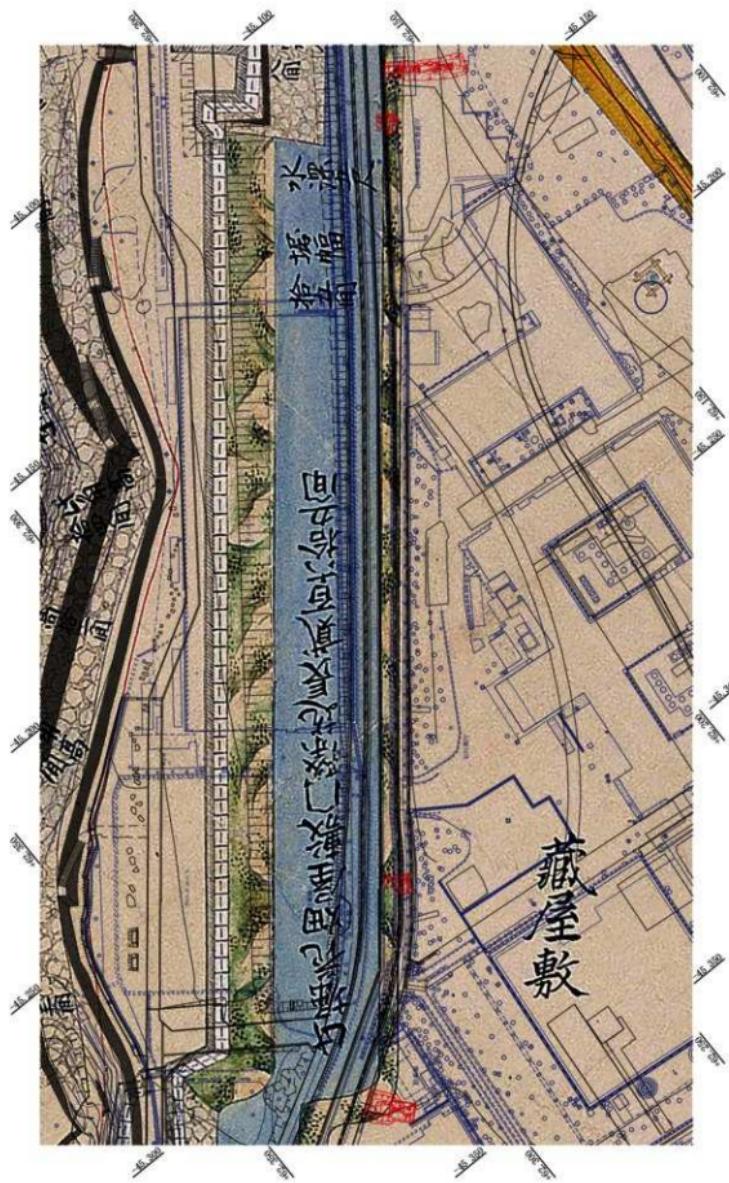
图：南岸区（調査区）示す。調査区
尺：比例尺100m



0 (S=1/1,200) 40m

第 109 図 南岸調査区 絵図照合図（近世前期）(S=1/1,200)

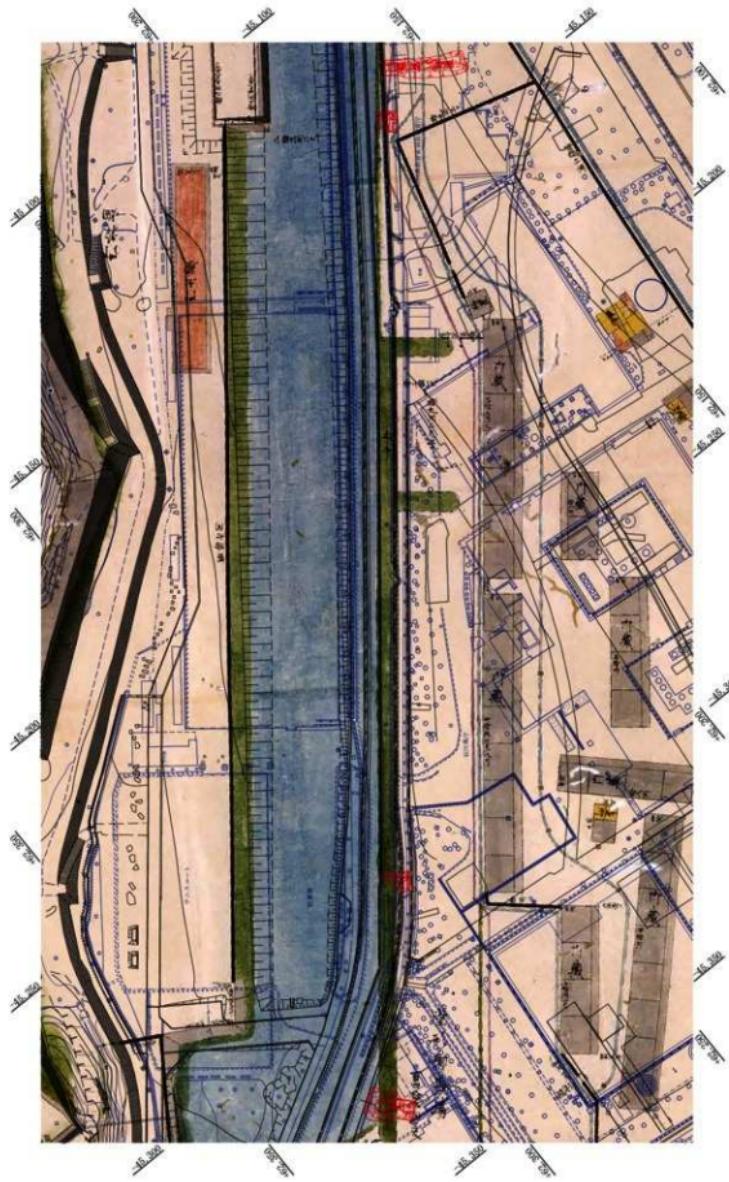
图：南岸区、南岸地区（南岸町） 卷：測量区
底：高松市南岸町（今治市之南端）（今治市立三川河川事務所）
航圖：丸岡田中作成（昭和 10 年）



图：南岸区、渝（重庆）—黔（遵义）铁路
及：渝（重庆）—黔（遵义）铁路部分基点图
底图：航测分幅图（巫山航段）

第 110 图 南岸调查区 绘图对照图（近世后期）(S-1/1, 200)

(\$=1/1,200) 40m
0





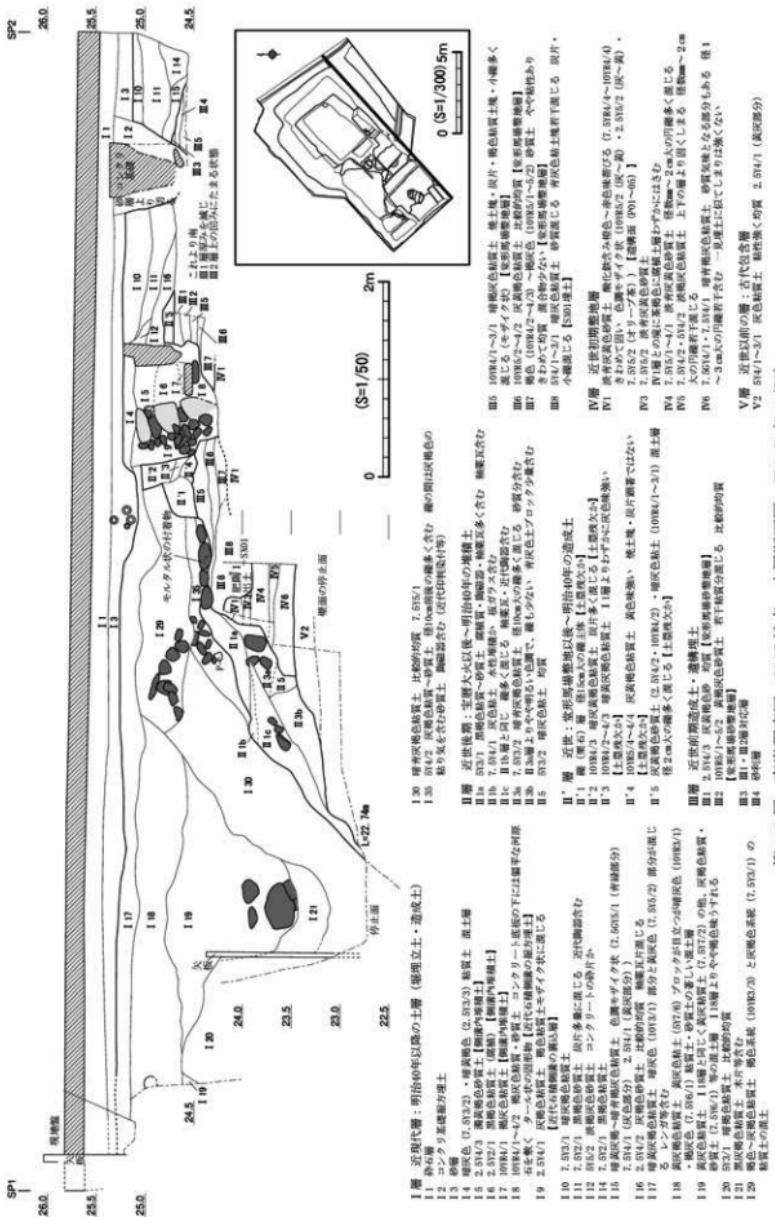
第 111 図 南岸調査区 2007 地点 平面図 (S=1/80)

器が出土している。

⑤ピット (P01 ~ P07) (第 111・115 ③④・116 図)

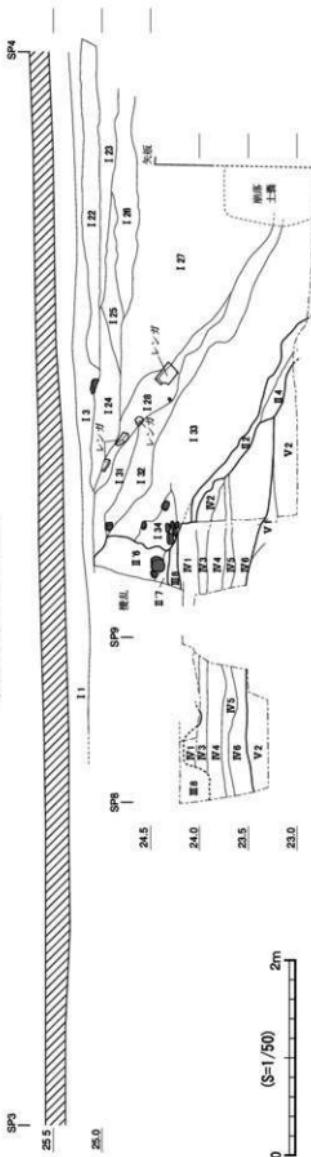
P01～05はIV層を基盤とし、III層で埋め立てられたピットである。P01は平面椭円形、長径 55 cm、短径 51 cm、深さ 9 cmを測る。P02～05は部分的な検出に留まる。P02は平面椭円形ないし略円形と推定され、長径 77 cm、短径 38 cm以上、深さ 21 cmを測る。P03は平面略円形と推定され、径 66 cm、深さ 24 cmを測る。P04は平面椭円形ないし略円形と推定され、長径 54 cm以上、短径 43 cm以上、深さ 10 cm以上を測る。P05は平面椭円形ないし略円形と推定され、長径 55 cm、短径 23 cm以上、深さ 12 cmを測る。

P06・P07はⅢ層上面で検出したが、Ⅰ層で埋め立てられている状況から、本来の掘り込み面が削



30

①SP3-4 · ②SP8-9 土層斷面



近現代層：明治40年以降の土層（堅埋立土・造成土）

近世後期：近世後期～明治40年の准博士

近世後期～明治時代の植樹土
1. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
2. 植樹土：常緑樹林地帯に分布する、肥沃で酸性の高い植樹土。
3. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
4. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
5. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
6. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
7. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
8. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
9. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
10. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
11. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。
12. 植樹土質：黒褐色、粘土質で、耕性良好。

IV 層 近世初期整地層
IV₁ 淡青灰褐色砂質土

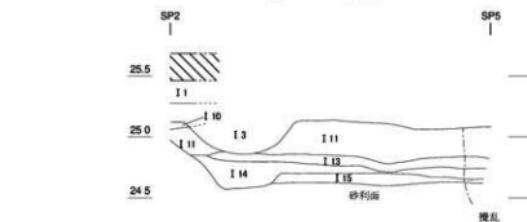
IV類 近世初期絶滅層
IV-1 水成岩質テフラ層
水成岩質テフラ層（10万年前～1万年前）
水成岩質テフラ層（1万年前～現）

ANV 7.3/01/2 桐原色鉄筋土質、N₁の場所に新規色鉄筋土質よりはさむ
ANV 7.3/01/2 桐原色鉄筋土質、後縫合で2cm以上多く張る
ANV 7.3/01/2 PV12 桐原色鉄筋土質、上部より回しめる。接着剤～2cmの引抜き耐力試験も
ANV 7.3/01/2 PV12 桐原色鉄筋土質、静粛性試験となる部分もある。1～3cmの引抜き耐力試験も
ANV 7.3/01/2 PV12 桐原色鉄筋土質、一見端土に付く
しまりはなく

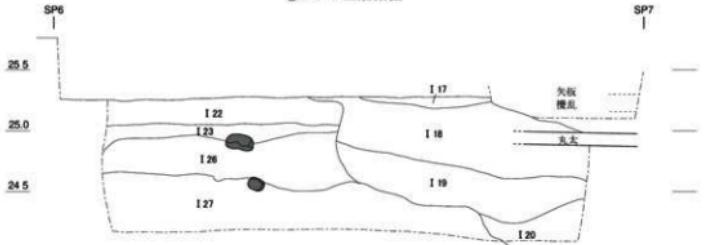
V型 遠位軟骨の量：古代包含量
VI型 背側位軟質土 粒状塊、V2B上位に部分的に発達 (7, 863)

第113図 南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP3-4・SP8-9 (S=1/50)

①SP2-5 土層断面



②SP6-7 土層断面



0 (S=1/40) 1m

I層：近現代層：明治40年以降の土層（埋立土・造成土）

I1 砂石層

I2 砂層

I3 7.SY2/1 墓田開拓地質

I11 7.SY2/1 黒褐色砂質土 砂片多量に混じる 近代陶器含む

I13 7.SY2/1 黒褐色砂質土 灰白色層（灰か）が入る 開ききわめて多く混じる

I14 7.SY2/1 黒褐色砂質土

I15 墓黄灰褐色～暗褐色灰色粘質土 色調モザイク状 (7.SY5/1 (青緑部分) 7.SY4/1 (褐色部分) 2.SY4/1 (黄灰部分))

I17 墓黄灰褐色粘質土 暗褐色 (10Y3/1) 部分と黄褐色 (7.SY5/2) 部分が混じる レンガ等含む

I18 黄灰褐色粘質土 黄褐色粘土 (8Y7/6) ブロックが目立つ暗褐色 (10Y3/1)・褐灰色 (7.SY6/1) 粘質土・砂質土の着しい混土層

I19 黄灰褐色粘質土 I18層と同じく暗褐色粘質土・暗褐色粘質・砂質土 (7.SY6/1) 等の混土層 I18層よりやや褐色後うすれる

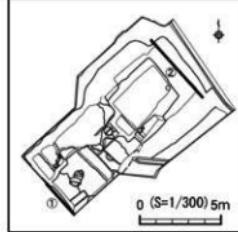
I20 5Y7/1 暗褐色粘質土 比較的均質

I22 7.SY6/1 黄褐色粘質土 黏性高い

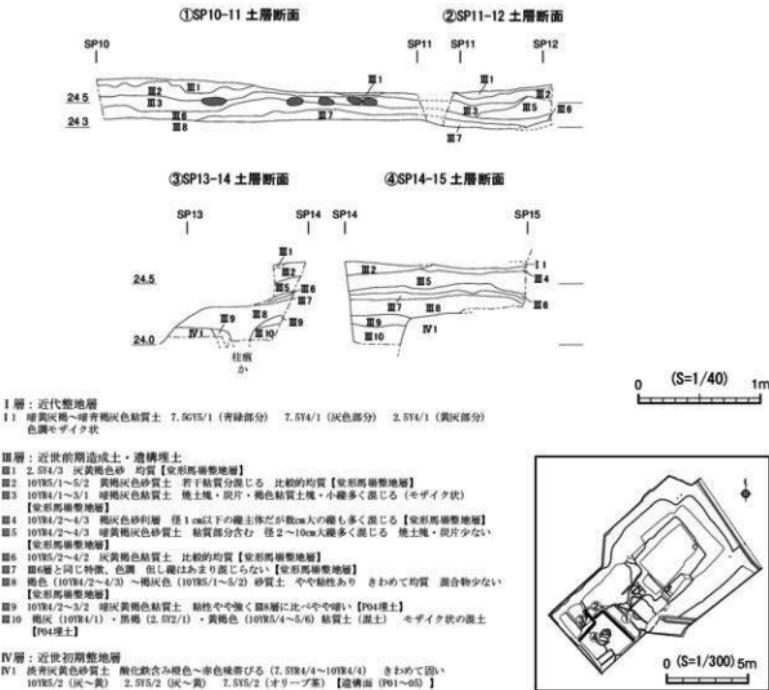
I23 7.SY6/1 黄褐色粘質土 黏性高い

I26 墓黄灰褐色粘質土 糜溝土 I25層に類似するが厚1cm程度の纏・從片等多く混じり著しい混土層となっている

I27 墓黄灰褐色粘質土 青灰土色 (7.SY5/1) と暗褐色土 (7.SY4/1) の混土層であるが I24～I26層とくらべると均質



第114図 南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP2-5・SP6-7 (S=1/40)



第115図 南岸調査区 2007地点 土層断面図 SP10-11・SP11-12・SP13-14・SP14-15 (S=1/40)

平を受けていると考えられる。また、両者は重複しており、P06がP07に切り込まれている。P06は平面橢円形とみられ、長径 53 cm 以上、短径 53 cm、深さ 15 cm を測る。P07は平面橢円形で、長径 67 cm、短径 54 cm、深さ 12 cm を測る。

2006-2 地質

(1) 概要 (第 109・110・117 ①図)

本調査地点は、現況市道となっている部分に相当する。調査では、大別層のⅠ・Ⅱ'・Ⅲ・Ⅳ層を確認した。Ⅱ'層は堂形馬場の砂整地層の造成以降明治40年(1907)のいもり堀埋立直前までの土層で、馬場の土壌を造成する盛土である。Ⅲ層については、堂形馬場の整地土を構成するⅢa層、堂形馬場造成以前の地盤を形成するⅢb層に細別される。Ⅳ層はいもり堀構築当初の法面の基盤層である。

(2) 谓语

①石積側溝（近代）（第117①：118①③：119図）

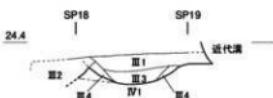
北西 - 南東方向に延びる戸室石による延長 4.25 m の 2 段の石積みと、その前面（南側）に接する逆 L 字状のコンクリート構造物で構成された近代側溝を検出した。石積みを構成する石材の控えは短く、青戸室石が多い。2007・2006-1 地点でも同様の御蓋が確認されており、一連のものと考えられる。

①P01 土層断面



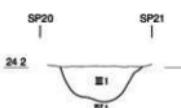
- Ⅲ層：近世前期造構埋土
Ⅲ1 5Y3/1～7, 5Y3/2 暗褐色粘質土 粘性強い 岩片若干混じる
Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1 淡青灰黃色砂質土【造構面（P01～05）】=SP1-2・SP3-4・SP8-9断面IV1層

②P02 土層断面



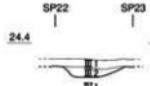
- Ⅲ層：近世前期造成土・造構埋土
Ⅲ1 黒灰色粘質土【変形馬場整地層】=SP1-2断面14層
Ⅲ2 暗褐色粘質土【S02埋土】=SP1-2断面15層
Ⅲ3 2. 10YR4/1～2/1 黑褐色粘質土 淡黃褐色砂質土 (10YR5/4～5/6) ラミナ状に混じる【P02埋土】
Ⅲ4 2. 10YR4/1～2/1 黑褐色粘質土 比較的均質【P02埋土】
Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1 淡青灰黃色砂質土【造構面（P01～05）】=SP1-2・SP3-4・SP8-9断面IV1層

③P03 土層断面



- Ⅲ層：近世前期造構埋土
Ⅲ1 10YR4/1～7, 5YR4/2 暗褐色粘質土 粘土塊・炭片若干混じる 比較的均質
Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1 淡青灰黃色砂質土【造構面（P01～05）】=SP1-2・SP3-4・SP8-9断面IV1層

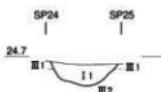
④P05 土層断面



- Ⅲ層：近世前期造成土・造構埋土
Ⅲ1 暗褐色粘質土 SP2-III14層に対応【変形馬場整地層】
Ⅲ2 10YR4/2～4/3 淡黃褐色粘質土 やや砂質分離層 炭片若干混じる【P05埋土】

- Ⅳ層：近世初期整地層
Ⅳ1 淡青灰黃色砂質土【造構面（P01～05）】=SP1-2・SP3-4・SP8-9断面IV1層

⑤P06 土層断面



- I層：近代造構埋土
II1 10YR4/1～4/3 暗褐色粘質土 炭片 径2～5cm大塊多く混じる【P06埋土】

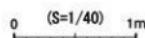
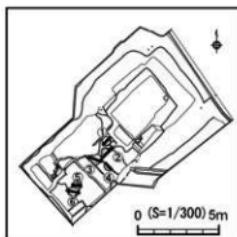
- III層：近世前期造成土
III1 暗褐色砂質土（質土）【変形馬場整地層】=SP1-2断面III1層
III2 暗褐色砂質土【変形馬場整地層】=SP1-2断面III2・III5層に対応

⑥P07 土層断面



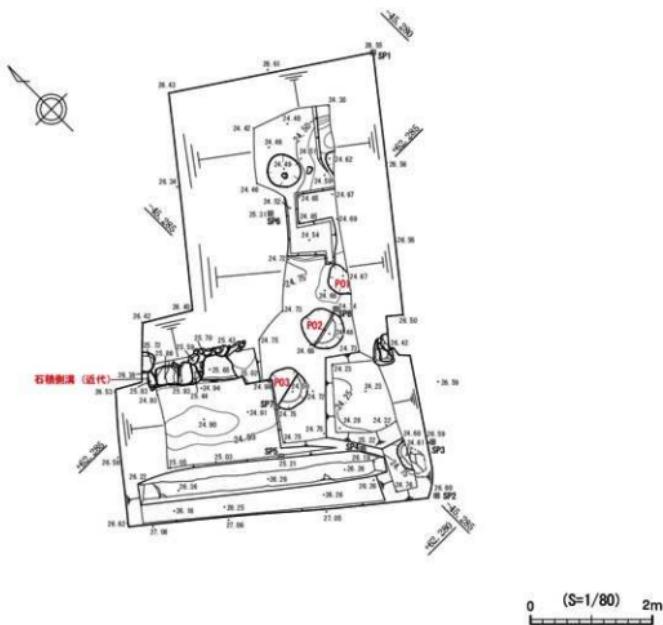
- I層：近代造構埋土
II1 10YR4/2～5/3 暗褐色粘質土 炭片 径2～10cm大塊顯著に混じる【P07埋土】

- III層：近世前期造成土
III1 小砂利層
III2 淡黃褐色砂質土（質土）【変形馬場整地層】=SP1-2断面III1層に対応か
III3 暗褐色砂質土【変形馬場整地層】=SP1-2断面III2層に対応か

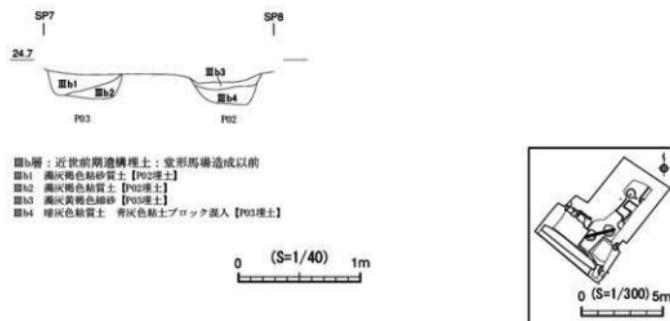


第 116 図 南岸調査区 2007 地点 土層断面図 P01～P03・P05～P07 (S=1/40)

①2006-2地点平面図

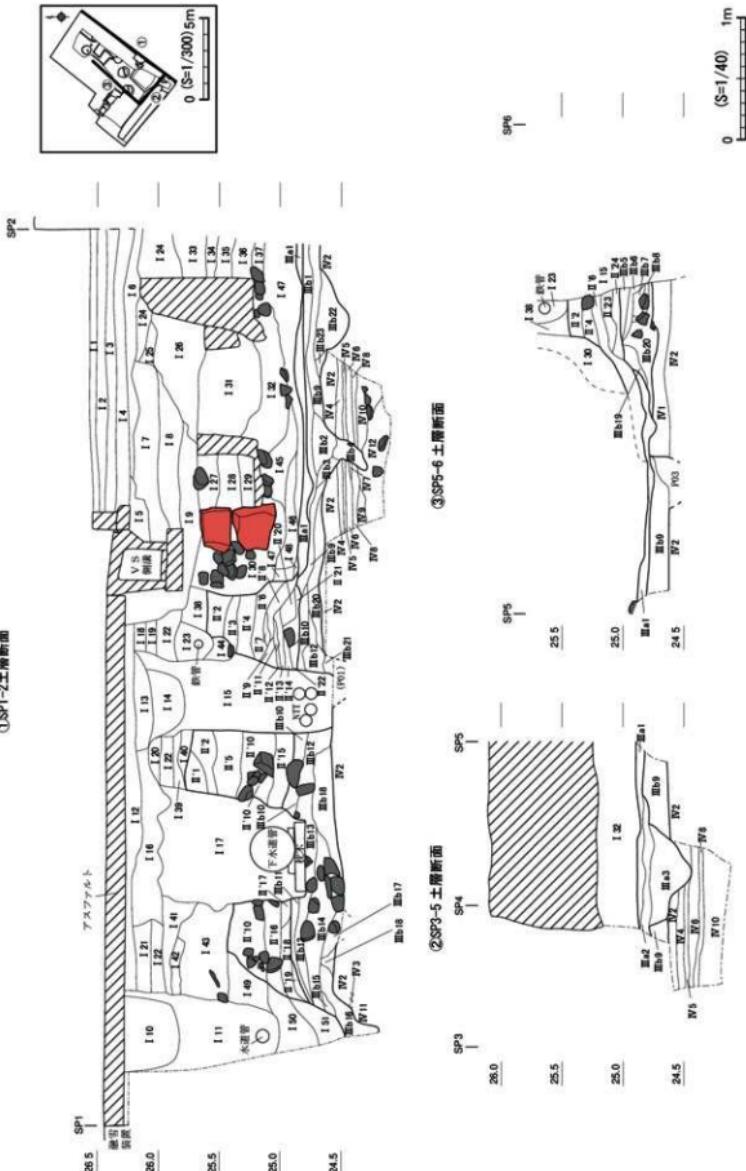


②P02・P03土層断面



第 117 図 南岸調査区 2006-2 地点 平面図 (S=1/80)、土層断面図 P02・P03 (S=1/40)

①SP1-2・土層断面



I 层	近現代層	
11	レンガブロック 歩道の舗装用	
12	灰色砂利 砂利の路床	
13	褐色粘土層 歩道の路床	
14	海砂層 VS側溝歩道改修時盛土層	
15	堆積褐色粘土 層1cm前後の石混入【VS側溝埋設時の整地層】	
16	灰褐色粘土層 歩道改修時の整地層	
17	灰褐色粘土【VS側溝埋設時の整地層】	
18	堆積褐色粘土 層1cm前後の小石混入【VS側溝埋設時の整地層】	
19	堆積灰色石砂層 層1cm前後の小石混入【VS側溝埋設時の整地層】	
20	砂石層 【木道管埋設施設地盤】	
21	砂石層 【アスファルトの路地】	
22	堆積灰色石砂 砂石混入【NTTケーブル埋設覆土】	
23	堆積石砂 層【NTTケーブル埋設覆土】	
24	海砂層 【木道管埋設地】	
25	海砂層 【木道管埋設地】	
26	堆積褐色粘土層 茶褐色粘土層【木道管埋設地】	
27	堆積灰色粘土層 ピニール港入【鋼構内側壁地盤】	
28	堆積褐色粘土層 小石混入【鋼構内側壁地盤】	
29	堆積灰色粘土 層【鋼構内側壁地盤】	
30	堆積褐色粘土層【近代石積側溝の裏込層】	
31	灰褐色粘土層	
32	堆積褐色粘土層	
33	堆積灰色粘土層	
34	堆積褐色粘土層	
35	堆積灰色粘土層	
36	堆積褐色粘土層	
37	堆積褐色粘土層	
38	明治初期粘土層 層10cm未満の小石・JY室宝石混入	
39	堆積褐色粘土 層【古都】	
40	明治初期粘土層 茶褐色粘土層【プロック】、茶褐色粘土層【ブロック】	
41	堆積褐色粘土層 固くしまる 岩粒・飛石混入	
42	堆積黑色粘土層	
43	堆積褐色粘土層	
44	堆積灰色粘土層	
45	堆積褐色粘土層	
46	堆積褐色粘土層	
47	灰色粘土	
48	堆積褐色粘土層	
49	堆積灰色粘土層 固くしまる 層5cm前後の小石混入【明治40年転立土】	
50	灰色粘土層【明治40年転立土】	
51	灰色粘土層【明治40年転立土】	
II' 層	近世造成土(堂形馬場造成～明治40年転立土)：土壌盛土	
52	堆積褐色粘土層 黒褐色混入	
53	堆積褐色粘土層	
54	堆積褐色粘土層	
55	堆積褐色粘土層	
56	堆積褐色粘土層 黑灰色粘土層・堆積褐色粘土層【ブロック】	
57	堆積褐色粘土層 黑灰色粘土層・堆積褐色粘土層【ブロック】	
	B' 層	
	堆積褐色粘土 層【黒褐色】	
	B' 2	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 3	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 4	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 5	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 6	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 7	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 8	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 9	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 10	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 11	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 12	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 13	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 14	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 15	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 16	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 17	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 18	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 19	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 20	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 21	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 22	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 23	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	B' 24	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bia 層	
	近世前期造成土：堂形馬場整地土	
	Bia1	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bia2	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bia3	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bib 层	
	近世前期造成土：堂形馬場造成以前の地盤	
	Bib1	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bib2	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bib3	堆積褐色粘土 層【黒褐色】
	Bib4	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib5	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib6	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib7	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib8	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib9	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib10	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib11	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib12	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib13	やや硬い堆積褐色粘土
	Bib14	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib15	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib16	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib17	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib18	青褐色細砂
	Bib19	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib20	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib21	黑色粘土 层【黒土】
	Bib22	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	Bib23	堆積褐色粘土 层【黒褐色】
	IV 层	
	近世初期整地層：いもり堀法面を形成	
	V 层	
	堆積灰色砂利層	
	V1	青褐色砂利層
	V2	青褐色砂利層 井戸に固くしまる
	V3	黒褐色砂利層
	V4	灰褐色砂利層 固くしまる 上面に黒層あり【ある時期の底層か】
	V5	堆積褐色砂利層 固くしまる
	V6	灰褐色砂利層 固くしまる
	V7	堆積褐色砂利層 固くしまる
	V8	堆積褐色砂利層 固くしまる
	V9	堆積褐色砂利層 固くしまる
	V10	堆積褐色砂利層 層5～20cmの石多く混入
	V11	青褐色砂利層 固くしまる
	V12	灰褐色砂利層

第119図 南岸調査区 2006-2地点 土層注記 SP1-2・SP3-5・SP5-6

②いもり堀（第117①・118①・119図）

壁面の土層観察から、明治40年（1907）の埋立直前の堀法面と、構築当初の堀法面の可能性のある傾斜面を確認した。

③堂形馬場（第118・119図）

壁面の土層観察から、土壌の盛土直下で厚さ2～14cmの均質な砂層を確認した。絵図との対比から、堂形馬場の一部と考えられ、当該砂層は整地層とみられる。同様の砂層は、近接する県埋文センター平成16年度調査区（2区）でも確認されている。また、いもり堀の法面際の南側で、上部から擾乱を受けているが、現況の頂部が約25.8m、幅3.5mを測る高まりを検出した。絵図との対比から、堀に接する土壌と考えられる。

④ピット（P01～P03）（第117・118①③・119図）

いずれもⅢ層を基盤とし、Ⅱb層で埋め立てられたピットで、調査地点南半部で検出した。P01は調査地点外に延長しており、一部の検出に留まる。平面形は梢円形ないし略円形と推定され、長径

54 cm、短径 36 cm 以上を測る。P02 は平面楕円形で、長径 71 cm、短径 62 cm、深さ 24 cm を測る。P03 は平面略円形で、径 66 cm、深さ 22 cm を測る。

2006-1 地点

(1) 概要 (第 109・110・120 ①図)

本調査地点は、現況市道となっている部分にあたる。調査では、大別層 I ~ IV 層を検出した。明治 40 年 (1907) の堀埋立直前および近世前期のいもり堀南岸の法面を確認し、堀北岸の調査と合わせて、堀幅の推定が可能となった。また、土層断面の精査から、近世後期の辰巳用水を確認した。

(2) 遺構

① 石積側溝 (近代) (第 120・121 ③図)

調査区中央で北西 - 南東方向に延びる戸室石による石積みを延長 4.9 m 分検出した。石積みは最大で 2 段で、裏込めには土および河原石が使用されていた。また、石材の揃えは短く、青戸室石が多い。石積みの前面には逆 L 字状のコンクリートの構造物が 2 段重なって確認されており、近代の側溝と考えられる。調査地点壁面の土層観察から、もとは石積みの 1 段目下端付近が溝底面であったが、のちに I 12 層の位置までかさ上げされたと考えられる。同様の構造をもつ側溝が 2007・2006-2 地点でも確認されており、一連のものと考えられるが、それらには底面のかさ上げは見られなかった。

② いもり堀 (第 120・121 ②③図)

近世後期の造成土を挟んで、上下 2 面の法面を確認した。上面は、明治 40 年 (1907) の堀埋立てにより埋没した面、下面是近世前期の面とみられる。

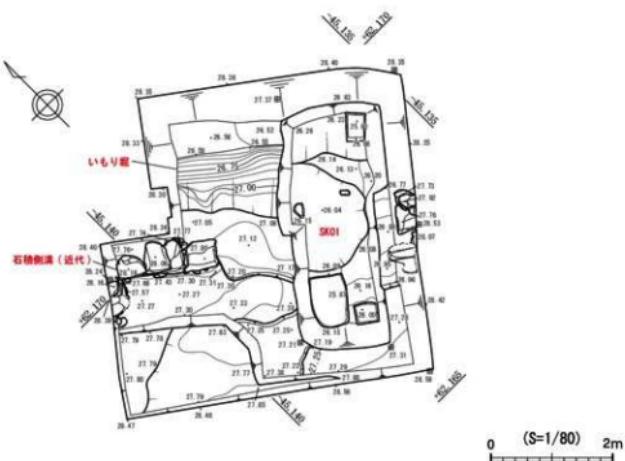
③ 辰巳用水 (石管) (第 120 ②・121 図)

壁面の土層観察から、溝状の掘方とその上面を覆った整地土と見られる層を確認した。断面形を見ると、上部で幅 1.2 m 以上 (南西肩は未確認)、深さ 40 cm 程度を掘削した後、さらに幅 0.8 m 以上 (南西肩は未確認)、深さ 1 m 以上 (底は未確認) の一段低い掘方が掘られていた。絵図との対比から、石管を導水管とする辰巳用水の掘方と考えられるが、石管本体および敷石等の支持部材については検出されていない。

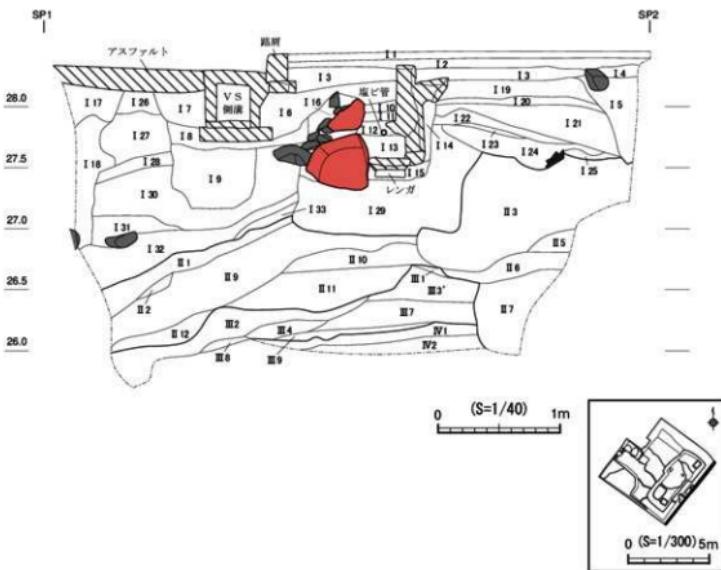
④ 土坑 SK01 (第 120 ①・121 ②③図)

平面楕円形とみられる土坑状の遺構の一部を検出した。径 120 cm 以上 × 176 cm、深さ 57 cm 以上を測る。土層断面の精査から、近世後期の盛土 (II 層) を切り込んで掘削されているが、一気に埋め立てられた後、導水管石管の辰巳用水 SD01 が設置されたと考えられる。

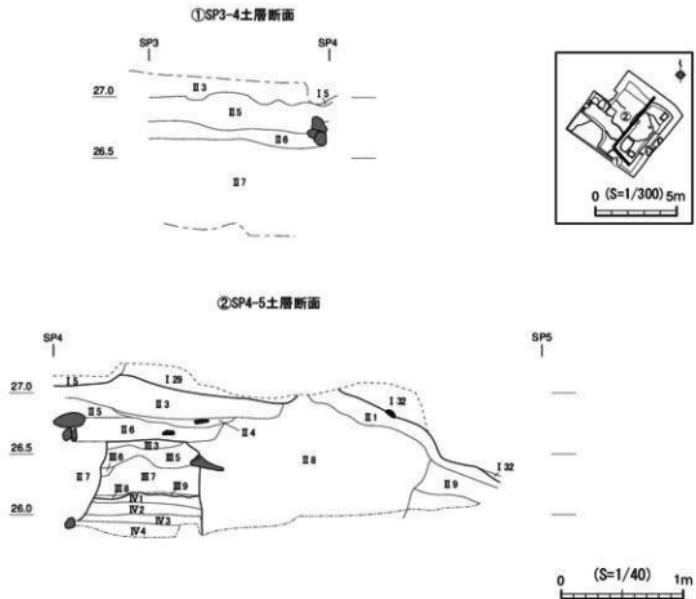
①2006-1 地点平面図



②SP1-2 土層断面



第120図 南岸調査区 2006-1地点 平面図 (S=1/80)、土層断面図 SP1-2 (S=1/40)



③SP1-2・SP3-4・SP4-5土層注記

I層	近世初期造成土
II層	埋瓦色粘質土 植物根莖質多く混入【明治の年に埋立直前】いもり表土層】
III層	褐色砂質土 【既に用ひられた瓦上等を被る】
IV層	褐色色粘質土 細粒灰白色土【既に用ひられた瓦上等を被る】
V層	褐色色粘質土 【既に用ひられた瓦上等を被る】
VI層	褐色色粘質土 5cm～20cm程度の石、礫塊瓦合む【既に用ひられた瓦上等を被る】
VII層	褐色色粘質土 【既に用ひられた瓦上等を被る】
VIII層	褐色色粘質土 径1～20cmの石混入【E801土層】
IX層	褐色色粘質土
X層	褐色色粘質土 粗砂・堆土・植物腐葉質混入
XI層	褐色色粘質土 径5～10cmの小石多く混入
XII層	褐色色粘質土
III層	近世中期造成土
IV層	灰色色砂質土
V層	埋瓦色粘質土 植物根莖質多く混入
VI層	【昭より古】時期のいもり表土層】
VII層	褐色砂質土
VIII層	灰色砂質土 径10cm程度の小石含む
IX層	褐色色粘質土
X層	褐色色粘質土
XI層	褐色色粘質土 5cm大の小石含む
XII層	褐色色粘質土 植物根莖質含む
XIII層	埋瓦色粘質土 植物根莖質含む

IV層：近世初期造成土
 IV1 青灰色細砂
 IV2 濁青灰色粘土 非常に硬くしまる 径2cmの大いな小石多く混入 IV1層との境目に
 厚く埋め青灰色粘土層あり
 IV3 灰色細砂 硬くしまる 粘土ブロック・粗砂混入
 IV4 灰色細砂 砂質土

第121図 南岸調査区 2006-1 地点 土層断面図 SP3-4・SP4-5 (S=1/40) 土層注記 SP1-2・SP3-4・SP4-5

2008 地点

(1) 概要（第 109・110・122～125 図）

本調査地点は、南岸調査区の東端に位置し、調査地点を北端から A～H（A 区：延長 3.2 m、B 区：延長 2.2 m、C 区：延長 1.3 m、D 区：延長 2.0 m、E 区：延長 1.0 m、F 区：延長 2.1 m、G 区：延長 1.2 m、H 区：延長 4.0 m）に区分し、調査を実施した。いもり堀南側では、本報告の南岸調査区のほか、平成 15・16・19・20・24 年度に県埋文センターによる堂形調査区の発掘調査が行われた〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c〕。本地点の D 区南部～H 区北端は県埋文センター平成 15 年度 I 区の BC 1・2 区と重複している。また、堂形調査区の調査成果から、戦国時代末期～江戸時代初期に存在した屋敷地区画溝・畠地・堀などの遺構が、慶長～元和年間（1595～1624）の堂形造成、および寛永 8（1631）年の大火を契機とした堂形地区の改変により廃絶したことが判明している。

調査地点北部は遺構の残りが良く、近世初期～後期の遺構を検出した。南部は削平を受けている部分が多く、主に近世前期以前の遺構を検出した。調査地点全体では、大別層 I～V 層を確認した。また、近世層を近世初期（～寛永大火（寛永 8 年（1631）））（IV 層）、寛永大火後～宝曆大火（宝曆 9 年（1759））（III 層）、宝曆大火後（II 層）の 3 段階に分類したが、各段階で複数の遺構面が検出されており、近世後期（宝曆大火後）の II 層について、II a～II d 層をそれぞれ基盤とする 4 面（Ia～I d 面）、近世前期（寛永大火～宝曆大火）の III 層について、III a 層・III b 层をそれぞれ基盤とする 2 面（2a・2b 面）、近世初期（～寛永大火）の IV 層について、IV a 層～IV d 層をそれぞれ基盤とする 4 面（3a～3d 面）を確認した。

(2) 遺構

① Ia 面（II a 層上面）の遺構

いもり堀（第 124 ①・126・127・135 図）

A 区北側で、明治 40 年に埋め立てられたいもり堀の南岸を検出した。瓦および陶磁器の出土が見られた。

② Ib 面（II b 層上面）の遺構

SD01（第 124 ①・126・127・135 図）

B 区で検出した北西～南東方向に延びる溝状遺構。幅 96～116 cm、深さ約 45 cm を測る。掘方内部から凝灰岩製の石管を 3 本分検出しておらず、辰巳用水の導水管と判断される。石管の断面形は方形で、全体を検出できた中心の石管の計測値は、1 辻 40 cm、長さ 114 cm を測る。また、確認できた石管上面及び側面には、細長く深い斜め方向のノミ加工と、それに直行したまばらに細い線状のノミ加工が施されており、各石管の上面端部（小口から 4～9 cm の中央部）に、石管の連結を強固にする締め合せのための長辺 3～4 cm、短辺 3 cm、深さ約 3 cm の平面長方形の穴があけられていた。石管の縦目は松脂状のもので接着されていた。また、縦目の下には沈下防止の敷石が置かれていた。敷石の計測値は、北西側で検出したものが長さ 60 cm、幅（北側）38 cm、幅（南側）43 cm、厚さ 17 cm、南東側で検出したものが長さ 67 cm、幅（北側）43 cm、幅（南側）31 cm、厚さ（北側）18 cm、厚さ（南側）20 cm 以上を測る。石管・敷石の下から玉石敷を検出した。当初、石管に伴うものと考えたが、壁面の土層断面の精査から、掘方に含まれておらず、その下の SK03 の一部であることが判明した。

なお、辰巳用水の導水管については、当初木製だったものが、天保 12（1841）頃以降、金屋石（凝灰岩）製石管に替えられていることから〔石川県金沢城調査研究所 2016b〕、この石管も当該期に設置されたと考えられる。

P01（第 124 ①・137 ① 図）

A 区北側で確認したピット。掘方の北側はいもり堀に切り込まれていた。平面椭円形と推定され、

長径 34 cm 以上、短径 25 cm、深さ 4 cm を測る。

③ 1c 面 (II c 層上面) 形成以後の遺構

P02 (第 124 ②・126・127・135・137 ②図)

B 区で北半部を検出したビットで、平面橢円形ないし略円形と推定され、長径 68 cm、短径 26 cm 以上、深さ 23 cm を測る。周辺および埋土の状況から上部が削平されているとみられ、1c 面の形成以後に本遺構が掘り込まれたと判断した。

④ 1c 面 (II c 層上面) の遺構

SD02 (第 124 ②・126・127・135・137 ②図)

A 区北側で検出した北西 - 南東方向に延びる溝状遺構で、SD03 と平行する。幅 27 ~ 52 cm、深さは深いところで 20 cm 程度を測り、東から西にかけて浅くなる。埋土中に宝曆大火（宝曆 9 年（1759））由来とみられる焼土・焼けた鉛が付着する石を多く含むが、基盤となる II c・d 層中の遺物が混入したものと考えられる。

SD03 (第 124 ②・126・127・135 図)

A 区南側で検出した北西 - 南東方向に延びる溝状遺構で、SD02 に平行する。幅 50 ~ 60 cm、深さ 30 ~ 40 cm を測る。掘方北壁付近で棒状の木材を検出した。木材のほとんどは腐っており、原形をとどめていないが、近世後期の絵図との対比から、木樋を導水管とする辰巳用水掘方と考えられ、当該木材が木樋の一部である可能性がある。また、溝底面に長径 24 cm 以上、短径 18 cm の平らな河原石が見られた。木樋の沈下防止のための敷石の可能性がある。磁器染付壺（P137）や鉄製品などが出土している。

⑤ 1d 面 (II d 層上面) 形成以後の遺構

SK03 (第 122・126・127・135 図)

A 区南端～B 区にかけて検出した。調査当初は A 区 SK05 と B 区 SK03 の別遺構としてとらえていたが、その後の検討により同一遺構であることが判明した。本遺構は、辰巳用水石管掘方（SD01）の下で検出され、A 区側から B 区側の石管南側へと展開する。SD01 石管の下にある栗石集中部分が石管掘方に含まれないことから、本遺構の一部と考えられる。また、辰巳用水（木樋）SD03 との関係から、SK03 → SD03 → SD01 という順で変遷したと考えられる。出土遺物には、19 世紀以降のものが含まれる。遺構は 2a 面で確認したが、上部が上面遺構により搅乱されているとみられること、および出土遺物の様相から、II d 層の堆積以後に本遺構が掘り込まれたと考えられる。

⑥ 2a 面 (III a 層上面) の遺構

SD05 (第 122・126 ~ 128・135・136 図)

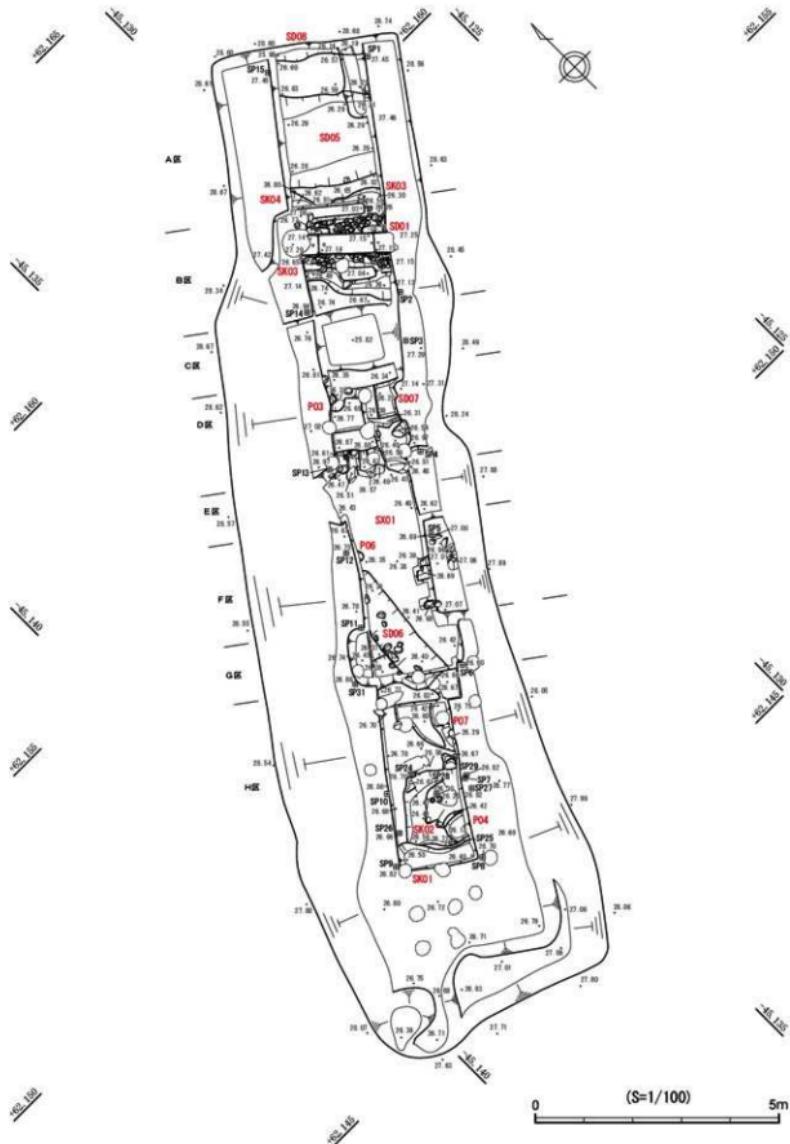
A 区中央部で検出した北西 - 南東方向に延びる溝状の遺構。幅は 160 ~ 190 cm、深さは 23 ~ 53 cm を測る。埋土には 18 世紀中頃以前の遺物を含み、焼土や炭化物の混じりは著しくないものの、宝曆大火を契機として埋め立てられたと判断した（II d 層）。また、遺構確認面は、南から北にむかって傾斜していた。

SD08 (第 122・126 ~ 128・135・136 図)

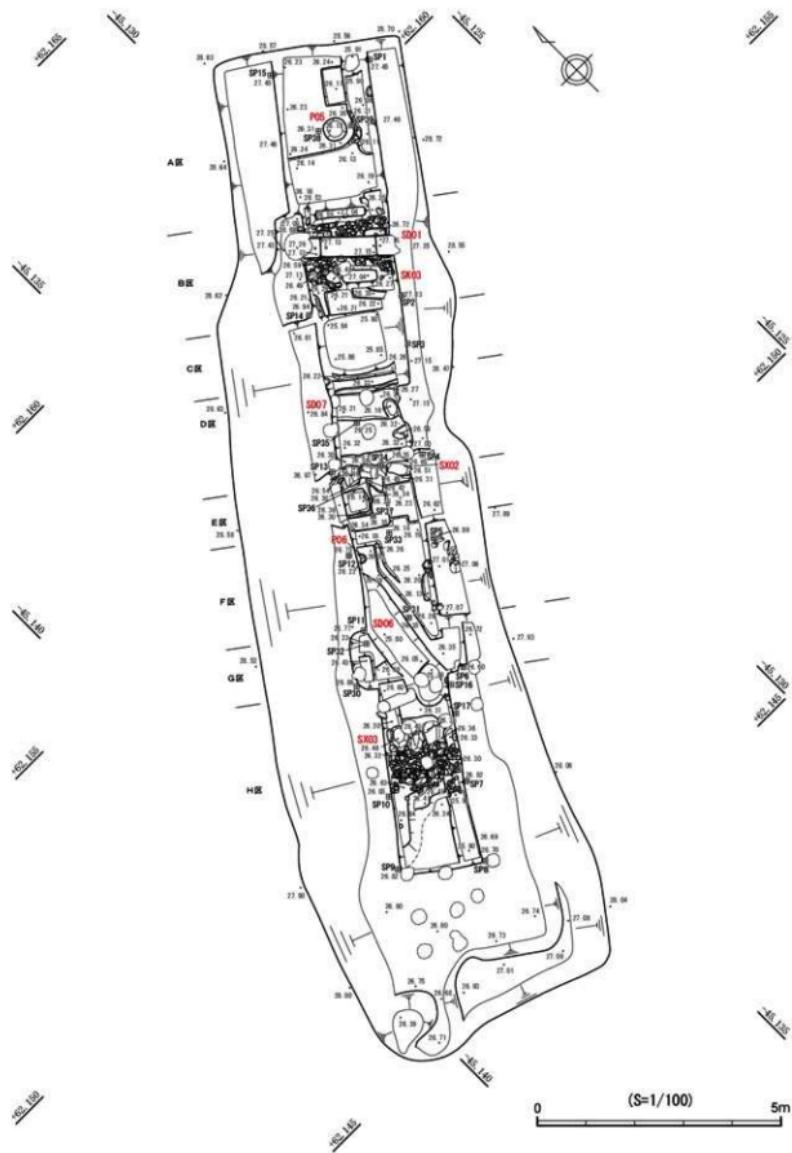
A 区北端で北西 - 南東方向の溝状の遺構とみられる遺構の南肩部を検出したが、その大半は調査区外に延びているため、詳細は不明である。遺構埋土は粘性が非常に強い黒褐色粘質土で、出土遺物には木片が見られた。近世前期段階のいもり堀の可能性がある。

SK04 (第 122・126・135・136 図)

A 区南側で検出した土坑だが、調査区壁面と A・B 区境のアゼに重複しており、部分的な検出にとどまる。長径 46 cm 以上、短径 32 cm 以上、深さ 18 cm を測る。SK03 に切られる。

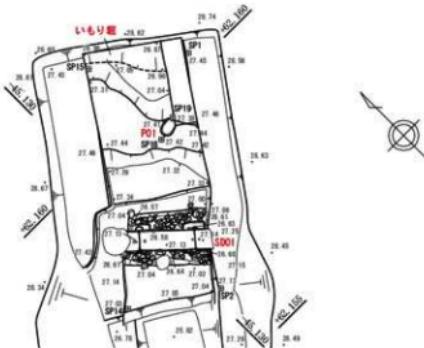


第122図 南岸調査区 2008地点 平面図1 (2a ~ 3b面) (S=1/100)

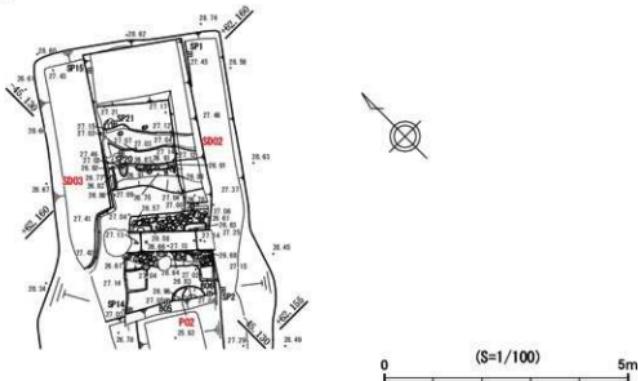


第123図 南岸調査区 2008地点 平面図2 (3c・3d面) (S=1/100)

①A・B区 1b面 遺構図



②A・B区 1c面 遺構図



第124図 南岸調査区 2008地点 平面図3 (A-B区 1b・1c面) (S=1/100)

⑦2b面(Ⅲb層上面)の遺構

SD04 (第125①・126・131図)

H区を南北方向に貫く溝状の遺構。幅11~29cm、深さ5~9cmを測る。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、ここでは2b面の遺構として報告する。

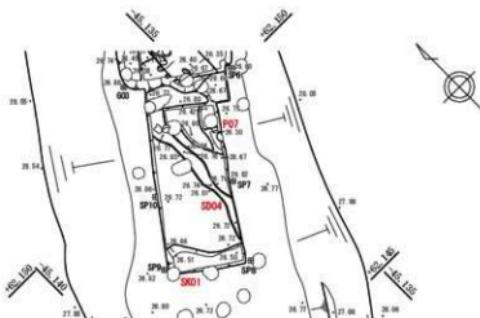
SK01 (第122・125①・126・131~133図)

H区南端で北側の肩を確認した。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、ここでは2b面の遺構として報告する。調査範囲外に延びており、詳細は明らかでないが、長径154cm以上、短径57cm以上、深さ30cm以上を測る。

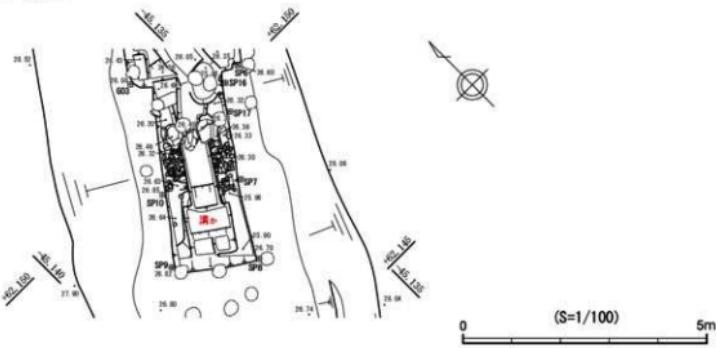
SX01 (第122・126・129・130・134図)

D~H区にかけて検出した。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、

①H区2b面 遺構図



②H区4面 遺構図



第125図 南岸調査区 2008地点 平面図4 (H区2b・4面) (S=1/100)

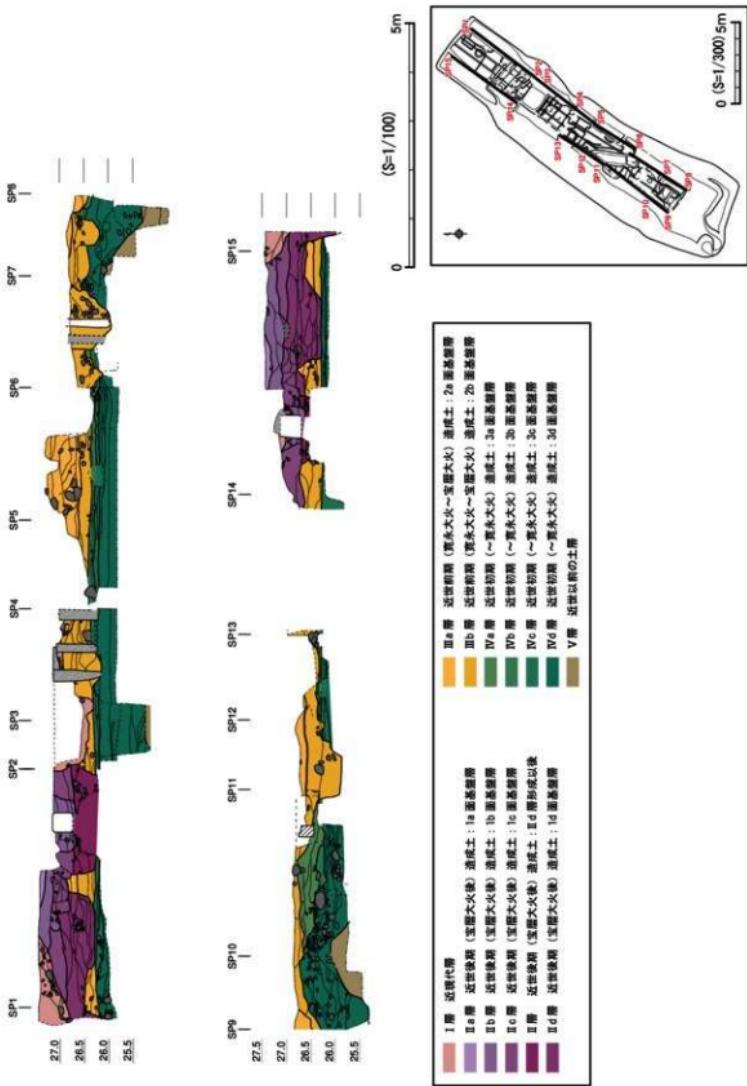
ここでは2b面の遺構として報告する。平成15年度に県埋文センターが調査した池状遺構SX01と同じ遺構である。平面椭円形の落込み状を呈し、長径5.2m、短径4~5m、深さ40~50cmを測る。北肩に礫が集中して検出されている。下~最下層にかけて、粘土化した木質および腐植土、木片・木屑が集中して検出されている。木製品が多く出土したほか、被熱した陶器皿(P141)なども出土している。

P03(第122図)

D区北側で一部を検出した。平面形は略円形ないし楕円形と推定される。径25cm以上、深さ30cmを測る。上部で径20cm程度の礫を複数検出した。

P07(第122・125①・126・131図)

H区北側の東壁際で遺構の西部を検出した。周辺の状況から掘り込み面が削平されている可能性も否定できないが、ここでは2b面の遺構として報告する。東壁土層で確認した径は130cm、深さは85cm以上を測る。掘方内の土は礫などがランダムに入り、遺構の掘削土をそのまま埋め戻したものとみられる。また、掘方内で杭あるいは柱とみられる断面円形の径14~17cmの丸太状の材を検出した。



第126図 海岸調査区 2008地点 土層大別図 (S=1/100)



I層 近現代

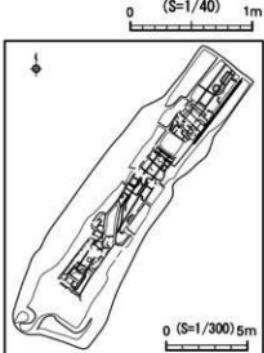
- 1 植生土
 - 2 10YR4/2 黄褐色（やや黄色が強い）砂質土 厚2~5cm範囲含む しまりやや強 粘性なし
【別治のいり屋根立土】
 - 3 2.5Y5/2 黑褐色粘土～砂質土 厚3~5cm少量含む しまり強 粘性ややあり
【別治のいり屋根立土】～西壁1層
 - 4 10YR4/2 灰黃褐色粘土～砂質土 やや粘性強 鉄分を斑状に含む 塩化物粗粒、白色粒子、黃白粒子少量含む しまり強 粘性あり【明治40年いり屋根立土】～西壁14層
 - 5 10YR4/1 黑褐色土 厚3cm位、白色粒子少量含む しまりやや強 粘性あり
【別治のいり屋根立土】
 - 6 10YR4/2 黑褐色粘土土 塩化物少量含む 厚0.2cm程の砂利を斑状に含む しまりやや強
筋状やや強 【明治40年いり屋根立土】～西壁1層
 - 7 10YR4/2 黑褐色粘土～砂質土 厚5cm程の砂利を中量含む (16層
より上) しまりやや強 粘性あり【明治40年いり屋根立土】～西壁1層
 - 8 10YR4/3 喀斯特岩～砂質土 喀斯特をわずかに含む 厚0.5cm少量含む しまり強 粘性あり
【別治のいり屋根立土】
 - 9 2.5Y5/2 黑褐色粘土土 塩化物粗粒少量含む しまりより 强 粘性強
【別治のいり屋根立土】
 - 10 2.5Y5/2 黑褐色粘土土 喀斯特灰岩土ブロック (2.5Y4/2) を少量含む 塩化物粗粒少量含む
砂質土少量がばら斑状に含む しまりより 强 粘性強 【明治40年いり屋根立土】
- 表I層 10層 粘性が弱く腐殖物が多い

II層 近世後期（宝暦大火後）造成土

- 1a層 土 厚1cm位、純土粒子、炭化物粒子少量含む 黄褐色粘土を部分的に含む
しまり強 粘性なし～西壁1層

IIb層 近世後期（宝暦大火後）造成土・埋積土

- 1b層 10YR4/3 黑褐色粘土～砂質土 砂質土 厚0.3~1cm程中量含む 塩化物粗粒・焼土粗粒中量含む
0.5cm纖維多量含む しまり強 粘性なし～西壁1層
- 1b層 10YR4/3 にじる黄褐色粘土～砂質土 砂質土 烧土粒子を多く含む 塩化物粗粒含む しまり強 粘性あり【SD01浜田用水石管層方理土】
- 1b層 10YR4/2 灰褐色粘土～砂質土 烧土粒子を多く含む 塩化物粗粒含む しまりやや弱 粘性あり【SD01浜田用水石管層方理土】
- 1b層 10YR4/3 喀斯特岩～砂質土 烧土粒子を多く含む 塩化物粗粒少量含む しまりやや強 粘性なし～西壁1層
- 1b層 10YR4/3 黑褐色粘土～砂質土 砂質土 厚3cm位の後壁の裏側 烧土粒子・純土粒子少量含む しまりやや強 粘性なし～西壁1層
- 1b層 10YR4/3 黑褐色粘土～砂質土 砂質土 厚3cm、焼土粒子・純土粒子少量含む 黄褐色土と灰色をそれぞれ呈した新質土・砂質土がマーブル状に混ざる
しまり強 粘性なし～西壁1層
- 1b層 2.5Y5/2 黑褐色粘土 厚0.2~0.3cm量含む しまりより 强 粘性なし～西壁1層
- 1b層 10YR4/3 黑褐色土 厚0.5~1cm黄色土ブロック (7.5Y6/6) を少量含む (焼か?) 厚0.5cm細小、炭化物粗粒・焼土粒子中量含む しまりやや強 粘性なし～
[SD02土層]～西壁1層
- 1b層 10YR4/3 黑褐色土 上層で見られた焼土ブロックの粒子を少量含む 烧土粒子、炭化物粒子中量含む しまりやや強 粘性あり【SD02土層】



IIc層 近世後期（宝暦大火後）造成土・埋積土

- 1c層 10YR4/2 黑褐色粘土土 厚0.5~1cm炭化物ブロック・炭化物粒子少量含む しまりやや強 粘性あり【SD03浜田用水木桶層方理土】～西壁IIc層
- 1c層 10YR4/3 黑褐色粘土～砂質土 厚0.5cm位少量含む 烧土粗粒少量含む 塩化物粗粒量含む しまりやや強 粘性なし
[SD03浜田用水木桶層方理土]～西壁IIc層
- 1c層 10YR4/2 黑褐色粘土土 (10YR4/6) を少量含む しまりやや強 粘性なし～西壁IIc層
- 1c層 10YR4/2 黑褐色粘土～砂質土 烧土粒子・喀斯特化粒子少量含む しまりやや強 粘性あり【SD03浜田用水木桶層方理土】
- 1c層 2.5Y5/3 喀斯特岩～砂質土 烧土粒子、炭化物粒子少量含む しまりやや強 粘性なし～西壁IIc層
- 1c層 10YR4/2 黑褐色粘土～砂質土 (2.5Y4/2) を微量に含む しまり強 粘性なし～西壁IIc層
- 1c層 2.5Y5/3 喀斯特岩～砂質土 烧土粒子、炭化物粒子少量含む しまりやや強 粘性なし～西壁IIc層
- 1c層 10YR4/2 黑褐色粘土～砂質土 烧土粒子、粘土を主体とする 喀斯特土 (10YR4/2) を厚3cm程のブロック状に中量含む 黄褐色土ブロック (10cm)
少量含む 船付粒子含む しまり強 粘性なし
- 1c層 10YR4/3 黑褐色粘土～砂質土 厚2cm位少量含む 厚2cm程多量含む 鉄分を斑状に含む しまり強 粘性あり
- 1c層 10YR4/2 灰褐色粘土～砂質土 粘土質土 厚2cm程少量含む 厚0.5cm程中量含む 烧土粒子少量含む 塩化物粗粒少量含む しまり強 粘性ややあり
～西壁IIc層

IId層 近世後期（宝暦大火後）構造埋土

- 1d層 2.5Y5/1 黑褐色粘土～砂質土 日晝よりやや粘性が増す 厚10cm程の繊に含む 繊の周囲には暗褐色の粘土が多い しまり強 粘性あり【SK03埋土】
～西壁IId層

IIe層 1層より砂質地 壱色から【SK03埋土】

- 1e層 2.5Y5/1 黑褐色粘土～砂質土 (粘質が強い) 白色粒子少量含む しまり弱 粘性強【SK03埋土】～西壁IIe層
2. 2.5Y5/3 喀斯特岩～砂質土 砂質土 厚2cmの幾少量含む しまり強 粘性なし～【SK03埋土】
3. 2.5Y5/3 喀斯特岩～砂質土 砂質土 上層と比べて繊が少なく密 繊分もあまりない しまり強 粘性あり【SK03埋土】
4. 2.5Y5/1 黄褐色 (2.5Y5/2) 喀斯特岩～砂質土 烧土岩～喀斯特土を斑状に含む しまりより 强 粘性あり【SK03埋土】
5. 2.5Y5/2 黑褐色土 厚5cm位、砂質土 粘土質土 厚5cm位少量含む 砂粒を斑状に含み細く堆積 しまりやや弱 粘性あり【SK03埋土】
6. 噴灰黄色 (2.5Y4/2) (・) 噴灰黄色 (10YR4/1やや弱) 砂質土 (底土) 厚1cm以下の中層多く混じる 本片混じる 黄褐色砂礫ブロック (2.5Y5/4)
特徴的燒成土 ARX側の埋土はあまり紅いてないが、底部付近では粘性の強い砂礫になる点が少しう似ている【SK03埋土】

第127図 南岸調査区 2008地点 土壌断面図 SP1-2 (S=1/40)

- H d層** 近世後期（宝曆大火後）造成土・構造土
 H d1 10W3/3 黒褐色粘質～砂質土・炭化物粒子・燒土粒子少數含む 径0.5cm小範囲中量含む しまりあり 粘性強
 H d2 10W4/2 黒褐色粘質土・砂質土 黃褐色（2.5W/3）砂土ブロック（径1cm）多量含む 燃土粒子中量含む 炭化物粒子少量含む しまり極強
 H d3 10W4/3 墓地色粘質～砂質土 砂質土 燃土粒子中量・炭化物粒子少量・径1cm小範囲少數含む しまり強 粘性なし～西壁II d層
 H d4 2.5W/3/1 黒褐色粘質～砂質土 粘性強 径0.5cm範囲中量・径3cm範囲少數・オリーブ褐色土（2.5W/3）を斑状に含む 炭化物粒子・焼土粒子少量含む しまりあり 粘性やや強～西壁II d層
 H d5 10W3/3 黒褐色粘質土 径0.5cm中量含む しまりやや弱 粘性強～西壁II d層
 H d6 10W4/2 黒褐色粘質～砂質土 砂質土 II層と同様だが繊維少なく粘性が増す しまり弱 粘性強～西壁II d層
 H d7 10W3/2 黑褐色粘質土・燒土粒子・炭化物粒子少數含む しまりやや強 粘性強 [SD05理土]～西壁II d1層
 H d8 10W4/2 黑褐色粘質土 砂質土 径2cm範囲・径0.5cm範囲多量含む 多様な色調の砂粒と斑状に含む しまり強 粘性なし [SD05理土]～西壁II d12層
 H d9 10W4/2 黑褐色粘質～砂質土 砂質土 径2～5cm範囲多量含む・焼土粒子少數含む（10W4/1）やぶい黒褐色砂質土（10W5/4）を部分的に含む しまり強 粘性なし [SD05理土]～西壁II d12層
 H d10 10W4/2 黑褐色粘質土 砂質土 II層と同様に斑状に含む 径1cm範囲多量含む 黑褐色の砂質土主体 しまりやや弱 粘性なし [SD05理土]
 H d11 2.5W/2 黑褐色粘質土 径2cm範囲中量 多様な色調の砂粒と主体とする 径0.5cm中量含む しまりやや強 粘性なし [SD05理土]～西壁II d17層
 H d12 2.5W/2 黑褐色粘質土 烧土粒子が少數く砂質土主体 しまりやや強 粘性なし [SD05理土]
 H d13 10W4/1 黑褐色粘質～砂質土（2.5W/1） 黑褐色の砂を斑状に含む 燃土粒子微量含む しまり強 粘性やや強 [SD05理土]
 H d14 2.5W/2 黑褐色粘質土・焼土粒子 黃褐色粘土を部分的に含む 燃化物粒子・焼土粒子中量含む しまり強 粘性やや強 [SD05理土]
 H d15 2.5W/2 黑褐色粘質土 しまりやや弱 粘性なし [SD05理土]
 H d16 2.5W/2 黑褐色粘質土 シルトが無い 鉄分を斑状に含む 橙色（10W4/4）砂を斑状に含む II d15層より砂が密に堆積 しまりやや弱 粘性なし [SD05理土]～西壁II d19層
 H d17 10W3/2 黑褐色粘質土 径0.5cm中量含む 鉄分を斑状に含む しまり強 粘性なし [SD05理土]～西壁II d20層
 H d18 2.5W/2 黑褐色粘質土 2.5W/2の堆積量は黄褐色土を斑状に含む 本片などの腐殖化を含む しまりあり 粘性極強 [SD08理土]～西壁II d21層

H a層 近世前期（寛永大火後～宝曆大火）造成土
 H a15 2.5W/2 黑褐色粘質～砂質土 径0.2～0.5cm範囲中量含む 燃化物・焼土粒子微量含む しまりやや強 粘性ややあり～西壁III a層
 H a16 2.5W/2 黑褐色粘質～砂質土 やや砂質土 上層に比べて灰白色粒子が斑状に含む しまり強 粘性なし～西壁III a層
 H a17 2.5W/3 黑褐色粘質～砂質土 燃土粒子・炭化物粒子微量含む しまりやや弱 粘性なし
 H a18 2.5W/3 オリーブ褐色土～2.5W/2 黑褐色粘質土・オリーブ褐色土 黑褐色を斑状に含む 本片などを含む しまりあり 粘性やや強～西壁III a層
 H a19 2.5W/2 黑褐色粘質土 燃化物粒子微量含む しまりやや強 粘性強
 H a20 2.5W/2 黑褐色粘質～砂質土 砂質土 黃褐色（10W4/2）砂質土を部分的に含む しまりやや弱 粘性あり

H b層 近世前期（寛永大火後～宝曆大火）造成土
 H b4 10W3/3 黑褐色粘質～砂質土 径0.5cm中量含む 燃土粒子中量含む 燃化物粒子少量含む しまりあり 粘性強～西壁III b層
 H b5 10W5/6～7/2 開削へ～黒褐色粘質土
 H b6 10W4/1 染（青色）色砂質土 全般的には青色、青色の粘土（5W6/1等）混じる黒灰色がかる
 H b7 2.5W/2 黑褐色粘質土・2.5W/2 深灰褐色粘質土 黑褐色粘土と暗灰黃色粘土が二層状に混ざり合う 燃土粒子微量含む しまりあり 粘性極強～西壁III b層
 H b12 2.5W/2 黑褐色粘質土 径0.2cm範囲少數含む しまりあり 粘性極強～西壁III b12層

H c層 近世初期（～寛永大火）造成土
 H c1 2.5W/2 墓地色粘質土 砂質土 主わめて繊細か密に堆積 しまり強 粘性なし～西壁IV c3層
 H c2 2.5W/2 墓地色粘質土・細い砂質土主体 径2cm範囲少數含む 全般的に鉄分が多く含み赤く変色している しまり強 粘性なし～西壁IV c5層
 H c3 2.5W/1 黑褐色粘質土 しまり強 黏土あり
 H c4 2.5W/2 黑褐色粘質土・2.5W/1 黑褐色粘質土・砂質土を主体とする 鉄分を斑状に含む しまり強 粘性あり
 H c5 2.5W/2 黑褐色粘質土 しまり強 黏土あり
 H c6 2.5W/2 オリーブ色粘質土・細い砂質土主体 径5～10cm範囲含む 径0.5cm範囲・砂を主体とする 鉄分を斑状に含む しまり強 粘性あり

H d層 近世初期（～寛永大火）造成土
 H d1 2.5W/2 墓地色粘質土 鉄分を斑状に含む 非常に硬く堅くなっている IV d2層に比べると砂がややいたい部分と密な部分とに分かれている しまり極強
 H d2 2.5W/2 黑褐色粘質～砂質土 径0.2～0.5cm範囲中量含む 白色粘土少量含む 燃化物粒子・焼土粒子微量含む しまりやや弱 粘性強
 H d3 2.5W/2 墓地色粘質～砂質土 燃土粒子少量含む 燃化物粒子少量含む しまりやや強 粘性強
 H d4 2.5W/2 墓地色粘質～砂質土 上層と颗粒するが上層より密 しまりあり 粘性やや強
 H d5 2.5W/2 墓地色粘質～砂質土 粘性強 黄褐色（2.5W/1）を部分的に含む 燃化物粒子少量含む しまりやや強 粘性強
 H d6 2.5W/2 黑褐色粘質土 しまり強 黏性なし
 H d7 10W5/1～4/1 黑褐色シルト 均質化黄土 3面構成層よりやや灰褐色強め、粘土組成
 H d11 褐泥じり層 2.5G4/1 褐泥じり層

第128図 南岸調査区 2008地点 土層注記 SP1-2

出土遺物は遺構の掘削土（寛永大火（寛永8年（1631）片付層）からの瓦が殆どを占める。

③a面（IV a層上面）の遺構

SK02（第122・126・131・137④図）

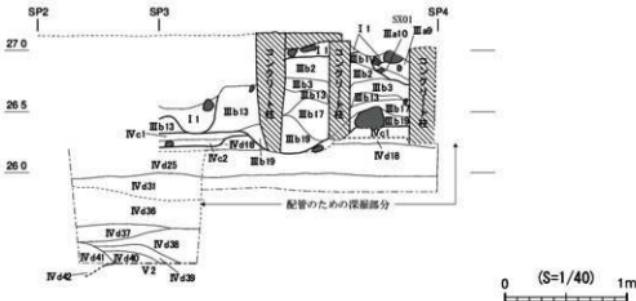
H区南側で検出した。遺構南東部が調査範囲外に延びているため、全形は明らかでないが、北東部は平面角丸長方形状を呈する。長軸156cm、短軸125cm以上、深さ46cmを測る。SK01およびP04に切られる。植栽痕とみられる。

P04（第122・126・131図）

H区南側で検出した。調査範囲外に延びているため、遺構平面形は明確ではないが、梢円形か。長径55cm以上、短径50cm、深さ54cmを測る。壁面の土層観察から、SK02が黒褐色土で埋められた後に掘削されたとみられる。

③b面（IV b層上面）の遺構

SD06（第122・123・126・131・134①・138①②図）



I層 近現代層
II層 塵埃

IIIa層 近世前期(寛永大火後~宝曆大火) 遺構埋土

IIIa9 537/2 オリーブ色(暗青灰褐色~黒褐色) 砂質土【S301埋土】

IIIa10 2.573/2 増粘~黒褐色粘質土 増黄褐色~暗灰色砂質土プロック混じりモザイク状 主体は木片起源の腐植質土【S301埋土】

IIIb層 近世前期(寛永大火後~宝曆大火) 遺構埋土・遺構土

IIIb2 2.574/2 黒褐色~青灰褐色砂質土 わずかに青白色を含む

IIIb3 10YR3/2 黒褐色粘土 岩片・赤色鉄多量に混じる 径0.1~0.2cmの小繊維が主体

IIIb5 10YR3/2-2/2 黑褐色粘質土 粘土質 土色赤多量に混じる IIIb3層に比べ粘性強

IIIb7 10YR5/1-1/2-2/3 黒褐色~灰黄褐色粘質土 細い黄褐色土しみと共に底に混じる

IIIb17 2.574/2 増灰黄色粘質土 繊少量混じる

IIIb19 537/2-4/2 深くオリーブ色粘質土 増化すると増粘黄色(は、IVa/2)に近くなる 均質

IVc層 近世初期(~寛永大火) 造成土

IVc1 砂層

IVc2 塵埃・暗褐色土層

IVd層 近世初期(~寛永大火) 造成土

IVd8 青灰色粘質土 しまり無 3d上部にある

IVd25 2.5G04/1 増オリーブ色砂質土 (3d面構成層下部) 硬くしまった部分ともろい部分がラミナ状に構成される 明瞭な縫隙は引いたり切られた等ではない

IVd31 10Y4/1 暗褐色~黒褐色 繊維質土層 繊維質土層の上部には、もろい砂質土が堆積し、その下に纖維層として発達する【纖維層】

IVd35 2.5Y1/2-3/2 増灰黃~黒褐色砂質土 増粘質土系の粘土質 粘性強

IVd37 537/2 オリーブ色粘土 粘土質 土色赤多量に混じる

IVd39 537/2 オリーブ色粘土 粘土質 土色赤多量に混じる

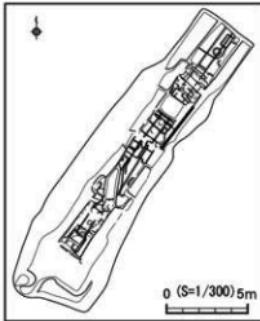
IVd40 537/2 黑褐色粘土 粘土質 土色赤多量に混じる 粘性強=IVd37層

IVd41 537/2 黑褐色粘土 粘土質 土色赤多量に混じる 粘性強

IVd42 537/2 黑褐色砂質土 増粘質土系の粘土質 粘性強

V層 古代包含層

V2 10YR4/1~2.574/1 黑褐色~黄褐色粘土 均質



第129図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP2-4 (S=1/40)

F~H区北部にかけて検出された、南北方向に延びる溝状の遺構。幅約80cm、深さ約60cmを測る。埋土中に焼けた瓦や壁が含まれる。溝底レベルを見ると、南から北へ緩く下っていたようである。焼瓦のほか、漳州窯産とみられる磁器染付皿(P140)が出土している。

P06 (第123・126・134④図)

F区の西壁際で検出したが、調査範囲外に延びており、平面形は梢円形ないし略円形と推定される。長径19cm、短径14cm以上、深さ12cmを測る。

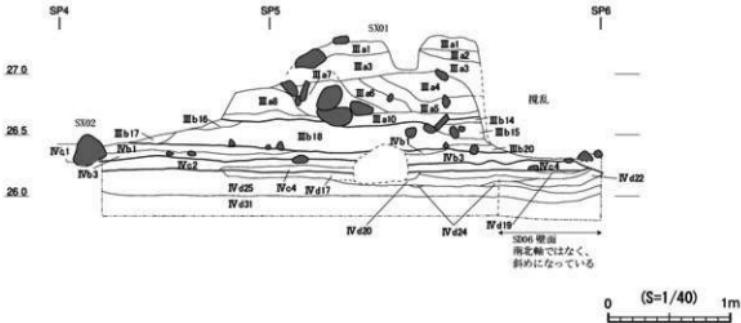
⑩3c面(IVc層上面)の遺構

SD07 (第123図)

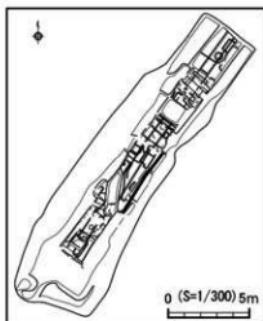
D区で検出した北西~南東方向の溝状の遺構。幅59~75cm、深さ10cm内外を測る。

SX02 (第123・126・130・134①・138③④図)

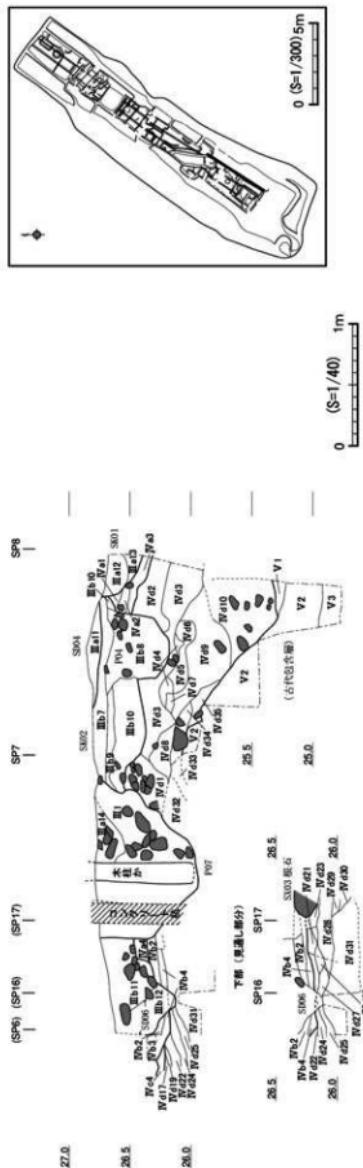
D区南端~E区北端にかけて、北西~南東方向に延長約1.4m(4石)を検出した石列で、戸室石の割石および自然石と河原石から構成されていた。面はいもり堀側を向く。前面掘方はIVc層上面から掘り込まれていた。



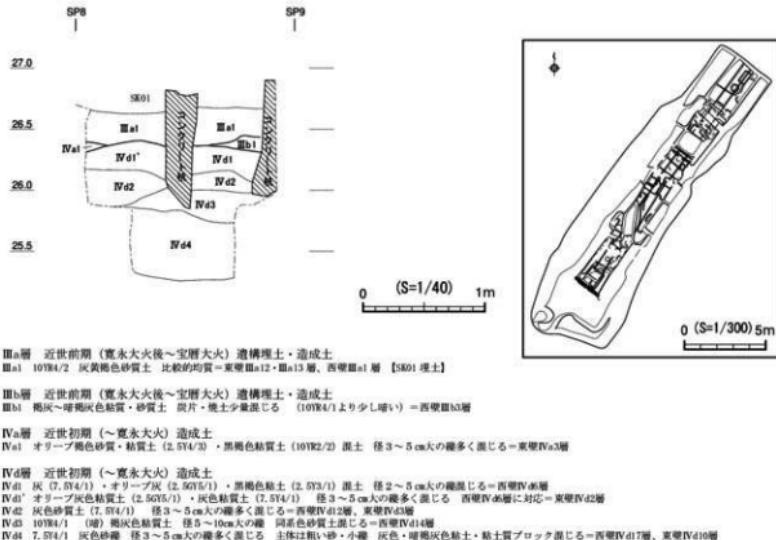
- | | |
|--------|---|
| IIIa層 | 近世前期（~寛永大火~宝蔵大火）構造壁・造土成土 |
| IIIa1 | 10M8/4-2 黄褐色粘土質砂質土 岐阜県文化センター平成15年度調査Ⅰ【KS301】中央アゼ1層に対応か |
| IIIa2 | 10M8/4-2 黄褐色粘土質砂質土 岐阜県文化センター平成15年度調査Ⅰ【KS301】中央アゼ2層に対応か |
| IIIa3 | 黄褐色～オーブル褐色粘土質砂質土 下段の砂質土層に特徴性異なる 岐阜県文化センター平成15年度調査Ⅰ【KS301】中央アゼ6層に対応か【無地盤層】 |
| IIIa4 | 2. 5M4/4-4 黄褐色～オーブル褐色粘土質砂質土 岐阜県文化センター平成15年度調査Ⅰ【KS301】中央アゼ6層に対応か |
| IIIa5 | 2. 5M5/4-4/4 黄褐色～オーブル褐色粘土質砂質土 IIIa4層に比して砂質強度・明るい調色 径2~5cm大塊多く混じる 【KS301埋土】 |
| IIIa6 | 10M8/4-2 黄褐色粘土質砂質土 IIIa4層と類似するが砂質弱い 色暗調、径2~5cm大塊多く混じる 【KS301埋土】 |
| IIIa7 | 2. 5M5/4-4/4 黄褐色～オーブル褐色粘土質砂質土 基本構成はKS301と同様だが、径2~10cmの大塊(岐阜県文化センター平成15年度調査Ⅰ【KS301東端の配石】)が混じる |
| IIIa8 | 10M8/4-2~4 黄褐色～にほい黄褐色粘土質土 IIIa4・IIIa5層と類似するが赤褐色・片岩若干混じる 【KS301埋土】 |
| IIIb層 | 木片層 黑褐色 (10M8/4) 部置質土・板状・板層で構成される 西堀山a2層に対応【KS301最下層】 |
| IIIb1層 | 近世前期（~寛永大火~宝蔵大火）造土成土 |
| IIIb1a | 10M8/5/4 黄褐色粘土質砂質土 |
| IIIb1b | 2. 5M4/4 黄褐色粘土質砂質土 |
| IIIb1c | 緑色・堆積黄褐色粘土質土 若干細縫の間にKX以北重粘土層下部に対する可能性があるが砂縫の混じり具合など異和感もあり確定できない |
| IIIb1d | 7. 7M5/4-1 緑褐色粘土質土 |
| IIIb1e | 7. 7M5/4-1/2 黄褐色粘土質土 |
| IIIb1f | 2. 5M5/4-2 黄褐色粘土質砂質土・砂質土・赤褐色・板片若干混じる (あまり多くない) 全体としては灰色 (SY4/1) であるが、明青灰色粘 (SBG7/1) が散り分布するにはほい黄褐色 (SGS5/1-4/1) を含む |
| IIIb2層 | SGS1 层 黑褐色粘土質砂質土主層 寸2~5cm大塊多く混じる 砂・粘質土ブロック状に混じる |
| IVa層 | 近世初期（~寛永大火）造成土 |
| IVa1 | NA/4 黄褐色 均質 |
| IVa2 | NA/4 黄褐色 オーブル黒褐色粘土質土 2. 5M3/1 混土 |
| IVc層 | 近世初期（~寛永大火）造成土 |
| IVc1 | SC1/4 黄褐色粘土質砂質土・砂質土 褐色少混じる 明青灰色粘 (SGS7/1) 少量混じる 【S302南面部分埋土】 |
| IVc2 | SGS4/1 层 緑褐色～緑褐色 (SGS6/1-7/1) 青灰褐色 |
| IVc3 | 小範・S34/1 黄褐色・砂質土・2. 5M3/1 オーブル黑色粘砂質土土質【腐殖質土】 |
| IVd層 | 近世初期（~寛永大火）造成土 |
| IVd1 | 10M5/4-1/4 黄砂・砂質土・粘土や青灰褐色土【礎面】 |
| IVd2 | 2. 5M4/4 黄褐色粘土質土 がまくがち物質的な砂質土 オーブル褐色 (2. 5M4/4) 砂質土が薄く層状に堆積 北側に向かって薄くなりなくなる |
| IVd3 | 青褐色砂質土【礎面】 |
| IVd4 | 2. 5M4/4 黄褐色粘土質土 IVd7層の馳緩土の青褐色砂を部分的に含む |
| IVd5 | 5M5/4-1 黄褐色砂質土 GKA4から見られ、北に向かって薄くなりなくなる |
| IVd6 | 2. 5M6/4-1 黄褐色砂質土 |



第130図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP4-6 (S=1/40)



第131図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP6-8・SP16-17 (S=1/40)



第132図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP8-9 (S=1/40)

P05 (第123・138⑤図)

A区中央部で検出したビット。III b 層で埋め立てられている。平面略円形で、径 47 cm、深さ 13 cm を測る。遺物の出土は見られなかった。

⑪3d面 (IV d層上面) の遺構か

SX03 (第123・131・133図)

3d面で確認したが、上部における造成などで周辺の3c面が失われた可能性があり、遺構が3d面から掘り込まれたと断定できないが、ここでは3d面の遺構として報告する。

H区北側で石垣の根石 3 石と裏込めの栗石層を確認した。根石には自然石が使用されていたが、合端調整のためか、側面に打割が見られる石もあった。面はいもり堀側に向いており、栗石は径 4 ~ 27 cm で、灰色粘土で被覆されていた。

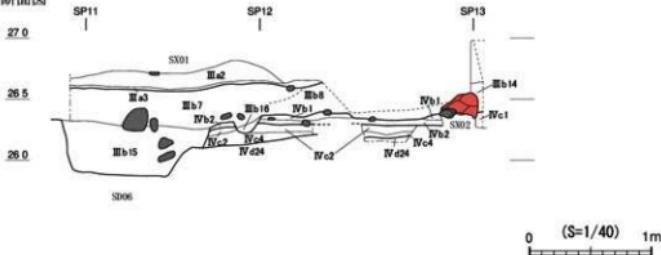
⑫4面 (V層上面) の遺構 (第125②・126・131・133図)

調査区南端の近世初期遺構面の下層で、古代の土器を含む灰褐色粘土層と、これを基盤とする溝状の掘り込みを確認した。現地表下約 4 m まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。

3. 小結

- いもり堀南岸の法面を検出し、いもり堀直線部分の南岸ラインを確定できた。従前の堀北岸の調査成果とあわせ、いもり堀全体の断面形状を復元する手掛かりが得られた。
- いもり堀南岸の法面について、明治40年(1907)の堀埋立てにより埋没した面と、部分的に構築当初および近世前期の面を確認した。
- いもり堀上層について、北岸の調査成果と合わせると、堀幅は 30 m 以上、広いところで約 40 m に達すると推定され、江戸時代後期の「御城中壱分基絵図」(文政13年(1830)) 中の「二拾三間二尺(約

①SP11-13 土層断面図



III-a層 近世前期（寛永大火後～宝曆大火）造構埋土

III-a2 木片層 東壁面10層に対応する【SX01】

III-a3 107W/1～2.5T/1 開削～黄灰色粘土 粘性強い 本質の粘土化したもの 東壁では顯著ではない【SX01】

III-b層 近世前期（寛永大火後～宝曆大火）造構埋土・造成土

III-b7 深く一層薄灰色粘土・砂質土 東壁面b10層に対応する

III-b7層中で灰白色片断層に含む部分

III-b14 土オリーブ色粘土質土【SX以北壁面】下部に対応

III-b15 黒褐色（10W/3'2～3'3）～暗褐色（2.5T/2'）粘質・砂質土 III-b7層に比べ粘土部分多い【SD06主体埋土】

III-b16 7.5T/1 灰色砂質土 上部はⅣ-b層と区別しがた【P06下部埋土】

IV-b層 近世初期（～寛永大火）造成土

IV-b1 NA/1 灰色砂・比較的均質

IV-b4 遊戯場～オリーブ黒（暗灰色）粘土質土ブロック（2.5T/1）織多く混じる

IV-c層 近世初期（～寛永大火）造成土

IV-c1 5T/1 灰色粘土質～砂質土 従片々混じる 明青灰色鉢（5G/27）少數混じる【石縫S302構築の泥方埋土】

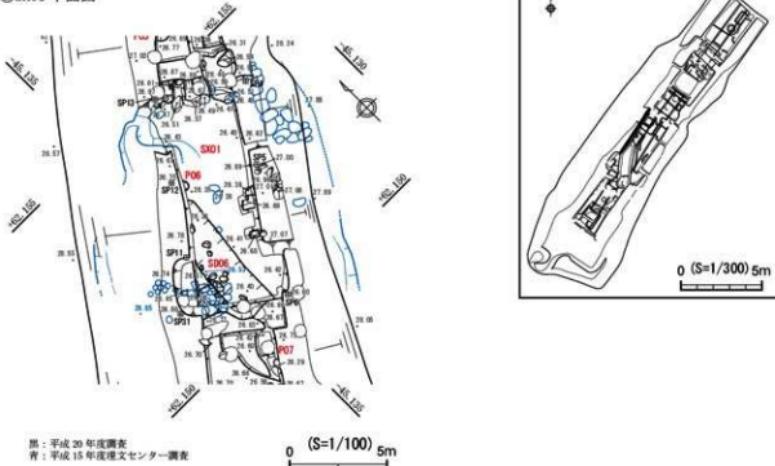
IV-c2 稲穂状～青灰砂 細粒5G/1～5/1 青灰色（5G/6/1～5/1）砂粒も目立つ 青ないし緑がかった砂質・均質

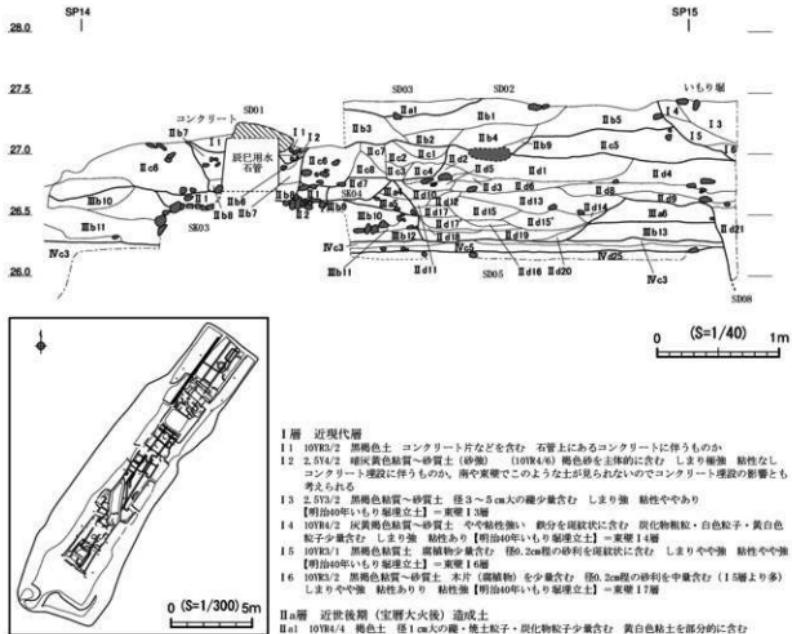
IV-c3 5T/1～2.5T/1 灰色砂～オリーブ黑色粘土質・砂質土・小礫混入 小礫を主とする【3c・3d面間の灘泥じり土層】

IV-d層 近世初期（～寛永大火）造成土

IV-d24 10Y/1～4/1 灰色砂～シルト 粒子細かく 3b・3c面構成層の砂層よりやや灰色味強い

②SX01 平面図





II-e	後世焼成（宝塚大火後）造成土・構造埋土	
II-c1	1970/12 黒褐色粘質土質、強、5-10cmの硬塑的粒子ブロック・炭化粒子少額含む [S003既往用木桶縫合埋土]	しまりやや強 粘性あり [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c1層 既往用木桶縫合埋土 2cmの大の纏微量含む
II-c2	[S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c2層	
II-c3	1970/4 呼吸孔鉢質・灰質土、褐黃色(2.5-3.5mm)を従状に含む [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c3層	粘性あり 主体となる土は東慶と同じで東慶より混じりが少なく粘質が増す。また、しまりが増す。 [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c3層
II-c4	1970/2 黑褐色粘質・灰質土、褐色(10mm)を少額含む [S003既往用木桶縫合埋土]	しまりやや強 粘性強 [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c3層 [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c4層
II-c5	1970/3 黑褐色粘質・灰質土、褐色(10mm)を少額含む [S003既往用木桶縫合埋土]	しまりやや強 粘性強 [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c3層 [S003既往用木桶縫合埋土] → 東慶Ⅱ c4層
II-c6	1970/8 灰黒褐色粘質・砂質土 (灰質) [S003既往用木桶縫合埋土]	弱、5cmの大の纏少量含む 強、5cmの大の纏中量含む 既往用木桶少額含む 炭化粒子微量含む しまり強 粘性やあらわ
II-c7	1970/4 灰黒褐色粘質・砂質土 (灰質) [S003既往用木桶縫合埋土]	弱、5cmの大の纏少量含む 強、5cmの大の纏中量含む 既往用木桶少額含む 炭化粒子微量含む しまり強 粘性やあらわ
II-c8	1970/4 灰黒褐色粘質・砂質土 (灰質) [S003既往用木桶縫合埋土]	弱、5cmの大の纏少量含む 強、5cmの大の纏中量含む 既往用木桶少額含む 炭化粒子微量含む しまり強 粘性やあらわ
II-c9	1970/5 灰黒褐色粘質・砂質土 (灰質) [S003既往用木桶縫合埋土]	弱、5cmの大の纏少量含む 強、5cmの大の纏中量含む 既往用木桶少額含む 炭化粒子微量含む しまり強 粘性やあらわ

II層	近世後期 〔室町大南北〕	構造土質
B-2	5.57m - 黑褐色粘土へ砂質へ - 硬塑性よりやや粘性が増す - 径10cm程の礫を含む - 種の用には暗灰色の粘土が多い - しまり強 - 粘性あり - 東壁よりやや褐色が - 明るい - 石の間には鉢質を認める 〔S030土質〕 - 東壁裏 1層	
B-2	5.57m - 黑褐色粘土へ砂質へ - 黑色粘土を含む - しまり弱 - 粘性強 〔S030土質〕 - 東壁裏 2層	

II-d層 近世後期(宝曆大火後)造成土・遺構埋土
II-d1 10cm以上 黄褐色粘質土 (0.5-5cm大の礫・砂・瓦等含む)
II-d2 10cm以下 黄褐色粘質土 (0.5-5cm大の礫・砂・瓦等含む)

第135図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SP14-15 (S=1/40)

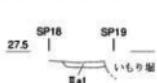
Hd4層	近世後期（宝應大火後）造成土・構造埋土	
Hd2	10YR4/3	にじみ・黒褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 黑褐色砂（10YR5/6）を微量含む しまりあり 粘性あり
Hd3	10YR2/4	黒褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 桃土粒子中量・炭化物粒子少量・径1cm細少量含む しまり強 粘性なし→東壁D3層
Hd4	2.5Y1/1	黒褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 径0.5cm細少量・径3cm細少量・オリーブ褐色土（2.5Y4/3）を斑状に含む 炭化物粒子・桃土粒子少量含む しまりあり 粘性やや強い→東壁D4層
Hd5	10YR2/2	黒褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 墓原黄（2.5Y4/2）の砂質土を斑状に含む 炭化物粒子・桃土粒子少量含む しまりやや強 粘性あり
Hd6	10YR3/3	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） しまりやや強 粘性強→東壁D5層
Hd7	2.5Y5/1	褐褐色粘質土・砂質土・（粘質強） 2.5Y1/1 黄灰（青灰か？）色の砂と鉄分を斑状に含む しまり強 粘性あり【SK04埋土】
Hd8	10YR2/4	灰褐色粘質土・砂質土・（粘性強） D15層と同じ径が少ない粘性が少なく 東壁より粘性弱くしまりあり→東壁D6層
Hd9	2.5Y3/2	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 桃土粒子・炭化物粒子中量・径3cm細少量含む しまりやや強 粘性あり
Hd10	10YR3/2	黒褐色粘質土・桃土粒子・炭化物粒子少量合む・しまりやや強 粘性強【SD05埋土】→東壁D7層
Hd11	2.5Y4/1	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 径0.5cmの褐褐色砂を斑状に含む 桃土粒子少量含む しまりやや強 粘性なし 色壁よりやや粗く色調も黒褐色に近い【SD05埋土】
Hd12	10YR4/2	灰褐色粘質土・砂質土 径2cm細多量含む 多様な色調の砂と斑状に含む しまり強 粘性なし【SD05埋土】→東壁D8層
Hd13	2.5Y4/2	灰褐色粘質土・砂質土・（粘質強） 径2～5cm細多量・しまり強 粘性なし【SD05埋土】
Hd14	2.5Y1/1	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 2.5Y4/2 墓原黄の砂質土を斑状に含む しまりあり 粘性やや強【SD05埋土】
Hd15	東壁D10層	東壁D10層と同様 しまり強 粘性なし【SD05埋土】
Hd15'	D15層	D15層よりより細少ない 砂質土 径2～3cm細少量・しまり強 粘性なし【SD05埋土】
Hd16	2.5Y3/3	オリーブ褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 径0.1cm程の粗い砂粒なども含む 鉄分によるものか？ やや赤味をおびる しまりあり 粘性なし【SD05埋土】
Hd17	2.5Y4/2	暗灰褐色砂質土・砂質土 径2cm細多量含む しまり強 粘性なし【SD05埋土】→東壁D11層
Hd18	2.5Y4/2	暗灰褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 径2～5cm細多量 しまり強 粘性なし【SD05埋土】
Hd19	2.5Y4/2	褐褐色粘質土・砂質土 上層と色調などは顔色がきめ細かい しまりあり 粘性なし【SD05埋土】
Hd20	10YR3/3	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 径0.5cm細多量含む しまりやや強 粘性あるが東壁より弱い【SD05埋土】→東壁D12層
Hd21	2.5Y3/2	褐褐色粘質土・砂質土 径2～5cm細多量含む 本片のみの腐植物を含む しまりやや強 粘性あるが東壁より弱い【SD05埋土】→東壁D13層
III-a層	近世初期（寛永大火後～宝應大火）造成土（2a面と構成）	
Hd1	2.5Y4/2	褐褐色粘質土・砂質土 径0.2～0.5cm細多量含む しまりやや強 粘性あり 東壁a16層から細砂質土をなくした感じ
Hd2	2.5Y4/2	褐褐色粘質土・砂質土 上層に比べて灰褐色土が斑状に分布がありしまり強 炭化物粒子微量含む しまり強 粘性なし→東壁D14層
Hd3	2.5Y4/3	オリーブ褐色土・2.5Y3/2 黑褐色粘質土 斑状に堆積 本片などを含む しまりあり 粘性やや強→東壁a19層
III-b層	近世初期（寛永大火後～宝應大火）造成土（2b面と構成）	
Hd4	10YR3/2	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 炭化物粒子・桃土粒子微量含む しまりやや強 粘性あり
Hd5	10YR3/2	褐褐色粘質土・砂質土・（粘性強） 桃土粒子中量含む 炭化物粒子最少量含む しまりあり 粘性強→東壁b14層
Hd6	2.5Y3/2	褐褐色粘質土・砂質土 径0.5cm細少量含む 桃土粒子微量含む しまりやや強 粘性あり 粘性極強
Hd7	2.5Y4/2	暗灰褐色粘質土・砂質土 径0.2cm細少量含む しまりあり 粘性極強→東壁b12層
Hd8	2.5Y4/2	暗灰褐色粘質土・砂質土 微量含む しまりやや強 粘性強
IV-c層	近世初期（～寛永大火）造成土（3c面と構成）	
IVc2	2.5Y4/2	褐褐色粘質土・さわめて細かい面に堆積 しまり強 粘性なし→東壁c1層
IVc3	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂質土・粗い砂質土主張 径2cm細少量含む 全体的に鉄分が多く含み赤く色味している しまり強 粘性なし→東壁c2層
IV-d層	近世初期（～寛永大火）造成土（3d面と構成）	
IVd3	2.5Y4/2	暗灰褐色粘質土・鉄分を斑状に含む 非常に硬くしまっている IVc3層に比べると砂がやや粗い部分と密な部分に分かれている しまり強 粘性なし→東壁d1層

第136図 南岸調査区 2008地点 土層記注 SP14-15

42.4m)」という記載と概ね一致する。

- 2006-1・2008地点において、近世後期～末にかけての絵図に描かれた辰巳用水に対応するとみられる溝状構造を確認した。2006-1地点検出のものからは、導水管および敷石等の支持部材は検出できていないが、絵図との対比により、導水管は石管であったと考えられる。なお、2008地点では、導水管を石管および木樁とする辰巳用水に対応する2条の溝状構造（石管：SD01、木樁：SD03）を検出した。
- 2008地点A～D区では、北西～南東方向の溝状構造が数条検出された（SD01・02・03・05・07）。これらが辰巳用水（石管）掘方のSD01とほぼ平行していることから、辰巳用水に関連するものも含まれている可能性があるが、SD03以外から導水管およびその支持部材など辰巳用水に関連するものは確認されなかった。
- 戦国時代末期～近世初期、堂形には屋敷地や堀等の遺構が展開していたが、元和年間（1615～1624）～寛永大火（1631）以前の堂形造成および寛永8年（1631）の大火を契機とした改変により、これらの遺構が廃棄され、新たに米蔵や馬場等の施設が配置された事が判明している。また、2008地点南部のE～H区では、近世初期～前期の遺構（石列・石垣・溝等）が検出された。詳細は不明であるが、堂形成立前後の屋敷区画の一部である可能性も考えられる。

①A区 1b面 P01 土層断面



II a層 近世後期(宝曆大火後) 造構埋土

II a1 10Y4/3 に高い黄褐色砂質～粘質土、径0.3cm大の小礫含む
燒土粒子・炭化物粒子微量含む 黄色土を所々に含む しまりやや強
粘性なし 【P01埋土】

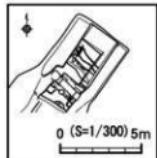


②A区 1c面 SD02 土層断面



II b層 近世後期(宝曆大火後) 造構埋土

II b1 10Y4/3 10Y2/4 増殖色砂質～粘質土、燒土粒子多量
焼土ブロック中量 炭化物粒子少量、焼けた鉢石含む
しまりやや強 粘性なし 【SD02埋土】

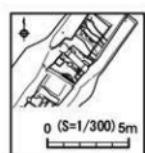


③B区 1c面形成以後 P02 土層断面

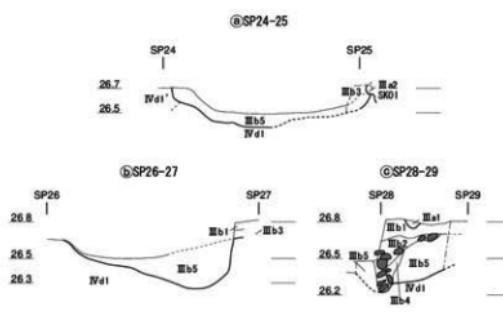


II c層 近世後期(宝曆大火後) 造構埋土：II c層堆積後

II c1 灰質砂土 (10YR4/2) ~ 黃褐色砂質土 (2. ST4/1) 径2~5cm大の礫多
径5~10cm大礫少しあじる 黄褐色粘土小塊 (2. BT7/4~7/6) 流じる
【P02埋土】



④H区 3a面 SK02 土層断面



III a層 近世前期(寛永大火後～宝曆大火) 造構埋土

III a1 黄褐色シルト質土 (2. ST5/3~6/4) 【SD04埋土】

III a2 黄褐色砂質土 (3Y6/4~5/1) 【SD01埋土】

III b層 近世前期(寛永大火後～宝曆大火) 造構埋土：造成土

III b1 灰質白色砂質土 (10Y4/2~2/2) 小礫・燒土 (JUR?) 多く混じる
黄褐色粘土質 (10Y4/2~2/2) 径3~10cm大の礫混じて多く混じる
【SK02上面ビット埋土】

III b2 黄褐色粘土質・灰白色～砂質土質 (10Y2/1~7. ST5/1)

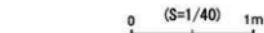
モザイク状に混じる 【SK02上面ビット埋土】

III d層 黄褐色シルト質土 (10Y2/1) 径3~5cm大の礫多く混じる
【SK02上面ビット埋土】

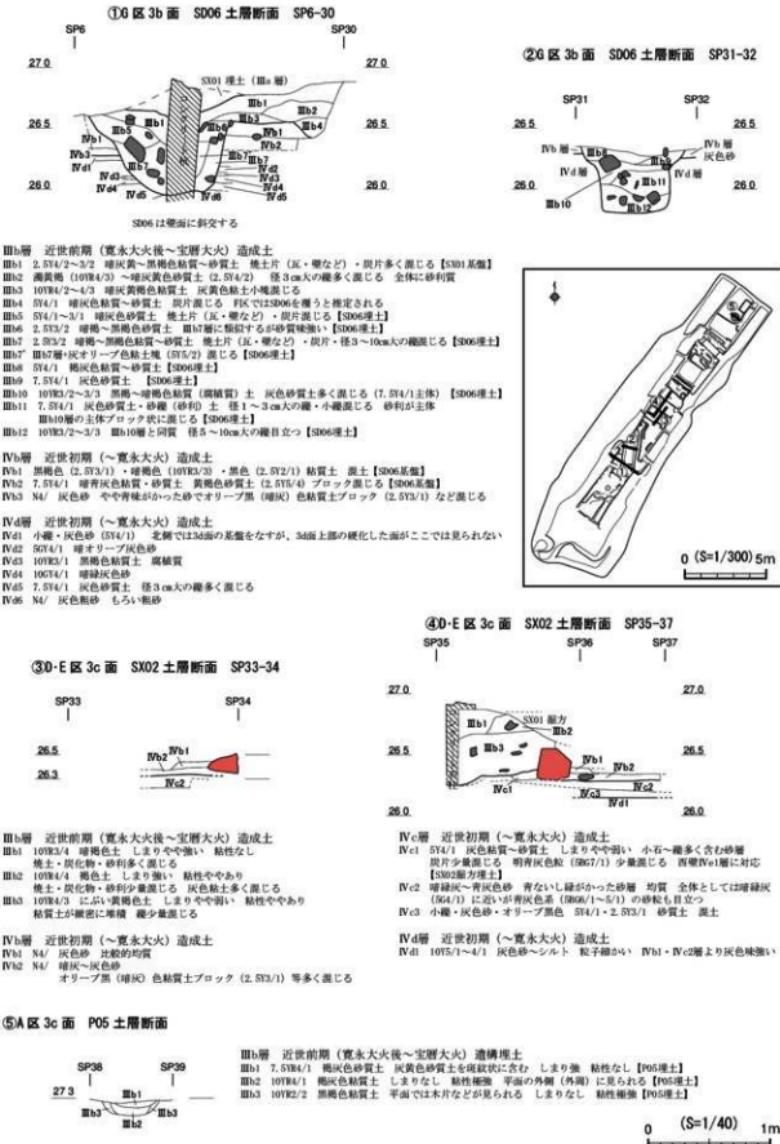
III h層 黄褐色シルト質土 (10Y2/1) 径1~3cm大の礫少しあじる 【SK02埋土】

IV d層 近世初期(～寛永大火) 造成土

IV d1 黄褐色粘土 砂質土が縦の間に入り 東側IV d1層に類似した感じ
縦が多い



第137図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 P01・SD02・P02・SK02 (S=1/40)



第138図 南岸調査区 2008地点 土層断面図 SD06・SX02・P05 (S=1/40)